

Mutsu Nakanishi Home Page 2005

『 Iron Road 和鉄の道 』【5】

- 日本の源流・たたら遺跡探訪 -

2006. 1. 15. by Mutsuo Nakanishi



北海道 和鉄の跡 砂鉄の浜 恵山山麓 古武井浜



薩摩 開聞岳の山麓 開聞川尻浜 2005. 01. 15. 17



北海道 渡島半島 恵山山麓 古武井浜



薩摩 開聞岳の山麓 開聞川尻浜

日本の南と北の端 火山の山麓に広がる砂鉄の浜

薩摩 開聞岳の山麓 開聞川尻浜 & 北海道 渡島半島 恵山山麓 古武井浜



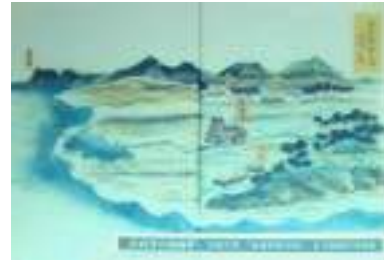
口絵1 日本の北と南の端に製鉄遺跡を訪ねる

幕末 日本の洋式高炉はこの両端の地に初めて建設され、日本の近代化の夜明けが始まった 鉄の郷である

1. 北海道 渡島半島先端の活火山恵山・古武井海岸 砂鉄がひろがる古武井浜と幕末の溶鉱炉建設跡



北海道 和鉄の郷 砂鉄の画館古武井海岸と恵山 2004.11.16



2. 鹿児島県 薩摩 知覧の石組製鉄遺跡群 鹿児島もまた「火の国」「鉄の国」



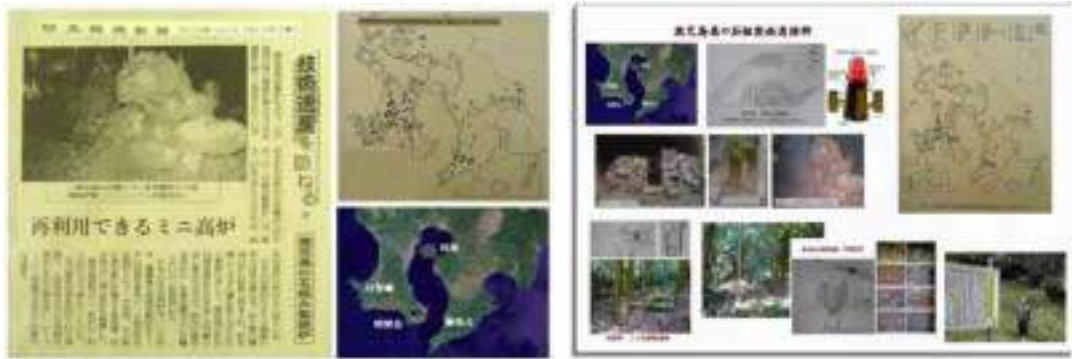
知覧 石組み製鉄炉のスケッチ



川尻浜の砂鉄



日本最初の島津藩 洋式高炉



知覧 ニツ谷製鉄遺跡



喜入 上茶笥松製鉄遺跡



根占 二川製鉄遺跡



内之浦 大谷添製鉄遺跡



知覧 厚地松山製鉄遺跡 A1・A2号 製鉄炉



現存する鹿児島県の  
石組み製鉄遺跡 6基

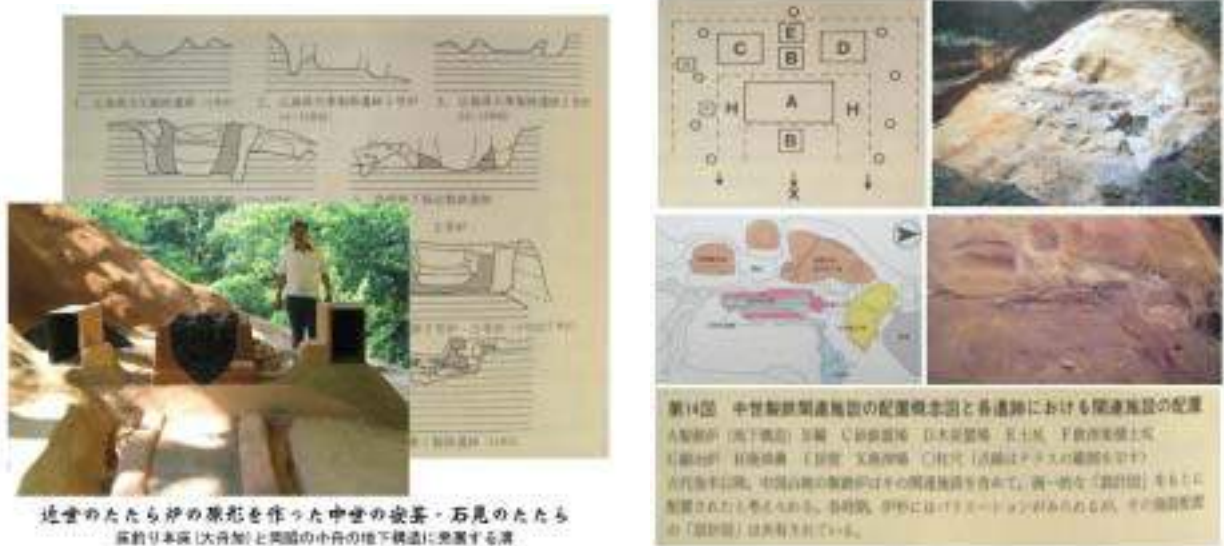


口絵 2 隅屋加計鉄山絵巻のたたら製鉄



口絵 3 たたら諸施設の基本配置を確立した「中世 中国山地 芸北のたたら」

安芸・石見のたたらが生産性のよい永代たたらの原型となったという。



近世のたたら炉の原形を作った中世の安芸・石見のたたら  
 備前日本館(大高加)と奥國の小舟の地下構造に参照する溝

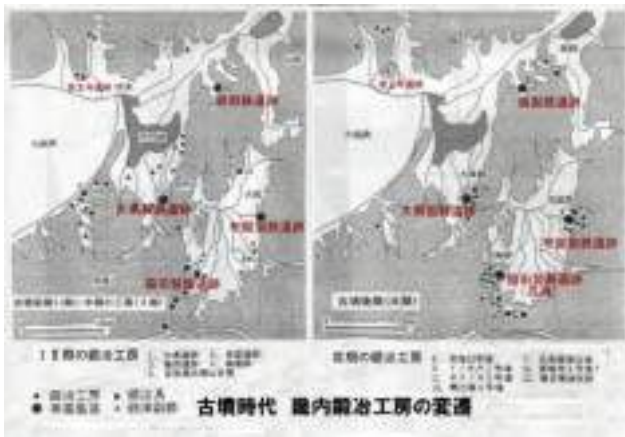


豊平町 中世の製鉄遺跡群 坤東製鉄遺跡



口絵 4. 古墳時代 畿内の大規模鍛冶工房とその変遷

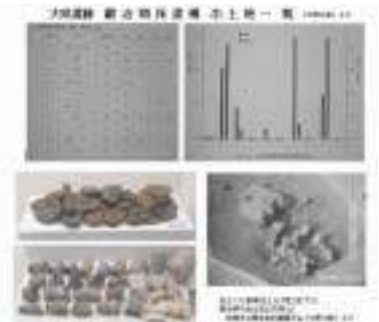
大泉製鉄遺跡 森製鉄遺跡 忍海脇田製鉄遺跡



生駒山脈の北端 河内磐船 森製鉄遺跡 周辺



生駒山脈の南端 柏原市 大泉製鉄遺跡 周辺



葛城山山麓 忍海製鉄遺跡群 周辺





## 和鉄の道 Iron road たたら遺跡 探訪 2005

- 口絵 1. 日本の北と南の端に製鉄遺跡を訪ねる
- 口絵 2. 隅屋加計鉄山絵巻のたたら製鉄
- 口絵 3. たたら諸施設の基本配置を確立した「中世 中国山地芸北のたたら」
- 口絵 4. 古墳時代 畿内の大規模鍛冶工房とその変遷

1. 北近江 安曇川・マキノ 雪の山郷 Country walk
2. 鉄のモニュメント 弥生時代の鉄の顔 自然石「鳴石」  
-唐古鍵遺跡出土の濁鉄鉢容器-
3. 鉄の6世紀 北九州の装飾古墳に和鉄の道を重ねて  
古代産鉄の技術集団が残した和鉄の道でないか
4. 7世紀 古代飛鳥の大製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 Walk  
「飛鳥池生産工房遺跡」&「川原寺寺院工房遺跡」
5. 金剛・葛城 山麓 葛城氏の鍛冶工房「忍海」  
渡来人が住み鉄鍛冶の技術を伝えた古代「忍海」
6. 「千年の秘技 たたら製鉄復活の炎」と映画「火火」  
信楽焼の「穴窯」と「たたら」の秘技 炎の美を重ねて
7. 函館郊外の地図にある「鉄山」の地名を訪ねて  
早春と冬が入り混じる北の大地を風来坊
8. 青森山 内丸山縄文遺跡の漆製品とその赤色顔料  
「縄文の赤」酸化鉄顔料に「古代鉄」のルーツを思う  
沼鉄(パイプ状酸化鉄)と赤色チャート(粘土質微粒酸化鉄)
9. 古墳時代 畿内の先進鍛冶工房集落 若王寺遺跡探訪  
尼崎市 若王寺遺跡 界限 Walk
10. 「加計 隅屋鉄山絵巻」と加計・豊平町の製鉄遺跡  
江戸時代 広島藩を支えた鉄の道「芸北 加計のたたら」
11. 北河内 の古代の郷 肩野物部氏の本拠地 交野界限 walk  
大和王権 を支えた鍛冶工房 森製鉄遺跡を訪ねて
12. 弥生の博物館 鳥取県 青谷上寺地遺跡を訪ねて  
弥生時代後期 北九州と並ぶ鉄の先進地「山陰」
13. 2005 夏 青春18きっぷ 日帰り Walk アルバム  
和鉄の道 古代の鉄の足跡を訪ねて
14. 薩摩 知覧の石組製鉄遺跡群を訪ねて  
薩摩独自の石組炉 それが日本最初の薩摩洋式高炉を立ち上げた
15. 日本最初の洋式高炉建設に燃えた地 古武井  
北海道 渡島半島の活 火山恵山・恵山町古武井海岸を訪ねて



## 北近江 安曇川・マキノ 雪の山郷 Country walk

古代 和鉄の郷 北近江 2005.1.14.



追坂峠より琵琶湖・マキノ遠望



メタセコイアの並木道



マキノ高原から赤坂山

古代鉄の先進地 北近江 マキノ 2005.1.14.

先日 名神大津で雪化粧したすばらしい比良の峰々を見て、急に比良の雪ならびに雪の山郷を歩いてみたくなって、琵琶湖西岸の湖西線に飛び乗って 北近江のマキノに行ってきました。

この琵琶湖西岸に沿って伸びる比良山系から其の奥に広がる北近江 安曇川・今津・マキノの地は朝鮮半島から日本海を渡って 若狭・近江・大和を結ぶ古代のメインロード 交通路の要衝で古代和鉄の先進地。

鉄鍛冶・精錬を背景に大和に並ぶ豪族・渡来人の根拠地。

暖かくなったらこれら製鉄遺跡を訪ねようとその予備調査も兼ねて・・・

鉄に付いてはまた別にまとめますが、本当に風来坊 雪の山郷をぶらぶら歩いて 鉄の話を聞いたり、教えてもらったり、車から声をかけて貰って、駅までおくってもらったり、おまけに路線バスまでのせてもらったり・・・

北近江は人情深い温かい地。 一日雪の中に遊んで帰りました。

## 北近江 安曇川・マキノ 雪の山郷 Country walk

### 【 内 容 】

1. 雪の比良を眺めながら湖西線を北上
2. 近江今津  
港で琵琶湖周航の歌にであい、対岸に伊吹山がそびえるのを知ってまたビックリ
3. 古代鉄の故郷 牧野へ すばらしいメタセコイアの並木道がつづいていました  
冬のソナタをイメージして訪ねる人が多いという
4. 近江高島 鴨稻荷山遺跡と三尾の里 walk  
日本誕生にかかわった渡来人の根拠地

参考 鉄の自給を達成し大和朝廷を支えた近江国 瀬田丘陵の古代製鉄遺跡群

## 1. 雪の比良を眺めながら湖西線を北上

今日は出発が遅かったが、どこまでといったあてもなし まあ 気楽な旅。

朝 10 時 JR 長浜行の新快速に乗り込む。京都駅で待ち時間なしで近江舞子行の普通電車。そして後を追いかけて来た近江今津行の新快速に乗り継いで近江今津へ。

比叡から蓬萊・打見 そして金糞峠・正面谷 堂満岳とつぎつぎに現れる比良の山々を眺めながら北近江へ今日は 晴れているものの雲が多く 雪の頂上部は雲に覆われ、琵琶湖をはさんだ対岸の山々もかすんでいる。でも 久しぶりに間近に見る比良の山々である。

久しぶりに足をふみいれた琵琶湖西岸 家々がたちならび、高速道路が走り、えらい変わりようであるが、昔のイメージを探しつつ、ご機嫌で雪をいただく比良をながめました。



雪の比良連峰 蓬萊・打見山 堂満・釈迦岳 湖西線の車窓から 2005.1.14.



近江舞子近傍より 比良正面谷 2005.1.14.

蓬萊駅を過ぎて滋賀。琵琶湖パレイ ゴンドラの直線路がくっきり打見の頂上へついている。この駅からは天狗杉を通過してクロトノハゲ・木戸峠と山小屋へ通った道。今は一人でのほれるやろか・・・松の浦も浜でよく夜を明かしました。

近江舞子を出て、スケールの大きな正面谷を眺めながら安曇川にかかるともう真っ白な白銀の世界。

京都から約 1 時間かからず、神戸から 2 時間ほどで近江今津。

本当に便利になったものである。新快速はここで終点。

ここから北は極端に電車が少なくなって、一時間に一本。電車を待っている間 琵琶湖へ。



雲の中の蓬萊・打見山頂上部 古代 鴨・三尾里を分ける鴨川 安曇川

## 2. 近江今津

港で琵琶湖周航の歌にであい、真向かいが伊吹山であることを知ってまたビックリ



JR 近江今津駅



近江今津港から 琵琶湖



近江今津 湖岸の旧街道

駅から出て直ぐのところに「琵琶湖周航の歌」記念館。琵琶湖周航の歌が館内に流れていました。長いこと歌わぬ「琵琶湖周航の歌」そして同じ節で歌う「琵琶湖哀歌」両方の歌詞と楽譜が印刷物になっていて、貰ってきました。琵琶湖周航の歌の新旧6番までの歌詞 そして 琵琶湖哀歌。もう忘れかけていた歌詞ひとつひとつに学生時代 比良の山小屋に通った時を思い出していました。館のお嬢さんとひとしきり話して このマキノ・高島地区の地図をもらう。また、港に琵琶湖周航の歌の歌碑があつたというので館をとびだす。



琵琶湖周航の歌記念館



琵琶湖周航の歌が一番づつはめ込まれた道標と港にある歌碑



此の館から港まで約 300m ほどの歩道に一番づつ歌詞がかかれた道標が立っていて、其の先が今津港。竹生島・長浜への船があるのですが、今の時期は休航で棧橋は閉鎖。

向かいには 「くっきりピラミッドの形の伊吹山が見える」と聞いたのですが雲の中で見えず。

「なんで こんなところで向かいに伊吹山????? 伊吹山がピラミッドの形????」

うそやと思っていましたが、マキノからの帰り、近江今津から安曇川への車窓からは本当にピラミダルのすばらしい形をした伊吹山 そして 南のほうには鈴鹿の山々が 琵琶湖の向こうに雪をいただいてそびえていました。



琵琶湖の対岸にそびえる伊吹山



伊吹山の南に連なる鈴鹿の峰

こんな伊吹 意識したことはなく、ぼくの感覚からすると、伊吹は大津からづつと東の方の山で、大津から北近江へやってきて、伊吹が真近に見られるなんて頭になし。また、僕の頭にある伊吹山と随分イメージが違う。



東海道線は大津から東へ米原・関が原に抜けてゆくとイメージしているが、実際は琵琶湖東岸を北上 琵琶湖をはさんで、今津からは伊吹山・長浜は対岸である。



近江今津周辺からの琵琶湖

長浜・米原 東海道線から見る伊吹の南側から見る姿  
堂々としたその山塊の大きさに圧倒される姿  
美濃 垂井・大垣 東からから見る伊吹  
幾重にも重なる美濃の山々に囲まれ、其の奥にどっしりと座る姿  
琵琶湖北岸 北近江からみる北側からの伊吹  
多くの山を眼下に従え 天空にひとときわ高く三角錐のいただきを突き上げる

でも こんな周りの山を従えて 聳え立つ伊吹の姿を意識したのは初めてで、改めて伊吹山の大きさにびつくりです。

今津からまた電車で 湖岸を北へ二駅でマキノ。行方には滋賀と若狭を分ける赤坂・三国山山塊が壁のようにそびえ、そこから湖岸まで、雪原がひろがる。その山裾にへばりつくように古代製鉄の里マキノの集落が見えている。 すっばりと雪の中である。



追坂峠から見たマキノ・琵琶湖北岸



近江と若狭を隔てる赤坂・三国山山塊  
その山裾に広がるマキノ

### 3. 古代鉄の故郷 牧野へ すばらしいメタセコイアの並木道

冬のソナタをイメージして 訪ねる人が多いという



マキノ高原へ続くメタセコイアの並木道



マキノ高原 赤坂山



JR マキノ駅

駅から北へ 赤坂・三国山を越えて若狭へ続く街道筋には4km 延々とメタセコイアの並木道が続く。すばらしい並木道。僕は知りませんでした。今流行の「冬のソナタ」ブームでこのメタセコイアの並木道

を訪れる人が多いとか・・

この並木道を通って谷筋を約10分ほどさかのぼってゆき、南牧野から赤坂山の上り口にあたるどころへ上ったところがマキノ高原。さらに奥に西牧野・北牧野・白沢の集落が広がる。

私たちが学生時代には関西でゆけるスキー場として多いににぎわったところ。

赤坂山・三国山の山麓に広がるこのマキノ高原の山裾に古代の古墳群・製鉄遺跡群があり、今でも鉄滓などが拾えるという。

この道をさらに北に遡ってゆくと、三国山の肩を越えて若狭敦賀へとつながる黒川越の道である。



古代 和鉄の先進地 古墳・製鉄遺跡が山裾に散在するマキノ高原 白谷集落



このあたりは 古代 朝鮮半島から日本海を渡り、若狭から琵琶湖北岸のこの地北近江 そして琵琶湖を渡って大和へいたる古代の通商路のひとつである。

多くの渡来人がこのマキノ周辺に渡ってきて、当時もっとも重要であった鉄の自給へむけた新しい製鉄技術を伝え、大和政権と連携しながら、この地で勢力をのばしたと考えられており、その痕跡が牧野製鉄遺跡群・牧野古墳群として今に残っている。

この牧野をふくめ、琵琶湖周辺の山岳 花崗岩地帯からは古代から鉄鉱石が産出されたとかんがえられている。

その鉄鉱石を使って、鉄自給の試みが新羅・伽耶・高句麗など朝鮮半島の渡来人たちの技術を使って始まったと考えられている。

このマキノ周辺の数多くの古墳時代後期6世紀からの古墳群・製鉄遺跡群の存在がそれを示している。

また、この北近江の出身である継体天皇が大和政権成立できたのもこの北近江・越・伊吹の製鉄地帯をバックにしたためと考えられている。

しかし、この地で実際に鉄精錬が行われたという製鉄炉の出土などの直接証拠は8世紀以降であり、確認はとれていない。



高島町 鴨稻荷山古墳からの出土品  
密接な朝鮮半島との関係



牧野 赤坂山山麓の斎頼古墳





この赤坂山・三国山へ分け入ってゆく明るい谷筋の道筋 牧野町の役場のところから、牧野高原（西牧野・北牧野の集落）の入り口を通して白谷の集落の入り口まで約4kmの直線道路の両脇にメタセコイヤの樹木が等間隔で植えられ、すばらしい並木道となっている。

メタセコイヤの並木道 韓国の風景を模して作られたわけではないと思いますが、朝鮮半島と関係の深いこのマキノの地に韓国「冬のソナタ」の舞台となつたメタセコイヤの並木道をほうふつとさせる並木道があり、今「冬ソナ」ブームに乗って多くの人が訪れるという。

なにか 和鉄の道の持つ因縁めいたものを感じる。

## バスで白沢集落を訪ねて

JR マキノ駅の案内所で聞いて、マキノ高原へゆく連絡バスに飛び乗り、製鉄遺跡の散らばる北牧野・白沢集落へ行く。 マキノ駅の西で赤坂山・三国山から流れ下る知内川をわたり、町役場のところで 北に折れ、広い谷間の道にはいって行く。一本道の直線道路の両側にまっすぐ高い樹木が立ち並ぶメタセコイヤの並木道に入ってゆく。

まさに 薄茶の木の回廊をまっすぐ進む感じで、真っ白な雪の田んぼの中を突き進んでゆく。

ちょっと日本離れしたすばらしい風景にしばし、見とれる。



南牧野からマキノ高原を待つ直ぐ貫くメタセコイヤの並木道 200501.14.

バスは一 二箇所寄り道しながらこのメタセコイヤの回廊を突き進んで、マキノ高原の集落にはいる。

地図でマキノ高原の一番奥の集落が白沢の集落なのでそこが終点と思っていたら、どうもおかしい。

道が東に曲がって集落をぬけて、バスは下ってゆく。沢山乗っていた人も二人になって、運転手さんに「このバスどこまで行くの 白沢集落でおりたい」というと「白沢集落はさっき過ぎた。バスはこのままマキノ駅へ行く」という。

バスはマキノ高原を巡る循環バス。もうマキノ駅まで帰って そこからタクシーで行くのがよいと教えてくれた。

おかげで マキノ高原から、現在の琵琶湖西岸と敦賀を結ぶ幹線国道にでて、海津大崎の山を越える追坂峠を越えて湖岸の海津へ下り、マキノ駅へ。結局マキノ市街を一周。

追坂峠周辺は古代近江の鉄精錬を支えた鉄鉱石が産出されたところ。そこからおそらく産出された鉄鉱石は海津から船で琵琶湖を渡り、瀬田丘陵にあった源内峠など大和政権が管理する湖南の古代製鉄遺跡群に送られたと考えられている。



追坂峠から琵琶湖北岸を望む

追坂峠から琵琶湖や周辺の山を眺めながら「ラッキー」と。。程なくマキノ駅。

駅でタクシーに乗り換えて もう一度メタセコイヤの林を抜けて 雪に埋まる白沢集落へ 白沢集落 道は除雪されているが、雪に埋まっている。



街で教えてもらった古人大村さんの古い家を訪ね周辺の製鉄遺跡について教えてもらおう。すばらしい民家 文化財の旧家である。

「こんな雪の中 案内もでけん。

すぐ横の山裾からも滓が出ているが・・・。

雪がとけたら 出直しといで。案内するから・・・」

と簡単に滓が出た製鉄遺跡の山裾を教えてもらって、ひょっと滓を手渡してもらった。

春 雪が解けて 赤坂山に春の高山植物が咲き出した頃に予定通り出直すことで、お願いして引き返す。



### 白メタセコイアの回廊 WALK 沢集落から古代遺跡周辺に寄り道しつつ

白沢の集落から北牧野の集落への山側の林にいくつもの製鉄遺跡が散在するという。

今はすっぽり雪の中に埋まっています。入ってゆけない。

そんな古代の製鉄遺跡に思いをはせながら、教えてもらったあたりを寄り道しつつ、メタセコイアの回廊をのんびりとマキノの駅へ下ってゆく。



古代の製鉄遺跡 古墳が散在する北牧野・西牧野の赤坂山 山裾 2005.1.14.

この赤坂山周辺の山裾には約 250 基の古代の古墳が確認されており、その大半は古墳時代後期 6 世紀頃に集中して、横穴式石室を持つ比較的小さな円墳群である。

ちょうど、この頃は、大和政権が統一に向け邁進し、鉄の覇権をめぐって朝鮮半島と活発な交流があった時であり、この流れの中、この地が最も重要な地であった時でもある。  
 メタセコイアの並木道を歩いている途中で「斎頼塚古墳」の案内板を見つけて西牧野の集落の中に立ち寄ってみるが、古墳への道も雪の中で立ち入れない。土地の人にこの竹林の向こうがそうだと教えてもらう。  
 この斎頼古墳は石棚が設けられているのが珍しいという。



西牧野にある斎頼塚古墳と其の内部にある石棚

再度 メタセコイアの並木道にでて 雲からの光が雪原に映えるのを楽しみながら下る。  
 時折 追い越してゆく車以外に誰もいないので、この景色も独り占めである。



マキノ高原を貫くメタセコイアの並木道 2005.1.14.

雪の田に足を踏み入れたり、座り込んだり、メタセコイアの回廊を楽しんでいたら、車から突然声をかけてもらった。「マキノ駅まで乗ってゆきませんか・・・ さっき 見かけて まだ ここだと大分わかりますよ」と。「一人歩いている人見るとほって置けない」という。  
 「色んな事件があって 載せていただくなど・・・やあ 助かります」と近江今津まで行くというお姉さんに今津までのせていただいた。本当にありがたく山里の人情に感謝でした。



#### 4. 近江高島 鴨稻荷山遺跡と三尾の里 walk

日本誕生にかかわった渡来人の根拠地



鴨稻荷山遺跡のある高島町 鴨郷



継体天皇ゆかりの 安曇川町 三尾里

近江今津へ送っていただいたおかげで、もうひとつどうしても行きたかった場所 近江高島町の鴨稻荷山古墳そしてそれに隣接した三尾の里に行く時間ができた。

古代 この北近江と関係ふかい朝鮮半島からやってきた渡来人の根拠地がこの高島町から安曇川町にあつたという。また、継体天皇の出身地(継体天皇の父彦主人王の領地)が幼少の時をすごした三尾の里もこのあたりという。

いずれも 古代の和鉄と密接に関係する場所で、ここに朝鮮半島新羅の王墓との密接な関係を示す副葬品がそっくりそのまま大出土した鴨稻荷山遺跡がある。JR 安曇川駅から南へ約 1.5km あるいは近江高島駅から北へ約 3Km のところである。



高島町鴨郷 鴨稻荷山古墳と歴史民俗資料館 2005.1.14.

鴨稻荷山古墳は安曇川町と高島町の境を流れる鴨川の右岸に位置する鴨郷にあり、古墳時代後期 6 世紀前半の前方後円墳で横穴式石室の石棺内からは数々の副葬品が出土した。

それがそっくりそのまま朝鮮半島新羅王陵のものと同じであることが判り、この地の豪族が新羅と密接な関係にあったことを示す貴重な古墳である。

また、この鴨川周辺部から鴨川左岸から北へ安曇川にかけてが古代の三尾郷といわれ、今もこの鴨川左岸に隣接して三尾里が存在する。



鴨稻荷山古墳概要展示 高島町歴史民俗資料館 & 鴨稻荷山遺跡出土 石棺



夕闇迫る 4 時過ぎに鴨稻荷山古墳の直ぐそばに建つ高島町立歴史民俗資料館に飛び込む。

ここには鴨稻荷山遺跡で出土した副葬品が複製展示されている。

昨年夏奈良国立博物館「黄金の国・新羅 王陵の至宝」展でみたのとそっくり同じ黄金の「王冠・耳飾・靴」が展示されている。これは本当に新羅の王陵そのものでないか・・・

もつとも この頃の新羅の王陵は円墳 この鴨稻荷山遺跡は前方後円墳である。



鴨稻荷山古墳 石棺からの出土副葬品展示 歴史民俗資料館にて 2005.1.14.

学芸員の人にこの地の古代製鉄についてお聞きして今津浜大供「東谷製鉄遺跡」の資料をコピーしてもらう。

そして、夕闇迫る中 北へ 雪にうずもれた鴨稻荷山古墳へ

この歴史民俗資料館より北へ 200 ばかりで、直ぐ隣が北が鴨川の土手である。そして、この鴨川にかかる橋に「天皇橋」の名前が付いている。

この川をはさんで南が鴨郷 北が三尾里。西に広く雪の平野部がひろがり、其の向こうに 比良の峰々連なり、比良の最高峰武奈ヶ岳も顔を出している。

ここが 古代 日本誕生。大和政権の確立の過程で大きな役割を演じた北近江。

吉備・出雲が脚光をあびるが、忘れてはならない日本誕生の和鉄の道である。

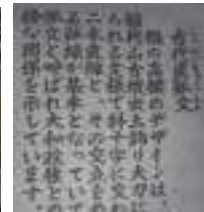
どんどん暗くなってゆく天皇橋に立って 鴨郷 三尾里の雪田をながめていました。



高島町 鴨 郷



安曇川町 三尾里



鴨川 天皇橋

鴨川 天皇橋より

鴨 郷 & 三尾 郷

2005.1.14.夕



高島町 鴨 郷



安曇川町 三尾里

ぶらぶら 15 分ほど歩いて 安曇川の駅に着いたときにはもう 真っ暗。 姫路行の新快速が直ぐ来るとい  
ので、ホームを駆けあがりました。 電車の窓から、真っ暗な琵琶湖をながめながら、今日一日 次から次へ  
の展開を思い出しながら思いつきででかけた風来坊 雪の Country Walk でしたが、楽しい Walk でした。

やつぱり、出かけないとあかんあ・・というのが実感

暖かくなったら再度北近江に訪ねよう。和鉄そして赤坂山春の高山植物を・・・

湖北町から余呉の鉄の山郷へも・・

ちよつと Country Walk から遠のいてもややもやしていましたが、すばらしい雪の山郷の Country Walk に成  
りました。雪の中に埋まる古代の古墳・製鉄遺跡にもいくつか出会い、資料ももらって これも興味津々。  
古代和鉄の日本での製鉄精錬の始まりにかかわる遺跡 近江・美濃・北九州彩色古墳群とたまってしまいま  
したが、まだ、頭の整理がつかず。ちよつとづつ、まとめようと思っています。

2005.1.14.夕 湖西線 真っ暗な琵琶湖を眺めながら  
Mutsu Nakanishi

北近江 安曇川・マキノ 雪の山郷 Country walk  
古代 和鉄の郷 北近江

【完】

1. 雪の比良を眺めながら湖西線を北上
2. 近江今津  
港で琵琶湖周航の歌にであい、対岸に伊吹山が  
そびえるのを知ってまたビックリ
3. 古代鉄の故郷 牧野へ  
すばらしいメタセコイアの並木道がつづいていました  
冬のソナタをイメージして訪ねる人が多いという
4. 近江高島 鴨稻荷山遺跡と三尾の里 walk  
日本誕生にかかわった渡来人の根拠地

参考 鉄の自給を達成し大和朝廷を支えた近江国 瀬田丘陵の古代製鉄遺跡群





## 2.

# 鉄のモニュメント 自然が作り上げた弥生時代の鉄の顔「鳴石」

- 唐古鍵弥生遺跡から出土した最大級のヒスイがおさまられた湯鉄鉢容器 -

2005.2. 神戸「2004 発掘された日本列島」展 より

2005.3.1. naruishi.htm by Mutsu Nakanishi



唐古鍵遺跡 唐古池の端に復元された楼閣 2000.2月



2004 年発掘展が神戸にやっとやってきて 見に行ってきました。

毎年 6月東京博物館がスタートで 日本全国回るので、2004 年度は神戸が最後。

その展示の中に大和田原本町にある唐古鍵弥生遺跡から出た「湯鉄鉢の容器に入ったヒスイの勾玉」がありました。層状の湯鉄鉢の層がよく見える。これは「高師小僧」ではないか・・・

説明書きによると「砂礫層のなかにある粘土を核として鉄分が巻きつき、殻を形成し、核部分の粘土が乾燥して空洞となって、生成したようである。空洞部分に乾いて小さくなった粘土やしみこんだ水が音を立てることから 鳴石・水石とよぶ」と。

弥生の宝物容器として「鳴石・高師小僧」小僧に出会えるとは・・・

鉄の最も古い顔のひとつ 自然が作り上げた鉄の顔に見入っていました。

大和平野の真ん中、日本の国の始まりを示すのではないかとされる弥生時代の中心的環濠集落で、楼閣を持ち、そこではさまざまな工房が営まれていたという。

卑弥呼の国といわれる巻向遺跡群はここから、5km ほど東へいった青垣の山すそ すぐそこである。

この唐古・鍵遺跡で楼閣が描いた土器片が出たときには、ここが邪馬台国ではないかと大騒ぎになった重要な弥生遺跡である。私が訪ねたのは5年前の今ごろ2月。弥生の楼閣を見たくて出かけました。

そんな大和の中心的な弥生遺跡の発掘が今も続いているが、環濠集落の西地区を区画する溝から自然にできた空洞のある湯鉄鉢の塊を容器に宝物である大きなヒスイの勾玉2個が入れられて出土したという。





おそらく 何か祭祀儀礼と関係するのでしょうか、中に入れられた勾玉ばかりでなく、容器として用いられた  
湯鉄鉢の塊も重要な役割を持っていたに違いない。



塊の形状とその成因アプローチに多少差はあるが まさしく弥生の「高師小僧」である。  
沼や葦原などに堆積した鉄分が植物の根などに吸い寄せられ、その周囲で長い年月をかけて 年輪を刻みながら  
大きく塊状に成長する。そして、その根などが枯れたり、入り込んでいた泥などがなくなると、真ん中が空洞  
の湯鉄鉢の棒状などの塊ができる。周囲の泥が洗い流されるとちょうど「小僧」が立ち並んでいるように見え  
る様から「高師小僧」とよばれる。

高師小僧 豊橋市田高師台 高師台中学周辺で 2003. 11. 12.

豊橋の東 渥美半島の根っこ 葦が一面に広がる高師ヶ原  
今 この台地では、雨上がり表面の土が洗われると  
煮鼓の小僧が顔をのぞかせる  
葦の根に吸い寄せられた鉄分が長い時間をかけて  
根の周りに付着析出して棒状に成長する。  
それが今顔をのぞかせ、「高師小僧」と呼ばれる

高師ヶ原台地  
天伯ヶ原台地

また、内部にできた空洞に石などが入ると「コロ コロ」と音がする。  
「鈴」や「神社のおすず神事」の始まりともいわれ、また、古代の製鉄原料の可能性として伊吹・東海・諏訪・  
伯耆・出雲などに伝承がある。前に「高師小僧」を調べて、知った湯鉄鉢の不思議。  
日本各地に種々伝承があるこれらの系統にのるものではないのか。。。

和鉄を追ってきて、日本古来の伝承に触れるたびに考えてきた「たたら和鉄精錬前夜 この湯鉄鉢（鬼板・高師  
小僧・沼鉄など名前はいろいろ）を使った和鉄精錬があつたのではないか・・・」。  
あたっているかどうかはまったく判りませんが、弥生の時代にすでに湯鉄鉢の塊が、重要品として扱われていた  
ことにびっくりするとともに連綿と続く伝承の重さをつくづく感じています。

鉄の最も古い顔のひとつ 自然が作り上げた鉄の顔に見入っていました。

大事な宝物の容器として 1800 年も前 弥生時代に自然にできた空洞の濁鉄鉱の塊がすでに意図的に使われていました。伝承とは別に古代の重要な材料として半信半疑でしたが、俄然信憑性を信じたくくなって、その前に釘付けで見ました。

鉄の最も古い顔のひとつです。

ついでながら ヒスイは漢字で「翡翠」この翡・翠 オス・メスのカワセミの漢字。

このオス・メスのカワセミの美しい体の色が交じり合うとヒスイの美しい色模様になるところからきているという。。。

ヒスイは黒曜石とともに縄文時代からのもっとも古い交易品。信州糸魚川の谷が日本最大の原産地で 日本全国に原始・古代の宝・装飾品として配られた。

雪がとけたら、この原石が露出している糸魚川・姫川にゆくツアーの計画があり、是非参加しようと思っています。



2005.2.9. 神戸 中西

## 参 考

### 弥生時代 大和の中心的な環濠集落 唐古・鍵弥生遺跡 walk

2000.2. 唐古・鍵弥生遺跡 Country walk スライド file より



### 「高師小僧」を愛知県豊橋 高師が原に訪ねて

もうひとつの古代製鉄原料?? 知っていますか??

<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/12takashi.pdf>

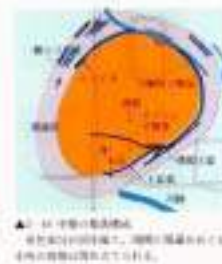
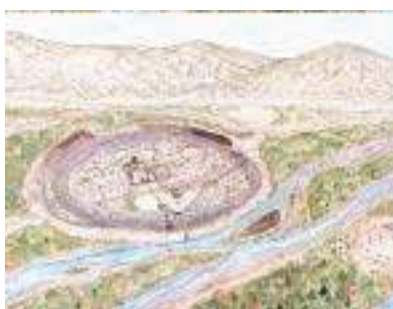
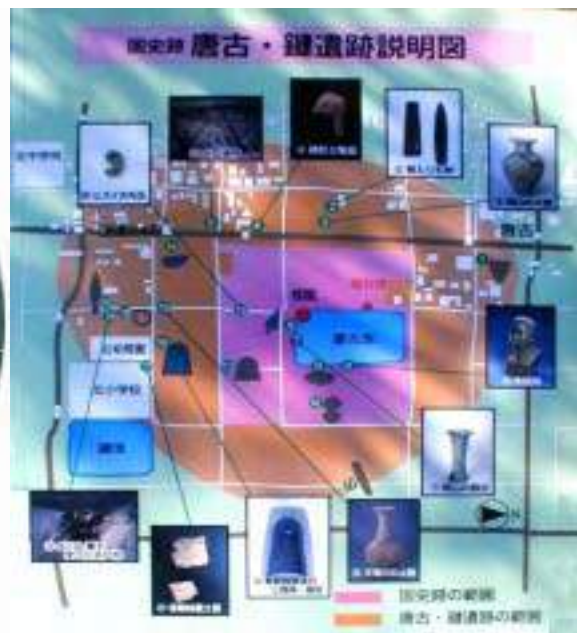
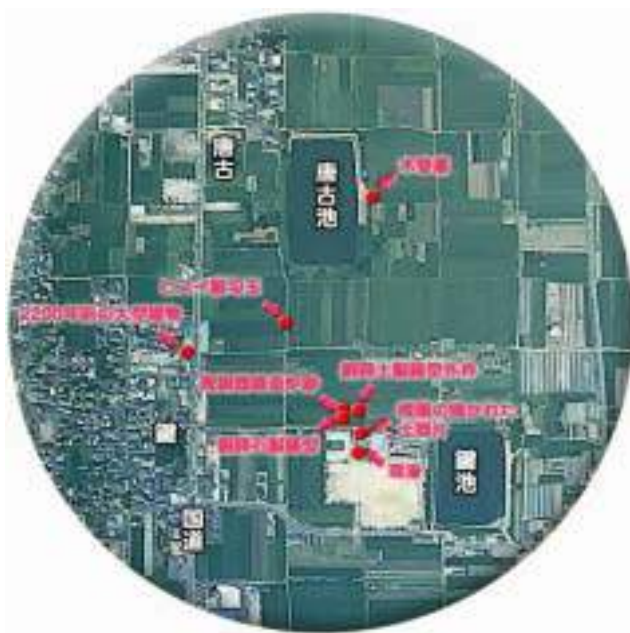




【参考】

# 弥生時代 大和の中心的な環濠集落 唐古・鍵弥生遺跡

2000.2.walk スライド file より  
2005.3.1. krkkgi.htm by Mutsu Nakanishi



唐古・鍵遺跡は、今からおよそ2,000年前に栄えた、弥生時代の代表的な集落。  
奈良盆地のほぼ中央、奈良県磯城郡田原本町大字唐古および大字鍵に位置し、遺跡面積の約42ヘクタールは近畿地方最大。直径約400mの範囲が居住区で、その周りには幾重にも「環濠」が巡っていました。  
遺跡は弥生時代前期（約2,300年前）に成立し、古墳時代前期（1,700年前）までの約600年間続きました。  
昭和11年の第1次調査では多量の土器・石器・木器が出土し、その成果は弥生時代研究の基礎となりました。  
昭和52年の第3次調査以来継続的な調査が行われ、多数の絵画土器や青銅器鑄造施設の発見など重要な成果が相次ぎ、その重要性から、1999年1月27日、国の史跡に指定されました。

[http://www.town.tawaramoto.nara.jp/8.karako\\_kagi/part/01.karako\\_kagi.html](http://www.town.tawaramoto.nara.jp/8.karako_kagi/part/01.karako_kagi.html)

田原本町 ホームページより



# 唐古池の縁に復元された楼閣

## 唐古・鍵遺跡の楼閣（復元）

平成3年秋、唐古・鍵遺跡の第47次調査において楼閣の描かれた土器片が出土し、古代建築史上、画期的な発見として、大きく取り上げられました。この土器は弥生時代中期（紀元1世紀）のもので、すでにこの時代に大陸文化を取り入れた建築物があったことを証明する資料となりました。1つの土器片には2層の屋根、大きな渦巻き状の棟飾り、3羽の鳥と考えられる波線が、また、もう1つには2本の柱と刻み梯子が描かれています。この建物の表現から、宗教的な建造物でないかと考えられています。また、魏志倭人伝（3世紀）には卑弥呼の宮室は「楼観、城柵をおごそかに設け…」と記されています。卑弥呼の住む邪馬台国にはこのような高い建物がそびえていたのでしょうか。

この楼閣は高さ12.5m、柱の間隔4×5m、柱の太さ0.5mの規模です。屋根は茅葺きで藤篋製の棟飾り、窓はつきあげ窓、一枚板製の扉、刻み梯子などで復元しました。

平成6年4月1日

田原本町



**楼閣土器**  
唐古・鍵遺跡第47次調査  
弥生時代中期（1世紀前半）

中国風の楼閣が描かれたこの土器片は、高さ12m程の塔になります。上の部分には2層以上の楼閣、下の部分には内側に傾斜をもった柱と梯子が描かれています。二層建て以上の建物は弥生時代には存在しなかったと考えられ、日本建築史上画期的な発見となりました。

この小さな土器片は、紀元1世紀頃に中国の影響を強く受けていたことが、その存在を伝えるような内容をもっています。



第 47 次調査で出土した絵画土器の「楼閣」をもとに、1994 年、唐古池の西南隅に楼閣が復元された。  
 戦前の発掘調査で、弥生時代の遺構は完全に失われていますので、遺跡の保存上問題がないと判断された唐古池の西南隅に建てられた。

復元楼閣の高さは 12.5m の 2 階建てで、4 本の柱は直径 50 c m のヒバ材を使用。平面 プランは 4 m × 5 m です。  
 屋根は茅葺きで、丸太で放射状に押さえ、壁は外面 が網代壁、内面が板壁となっている。  
 唐古・鍵遺跡の建物に特徴的な渦巻き状の屋根飾りは藤蔓で作り、梯子は刻み梯子で復元。  
 土器に描かれた屋根の上の逆 S 字状の 3 本の線は渡り鳥と解釈し、木製の鳥を東西両面 にそれぞれ 3 羽ずつ設置している。



唐古・鍵遺跡から出土した遺物

### 唐古・鍵遺跡 第 9 3 次調査 (大型建物跡) の概要

2003年10月19日に行った現地説明会の資料より  
 今回の調査は、遺跡内部の実態解明を目的とした内容確認調査で、調査地は、環濠内部の西地区にあたり、弥生時代中期中ごろの大型建物跡とともに、弥生時代中期から古墳時代初頭までの溝や井戸を検出しています。





# 1. 区画溝について

区画溝 1114 は北東から南西方向に走向します。溝は今回の調査区の東端に沿って南北へ伸び、北側は第 80 次調査区へと続き、南側では西側への溝が派生しています。その検出総延長は約 60 メートル。

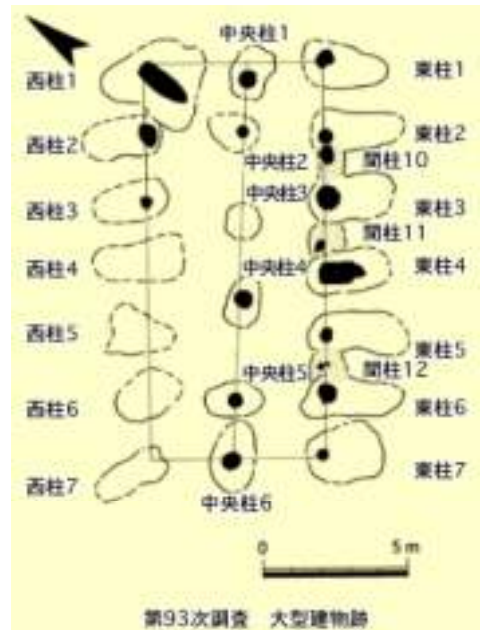
溝は、弥生時代中期中葉（約 2150 年前）に掘削され、弥生時代終末（約 1800 年前）まで再掘削を繰り返し開口しています。度重なる掘削によって、溝幅 4 メートル、深さ 1 メートルの規模で、この溝からは、第 80 次調査で大型の勾玉を 2 個入れた褐鉄鉢（かってっこう）容器が出土した。この溝を境として地形は、東側が低く、西側が高くなっています。このような区画溝に軸を合わすように、大型建物跡は建っている。

# 2. 大型建物跡について

大型建物跡は、北東から南西方向に軸をもつ梁間（はりま）2 間（6 メートル）×桁行（けたゆき）6 間（13.7 メートル）の建物。独立棟持柱をもたない長方形の建物で、床面積は 82.2 平方メートル（タタミ約 50 畳分）もあります。柱列は、建物中央と東西両側の 3 列に並び、中央柱列は 6 本、東西両側の柱列は基本的に 7 本の柱がある。

東側の柱列には、基本となる 7 本の間にさらに 3 本の柱が据えられている。この点については、基本となる 7 本の柱と間の 3 本の柱では、柱根底面の深さが前者よりも後者が浅いことから、後者は後に添えられた柱と考えている。残存する柱根の太さは最大で径 80 センチもあり、弥生時代の柱としては最大級。

これらの柱材はすべてケヤキ材。また、この柱を据えるために掘り込まれた柱穴の大きさは長さ 3 メートル、幅 1.5 メートルもあります。大型建物は、柱穴から出土した土器から、弥生時代中期中葉（約 2150 年前）に建てられたと考えられている。

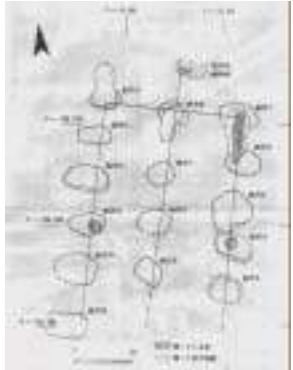


# まとめ

今回の大型建物跡は、弥生時代中期中葉、大環濠に囲まれた唐古・鍵ムラの西地区中枢部末端で建てられた建物として注目される。このような大型建物跡は唐古・鍵遺跡では 2 例目であるが、前回（第 74 次）の建物のような独立棟持柱をもたない構造で、その性格は異なる可能性がある。唐古・鍵の大集落にはさまざまな機能をもった施設が配置されていたと考えられ、今後、周辺の調査によって明らかにされることだろう。



1. 調査概要  
 2. 調査年月日  
 3. 調査地域  
 4. 検出した遺物  
 5. 検出した遺物  
 6. 大型建物について  
 7. まとめ





## 集落の構造

唐古・鍵遺跡は、集落のまわりを大溝で囲む「環濠集落」です。居住区が一番内側を囲む大環濠の規模は、幅8～10m、深さ2mで、直径400mの範囲を囲みます。この大環濠の外側約100～150mには、環濠がドーナツ状に3～5条巡る「環濠帯」が形成されています。これらの環濠により、水害や外敵から集落を守っていたほか、普段は運河としての役目も果たしていたようです。

居住区には、高床建物や竪穴住居、井戸、木器を貯蔵する穴など多数のさまざまな遺構がみつかっています。

## さまざまな生産活動

唐古・鍵の人々は、さまざまな道具を製作しています。石鎌や石剣などは二上山北麓で採れるサヌカイトを、稲穂を摘み取る石包丁は耳成山の流紋岩や紀ノ川流域の結晶片岩の原石をムラに運び込んで製作しました。

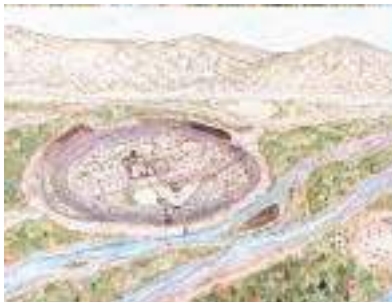
また、木器を水浸けした穴や環濠からは、製作途中の鎌や鋤などがよく出土します。これはケヤキやカシなどの木材を加工しやすくするため水浸けしたものです。

ムラの東南部では、青銅器の鋳造が行われました。銅鐸や銅戈、銅鎌の鋳型、送風管、とりべなど鋳造に使う道具類、伊跡などがみつかっています。

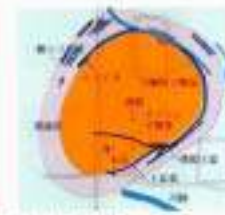
## 近畿地方の中核的な集落

唐古・鍵遺跡の周囲1km以内には、衛星集落や墓地が存在します。遺跡の北側600mには絵画土器が多量に出土した清水風遺跡、東側400mでは方形周溝墓がみつかった法貴寺遺跡、南側1kmには羽子田遺跡、西側600mには八尾九原遺跡などの小集落や墓地が存在し、唐古・鍵遺跡群を形成しています。

唐古・鍵遺跡は、大阪湾から船で大和川を溯ると最初に到達できる港であり、また、そこから山を越えると東方地域とも陸上交通でつながっていました。この遺跡からは、河内や伊勢湾沿岸地域、遠くは岡山県南部や天竜川流域の土器が出土しており、これらの地域との交流が盛んであったことが判っています。すなわち、物資流通の中心的な役割を果たしており、近畿地方の中核的な集落といえるでしょう。



▲ 11 遺跡の位置関係  
遺跡の中心は唐古・鍵遺跡、その周囲には法貴寺遺跡、羽子田遺跡、八尾九原遺跡などがある。



▲ 12 遺跡の位置関係  
遺跡の中心は唐古・鍵遺跡、その周囲には法貴寺遺跡、羽子田遺跡、八尾九原遺跡などがある。







#### 主な遺物・遺構の出土場所

- |   |   |  |
|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>① 縄文土器</li> <li>② 鞘入り石剣</li> <li>③ 岡山の大甕</li> <li>④ 鶏形土製品</li> <li>⑤ 大型建物</li> <li>⑥ サヌカイト原石</li> <li>⑦ 岡山の器台</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>⑧ 木棺墓</li> <li>⑨ 愛知の土器</li> <li>⑩ 分銅形土製品</li> <li>⑪ 刻み梯子</li> <li>⑫ ヒスイ大勾玉</li> <li>⑬ 古墳</li> <li>⑭ 耳成山産流紋岩の石包丁</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>⑮ 天電川の土器</li> <li>⑯ 青銅器製造の工房跡・鋳型</li> <li>⑰ 桜園絵画土器</li> <li>⑱ 青銅の腕輪</li> <li>⑲ 大臼と鑿を使った井戸枠</li> <li>⑳ のみに転用された銅矛</li> </ul> |
|---|---|--|

## 鉄の6世紀 北九州の装飾古墳に和鉄の道を重ねて

装飾古墳群は古代 産鉄の技術集団が残した和鉄の道でなかったか・・・

2005.3.1. by Mutsu Nakanishi



6世紀装飾古墳文化が花咲いた熊本県 菊池川中流域 山鹿市周辺



熊本県菊池川流域の装飾古墳 左 鍋田 27号横穴墳 右 チブサン古墳



前室 玄室 石屋形と奥壁  
福岡県遠賀川流域 王塚装飾古墳の内部 (復元 王塚古墳館 展示より)

北九州に偏在する装飾古墳の名前を聞いた時には「高松塚やキトラ古墳のルーツになつた日本固有の文様壁がを持った装飾古墳が日本各地に点在する。」程度の軽い気持でありました。

ところが、昨年9月 熊本県菊池川中流域の装飾古墳を訪ね、色鮮やかな謎の文様の世界に引き込まれてしまいました。そこで、装飾古墳の集積地の分布地図を見て、またこの菊池川流域から砂鉄が取れることを聞いて、この装飾古墳の集積地が日本各地の「産鉄の地」に重なるのにビックリ。

ちょうど同じ頃 河内生駒山の南端が大和川に落ちるところに存在する「大県製鉄遺跡」(5世紀後半の大和王権の大鍛冶工房。精錬を開始していたのでないかと見られる)と重なる生駒連山南端の高井戸横穴古墳群の中にも同じような形象文様の横穴墳があること思い出し、「これらの装飾古墳群は鉄自給を模索する人たちの残した足跡ではないか。。。 古代の和鉄の道」と夢を膨らませました。

「装飾古墳は鉄の自給のため、大陸・朝鮮半島からやってきた産鉄の技術集団の足跡ではないか・・・」

「鉄の自給に必死に取り組んだこの時代 先たたら技術集団と重なるのではないか・・・」



なんでもかんでも 鉄に結び付けて・・・とは 思いながら 調べはじめましたが、実に面白い。

妄想かもしれませんが・・・

北九州の装飾古墳 Walk に今まで歩いた「和鉄の道」資料を重ねて 「鉄の6世紀 日本誕生と鉄の自給」にかけたロマンを追いかけてきました。

1. 古代 北九州に花咲いた装飾古墳群を訪ねて
  - 熊本県山鹿市チブサン古墳と福岡県桂川町王塚装飾古墳 -
    - 1.1 熊本県 菊池川流域の装飾古墳群 チブサン遺跡・鍋田横穴古墳群・熊本県装飾古墳館
    - 1.2. 日本で一番美しい装飾古墳 筑紫の国 王塚装飾古墳
2. 装飾古墳概要とその時代 鉄の自給へ向けた技術競争と朝鮮
  - 2.1. 北九州など限られた大河流域で花咲いた謎の装飾古墳群
  - 2.2. 装飾古墳の時代 大和王権の建設期 鉄の安定供給を求めて大陸・朝鮮へ
3. 熊本県菊池川流域に古代「火(肥)の国」の製鉄遺跡群を探して
  - 菊池川下流北岸に点在する小岱山製鉄遺跡群と玉名市疋田「炭焼き長者」伝説-
4. 日本の古代製鉄地帯と装飾古墳群の重なり
5. 装飾古墳のルーツは・・・

## 1. 古代 北九州に花咲いた装飾古墳群を訪ねて

- 熊本県山鹿市チブサン古墳と福岡県桂川町王塚装飾古墳 -



熊本県菊池 チブサン古墳 と チブサン古墳内部壁画



福岡県桂川町 王塚古墳とその内部壁画

北九州の装飾古墳。北九州に古墳時代 高松塚古墳に先駆け、中国文化の影響(詳細な人物像 朱雀・亀・虎・蛇など高松塚やキトラ古墳に代表され、漆喰での上に描かれる)を受けない幾何学文様などの鮮やかな装飾壁画が岩壁に直接描かれた古墳群が現れそして忽然と消えた。

その代表が福岡県遠賀川中流の「王塚装飾古墳」や熊本県菊池川中流の「チブサン装飾古墳」。

そして 出かけた熊本県菊池川流域「チブサン古墳」と遠賀川流域の「王塚装飾古墳」で見た装飾古墳の素晴らしさ。石室の中 真っ赤な色彩に彩られ、種々の図形文様で描かれた古代の甲いの祈り・死後の世界観の謎。その素晴らしさに驚嘆。赤を貴重とした鮮やかな彩色と幾何学文様の不思議な魅力。

そして、文字がない前史とは言いながら、畿内にはすでに大和政権が立ち 色々なことが語られはじめる時代に、まったくその古墳の主がわからないミステリーにビックリ。



これら装飾古墳は5世紀後半から6世紀末までの間に数多くつくられ、北九州・茨城などきわめて限られた場所に集中的に存在。畿内では河内の高井田古墳群の中にも存在する。

その出現地が北九州の菊池川・筑後川・遠賀川沿い・吉備・伯耆淀江の国 畿内河内高井田横穴古墳群遺跡・近江そして東国の房総・常陸の国と東進する。まるで日本誕生の東遷とおなじである。

ちょうど大和政権が誕生した5世紀頃から現れ、大和政権が安定する7世紀には消えてしまう。朝鮮半島伽耶からの供給が苦しくなり、鉄の自給が始まった時と符合する。

まったくのあてずっぽうですが、『この装飾古墳は大陸・朝鮮半島からやってきた『古代製鉄「産鉄の民」』と関係が深いのではないかと強い思いを持っています。

鉄の自給に向けた対応は 朝鮮に近いこの九州でいち早く試みられたに違いない。

装飾古墳の痕跡が和鉄の道とどうかさなるのか。。。。。。

「九州の装飾古墳」と「和鉄の道」の重なりを是非しらべたい。 本当に気になる Walk でした。

これら 九州の装飾古墳を訪ねる Walk は一度 九州の・縄文・古代遺跡を訪ねる旅としてまとめましたが、今回 和鉄との道との関係でまとめる記事収録のため、それらの中から抜き出して取りまとめました。

## 1.1 熊本県 菊池川流域の装飾古墳群 2004.10.6.

チブサン遺跡・鍋田横穴古墳群・熊本県装飾古墳館



古墳時代の装飾古墳文化が花咲いた菊池川流域 山鹿市近辺 2004.10.6.





熊本県菊池 チブサン古墳 チブサン古墳内部壁画

10月6日 早朝 古代史同好の人たち約30名の九州 縄文・古代史のツアー。

伊丹から 阿蘇の山並みを眺めながら熊本空港へ。熊本空港からチャーターしたバスで阿蘇の山並を背後に行手に県北の山々が連なる菊池市を通過して 山鹿市へ約1時間。

この古墳時代の装飾古墳群が集積する菊池川流域 山鹿・鹿央の地域は 福岡・大分と熊本県の県境の山岳地に沿って、菊池川が流れ下り、流域には縄文・弥生時代からの遺跡が点々と連なり、その最下流部では日本最古の鉄斧が出土した地。

古墳時代になると前方後円墳を中心とした古墳群が発展し、6~7世紀には菊池川流域に日本有数の装飾古墳文化が栄えた地である。



その中心地山鹿市では頭上に燈籠をいただけ、静かに踊る優美な山鹿燈籠踊りで有名なところである。

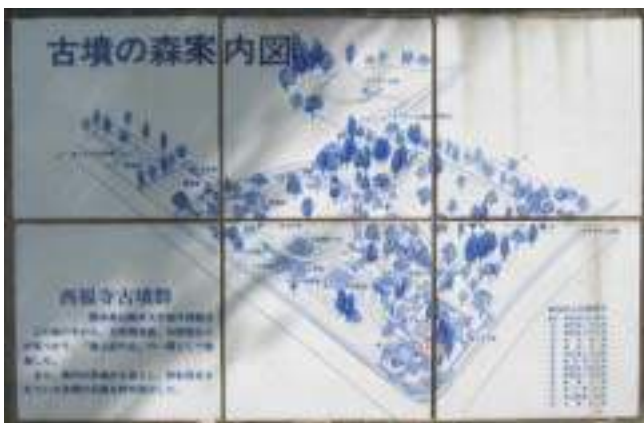
町の中を西から東へ菊池川が流れくだる温泉町である。

この町の西端で北の山岳部から流れ下る岩野川・吉田川が合流する合流点の北西岸の高台 鍋田台に山鹿市立博物館やチブサン古墳・鍋田横穴古墳群などがあり、この菊池川を挟んで南岸 鹿央町の丘陵地には岩原横穴古墳群や熊本県立装飾古墳館がある。

これら 古墳時代装飾古墳群文化の中心地は 今「肥後 古代の森」として整備されている。

このあたりから菊池川が蛇行しながら南に流れをかえ、有名な象嵌文字の剣が出土した江田船山古墳などのある菊水町を経て 玉名市で有明海にそそぐ。

**a. 肥後の森 鍋田台 オブサン古墳・チブサン古墳へ**



山鹿市立博物館と古墳の森案内板





肥後の森 古墳の森 鍋田台頂上部 西福寺古墳群 2004.10.6.

山鹿燈籠が街灯として立ち並ぶ山鹿市内を抜け、菊地川の支流岩野川を渡ったところに鍋田横穴古墳群の標識がみえ、ここから川岸に沿う丘陵地の細い道を何度かバスはターンしながら丘の上に出る。樹木に囲まれた公園になっていて、丘陵地の幾つもの丘に小さい幾つものこぶがが並んでいる。西福寺古墳群で良く整備された公園になっている。

丘の中腹の山鹿市立博物館で予備知識をいれて、ボランティア ガイドの案内でチブサン古墳を見学に丘を登ってゆく。丘の頂上部には方形周溝墓の西福寺古墳群が広がり幾つもの古墳が見える。天気が良いので、樹木の中に入ると本当に気持ちが良い。この頂上のすぐ下の丘にオブサン古墳。そして、そこを少し南に行くとチブサン古墳へと続く。

### オブサン古墳

丘を一段下ると饅頭状の古墳の入口部に長く手を伸ばした突堤の見える古墳がある。全国でも極めて珍しい突堤付き円墳で古くから「安産の神様」として信仰されてきた「オブサン古墳」である。



オブサン古墳 2004.10.9.

直径2.2m高さ 5mの古墳時代後期(6世紀後半)の円墳で、内部に巨石積の横穴式の複式石室が築かれていて、奥室には石屋形や一部には装飾文様が描かれているという。

入口から内部にはいるとすごい湿気。ガラス窓で外部と遮断 ガラス越しにみるが、内部の装飾壁画は良くわからない。

### チブサン古墳

このオブサン古墳から林を抜けて少し歩くと双子の丘に見える古墳が見えてくる。これが「チブサン古墳」である。



チブサン遺跡 2004.10.6.

チブサン遺跡は全長4.5m(後円部径2.4m、前方部幅1.57m)の前方後円墳。

古墳時代6世紀半ば頃に造られた代表的な装飾古墳。

潜道をとって、後円部に全長6mの複式石室(前室1.9m 奥室3.6m 四方の正方形)を持ち、側壁はドーム状に割石でくみ上げられ、天井は一枚の天井石でふさがれている。奥室の奥壁に沿って石屋形が築かれ、この部分に華麗な三角や菱形、同心円などの幾何学文様などが描かれ、見方によって鳥にも原始の仮面にも連想できる。

また、乳房にも見えることから「チブサン」という名がつき、「乳の神様」としての信仰を集めました。この名前の由来は、異説があって横穴式石室のルーツが朝鮮半島南部にあることから、韓国語のチブ(家)とサン(墓の尊称)の組み合わせが変化して、チブサンになったと推理する人もいます。

また、死者の枕元の右側の壁には、白い人物像が描かれている。

悪霊の前に立ちふさがる番兵といわれ、死者を護っている。

頭上の白い八個の円文は冥界を照らす星。また、これらの赤青白黒黄を使った絵は呪術的意図をもつ「除魔辟邪」と呼ばれているという。



チブサン遺跡内部 石屋形壁面の彩色壁画 中央に同心円など幾何学模様 右壁に白い人物  
(チブサン遺跡 内部石屋形レプリカより)

そんな予備知識を頭に入れて、狭い潜道の入口から中へ。

石室の中へは 2重の扉となっていて、しかも非常に狭い。斜めになっている長い階段のところで順番を待つ



チブサン遺跡 と その内部 石屋形壁面の彩色壁画 中央に同心円など幾何学模様



むんむんした内部 シャガんでも頭を打ちそうな狭い石室の入口からガラス越しに内部を見る。

正面にくっきりと同心円模様が赤・黒・白の彩色で鮮やかに描かれ、右壁の人物もかすかにわかる。こんな図案が6世紀に。。。。そして、赤。おそらくベンガラで描かれたのだろう。

高松塚古墳は漆喰の壁に描かれているが、チブサン遺跡などの装飾古墳では直接壁面に描かれているので剥がれ落ちずに残っている。

また、二つの丸い同心円 「チブサン古墳」名前の由来と言われるが、ぼっと暗闇の中に浮かび上がっているのを見ると「くちばしのある妖怪」の目の玉のようにも思える。

どんな人たちがここに葬られたのだろうか。。。。薄明かりに照らされた壁画を見ながら、色々思いをめぐらす。6世紀半ばといえば、大和では三輪政権が確立し、仏教伝来(538年)そして、聖徳太子の時代前夜である。



ガラス越しに見たチブサン遺跡 石屋形内部の壁画

当初 この石屋形は石棺のごとく こちら側にも石の壁があって、密封されていたと思っていました。こちらから見えるように取り外していると思っていましたが、そうではなく、初めからこちら側はオープン。石棺ではなく石屋形の意味やつと理解。

石室の中のベッド これが石屋形でこの中に直接死者が寝かされて葬られる。独特の墓の形式である。



チブサン古墳脇にある家屋形ならびに石人像のレプリカ 2004.10.6.

熊本県は古墳の内部に彩色や彫刻で文様や図柄が描かれた装飾古墳の数で全国一。

その数はけた違いで2位の福岡県が約60基なのに対し、熊本県には187基もある。そして、これらの装飾古墳はなぜか菊池川の流域に集中し、122基が確認されている。

さらに、122群・3000基を越える横穴墓群がひしめきあって、菊池川流域に日本の装飾古墳の約4割が分布している。

「装飾古墳がなぜ 菊池川流域や福岡遠賀川流域そして茨城県などに偏在して存在するのか。」



この謎は今も解けていない。

鍋田台の東側がこの「肥後古代森林の森」の入口になっていて、台地の斜面に大きな装飾古墳説明の陶板がモニュメントとしてはめ込まれていた。山鹿市立博物館のところまで戻って昼弁当。

もう一度博物館に入ると共に、ボランティアガイドの人がふっと漏らした「菊地川は砂鉄の産地」の言葉について教えてもらう。

「菊地川では 今でも川砂鉄が取れる。 県立装飾古墳館では砂鉄を集めて、製鉄実験もしている」と教えてもらう。



熊本県の装飾古墳説明のモニュメント  
肥後古代の森入口で

「やっぱり、この流域は古代製鉄の先進地ではないか。。。

装飾古墳はこの産鉄の民 産鉄の渡来人がもたらした文化でないか。。。 」 の意を強くするが、古代鉄との関係は良くわからず、装飾古墳館で聞くことにする。

山鹿市立博物館にはこの地で発見されていない石包丁型鉄器が展示され、まだ他の地域が石包丁を使っていた時代に既に鉄が使われていたことを示していた。

この菊地川流域は鉄の先進地である。

また、この鍋田台地のもう少し南側にある特異な岩山が林立する不動岩近傍で砂鉄が取れることまた、同じ山中で古代の赤顔料 ベンガラが採取されたことなどを教えてもらう。



珍しい石包丁型鉄器

そんな事を教えてもらって、鍋田の丘を東側に廻ると、菊地川の流れた家並みの向こうに、不動岩の特異な 山鹿市立博物館に展示より 石包丁型鉄器姿が見えた。

後で調べるとこの不動岩 変斑レイ岩で菊地川流域は太古の阿蘇山噴火によるマグマが変質した地質で鉄鉱物を多く含んでいることもわかった。



チブサン古墳 鍋田台から見た不動岩

2004.10.6.

## b. 鍋田横穴古墳群へ

昼食後 鍋田台を菊地川の支流岩野川の岸までおりる。

この川に沿って鍋田台の崖が続き、その崖の岩をくりぬいて幾くつもの横穴古墳があり、その数 55 基。そのうち 10 基に装飾壁画がある。鍋田横穴古墳群である。

最も多彩な壁画を持つのが、ちょうど鍋田台から下りてきたすぐ横 27 号墓の横穴で、弓をもった人物や楯（たて）などが彫刻されている。



縄文文化

### 鍋田横穴群第27号墓

Nabeta Rock-cut Tombs No.27 Tomb

(7世紀 - 7th century)

山形市立大学

山形市の西は、平小幡台地の南端には城地区古墳、村岡地区古墳、鍋田地区古墳等の横穴群が散在している。中でも著名なのが鍋田横穴群の第27号墓である。入口の右側は彫刻されているが、古く藤原2年（1068）の矢野一善のスケッチによると、この部分にも動物や人物の彫刻が施されている。展示資料は入口の右側の外壁に貼られたもので、すべて浮彫りである。1は弓をもつ人物で、墓を守る人であろう。2は手袋、3は楯、4は大きな盾、5は小さな楯、6は楯、7は矢をつかえと弓、8は楯、9は盾である。以上のように文様も豊富で、装飾のある横穴の代表例である。





この鍋田横穴古墳群で一番有名なのが、第 27 号墓。入口右側にも同じ線刻画があった。

今は崩落してないが、江戸時代の残されたスケッチでそれがわかる。

ちょっと見た目には汚れていて判読しにくいけど、横穴のすぐ脇に弓を持つ人物　そして左へ順に矛先・鞆・鞆・鎌・矢をつがえた弓・盾そしてそれらの下に馬が描かれ、侵入者から葬られた人を守る人を描いている。

鍋田横穴古墳群では　大きな装飾古墳はこれだけであるが、岩野川に沿う崖に多数の横穴があり、川に沿った遊歩道から見学できる。　墓を見学しているわけであるが、全く暗さはない。

すぐ南には清流が流れ、その向こうに東の不動岩などの山々を後背として広々とした平野が西の有明海までひろがる奥まった地。ボランティアガイドの人はこの地は昔菊地川を中心とした 3 河川の合流点で、氾濫の多い肥沃な土地だったという。

鍋田台ほか菊地川に沿う高台・山裾が昔から早く開けた所以であろう。



鍋田横穴古墳群　2004.10.6.

### c. 熊本県立装飾古墳館と岩原横穴古墳群



鹿央町　熊本県立装飾古墳館とそこからみた岩原古墳群

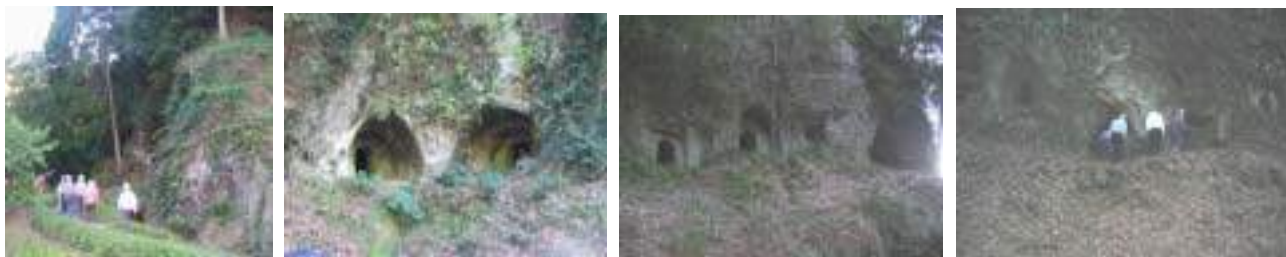
鍋田台の「肥後古代の森」から　東西に流れる菊地川を反対南側の鹿央町の高台にも 5 世紀の古墳群・横穴古墳群がある。岩原古墳群・岩原横穴古墳群で、ここも「肥後古代の森・鹿央地区」として整備されている。その中心施設として熊本県立装飾古墳館があり、熊本県の装飾古墳のレプリカ再現展示をはじめ、屋外には岩原古墳群とともに横山古墳など県内の古墳を移設復元して展示している。



鹿央町　岩原古墳群と移設復元された横山古墳　2004.10.6.

鍋田台で時間をとったため、この台地をゆっくり歩けなかったが、全長 107m の前方後円墳双子塚古墳を中心

に 12 基の円墳があり、高台の北斜面の崖には 100 基を超える岩原横穴古墳群があつた。



岩原横穴古墳群 2004.10.6.

菊池川流域を全部あるいたわけではないが、この山鹿・鹿央を中心とした菊池川流域は古墳時代の古墳の宝庫。日本誕生の先進地。そして、山鹿市の片保田東原弥生遺跡からは他の地域にはない石包丁型の鉄器が出土。西へ菊池川を下ると象嵌文字のある鉄剣が出土した菊水町江田船山古墳。

また、川砂鉄の宝庫 菊池川が海岸で形成するデルタに程近い荒尾市の小岱山には平安時代から鎌倉時代にかけてのたたら製鉄群があるという。

「この菊池川流域は産鉄の人たちが分け入った古代鉄の先進地」の思いが益々強くなる。そして、装飾古墳を作った人たちはそんな鉄の技術を持って この地にやってきた「渡来の人たち」ではないだろうか。。 鉄が演じた日本誕生へのドラマがここでもあったのだろう。

これが事実なら、もう一つの九州装飾古墳の集積地 遠賀川流域も鉄の痕跡があるだろう。

昔訪ねた筑豊のたたら遺跡が頭にある。

最も美しい装飾古墳といわれる北九州 飯塚の「王塚装飾古墳」にもすぐ出かけた。

確証はないが、描いていたイメージが、益々強くなってご機嫌で、この地を後にする。

後日 10 月 15 日 北九州 飯塚の近く桂川町の王塚装飾古墳を訪ねました。その素晴らしさもすごい。

これらについては 別途 「装飾古墳群と古代鉄の先進地」とでもしてまとめます。

2004.10.6 . 九州の縄文・古代遺跡を訪ねる旅の途中で

by Mutsu Nakanishi





## 1.2. 日本で一番美しい装飾古墳 筑紫の国 王塚装飾古墳 2004.10.15



王塚装飾古墳 古墳内部は隣の王塚装飾古墳館に作られた復元レプリカ 2004.10.15.

九州 菊池川の装飾古墳群のチブサン古墳を訪ねて この地が産鉄の地であることを知り、北九州のもう一つの装飾古墳集積地である福岡県 遠賀川流域に是非行きたくなって 山口へいった10月15日 家内と二人 日本で一番美しい装飾古墳 筑紫の国 王塚装飾古墳を 飯塚市の南 桂川町にたずねました



王塚古墳は西に三郡山地 東に福智山地 南に古智山塊・英彦山塊にコの字囲まれた筑豊平野の中にあり、西の三郡山地の山麓を流れる穂波川と本流遠賀川の本流との合流点の位置にある。これらの山岳部は花こう岩ベルトで、豊富な金属資源・石炭の資源地帯である。

よく知らないが、王塚古墳の西の三郡山地の犬鳴山の山麓には犬鳴金山製鉄遺跡の名前が見え、北には竹原装飾古墳がある。また、遠賀川に沿って北へ進んだ英彦山の山麓添田町には多くの鉄器と共に最古の銅製のヤリカンナや金属鍛冶工房が出土した弥生後期の庄原遺跡がある。もう7,8年前になるが、3世紀の大金属工房の新聞記事を見て 飛んで見に行ったことがありました。



関門海峡を渡り、九州自動車道を九州の山並みの中を走り、美しい形の福智山のトンネルを抜けると筑豊の平野が広がる。

八幡のインターをうっかり通り過ぎて、若宮のインターを出て、飯塚の町をめざす。

飯塚で広い国道200号線にでて、南へ飯塚の町を通り抜け、遠賀川に合流する穂波川を渡ると桂川町。桂川町の街中の筑豊本線を渡ったところに王塚古墳の標識が見える。狭い道を再度西へ線路を渡った街はずれに王塚古墳その先には田園地帯と穂波川の土手があった。

関門端をわたって 一時間ちょっとの距離である。

集落に接するように巨大な前方後円墳の王塚古墳があり、その南西側に王塚装飾古墳館と広い遺跡公園が整備されている。

古墳館の前に旗が翻り、数張りのテントがあり、何かと聞くと「明日が年に一度の王塚古墳内部の公開日」と・・・。

残念では在りましたが、王塚古墳館にそっくりそのまま王塚古墳の石室が復元展示されており、かつ九州の主だった装飾古墳が復元展示されている。

こんな復元展示というとチャッチイイかげんなのが多いが、きっちり復元展示され、素晴らしい展示館で、古墳の石室内部の装飾壁画は残念ながら見られなかったが、満足した。



古墳の西南 古墳館の背後に三郡山塊

遠くに福智山

古墳館より東側に見える王塚古墳



王塚古墳 前方後円墳と墳丘





王塚古墳は6世紀中頃の全長86m 後円部径56m 前方部幅60mの二段築成式の前方後円墳で、墳丘の内部には全長6.5mの複式の石室がある。この石室全体鮮やかな赤を基調に数々の幾何学文・図形文が描かれている。墳丘の上にあがって、周囲をながめる。田園地の中に遠く 福智山や三群山地の山々が見える。花崗岩地帯の山々で、これらの山々がこの一帯の勢力の源であつたらうと鉄に思いをめぐらしつつ、装飾古墳館の中に入る。

装飾古墳館には 王塚古墳をはじめ、チブサン古墳・竹原古墳など北九州の主要装飾古墳石室内部が、復元展示され、かつ、日本各地の装飾古墳ならびにその文様について わかりやすく解説パネル展示されている。



前室奥壁の小窓と装飾壁画



玄室の石屋形と奥へ木の装飾壁画



王塚古墳復元展示 石室内部 部分



吉井町 日岡古墳



若宮町 竹原古墳



福島県 清戸サク古墳



茨城県虎塚古墳

日本各地の装飾古墳 復元展示

(王塚装飾古墳館)

素晴らしい色鮮やかな装飾古墳に本当にビックリでした。

もうひとつ 興味があったのは これら装飾古墳を描いた顔料と直接壁に描いた顔料の接着剤。

古代の接着剤と顔料 まだ よくわからないところが多いようですが、実際の試験画描と共にそれぞれの可能性が展示されていました。

一番判らないのが、この時代の接着剤とか。。。。

その候補として「にかわ」「漆」「ゴマ油」だとか。。。。。

興味深深でした。



九州の装飾古墳に使われた顔料



装飾古墳の壁画顔料を溶いた接着剤の候補 「エゴマ」「膠」「漆」

高松塚よりも古い時代に こんなに美しい装飾古墳があったこと驚きです。ちなみに この王塚装飾古墳の赤は酸化鉄・ベンガラ。古代顔料・接着剤 書き物で色々読んだり、聞いたりしましたが、現物と画描と対比展示してみたのははじめて。。 顔料が実際の絵になるさま 初めての思いです。

王塚古墳 やつぱり 国宝の本当に素晴らしい遺跡でした。

やっぱり 装飾古墳は古代和鉄の道に花ひらいた文化でなかったか。。。。。

ばらばらだった古代の筑紫の国「装飾古墳の集積地は古代 産鉄の地」との思いが身近に。。。。。

おそらく 朝鮮半島の高度な鉄の技術集団がからんでいるだろう。

今までの和鉄の道と装飾古墳 一度重ねて調べなおしてみよう。

ちょうど時代は大和王権が確立中央集権化する時代 また 朝鮮半島から奥の技術集団がやってきて鉄の自給が始まった時代 記紀神話・出雲神話・風土記と多くの製鉄伝承が錯綜する時代である。

なんか 無手勝流にかんがえてきた日本誕生と和鉄の道のドラマが結びつく。

いいテーマまが出てきたとルンルンで 遠賀川沿いを通して関門大橋へ 帰路に着きました。

2005.10.15. 関門大橋を渡りつつ、古代の鉄の道にひたって

Mutsu Nakanishi



## 2. 装飾古墳概要とその時代

鉄の自給へ向けた技術競争と朝鮮

### 2.1. 北九州なと限られた大河流域で花咲いた謎の装飾古墳群

5世紀から6世紀にかけて 北九州そして東国などごく限られた地域に鮮やかな装飾文様で彩られた装飾古墳文化があった。特に 北九州の遠賀川・筑後川・菊池川流域には その半数以上が存在し、もうひとつの集積地は常陸の北部地域である。

当初 北九州に出現し、 築上された墳丘の横穴式石室の石棺に簡単な円文・直弧文・幾何学文様などが鮮やかな赤・黒・黄などの顔料で描かれ、6世紀に入ると石室の奥に石屋形が設置され、馬・盾・弓など数々の形象図形文様も登場してそれを色鮮やかに飾るとともに地域を拡大しながら、東国へ伝播してゆく。

そして、7世紀になるとこの文化は次第に衰退して消滅する。墳丘と同時期につくられた横穴にも同じ系譜がある。他の地域には現れなかった装飾古墳群の文化 謎の古代文化である。

#### 【 代表的な装飾古墳とその内部の壁画文様 王塚装飾古墳館展示資料ほかより 再構成 】



福岡県桂川町 王塚古墳



熊本県山鹿市 チブサン古墳



5世紀 石人山古墳 前方後円墳  
直弧文  
福岡県広川町 筑後川流域



6世紀 チブサン古墳 前方後円墳  
幾何学文 人  
熊本県山鹿市 菊池川流域



6世紀 千金甲1号墳 円墳  
同心円文 刃  
熊本県熊本市



6世紀 竹原遺跡 円墳  
人物・鳥・キザハシ・怪獣・船ほか  
福岡県若宮町 遠賀川流域



6世紀 王塚古墳 前方後円墳  
武器・馬・人物・幾何学文・蕨手文双脚輪状文  
福岡県桂川町 遠賀川流域



6世紀 日岡古墳 前方後円墳  
同心円文・馬・船・魚・盾・刃ほか  
福岡県吉井町 筑後川流域



7世紀 清戸サク76号横穴墓  
人物・渦巻文・矢・馬・犬ほか  
福島県双葉町



7世紀 虎塚古墳 前方後円墳  
刃・矛・船・幾何学文・同心円文ほか  
茨城県ひたちなか市 那珂川流域



装飾古墳の分布

大陸・朝鮮半島には 日本の装飾古墳と同じ文様がそっくりそのまま描かれたような古墳はまだ、発見されていない。しかし、横穴石室に精細な人物壁画を有する装飾古墳は高句麗で2世紀頃から始まっており、横穴石室を装飾することのルーツはやっぱり高句麗など朝鮮半島の影響といえる。

直弧文や円文・三角文などの幾何学文は日本固有の文様で、蕨手文やなどは南方系の隼人族などの特長を持つといわれている。

とはいえ、赤 緑 黒 白などの顔料を用いて弧線・円・三角形・舟・鳥・馬など、さまざまな図文が描かれた装飾古墳は、別名「黄泉の国の芸術」とも呼ばれ、死者を弔う気持ちが強く表現されているといわれますが、今なお多くの謎に包まれています。



装飾古墳の文様 王塚装飾古墳館展示解説より

5世紀 装飾古墳の初期には 直弧文や三角文・円文などの幾何学文中心でしたが、やがて6世紀になると蕨手文など素朴な図柄や弓矢・盾などの武具 そして船や人物・馬・カエル・鳥など造形を表現する文様を同時に描くなど変化を遂げつつ、6世紀後半には大陸・高句麗の思想性を色濃く帯びた装飾も現れる。

この連続三角文や同心円文などの文様、朱や青などの強烈な彩色などは、葬送儀礼への古代人の祈りをあらわし、造形を表現する文様は古代の精神世界を伝えているといわれ、例えば、舳先に鳥がとまった舟に人や馬を乗せた絵からは、当時の人々の死生観を知ることができる。

装飾古墳は、古代人が未来に託したメッセージと言えるかもしれない。

そして 6世紀後半になると 月をあらわすヒキガエルや玄武・朱雀など高句麗壁画の材料が描かれたものも現れてくる。すなわち、文様も日本固有の文様から大陸・高句麗の文様の影響が現れてきていると考えられる。また、5世紀から時代が下るにつれ、装飾の規模も石室内の石棺・石屋形の装飾から複式の石室を持ち、それら石室全体を豪華絢爛に飾る装飾へと移ってゆく。



## 2.2. 装飾古墳の時代は大和王権の建設期 鉄の安定供給を求めて大陸・朝鮮へ

装飾古墳に描かれた文様は朝鮮半島にある壁画古墳とは大きく異なっているが、石室の石棺や壁に彩色壁画を残す文化は高句麗に古くからあり、装飾古墳のルーツも朝鮮半島であろう。

当時 日本は有力豪族の連合体である大和王権が統一国家を着々と進める過程にある。

この、大和王権の支配の初期には、地方豪族は自分の支配地での統治が認められており、まだ地方には中央の直轄組織である国造などの直接統治組織は形成されておらず、地方の豪族は大和王権の中で自分たち自分の王国を建設し、その力の印・大和王権の傘の中にある印としてとして前方後円墳の建設を許され、日本各地の国で前方後円墳を中心とした巨大な墳丘が建設された時代である。

こんな時代の中で、限られた地域の地方を支配する王族（豪族）の墳丘墓や横穴墓として装飾古墳群が現れてくる。

（律令政治が始まり、大和の直接支配が始まるのは大化の改新の後7世紀半ばまで待たねばならない。

それまでは 地方の豪族もそれぞれの王国で大きな力をもっていたと見られている。）

装飾古墳が現れた5,6世紀頃 朝鮮半島は、長く朝鮮半島を支配してきた、漢の衰退により大陸支配から脱した三国時代。北に高句麗・百済・新羅そして南端に伽耶の小国家群が並立していた。

一手に日本に鉄素材を供給してきた伽耶・任那の諸国が新羅・百済の重圧に侵され、かつ高句麗の南下にさらされた百済・新羅が鉄の安定供給基地 伽耶諸国と密接に関係する大和王権と連携・抗争しながら、大和王権をも巻き込んだ戦乱の中 次第に新羅が勢力を拡大する。

ますます日本への鉄の移入は難しくなり、自給が必須課題となっていた時代である。

一方、国内では、紀元前4世紀にはもう鉄器が伝来し、その後 技術・文化は大陸・朝鮮半島との密接な交流を通じて、朝鮮諸国より、鉄の安定供給を受けてきた。

多くの技術・文化が次々と伝来し、技術移転が行われたのに対し、製鉄技術だけは5世紀後半まで約1000年の長きに渡って移転できず、鉄の自給が始まるのは5世紀半ば以降であると言われている。

この間 卑弥呼の時代から聖徳太子の時代まで「朝鮮半島から鉄素材が輸入され続けるというのに・・・」である。しかも、大陸・朝鮮半島との人・文化・技術の交流は連綿と続き、あれだけ多くの渡来人がやってきて 日本統一を推進してきた大和の王権が常に「朝鮮半島からの鉄の覇権」を最大外交課題とてきたのにかかわらず・・・。朝鮮半島の鉄の覇権をにぎった大和王権そして大和の豪族・地方の豪族たち そして渡来人技術集団 それぞれが、力の源泉を求めて鉄の新技术には躍起になったろうに・・・

一般には大和を中心とした豪族連合大和王権がこの朝鮮半島の鉄輸入の覇権を支配して、日本各地の豪族たちを支配していったというのが通説であるが、歴史に登場した九州の諸国 出雲 伯耆・丹後 若狭 越の日本海諸国 吉備・播磨・河内・近江・尾張そして東国の諸国で数々の豪族たちが 鉄を産する「百済・伽耶諸国・新羅」の朝鮮半島諸国と連携しながら、鉄自給を目指した技術競争が繰り広げられたに違いない。出雲神話・記紀神話そして風土記など各地に残る伝承はその過程が異説を含めて面々と伝えているという。鉄器が伝来し、鍛冶加工による農具・武器・武具など鉄製品が広がってゆく中で 本当に 1000年もの長きに渡って 鉄素材は自給できなかったのだろうか・・・

この長い間、鉄の自給をもとめてどんなドラマがあったのか。。。。



3世紀 朝鮮半島の鉄を求めて 500年頃の朝鮮半島

たたら製鉄の前夜・鉄自給開始の謎は古代史のロマンとして邪馬台国とともに今もってベールに包まれたままである。

参考

季刊考古学 13「東アジアの装飾古墳を語る」2004年2月

王塚装飾古墳館 資料

### 3. 熊本県菊池川流域に古代「火（肥）の国」の製鉄遺跡群を探して

菊池川下流北岸に点在する小岱山製鉄遺跡群と玉名市疋野「炭焼き長者」伝説



菊池川流域を訪ねた時にこの流域で砂鉄が取れることを聞いて、「古代にこの菊池川流域に製鉄遺跡があったのでは。。。と」考え、熊本県立装飾古墳館の江本氏に資料をお願いし、菊池川の河口近く北側の丘陵地に点在する小岱山製鉄遺跡群の資料を送っていただきました。

(荒尾市文化財調査報告書第7集「金山・樺製鉄遺跡群調査報告書 - 小岱山麓における製鉄遺跡の調査 - 」)

資料によると直接この菊池川流域での古代製鉄遺跡は見つからないものの菊池川の河口に近くの両岸近く、南側の三の山北側の小岱山にそれぞれ、中世・平安時代の製鉄遺跡群があり、同時にこの川の流域で、さらに時代をさかのぼれる鍛冶滓や精錬滓などが発見されているとの報告があり、装飾古墳群との直接的なつながりは見つけれませんでした。

しかし、装飾古墳文化の中心菊池川の中流域には文化が現われるすぐ前の時代に鍛冶場があり、石型鉄包丁など数々の鉄器が出土した大環濠集落山鹿市方保田東遺跡があり、この菊池川流域が「火の国」の中心地として古くからの産鉄の地であったことがわかる。

実際に見聞したわけではありませんが、この資料ならびに昨年出かけた菊池川流域をもとに、この菊池川周辺の製鉄遺跡についてとりまとめました。

また 菊池川の河口に近い玉名市には 古代製鉄と関係深い豪族玉名日置氏の根拠地（疋野）で、ここには「疋田長者」伝説 いわゆる古代製鉄と関係深い伝承「炭焼き長者」伝説がありました。

古代日本誕生の黎明期に熊本県菊池川流域に忽然と現われ忽然ときえた「装飾古墳の文化」が渡来製鉄の技術集団の足跡



小岱山製鉄遺跡群



熊本県の装飾古墳分布と製鉄遺跡群



ではないかと考え、調べ始めた菊池川流域 古代の和鉄の道。

本当に半信半疑でしたが、脈々と古代の鉄の痕跡があると感じています。

2005.2.25. Mutsu Nakanishi

### 3.1. 菊池川流域 古代製鉄の足跡を探して

#### 3.2. 「炭焼き長者伝説」 疋野長者伝説

#### 3.3. 熊本県 装飾古墳群と熊本県の製鉄遺跡の関係まとめ

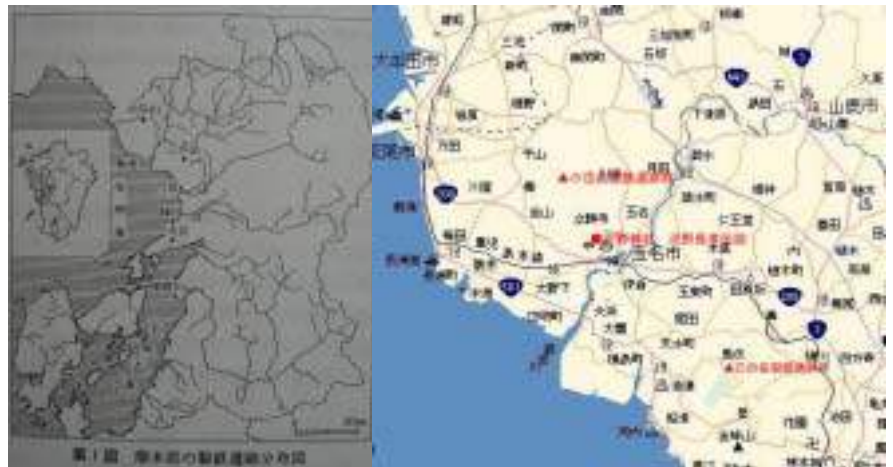
## 3.1. 菊池川流域 古代製鉄の足跡を探して

熊本県立装飾古墳館の江本氏より送っていただいた資料「金山・樺製鉄遺跡群調査報告書 - 小岱山麓における製鉄遺跡の調査 -」(抜粋)をベースに菊池川流域の古代製鉄遺跡の痕跡を調べた。

熊本県には約 120 箇所の製鉄遺跡があり、菊池川北岸の小岱山周辺 菊池川の南にひろがる金峰山塊の三の岳周辺そして宇土半島の大岳周辺の 3 箇所に集中し、なかでも小岱山周辺に持つとも多い。

これらの地域はいずれも古代遺跡分布の密度の濃い地域でもある。

### 小岱山製鉄遺跡群



熊本県の製鉄遺跡

本州から帯状に伸びる北九州花崗岩

帯の南端がこの小岱山を含む菊池川北岸で、良質な鉄を含んでいる一帯と考えられ、古くから和鉄精錬が行われ、この小岱山山麓を取り囲むように製鉄遺跡群があり、小岱山製鉄遺跡群と呼ばれる。この製鉄遺跡群でもっとも古い製鉄遺跡は金山地区の大藤 1 号遺跡で 9 世紀頃と見られている。そして 最も多くの遺跡は 11 世紀・12 世紀の平安時代の遺跡と見られ、鎌倉時代まで製鉄が営まれたといわれる。



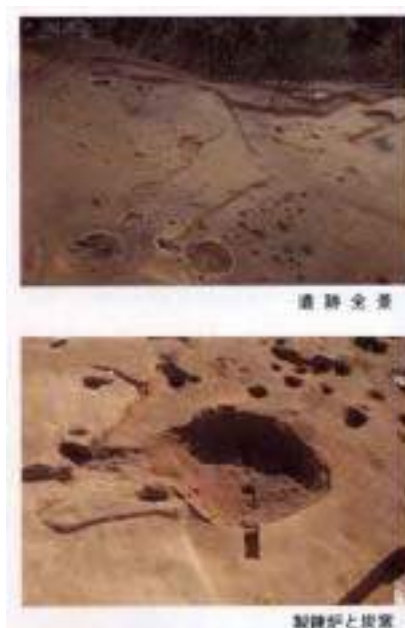
熊本県荒尾市・玉名市・南関町に広がる小岱山製鉄遺跡群

小岱山周辺では、北麓の玉名郡南関町に 1 遺跡(大谷遺跡)、東・南麓の玉名市に 5 遺跡(六反・広福寺裏・築地小岱、斧砥・蛇ヶ谷遺跡)が見られるほか、西麓の荒尾市に最も集中し、平山・樺(かば)・金山地区に 25 遺跡が知られています。

小岱山製鉄跡群はこれらの製鉄遺跡を総称した呼び方である。  
それぞれの遺跡からは炉壁片・羽口と大量の鉄滓などが出土しているが、大藤 1 号遺跡ではゴルフ場造成に伴う発掘調査が行われ、完全な形の製錬炉 1 基、炭窯 9 基、廃滓場等が発掘された。

製錬炉は、全長約 90cm、炉床の長さ 87cm、幅 32～37cm、炉壁の高さは残存部で約 23cm。炉の構造は、半地下式竪型炉で、本体の前方に「八」字状の前庭部（作業面）を持ち、炉床は緩やかに傾斜（約 12 度）していた。廃滓場は、炉の下方の斜面に広がり、鉄滓、炉壁羽口、土器等が出土。炭窯は、直径 130～235cm の円形で、最も深いもので 69cm。焚口や煙道は確認されなかった。

出土した須恵器の年代から 9 世紀と考えられ、小岱山周辺においては最も古い製鉄遺跡である。



大藤 1 号遺跡

[http://cyber.pref.kumamoto.jp/arinomama/contents\\_dbpac/asp/bunkazai/](http://cyber.pref.kumamoto.jp/arinomama/contents_dbpac/asp/bunkazai/)

[http://www.pref.kumamoto.jp/education/hinokuni/tuushinkumamoto/no.5/no5\\_5.html](http://www.pref.kumamoto.jp/education/hinokuni/tuushinkumamoto/no.5/no5_5.html) より

### 三の岳製鉄遺跡群ほかの製鉄遺跡

三の岳は菊池川による沖積平野を間に小岱山と対峙した菊池川の南にあり、三の岳の北側中腹や山麓に 8 箇所の製鉄遺跡が確認されているが、十分な資料がないが、平安時代の遺跡と見られている。

また、宇土半島の基部にある大岳製鉄遺跡ではさらに年代は新しいとみられているが、十分な資料がない。これらのたたら遺跡のほか 近世 球磨川左岸の段丘で営まれた八代鉄山や 益城町の馬水鉄山がある。

以上示したとおり、古代に遡れる製鉄遺跡として 菊池川流域にある小岱山製鉄遺跡群が在り、三の岳製鉄遺跡も周辺の古代遺跡の重なりから古代に遡れるかもしれない。しかし、どちらも現在のところ、装飾古墳が出現した 5 世紀～7 世紀にまで遡れる製鉄遺跡は発見されていない。

しかしながら、菊池川周辺では 古代たたら黎明期まで遡れると考えられる鉄滓が断片ではあるが、出土している。

その中で 3 世紀末から 4 世紀はじめにかけて数々の鉄器が出土した大環濠集落 山鹿市の方保田遺跡は重要であろう。

### 方保田東原遺跡

菊池川の中流 山鹿市の東、菊池川とその支流の方保田川にはさまれた台地の上に広がる弥生時代後期から古墳時代前期（今から約 1700 年～1900 年前）に繁栄した大環濠集落遺跡で、鉄製のさまざまな道具である鉄器を作った鍛冶場と思われる



菊池川中流 山鹿市周辺



る住居跡も発見。

3世紀後半から4世紀初頭期の多数の鉄器と共に全国で唯一といわれる石包丁形鉄器が出土し、また、特殊な出土品として巴形銅器をはじめとする数多くの青銅製品も出土した。

当時この流域の中心的集落と考えられ、その背景には豊富な鉄の存在があったと考えられる。

そして その後の5～6世紀 この方保田遺跡のすぐ西の菊池川中流流域の台地の上では装飾古墳群（チブサン・オブサン古墳・鍋田横穴古墳群・岩原横穴古墳群など）が花咲く。地菊池川流域古代の中心地。「火の国」の中心地である。

まさに 装飾古墳と鉄との出会いと感じています。

昨年9月 山鹿市博物館で「石包丁型鉄包丁」が展示されているのを見ましたが、その時は装飾古墳に眼をうばわれ、こんな背景が後ろにあるなどつゆ知りませんでした。



このほか「金山・樺製鉄遺跡群調査報告書 - 小岱山麓における製鉄遺跡の調査 -」（抜粋）資料に書かれている古代の菊池川流域の和鉄関係の記録を拾って書き留めておく

- |                 |                 |             |
|-----------------|-----------------|-------------|
| 1. 玉名郡岱明町 下前原遺跡 | 弥生時代末期 鉄片・鉄滓の出土 | 菊池川河口近くの北岸地 |
| 2. 玉名郡菊水町 諏訪原遺跡 | 弥生末期 鉄片出土       | 菊池川中流       |
| 3. 荒尾市 野原八幡古墳群  | 一号古墳墳丘から鉄滓出土    | 小岱山周辺       |

「金山・樺製鉄遺跡群調査報告書 - 小岱山麓における製鉄遺跡の調査 -」（抜粋）より

### 3.2. 「炭焼き長者伝説」 疋野長者伝説

菊池川の河口に近い玉名市には 古代製鉄と関係深い豪族玉名日置氏の根拠地（疋野）で、ここには「疋田長者」伝説 いわゆる古代製鉄と関係深い伝承「炭焼き長者」伝説がありました。



玉名市



疋田神社



## 「疋田長者」伝説 玉名市疋田

玉名市 インターネットホームページより

千古の昔、都に美しい姫君がおられました。

「肥後国疋野の里に住む炭焼小五郎という若者と夫婦になるように」との夢を度々みられた姫君は、供を従えはるばると小岱山の麓の疋野の里へやってこられました。

小五郎は驚き、貧しさ故に食べる物もないと断りましたが、姫君はお告げだからぜひ妻にと申され、また金貨を渡し米を買ってきて欲しいと頼まれました。

しかたなく出かけた小五郎は、途中飛んできた白さぎに金貨を投げつけました。

傷を負った白さぎは、湯煙立ち上る谷間へ落ちて行きましたが、暫くすると元気になって飛び去って行きました。

米を買わずに引き返した小五郎に姫君は「あれは大切なお金というもので何でも買うことができましたのに」と残念がられました。

「あのようなものは、この山の中に沢山あります」との返事に、よく見るとあちこち沢山の金塊が埋もれていました。

こうして、めでたく姫君と夫婦になった小五郎は、疋野長者と呼ばれて大変栄えて幸福に暮らし、白鷺が元気になった湯が、今の玉名温泉となった。

この「炭焼き長者伝説」は、日本各地に存在し、総じて、炭焼き・鍛冶・冶金・タタラなどのたたら製鉄と関連した伝承と言われており、また 疋田神社の祭神、波比岐神は「灰吹き」の意味ともいわれる。また、この疋田神社は古代この地方でたたら製鉄に従事した玉名の豪族 日置氏の氏神とも言われる。日置氏は出雲で製鉄に従事した日置氏と同族の豪族であろうと考えられている。

### 3.3. 熊本県 装飾古墳群と熊本県の製鉄遺跡の関係まとめ



熊本県 装飾古墳群と熊本県の製鉄遺跡の位置関係

菊池川の流域 あまり良く知りませんでしたが、古代早くから開けた「火の国」文化の先進地。古代遺跡が点々と連なっている。



そんな中で、この地に忽然と現われ、忽然と消えた「装飾古墳文化」和鉄生産の先進地でもあった。

この菊池川流域から弥生時代 石包丁にかわる鉄包丁がはじめて出土し、文字が刻まれた鉄剣がでた江田船山古墳もある。菊池川北岸の小岱山製鉄遺跡群は平安時代の製鉄遺跡群と言われており、さらに古代初期まで遡れるかも知れない。古代の製鉄伝説があり、和鉄に関係した玉名日置氏の存在も……。



九州・中国地方の花崗岩ベルト



菊池川流域の山並み

この地は古代 鉄の黎明期 装飾古墳の文化が花咲いた5～6世紀末にも火の国の製鉄の中心地として 畿内中央政権のみならず、大陸・朝鮮半島とも独自の交流をもっていたとの意を益々強くする。装飾古墳はそんな産鉄の技術集団が残した足跡であつたらう。

2005.3.1. by Mutsu Nakanishi

#### 4. 日本の古代製鉄地帯と装飾古墳群の重なり

朝鮮半島との人・文化の交流の中で、大和王権と同様に日本各地の豪族・王国と結んで、日本での鉄の自立に挑んだ渡来人技術集団が数多くいたに違いない。

その足跡のひとつがこの限られた時期に限られた場所に装飾古墳が現れた理由でないか……

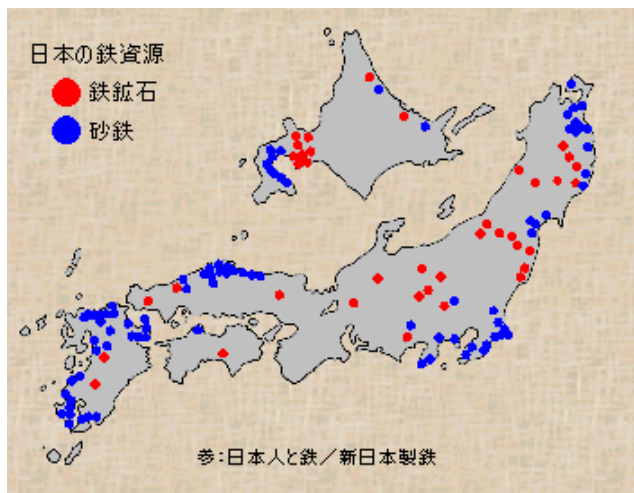
そして、大和王権を中心とした豪族連合政権から大和中央政権が確立し、広く鉄の自給が進む7世紀にはこの装飾古墳文化は消滅する。

筑紫・火・豊の九州で そして 日本海沿岸の出雲・伯耆・越へ 瀬戸内の吉備・讃岐・播磨・河内・近江へ そして東国 常陸・房総へと拡大する。これはまさに古代の鉄の道でなかったか……

弥生時代の製鉄技術から古墳時代になると出土する鉄滓の質・量などの変化から、朝鮮半島から鉄素材とともに鍛冶新技術が入り、北九州で 鍛冶技術の革新がはじまり、鉄精錬の模索も始まったと考えられる。実際に「たたら製鉄炉」が出土し、製鉄がおこなわれたのを明確に示すのは6世紀後半吉備 千引カナク口谷や大蔵池南などの製鉄遺跡 丹後の国 古橋・遠所製鉄遺跡などである。

一方 大和政権でも 4 世紀後半になると畿内の王権を形成する豪族たちが、それぞれ、専門の鍛冶工房を経営して鉄器生産に乗り出す。そして、5 世紀半ば河内の大県などの大鍛冶工房に次第に集約されてゆく。この大県鍛冶工房では大量鉄滓・羽口の出土からこの工房の周辺で精錬がはじめられていたと見られている。そして 7 世紀後半になると南近江源内峠や木瓜原遺跡でも鉄精錬がはじまる。これら大和王権の鉄の精錬にも、多くの渡来鉄の技術集団が加わっていたにちがいない。

日本の鉄の自立を推進した鉄の渡来人技術集団のひとつが産鉄の地で残した足跡がこの装飾古墳群と考えれば、時期・場所の痕跡が見事に符合する。まさに胸わくわくの話である。



日本の鉄資源



装飾古墳群の位置

【北九州・福岡の山地と大河の概要】

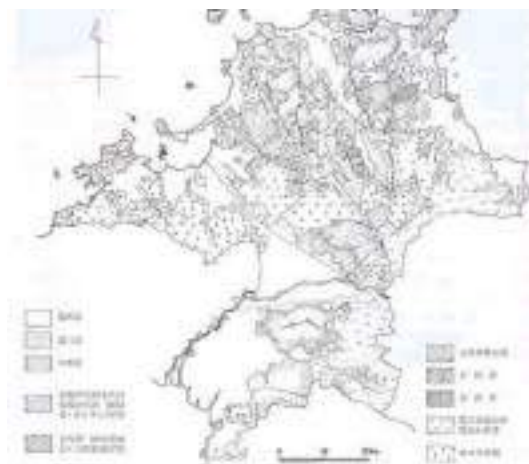
福岡県は佐賀県とは東西に伸びた脊振山地および筑後川で境され、南東の大分県とは英彦山地、熊本県とは釈迦岳山地で境される。英彦山地に源を發する遠賀川が筑豊盆地、大分県の九重連山に源を發する筑後川が釈迦岳山地から西へ伸びた耳納山地の北を西進し、釈迦岳山地から流れ出した矢部川と共に有明海へ注いでいる。また、県北西部では背振山地からの諸川が北の博多湾に流れ下る。また、釈迦岳山地・肥後山地からは熊本県側で菊池川が有明海に注いでいる。この他、福岡県の内部に英彦山地から西へ伸びる古処山地や三郡山地・福智山地（福智山 901m）がある。



これら九州北部の地域では白亜紀後期には中性ないし酸性マグマによる火山活動が活発で、花崗岩・花崗閃緑岩が非変成古生層、変成岩類、白亜系などに貫入した。そしてその後の地殻変動で地表近くまで持ち上げられ、侵食作用によって地表に露出し、脊振山地、三郡山地南部は主として花崗岩類で形成されている。

このように北九州 福岡県の南の県境部をなす山岳部には幅広く花崗岩ベルトが形成されており、そしてこれらの山地から流れ下る川の河口等には砂鉄がある。

九州の製鉄遺跡はよく調べていないが、朝鮮半島から一番先に製鉄技術が持ち込まれた場所に違いなく、そんな砂鉄を堆積させる北九州の大河流域で装飾古墳が 5 世紀から 6 世紀に花開く。



福岡県を中心とした地質図



そして、瀬戸内・讃岐・吉備 日本海側の出雲・伯耆・越から 北九州は花崗岩ベルトが幅広く分布  
東国房総・常陸に伝播する。まさに古代の鉄の道。



九州について装飾古墳の集積が大きい東国 常陸でも背後の山地からは大量に砂鉄を産し、そこを流れ下る那珂川・久慈川の流域で装飾古墳の文化が花開く。

どの地域も 5,6 世紀から 7 世紀初頭世紀にかけて装飾古墳の文化が花開いた時代に鉄の自給を示す製鉄遺跡が見つまっているわけではないが、そのそれぞれが、次の時代 鉄の自給がはじまると重要なたたら製鉄地帯となった諸国である。この古墳時代時代 数多くの古墳が作られ、大和王権連合体の象徴として前方後円墳が王権の証しとして各地に作られるが、限られた地域それも限られた産鉄の地に 大和王権連合の印である前方後円墳もふくめ、装飾をこらした大きな墳墓が作られていると見える。

やっぱり 古代鉄自給へ向け、大和王権のみならず、日本各地でその地方の豪族たちが鉄の自給にむけた試みた。高度な製鉄技術を持つ技術集団をかかえ、技術先端の証拠として彼らが持ち込んだ装飾古墳の文化を組み入れたのではないか。。。。。

装飾古墳文化が咲いた地域とそこを流れる大河流域

6 世紀半ば 九州で磐井の乱がおこる。その中心は装飾古墳文化が花開く筑後川流域の勢力である。それらが筑紫・火の国の勢力を糾合して大和王権連合と対抗する。まさに装飾古墳連合が大和政権に対峙する。この乱は「大和王権が積極的な交流・鉄供給を受けていたメインルート百済・伽耶に侵略する新羅」をたたくことに反対した親新羅九州勢力の「鉄の技術・供給ルートを巡る戦い」の側面を持っているといわれる。この時代 鉄の技術の獲得が重要な課題であったかを示す出来事である。

そして、九州連合は敗れるが、抹殺されたわけではなく、装飾古墳は続くが、次第に衰退してゆく。

鉄の技術集団が断絶したのか もう鉄の技術集団に頼らずとも鉄の自給が完成したためなのか よくわからないが 7 世紀になると衰退する。

一方大和政権は 6 世紀後半から次第にたたら製鉄による大規模な鉄の自給が始まり、7 世紀には官営の鍛冶工房と組み合わせさってますます鉄の支配力を高めてゆく。

こんな装飾古墳の文化にたたら製鉄前夜 鉄の自給に向けたロマンを託すのは無謀でしょうか。。。。

鉄のロマンとよく言われますが、古代の鉄の道に装飾古墳のすばらしい文化が咲いたとイメージするだけで、うれしくなる。

装飾古墳の文化のみならず、数々の鉄自給への試みが日本各地で行われ、多くの伝承・神話として今に残されていると思う。それをひとつひとつ掘り起こしてみるのも面白い。

2005.2.15. 九州の装飾古墳に古代鉄の道のロマンを託して

Mutsu Nakanishi

参 考

季刊考古学 13「東アジアの装飾古墳を語る」2004 年 2 月

王塚装飾古墳館 資料

福岡県の自然 インターネットより

<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/kankyo/rdb/kaisetsu/sizen.htm>

## 5. 装飾古墳のルーツは・・・朝鮮半島鉄の供給地との関係

「たたら製鉄誕生前夜 和鉄の道に装飾文化が咲いた」こんな夢

これが本当とするとそのルーツはどこか。。。朝鮮半島にその痕跡はあるのか。。。。

この装飾古墳文化を倭の人と共有した鉄の技術集団の根拠地はどこか。。。

現状ではまったく判らないし、確かな根拠があるわけではない。朝鮮半島にその想像をたくましくしている。

5, 6 世紀頃 日本に鉄の供給基地としてよく知られているのは洛東江東岸の伽耶諸国・百濟・新羅であるが、朝鮮半島から供給された鉄素材「鉄テイ」の分布から見るともうひとつ朝鮮半島の南東端 慕韓栄山江流域がある。



この栄山江流域は朝鮮半島の南端にあって、古くから中国や高句麗・百濟への海路の中継地であり、九州の豪族たちは広く交流を行っていたと考えられている。5,6 世紀には日本固有の墳墓といわれた前方後円墳が

この地に築かれており、日本との強い関係の証となっている。もっとも装飾古墳ではないといわれているが。。

5 世紀 日本への鉄の供給基地「伽耶」の中心は金海伽耶を中心とした洛東江東岸伽耶諸国であったが、5 世紀半ばから新羅の圧迫を受け、6 世紀半ば 532 年にはその中心国金官伽耶が新羅に滅ぼされる。

一方 洛東江西岸高霊の大伽耶は 5 世紀半ばから洛東江西岸の諸国と連携して成長しつつ新羅に対抗する。これらの情勢変化につれ、日本への鉄供給基地の中心も西に動く。しかし、562 年大伽耶も新羅に併合され、ますます、日本の鉄入手は厳しくなる。

一方、大和政権と連携する百濟は高句麗に 475 年漢城を追われ、南の扶余に移り、勢力を伸ばす新羅と対抗しつつ、伽耶諸国を圧迫し、6 世紀はじめには栄山江周辺域を手に入れる。

すなわち、周辺諸国間で激しい争奪戦がこの産鉄の地栄山江流域地帯にも及ぶ。

伽耶は 562 年大伽耶が新羅によって滅ぶことにより消滅する。そして、660 年百濟もまた、新羅によって滅び、さらに 668 年高句麗も新羅に滅ぼされ、朝鮮半島は新羅によって統一される。

この栄山江流域周辺は高句麗・百濟・新羅そして伽耶それに日本の大和王権も加わる交易路の中心にあり、この地の争奪戦が繰り広げた国際戦乱の場。高句麗との交流もあったろう。

その中心には「鉄」があり、人・技術・物が大きく動いたに違いない。群雄割拠の戦乱の中、鉄素材製造技術の厳しい統制と鉄素材供給を武器に日本と交流してきたしてきた百濟・新羅・伽耶諸国。そして 高句麗。そのいずれにも帰属がはっきりしない交易路の真ん中にあるこの栄山江流域の鉄は日本にとって大陸・高句麗までも含めた朝鮮半島最新の技術・情報の窓口であったにちがいない。

百濟と組んだ大和王権または北九州から派遣された集団が力誇示のためつくったのが、この地に残る前方後円墳か。。。。

また、6 世紀前半 洛東江西岸宜寧地域に石柵を持ち横穴式石室を内部主体とし、石屋形石棺や石室内部を赤色顔料で塗布された墳丘墓が残され、これもまた、大和王権との深い関係を示す遺跡と考えられる。

喉から手が出るほどほしかった最新の製鉄技術がここにあり、この戦乱の中で、日本そして北九州の地を永



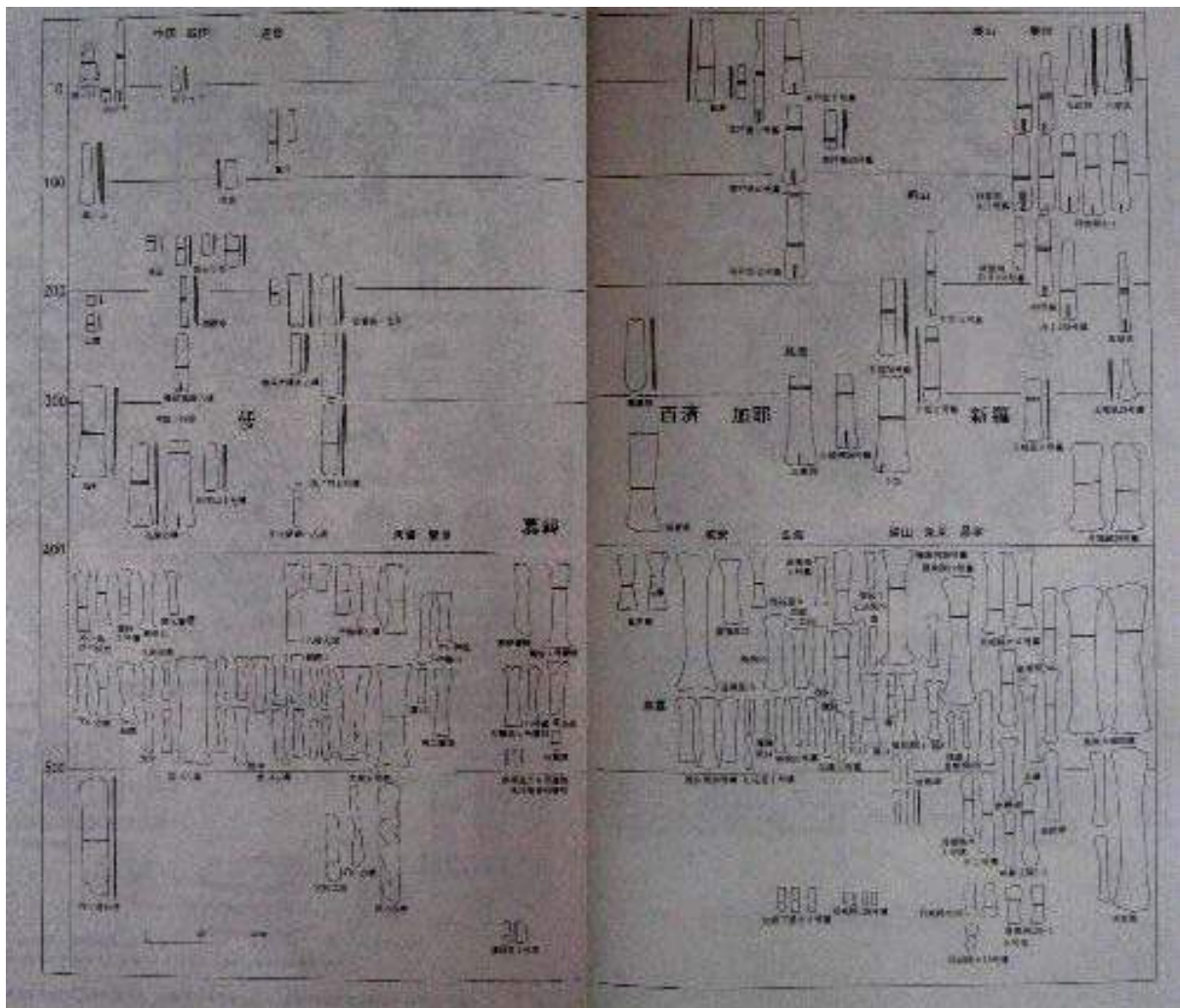
住の地に選んだ土着・流浪の技術グループがいてもおかしくない。特に北九州とは長い交流の歴史がある。



4,5世紀 朝鮮半島の産鉄の地と鉄素材 鉄テイの出土 と 日本と大陸・朝鮮半島の交易路

第5回暦博国際シンポ「古代東アジアにおける倭と伽耶の交流」資料によると栄山江流域の後背の山には鉄鉱石があり、鉄精錬が行われていたと考えられ、この慕漢の地からも鉄テイが出土している。

百濟・伽耶・新羅では弥生時代から鉄テイが出土しているのに慕韓では5,6世紀に限られている。



このことから、この時代が最も鉄生産が盛んで、高句麗・百濟・伽耶などの周辺諸国と非常に近い地形が鉄生産を可能にしたと考えられ、その集団の一部が北九州にやってきたと考えられないだろうか。。。。

古代 日本・朝鮮半島の産鉄の地と鉄素材 鉄テイの出土

その技術集団の母国は高い鉄の技術水準を持ち 墳墓には装飾壁画のある高句麗が・・・・・・。

当時の日本では、鉄の自給へ向けた製鉄技術革新の真っ最中。

各地で渡来の鉄の技術集団が自給に向けて、鉄原料を捜し求め、鉄鉄精錬を推し進めていたに違いない。

慕韓の地が日本の前線基地であったように、高句麗・百済・中国の前線基地であったかも知れない。

北九州にやってきた鉄の集団は製鉄技術水準の高い高句麗であったのではないか。。。。。

その集団の忘れていた母国・消えてしまった母国への思いが、装飾古墳になったのか。。。。、



新羅 慶州 土偶付陶器



北近江 古墳に朝鮮半島の色濃い影響を見る

なんの根拠もないが、限られた産鉄の地に忽然と現れ、忽然と消えたすばらしい装飾古墳群  
そして、時を同じくして1000年も得られなかった鉄精錬の技術がもうれつな勢いで日本で普及する。  
そんな事象にたたら製鉄前夜・大和王権の確立のロマンを重ねて

「 百済・高句麗・伽耶に近い慕韓の地で戦乱の周辺諸国の狭間にあった高い製鉄技術集団が  
日本にやってきて鉄の自給への試みを推進したのではないか・・・・・・ 」  
そんなこんなイメージを勝手に膨らましている。

参考 第5回曆博国際シンポ「古代東アジアにおける倭と伽耶の交流」資料 2002年3月  
よみがえる古代王国「伽耶文化展」資料 1992年6月  
黄金の国・新羅 王陵の至宝展 資料 2004年7月  
渡来人登場 弥生文化を開いた人展 資料 1999年4月  
季刊考古学 13「東アジアの装飾古墳を語る」2004年2月

### 「和鉄の道 Iron Road」 関連たたら製鉄遺跡探訪記

土井が浜シンポジウム 渡来系弥生人 日本人の ルーツと和鉄の道の接点を求めて	-2
<a href="http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/jstlaa02.pdf">http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/jstlaa02.pdf</a>	
黄金吹く行方製鉄遺跡群 福 島県 原町 蝦夷征伐の兵器庫 金沢製鉄遺跡	-4
<a href="http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/jstlaa04.pdf">http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/jstlaa04.pdf</a>	
古代鉄の大王国 山陰 伯耆国 溝口の鬼伝 説と大山山麓の大製鉄遺跡群	-5
<a href="http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/jstlaa05.pdf">http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/jstlaa05.pdf</a>	
大和政権を支えた近江国の鉄 瀬田丘陵の製鉄地帯	
<a href="http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/jstlbb13.pdf">http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/jstlbb13.pdf</a>	-13
北茨城 「常陸」は産鉄の民が開いた地 北茨城 五浦海岸で砂鉄に出会う	-4
<a href="http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/izura.pdf">http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/izura.pdf</a>	
「鉄の5,6世紀」大和の日本統一を支えた大県製鉄遺跡	-12
北河内の大規模専業鍛冶工房 大県製鉄遺跡探訪	
<a href="http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/4iron12.pdf">http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/4iron12.pdf</a>	



## 7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 WALK

官営大コンピナート「飛鳥池生産工房遺跡」&amp; 「川原寺寺院工房遺跡」

2005.3.15.



「大君は 神にしませば 赤駒の 腹這ふ田居を 都と成しつ」  
 「大君は 神にしませば 水鳥の すだく水沼を 都となしつ」

天武天皇と天武天皇の浄御原宮を読んだ歌である。

7世紀後半 壬申の乱(672)の後 天武天皇は明日香の浄御原宮で即位する。

それまでは三輪山麓の南 磐余の地に宮が置かれていましたが、古代天皇の代替りごとに宮を移す「歴代遷宮」の慣行がつづいていました。この7世紀後半になると、皇極=飛鳥板蓋宮 孝徳=難波長柄豊碕宮 斉明=後飛鳥岡本宮天智=近江大津宮 天武=飛鳥浄御原宮と主に飛鳥の地に宮が営まれ(飛鳥京) 次の持統天皇の時代に藤原宮が永遠の都として造営される。(694)

( この大化の改新から平城京遷都までの中央集権・律令政治 確立の時代を飛鳥時代の中でも白鳳時代と呼ぶ。 )

5世紀に青垣・三輪の山裾に地方・大和の豪族の連合体として誕生した倭王権が次第に支配力を高め、中央集権化を強めて、古代国家から律令国家への歩みをスタートする。(6世紀末 三輪王権 推古天皇・聖徳太子の飛鳥時代の始まり。)

そして、7世紀後半 大化の改新・壬申の乱を経て、連合体から中央集権の律令政治の国としての体裁を確立し、「ヤマト」に「倭」の字をあて、「天皇」の言葉がはじめて使われるそんな時代が天武天皇の時代 いわゆる白鳳 律令国家の誕生である。

この飛鳥時代 国際的には朝鮮半島と倭とが密接な関係を持ち、朝鮮半島から数々の渡来人がやってきて

文化。技術を日本に伝えた時代でもある。

鉄についても5世紀後半から6世紀前半 韓鍛冶の渡来によって 製鉄技術が伽耶・百濟・新羅・慕韓



など朝鮮半島諸国から移転され、大和では 大和（柏原市）・布留（天理市）・脇田&南郷（葛城市）などで、専門の鍛冶工房が営まれると共に鉄の自給に向けた製鉄が模索・開始される。そして 6 世紀中葉～7 世紀日本各地で製鉄が本格化し、7 世紀になると砂鉄によるたたら製鉄もはじまり、数々の鍛冶・金属加工技術も発展すると共に鑄物のる技術も移転され。



甘樫丘より倭平野 左奥 金剛山・葛城山 中央 大和三山 叡傍山・天香山

鉄の視点で倭王権を見ると朝鮮半島の鉄技術移入の覇権を握った倭王権がその力を背景に日本各地の支配力を高め、中央集権の日本統一を完成した時代である。

そして 万葉集の歌

「大君は 神にしませば 赤駒の 腹這ふ田居を 都と成しつ」

「大君は 神にしませば 水鳥の すだく水沼を 都となしつ」

が生まれる。

この古代の中心地 飛鳥で 最近 数々の古代遺跡が発掘され、飛鳥時代の時代感がクリヤーになってきた。

明日香村大字岡にある「明日香板蓋宮伝承地」では 4 つの宮殿遺構が重複して確認された。



舒明=飛鳥岡本宮（630）皇極=飛鳥板蓋宮（655）

斉明=後飛鳥岡本宮（656）天武=飛鳥浄御原宮（672）

甘樫丘と多武の峯にはさまれた狭い飛鳥の地に 7 世紀後半に 4 つの宮が営まれ、古代中央集権の大和王権が確立する。飛鳥はこの時代まさに飛鳥京と呼ぶにふさわしい王城の地であった。



朝鮮半島からの鉄素材供給を中心とした文化・物・人の覇権を一手に支配し、朝鮮半島からの数多くの渡来人技術集団・文化・物を受け入れつつ、勢力を高め、壬申の乱を経て 律令国家として「国家」と呼ぶにふさわしい日本統一を成し遂げたのが、7 世紀後半天武天皇の時代である。

その力の源泉 「鉄」について言うと、鉄伝来以来 悲願であった鉄生産の自給も軌道に乗り、日本各地で



たたら製鉄による大規模生産もはじまる時代である。

一度 和鉄を飛鳥に探して ゆっくり歩いてみたいと思っていた時に、大和王権を支えた一大鍛冶工房が飛鳥の中枢部に存在するのを知りました。飛鳥池生産工房遺跡である。一時話題となった最古の貨幣「富本銭」が此処で作られたという。

また、飛鳥京のすぐ南東側 川原寺跡史跡からは同じ7世紀 寺の創建・営繕にかかわる金属・瓦の川原寺寺院工房（7世紀から平安時代）が出土し、川原寺寺域北限施設 川原寺寺院工房遺跡として保存されていることも知りました。

2月になって、少し暖かくなったので、これら古代 飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて飛鳥を歩いてきました。

また、3月 「飛鳥浄御原宮の正殿が発掘された」と新聞が伝えたのを読んで、再度飛鳥の地へ。

久しぶりの飛鳥 ゆったりと昔を思い出しながらの飛鳥 walk。

天武天皇の時代に大きく飛躍した和鉄の時代 その足跡を訪ねました。



### 7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 WALK

#### 官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」& 「川原寺寺院工房遺跡」

1. 「飛鳥池生産工房遺跡」& 「川原寺寺院工房遺跡」概要
  - 1.1. 古代 飛鳥 の 官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」
  - 1.2. 古代 飛鳥 の「川原寺寺院工房遺跡」
2. 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 WALK
  - 2.1. 飛鳥 WALK 甘樫丘 川原寺寺院生産工房遺跡から石舞台へ
  - 2.2. 飛鳥 WALK 水落遺跡・伝飛鳥板蓋宮から酒船石遺跡
  - 2.3. 飛鳥 WALK 7世紀後半 倭王権の大コンビナート飛鳥池生産工房遺跡
3. 飛鳥浄御原宮 「正殿」遺跡 発掘現場を訪ねて 2005.3.9.
4. 7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 WALK まとめ

7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 WALK  
官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」&「川原寺寺院工房遺跡」

1. 「飛鳥池生産工房遺跡」&「川原寺寺院工房遺跡」概要

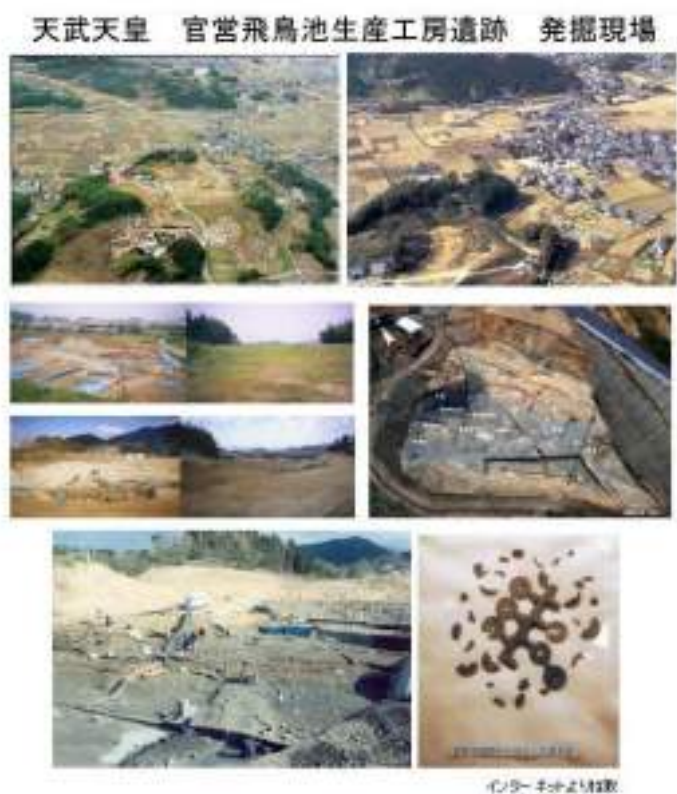
1.1. 飛鳥池生産工房遺跡



今から 1300 年ほど前のこの時代に 飛鳥寺の東南 多武峯山麓の丘陵地 飛鳥寺と亀形石造物が出土した酒船石遺跡に挟まれた谷地に、官営の巨大なコンビナート・官営大総合生産工房が広がっていた。現在その地には巨大な博物館「万葉ミュージアム」が建っていて、建物に取り込むようにこの大生産工房遺跡の一部が保存されていて、出土品の一部が「万葉ミュージアム」で常設展示されている。古代飛鳥の官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」である。

この飛鳥池遺跡は飛鳥の中枢部に営まれた天武・持統天皇の時代 7世紀後半から8世紀初頭にかけての大コンビナート・総合生産工房で、鉄・銅製品の鑄造・鍛冶工房 銀・ガラス・めのうなどの宝飾品工房そして漆工房などの一大総合生産工房で宮殿の造営をはじめ、都の生活を物質面から支えた官営工房で、飛鳥浄御原宮や飛鳥の寺院に供給されたとみられている。蘇我氏が造営した飛鳥寺の東南に接した谷間に立地し、飛鳥浄御原もすぐ近い。工房群はY字型に伸びる谷の両岸に計画的に配置され、金・銀・銅・鉄・漆・めのう・水晶・琥珀・鼈甲などを素材に宝飾品・武具・農工具・建築金物や屋瓦などが生産されていた。

1991年 飛鳥池の埋立てに先だつ池底の発掘調査で、7世紀後半の大規模な生産工房の跡が見つかり、人形や釘・針・ピンセットなどの銅製品、仏像や海獣葡萄鏡の鑄型、釘や鎌・ノミ・針などの鉄製品、金属製品を注文する際の木製の見本（雛形）、木工具、漆工具、ガラスの罎埴（るつぼ）や鑄型など多種多様な遺物と共に炉跡や鞆の羽口などの鑄造・鍛冶関係の遺構・遺物が大量に出土し、この場所で広範囲にわたる生産活動がおこなわれていたことがわかった。



インサートより複製



遺物の大半は、谷筋に厚く堆積した炭の層の中から出土し、生産時に炉で使用した大量の炭を廃棄した際に、いっしょに捨てた様子がうかがえる。

その後、万葉ミュージアムがここに建設されることとなり、1997年1月から本格的な発掘調査が継続的に実施され、この飛鳥中枢部で営まれた古代の大コンビナートの全貌が明らかになった。

鑄造・鍛冶遺構が集中するのは、西側の浅い谷筋の部分で、北に下る斜面を何段にもわたって削り出し、整地をおこなって、ほぼ平坦に近い作業面を造成し、そこにたくさんの炉がつくられている。

炉跡は、上部が削られて、底面近くをわずかに残す例がほとんどですが、基本的に地面を浅く掘りくぼめた形態。同じ場所で、何度も作り替えをおこなったものもある。

炉底や炉壁は高温の火熱を受けて、青灰色に固く焼けしまっている。また、炉の付近には、生産のさいに生じたカス（鋳滓）や焼土の存在も認められた。

また、「琥珀・瑪瑙・水晶などの玉類や、緑・青・黄・赤などの華麗な彩りのガラス玉の宝飾製品と共に小玉鑄型やガラスを融かした坩堝・原料となる石英や鉛」とガラス玉の製作に関わる遺物一式が出そろって見付かり、従来、ほとんど明らかでなかった7世紀の宝飾品生産の実態を解明する重要な資料である。

銀を融かした坩堝の存在も確認され、この場所で、銀製品の生産そのものがおこなわれていたことが確定され、銀の製作加工を示す遺跡としては、国内最古の例である。

何よりも飛鳥池遺跡を有名にしたのは、富本銭の発見。

工場の廃棄物処理場ともいえる炭層から、破片を含めて560点以上が出土し、7世紀後半に鑄造された「最古の貨幣」だったことが明らかになった。

「日本書紀」には、天武12年4月、「今より以後、必ず銅銭を用いよ。銀銭を用いることなかれ」と詔（みことり）が出されたことを伝える。

また、「天皇」と記された木簡も出土。天皇の呼び名が確認できる最古の木簡である。

7世紀後半 律令制度が整った天武・持統天皇の時代に神格化された君主が存在。

「壬申の乱」（672年）に勝利した天武天皇（在位672-686年）が強大な力を手にいれ、唐の都を模した永遠の都 藤原京の造営に着手することなどと合わせ、天武天皇の時代 国力を充実しようとしていた様子を物語る重要な遺跡である。

## 1.2. 川原寺 寺院工房遺跡



齊明天皇（594-661）が営んだ川原宮の地に天智天皇（626-671）が母の冥福を祈って建立した川原寺。飛鳥時代 官寺の扱いを受け、広大な寺域に伽藍が立ち並び、飛鳥四大寺として栄えました。

2003年 この伽藍地北方300m程の場所 寺域の北限近くの発掘調査で川原寺創建期から平安時代に続く創建ならびに営繕にかかわる寺院工房の遺構が発見されました。

その主要な遺構は北から南へ北面大垣・瓦窯・掘立柱建物群（双倉）・鑄造遺構・寺院工房などである。

この創建期の関連工房跡および廃棄物層から多量の鉄滓・坩堝・鞆の羽口・砥石などが出土。ほかにガラス小玉鑄型・ガラス片・金属製品鑄型・銅製品・鉄製品・銀片・漆塊などが出土し、川原寺に供給する多彩な製品を作っていたことがわかる。

鑄造遺構では径 2.8m の土坑の中央に鑄型を据えて山側に溶解炉を置いて鉄窯を鑄造。寺で使う湯釜や料理用の釜などとして使われた。

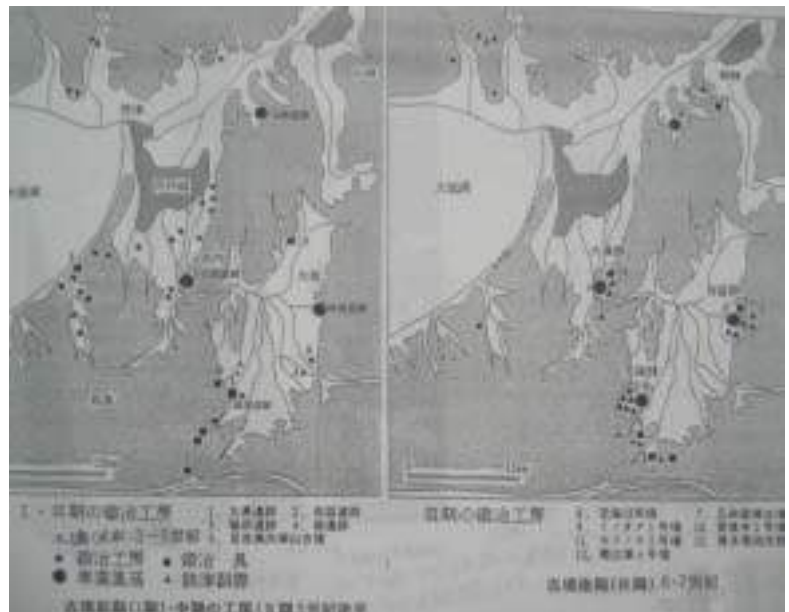
また、一番南の寺院工房跡地には金属やガラス加工のための炉跡群が分布。炉跡群の周りに「コ」字状に排水溝をめぐらし、工房区画が並んでいる。この遺構の各所から銀・銅・鉄・ガラス。などの製品破片や道具（鑄型・羽口・坩堝・漆つぼなど）が多数出土し、この工房で造営や営繕に必要な資材・仏具などが生産されたと考えられている。



7 世紀後半飛鳥の中枢部に大和王権の鉄鍛冶生産工房を含む大生産工房があった。残念ながらいずれの生産工房からも製鉄炉など製鉄を行った痕跡は認められていないが、多くの鉄滓や鞆羽口とともに多数鍛冶炉がみつき、鑄造も行われていたことが確認されている。

この時代 九州・山陰・瀬戸内・吉備・播磨・近江などでたたら炉による大量安定和鉄生産が始まり、倭王権に持ち込まれただろう。また、畿内でも鍛冶加工とともに大泉をはじめ、布留・忍海などの畿内倭王権と関係した専用鍛冶工房でも鉄生産が始まったに違いない。

これらの鉄素材の供給を受けて需要が急増する鉄器の大量生産が官営の専用鍛冶工房で作られたと考える。おそらく この大和近傍で精錬された鉄素材がこの飛鳥の鍛冶工房に持ち込まれ、鉄製品に鍛冶加工された。鉄・銅の鍛冶加工・鑄造技術をはじめ、玉・ガラスの加工技術など重要技術が倭王権が直轄して支配力を高め、他の倭・地方豪族を圧していったことがよくわかる。





7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 WALK  
官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」&「川原寺寺院工房遺跡」

2. 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 WALK

- 2.1. 飛鳥 Walk 甘樫丘 川原寺寺院生産工房遺跡から石舞台へ
- 2.2. 飛鳥 Walk 水落遺跡・伝飛鳥板蓋宮から酒船石遺跡
- 2.3. 飛鳥 Walk 7世紀後半 倭王権の大コンビナート飛鳥池生産工房遺跡



2.1. 飛鳥 Walk 甘樫丘 川原寺寺院生産工房遺跡から石舞台へ

2.4. 朝 天候は快晴。 阿部野橋から橿原神宮行近鉄特急に乗って 30 分ほどで橿原神宮である。久しぶりの飛鳥である。

まず、甘樫丘に登って 大和平野を眺めて 後は川原寺寺院工房遺跡と飛鳥池生産工房遺跡を見に行く。昨年 河内の大泉鍛冶工房遺跡をみましたが、それに続く古代飛鳥の時代 倭王権中枢の地に存在した官営の鍛冶工房遺跡である。

鉄の自給が始まった飛鳥時代 鉄素材・鍛冶加工そしてその流通をも支配して王権支配の源泉となっていたという。どんな工房が機能していたのか、また 鉄自給の技術を提供したと考えられる渡来の技術集団や倭王権の中枢を担った大和の豪族の動きが見えるかもしれない。

駅で地図をもらって胸わくわくで、健康 Walk を兼ねて橿原駅から甘樫丘を目指して歩き出した。橿原神宮駅から孝元天皇陵の横から南へ新興住宅が立ち並ぶ丘を越えると 30 分ほどで岡寺駅からまっすぐ東へ甘樫丘の南端を通過しての明日香村の中心部・石舞台古墳を結ぶ幹線道路に突き当たり、ここを東に折れると明日香村の観光スポットの案内標識がいくつも掲げられた川原の集落にでる。正面の多武峰の山並みに向かって扇状に田園地がひろがり、左側には甘樫丘そして右の丘陵地の端にそって、この道が山に向かってまっすぐ伸びている。いよいよ 明日香村。丘陵地に囲まれたこの狭い田園地の中にすっぽり古代飛鳥の中心



明日香 川原 2005.2.4.

部が納まっている。

南から高松塚の方から丘陵地を降りてくる道が合流し、北へは甘樫丘の裾を縫う道が分かれる。



甘樫丘が道に沿って北へ続く 2005.2.4.

田園地の向こう多武峰の山並みの手前には見覚えのある川原寺・石舞台へと続く道。道が広く舗装され周辺は大きく変化しているが昔のイメージにある飛鳥が眼前に広がっている。

平日の昼前 静かなものである。

何はともあれ、甘樫丘に登って、大和の国そして飛鳥をみよう。

川原寺の方へ行かず、北へ甘樫丘の方へ曲がるとすぐに甘樫丘へ登る遊歩道の入り口があり、丘陵地の林の中に入ってゆく。

甘樫丘の上には南から北へ起伏のある尾根筋に林の中を縫って遊歩道がつづき、数箇所の展望台があり、この丘の西側には金剛・葛城山をバックに広大な大和平野

野が広がっている。また、東側には多武峰の山並みとの間に幅の狭い平坦地明日香の郷が広がる。古代の飛鳥京である。



甘樫丘の上で (左 丘の東側 明日香 中央 丘の上の遊歩道 右 丘の西側 大和平野)

### 2.1.1. 甘樫丘からの大和平野 & 飛鳥京の展望

【 甘樫丘から 大和平野 眺望 2005.2.4. 】







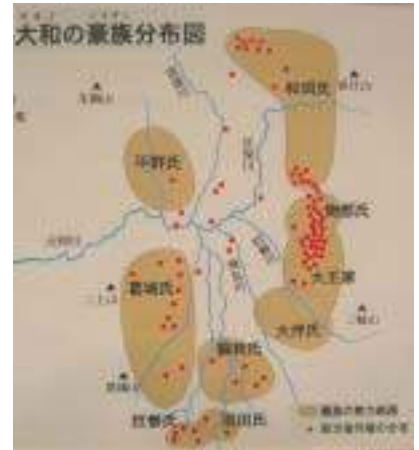
甘樞丘より倭平野 左奥 金剛山・葛城山 中央 大和三山 畝傍山・天香山

甘樞丘からみる広大な大和平野 平野の中にポツポツと大和三山が点在し、素晴らしい景観を作っている。

また、背後の金剛・葛城の山並みが大きく、本当に堂々としている。これら、大和平野の周りの山裾に沿って、古代大和の豪族たちや渡来技術集団の人たちが本拠を構え、大和王権を支えた。すぐ眼下は蘇我氏の本拠地曾我。そして、この甘樞丘の反対側 多武峰から三輪・青垣の山並みの山裾には大和王族の本拠地が点々と続く。さらにその北は物部氏の本拠地布留である。

本当にこの広い大和平野がホームグラウンドに見えてくる。古代 数々の豪族・王族がこのグラウンドに登場し、消えていった。鉄の集団もこのグラウンドに登場したに違いない。

昼飯をほうばりながらそんなことに思いを巡らす。



【 甘樞丘から 飛鳥眺望 2005.2.4. 】



甘樞丘より多武峰 背後の山は多武峰 2005.2.4.



多武峰 飛鳥寺 飛鳥池遺跡・酒船石遺跡 石舞台 伝飛鳥浄御原宮跡

西の大和平野から、丘の反対側東側の飛鳥に目をやると実に静かなのどかな田園風景が広がっている。奥には多武峰がそびえ、狭い平地が飛鳥京。中央 右には天武天皇の浄御原宮など4代の宮が置かれた伝板

ブキ宮跡 左中央に飛鳥寺が見える。地図をだして、古代史跡の位置を照合する。

飛鳥池が見当たらない。確か昔々古い飛鳥寺のすぐ裏に池があったが・・・

ぼこぼこお椀型の森が続くあたりが酒船石古墳のあたりか・・・

その向こうの山裾が石舞台。

甘檀丘で川原寺やその南向こうの高松塚古墳周辺は見えない。  
(後でわかったのであるが、飛鳥池は10数年前に埋め立てられ、その時の底さらえでそこが、古代飛鳥の大生産工房跡であることが判ったと。)

手の届く狭い範囲に古代飛鳥の歴史が詰め込まれているのを実感する。30分程 丘の上を歩いて丘を下り、川原の集落に戻り、正面の多武峰の山に向かって少し歩くと見覚えのある風景。道の左に広い川原寺跡遺跡 右の丘に橘寺が見えてくる。



多武峰に向かってまっすぐ Walk



川原寺跡と現弘福寺



橘 寺

### 2.1.2. 川原寺遺跡 & 川原寺寺院工房遺跡



川原寺とそのすぐ東側を寺域に沿って流れる飛鳥川



2005.2.4.



川原寺は天智天皇の時代に母齊明天皇の川原宮跡に冥福を祈って建てられた寺といわれ、飛鳥四大寺のひとつとして官立に近い扱いを受けた大寺であつた。

発掘調査により、現弘福寺の位置に中金堂があり、その前庭に 東に塔 西に西金堂が立ち並び、中門から出た回廊がそれらを取り囲む。そして中金堂の後ろには講堂があり、それらを取り囲むように僧房が3面にあったという。

広大な寺域に大伽藍が並んでいた。また、この川原寺遺構の下層に川原宮の遺構があるが、今は史跡公園内に当時の礎石と建物基壇が復元されている。

寺域に沿って南北に飛鳥川が流れ、川の反対側である東の広い田園地に飛鳥の宮跡（伝板蓋宮や浄御原宮など4代の宮）があり、その奥には多武峰がどっしりと構えている。

寺院工房遺跡がある弘福寺の北にある丘の方へ回りこむ。山肌に沿って弘福寺の北へおよそ500mほど行ったところに「川原寺の寺域北限施設」として、寺院生産工房跡などが公園として整備されていた。



川原寺生産工房遺跡 2005.2.4. & 3.9.

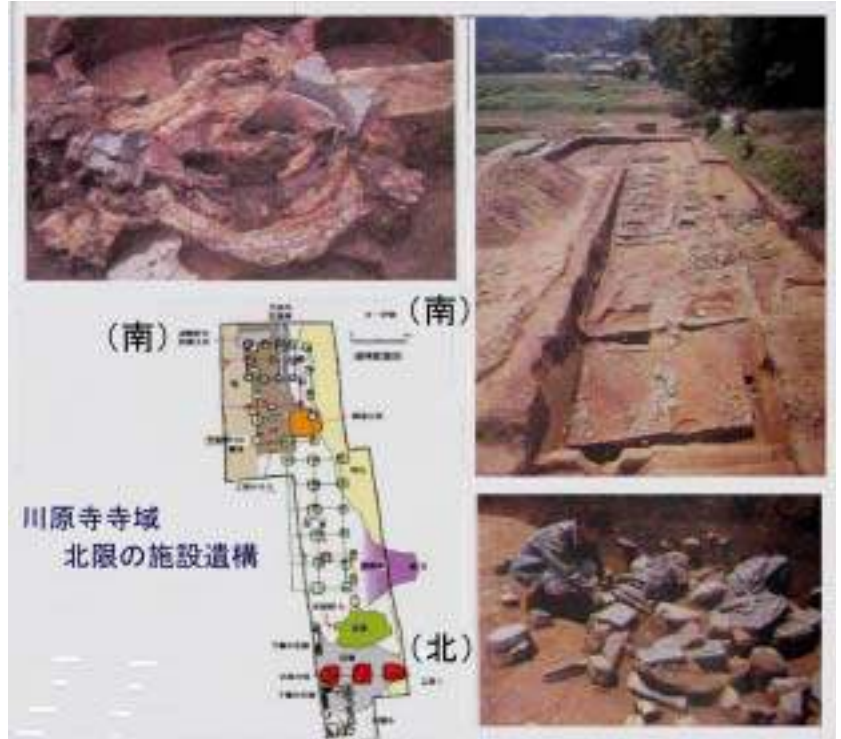
7世紀後半に此処に墨釜や鑄造炉と鑄造場そして鍛冶炉が並ぶ鍛冶場そして倉庫などが建ち並んでいた。今は発掘後埋め戻され、傍らにここが川原寺の生産工房であったことを解説する案内板があり、建物の柱の位置にコンクリートの丸棒が立ち並ぶ公園として整備されている。

鑄造遺構では径 2.8m の土坑の中央に鑄型を据えて山側に溶解炉を置いて鉄窯を鑄造。寺で使う湯釜や料理用の釜などとして使われた。

また、一番南の寺院工房跡地には金属やガラス加工のための炉跡群が分布。炉跡群の周りに「コ」字状に排水溝をめぐるし、工房区画が並んでいる。

この遺構の各所から銀・銅・鉄・ガラスなどの製品破片や道具（鑄型・羽口・埴塙・漆つぼなど）が多数出土し、この工房で造営や営繕に必要な資材・仏具など多彩な製品が生産され川原寺に供給していたと考えられている。

此処は飛鳥歴史のガイドブックにも乗っていないのか、誰もやってこないが、遺跡のすぐ横を飛鳥川が流れ、川向こうには飛鳥の素晴らしい田園風景が広がっている。



「田園の風景画の中にがポツポツ小さな人の歩く姿 車とコンクリート造りの建物の全くない世界」飛鳥の良さかもしれない。



川原寺生産工房遺跡周辺の景色 2005.2.4.

寺では「学問道場」としての役割がよく論じられるが、この川原寺院生産工房遺跡が示すごとく、古代には数々の新しい技術の生産活動が行われ、先端技術の一大センターであったことが判る。

日本での和鉄生産が始まり、その鉄素材を用いたさまざまな鉄製品への展開 従来の鍛錬鍛冶技術ばかりでなく、鑄造技術 そしてガラスの製造・加工も専用工房として始まった。

おそらく、これらの技術には大和にいる多くの渡来人技術集団も関係しただろう。また 同時期に同じ飛鳥の地で王権の大生産工房として活動した飛鳥池生産工房とも密接に関係していただろう。

これらの先端技術がつつきとこの飛鳥から地方へ伝播していったに違いない。



和鉄もこの時代を経てその生産と需要が大きく拡大し、日本全国でその生産活動が展開されてゆく。

### 2.1.3. 石舞台古墳へ

川原寺生産工房遺跡から飛鳥川沿いに南へ再度川原寺のところに戻り、川沿いに石舞台へ谷筋を登ってゆく。

川の反対側には広い道路が石舞台へ。こちらは丘にへばりついて川沿いにつけられた遊歩道。

飛鳥川も谷間に入って きらきらと輝きながらのセセラギである。



飛鳥川 玉藻橋

20分ほどで石舞台古墳の下につく。

石舞台が嚴重な垣に囲まれ、周りがよく整備された公園になっているのにはビックリ。

このあたりは川原寺など飛鳥の平坦部からは一段高くなっていて、以前は飛鳥の中心部が見下ろせ、周辺には美しいレンゲ畑の田圃が広がり、その中心に石舞台があって、気持ちのいい場所でしたが。。。。

もっとも道が狭く自動車が溢れかえっていました。



石舞台古墳 2005.2.4.

逆に このあたりは、飛鳥の中心部からは、見上げる高台で石舞台は蘇我馬子の古墳ともいわれており、古墳のすぐ下の広場のあたりには蘇我氏や大王家の邸宅があったところ。

檻の外からゆっくりと石舞台古墳をまわって、引き返して 甘檀丘の下に広がる飛鳥京の中心地 飛鳥板蓋宮から飛鳥寺・飛鳥池周辺へ戻った。

空前の古代 飛鳥ブームを考えるとしかたないのですが。。。。

周辺が整備されて、もうありきたりの観光スポットになってしまっているのにはがっかりでした。

## 2.2. 飛鳥 Walk 水落遺跡・伝飛鳥板蓋宮から酒船石遺跡



飛鳥池生産工房遺跡



飛鳥寺



水落遺跡



酒船石遺跡



伝板蓋宮跡



飛鳥池に建つ万葉ミュージアム

石舞台の所からまっすぐ北へ 多武峰の山裾に沿って広がる集落に入る。車がすれちがえるかどうかの細い道の両側に古い家並みが岡寺の門前を経て飛鳥池の方へつづく。昔からの岡寺詣の参詣道で岡寺詣の宿場街・門前街として栄えた古い街道筋 昔のたたずまいを今も残している。



岡寺参詣道の古い家並み



15分ほど家並みの中歩くと川原からまっすぐ登ってきた岡寺への参詣道と交差する。石の鳥居がある正面の参詣道である。「伝板蓋宮」の案内にしたがって、家並みの間を曲がりながら少し下ると家並みのはずれ 広い飛鳥の田圃地南側の端に「伝板蓋宮」の標識とともに平地に整備された史跡があった。田圃・飛鳥川の向こう正面に甘樫丘が南北に伸び、南西側遠くに午前中に行った川原寺・川原寺院生産工房遺跡のある森がみえる。北には飛鳥寺へと田圃地が続いている。

皇極=飛鳥板蓋宮 孝徳=難波長柄豊碇宮 斉明=後飛鳥岡本宮 天智=近江大津宮 天武=飛鳥浄御原宮と続



く7世紀の飛鳥時代にあつて、飛鳥3代の宮が営まれた飛鳥王城の地である。

大化の改新がここであり、壬申の乱を征した天武天皇の飛鳥浄御原宮もこの地で営まれた

この「伝飛鳥板蓋宮」跡を振り出しに古代飛鳥京の時代の水落遺跡・飛鳥寺・酒船石遺跡そして官営の大コンビナート・飛鳥池生産工房遺跡と地図を片手にあっちへいったりこっちへ行ったりの気ままな walk。



飛鳥 3代の宮が営まれた「伝飛鳥伝板蓋宮」

### 2.3.1. 飛鳥王城の地「伝飛鳥板蓋宮」

皇極天皇「後飛鳥岡本宮」 齊明天皇「飛鳥板蓋宮」 天武天皇「飛鳥浄御原宮」



飛鳥 3代の宮が営まれた王城の地 大化の改新の舞台 「伝飛鳥板蓋宮」  
また壬申の乱の後 即位した天武天皇の宮で真の意味で統一国家がここで初まった

飛鳥伝板蓋宮は643（皇極2）年、皇極天皇が小墾田宮から移った所で、大化改新では蘇我入鹿の暗殺事件の舞台になった場所。

現在では、この遺跡の最下層が皇極天皇「後飛鳥岡本宮」、二層目が齊明天皇「板蓋宮」、最上層が天武天皇「飛鳥浄御原宮」という見方が強い。ここからすぐ南西側で発掘調査がつづいていたが、3月9日 そこが天武天皇「飛鳥浄御原宮」の宮廷の一部「正殿」跡と発表された。



「大君は 神にしませば 赤駒の 腹這ふ田居を 都と成しつ」  
「大君は 神にしませば 水鳥の すだく水沼を 都となしつ」

天武天皇と天武天皇の浄御原宮を読んだ歌である。

7世紀後半 壬申の乱（672）を征した天武天皇は浄御原宮で即位する。

律令を整備し、国造を置いて地方各国を直接支配下におき、「天皇」と始めて称し、ここで真の統一国家が成立したと言える。そんな時代を読んだ歌が上記「万葉集」に収められている。  
まさに東アジアにあって「日いずる国」の実力と自信にあふれた時代のスタートである。



飛鳥 3代の宮が営まれた王城の地 「伝飛鳥板蓋宮」 <2>

この自信の裏づけに長年 朝鮮半島からの供給に頼ってきた「鉄の自給生産」がある。  
古代 大陸から数々の新しい技術が伝来し、多くの渡来人の帰化・交流によりそれらを吸収・消化して必死に自立を目差してきた倭。そして、この時代 鉄をはじめ多くの技術が自立してゆく。  
飛鳥京はそんな先端技術の一大生産技術センターであった。  
その中心に官営の大生産工房があり、生産と需要を拡大していった。  
和鉄・銅・ガラス・漆をはじめ、数々の技術が日本で独自技術として花咲き、次々この飛鳥から地方へ伝播していったに違いない。そして 中央支配の統一国家がほぼではあがり、古事記・日本書記の編纂、永遠の都として藤原京の造営に取り掛かつてゆく。  
政治・社会的な「大化の改新」「壬申の乱」などばかりでなく、そんなドラマが今は静かでのんびりとしたこの飛鳥の宮で繰り広げられていった。

飛鳥池生産工房もそんな飛鳥京の大生産工房。どのあたりだろうか・・・

この飛鳥池生産工房遺跡からは「天皇」と書いた木管が出土し、最古の貨幣「富本銭」が鑄造された。  
ここから北東 多武峰の山裾の森のあたりか・・・

### 2.3.2. 水落遺跡・飛鳥寺そして酒船石遺跡 walk

この飛鳥の狭い地で繰り広げられたドラマを思い巡らしながら、左に甘樫丘・飛鳥川 右に多武峰の山を眺めながら、飛鳥川飛鳥池生産工房遺跡を探しての古代史跡を巡る walk。気楽な飛鳥の郷めぐりになりました。



【 北側 山田道から見た飛鳥 】

2005.3.9. ワイド合成のため縮尺変化しています



**飛鳥川のほとり水落遺跡（飛鳥の水時計）& 飛鳥寺**

日本書紀によれば、斉明6年（660年）5月「皇太子が初め漏刻（水時計）を造り、人々に時刻を知らせた。」とある。水落遺跡が後の天智天皇、中大兄皇子がわが国で初めて造らせた水時計の跡にあたる。飛鳥板蓋宮跡から、田圃道を北西へ甘樫丘の方へ10分ほど歩いた飛鳥川の右岸にあり、一片20mの四角い石組み基壇と礎石、黒漆を塗った木箱などが発掘されたという。



日本書紀によれば、斉明6年（660年）5月「皇太子が初め漏刻（水時計）を造り、人々に時刻を知らせた。」とある。水落遺跡が後の天智天皇、中大兄皇子がわが国で初めて造らせた水時計の跡にあたる。

飛鳥板蓋宮跡から、田圃道を北西へ甘樫丘の方へ 10 分ほど歩いた飛鳥川の右岸にあり、一片 20m の四角い石組み基壇と礎石、黒漆を塗った木箱などが発掘されたという。

案内板によると「周囲に貼石を巡らせた基壇を設け、地中に礎石を埋め込みその上に堀立て柱をたてた非常に堅固な二階建ての建物の地下に木樋や銅の管を配置して水時計を動かす水を取り込んでいる。一階には水時計、二階には都中に時を告げる鐘や時刻の補正をするための天文観測の装置が置かれていた」という。

これも飛鳥の時代の新技術。

この水落の遺跡からは右岸に多武峰の山裾まで、広大な田園地かつての飛鳥京が見渡せる。

その田園地の中、集落をバックに蘇我馬子が建てたと言う飛鳥寺がみえる。

もう 何十年前になるか、ぼろぼろに傷んだお堂に飛鳥大仏が座していて、古いが故と感じたことがありましたが、今は立派に修復された飛鳥寺。美しい特徴ある百済仏の御姿で座しておられ、うれしくなる。



飛鳥寺 2005. 2.4. & 3.9.

### 酒船遺跡 亀形石造物 飛鳥の大導水施設

飛鳥寺から少し、南へ集落の中の道を引き返しながら山裾の丘陵地に大きな万葉ミュージアムが建っている。その南の丘全体が酒船石遺跡で、その丘の崖下 周囲の丘で囲まれ、谷底となったところに、写真で見覚えのある亀形石造物が発掘保存展示されていた。そしてこの丘の上の竹藪に謎の酒船石がある。



酒船石遺跡の丘周辺 2005.2.4.



酒船石遺跡 亀形石造物 2005.2.4.



この場所は日本書紀の斉明天皇2年の条に「宮の東の山に石を累ねて垣とす」「石山丘」に符合する遺跡と考えられている。

亀形石造物・小判型石造物はいずれも水を受ける槽で、崖ぎわの砂岩を切り出した湧水施設から小判型石造物 亀形石造物を通して北に伸びる溝に水が導かれる。



この溝の周囲は石敷がひろがり、石垣が階段状に組まれている。これら一連の設備は狭い谷底状の閉鎖された場所であり、何らかの祭祀の場所と考えられている。

そして、何度か改修されながら、7世紀半ばから平安時代まで約250年間続いたという。（酒船石遺跡パンフより）

また、この崖の上には石に溝を切った酒船石があり、この石も含めての一連の導水設備とも考えられるが、その関連は良くわからない。いずれにせよ、飛鳥時代の導水構造を持つ精巧な石造りの施設で、しかも谷の閉鎖空間をきっちり整備した大土木工事である。飛鳥にはそのような大工事を行う技術と権力がすでにあったという証明でもある。

この遺跡のまわりを再度一周して、万葉ミュージアムをながめながら、北の飛鳥坐神社へ丘陵地の集落を walk。

まだ、飛鳥池の生産工房遺跡は見つけれず。

こちらの不勉強で集落の人に「鉄の遺跡や炉跡が沢山出たと聞く」と聞いてもまったくわからず。

飛鳥池があるから、それ探せば。。。と思っ  
ていましたが、それも判らず。



ついに また、飛鳥寺の田圃まで帰ってきました。

再度 田圃のおばあちゃんに今度は「飛鳥池教えて・・・」と聞くと「もう そんな池あらへん」と。

「もう 昔に埋め立てられて、今 万葉ミュージアムの建て  
ているその場所が飛鳥池で、そんな鉄の遺跡なんか残っ  
ていない。」という。

向こうに見える丘が間違いなく飛鳥池だという。

万葉ミュージアムの案内板は沢山みましたが、飛鳥池や飛鳥池遺跡 ましてや 生産工房遺跡などの標識全くなし。

飛鳥の郷が「万葉集」一色であること思い知りました。



飛鳥坐神社周辺

## 2.3. 飛鳥 Walk 7世紀後半 倭王権の大コンビナート飛鳥池生産工房遺跡



酒船石遺跡の北側道路沿いの丘陵地の裏側 丘陵地との谷間に飛鳥池があったという。今はまったく池はなく、飛鳥万葉ミュージアムがこの谷を埋めてつくられて、周辺部の谷間が公園として遊歩道がつけられ整備されている。

外見からはまったく飛鳥池生産工房遺跡の姿は見えない。

建物の敷地の下ちょうど二つの丘陵地の谷間にある遺跡部を埋め戻さず、多数の鍛冶炉がならぶ工房跡が整備され、見学できるようになっている。万葉博物館の本館と展示館の2棟の建物の間の谷間に発掘ままの姿が渡り廊下から見え、その渡り廊下から、遺跡へ出られる。建物に囲まれた狭い場所である。

でも、なんで、こんな重要な遺跡が、建物の下になっているのか。。。。

ミュージアムは「万葉集 万葉集 万葉集・・・」遺跡とは完全に別世界である。

出土品は万葉ミュージアムの中にコーナが作られ、一部展示されているが・・・。



### 建物の下に飛鳥池生産工房遺跡が眠る「万葉ミュージアム」



天武天皇飛鳥浄御原宮-藤原京の官営の総合大生産工房跡 発掘時の写真



この遺跡は飛鳥の中枢部に営まれた天武・持統天皇の時代 7世紀後半から8世紀初頭にかけての大コンビナート・総合生産工房で、「鉄・銅製品の鑄造・鍛冶工房」「銀・ガラス・めのうなどの宝飾品工房」そして「漆工房」などの一大総合生産工房で宮殿の造営をはじめ、都の生活を物質面から支えた官営工房で、飛鳥浄御原宮や飛鳥の寺院に供給されたとみられている。飛鳥の大和王権がその支配力の根源として有していた大総合コンビナートで、飛鳥の先端技術が此処に結実していたと見られる。

工房群はY字型に伸びる谷の兩岸に計画的に配置され、金・銀・銅・鉄・漆・めのう・水晶・琥珀・鼈甲などを素材に宝飾品・武具・農工具・建築金物や屋瓦などが生産されていたという。



現在建物の間の谷で保存されているのは鑄造・鍛冶遺構が集中する部分。



倭王権の大コンピナート飛鳥池生産工房遺跡（復元保存万葉ミュージアム）

西側の浅い谷筋の部分で北に下る斜面を何段にもわたって削り出し、整地をおこなって、ほぼ平坦に近い作業面を造成し、そこにたくさんの炉がつくられている。炉跡は、基本的に地面を浅く掘りくぼめた形態で同じ場所で、何度も作り替えをおこなったものもある。何よりも飛鳥池遺跡を有名にしたのは、7世紀後半に鑄造された「最古の貨幣」富本銭の発見で、生産工房遺跡の展示コーナーに中心展示されている。

「日本書紀」には、天武12年4月、「今より以後、必ず銅銭を用いよ。銀銭を用いることなかれ」と詔（みことり）が出されたことを伝える。

また、「天皇」と記された木簡もこの場所から出土。天皇の呼び名が確認できる最古の木簡である。



日本最古の貨幣「富本銭」  
飛鳥池生産工房遺跡出土

「大君は 神にしませば 赤駒の 腹這ふ田居を 都と成しつ」  
「大君は 神にしませば 水鳥の すだく水沼を 都となしつ」

7世紀後半 天武天皇の時代 律令を整備し、国造を置いて地方各国を直接支配下におき、「天皇」と始めて称し、真の統一国家が成立する。

東アジアにあって「日いずる国」の実力と自信にあふれた時代のスタートである。

そんな時代を支える飛鳥王権の一大コンピナート・生産工房が飛鳥池生産工房遺跡である。

もちろん その中心は「鉄・銅製品の鑄造・鍛冶工房」 「銀・ガラス・めのうなどの宝飾品工房」そして「漆工房」など先端技術を駆使した工房で生まれる数々の新しい製品。それら 技術と製品が次々と日本各地へ伝播していった。



富本銭



ガラス・玉類



金・銀製品



鉄製品



銅製品

飛鳥池生産工房で製作された製品

古代の産業革命ともいえる新技術革新によって、生産活動が拡大する。そんなシステムを担った大コンビナートである。

「壬申の乱」(672年)に勝利した天武天皇(在位672-686年)が強大な力を手にいれ、唐の都を模した永遠の都 藤原京の造営に着手することなど合わせ、天武天皇の時代 国力を充実しようとしていた様子を物語る重要な遺跡であろう。

こんな生産活動の大変革を示す古代の生産工房について、なぜ系統的にきっちりと評価がなされないのだろうか。。。。

万葉ミュージアム 飛鳥池遺跡からの出土品展示はあるものの万葉集一色の文化テーマの博物館。この場所は飛鳥文化を支えた生産活動その現場そのものであるのにまったくの視点外。 その方が人は集まるでしょうが、そんなムード評価したって仕方がないと思うのですが。。。

あまりの落差の大きさ感じたのですが、私の思い入れの差でしょうか。。。。

産業考古学が叫ばれている昨今 近代の産業遺産ばかりでなく、古代についてもそんな目が必要になっていくのではないのでしょうか。。。

夕ぐれの中の万葉ミュージアムを見ながら、そんなこと考えながら、飛鳥の郷を後にしました。



2005.2.4. Mutsu Nakanishi





## 7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 Walk

官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」&「川原寺寺院工房遺跡」

### 3. 飛鳥浄御原宮 「正殿」遺跡 発掘現場を訪ねて 2005.3.9.



飛鳥浄御原宮「正殿」跡遺跡 発掘現場 2005.3.9.

3.9. 朝日新聞の朝刊が大きく後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮「正殿」跡全体が発掘されたと檀原考古学研究所が発表したと伝えた。正殿とは天皇が在所していた私的空間 つまり天武天皇の皇居である。

場所は伝飛鳥板蓋宮跡の南約100m ちょうど明日香町役場との中間の位置である。

東西23.5m 南北12.4m 高床式の飛鳥時代最大の建物で正殿正面中央には入り口がなく、大きさや形の異なる建物が東西に隣接するなど、左右非対称の特異な構造で、四隅には旗ざおを立てたとみられる跡があり、「荘厳さを演出した」と考えられている。

また、渡り廊下でつながった別棟、池を望む縁側がついた建物も出土し、周囲やくぼみの形状から池のある庭園が近くにあり、縁側から眺められたらしい。

伝飛鳥板蓋宮跡に立って「ここが天武天皇の飛鳥浄御原宮」と知ってもピンと来ていなかった時だけに「飛鳥京 天武天皇の皇居全体が発掘された」の報にビックリ。

ちょうど大和葛城山麓の「忍海」に出かけることにしていたので、3月9日の午後飛鳥まで足をのばして、後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮「正殿」跡発掘の現場を見てきました。



後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮「正殿」跡発掘現場 2005.3.9.

発掘現場では、まだ、調査が続けられており、また、現場の周囲には現地説明会用の足場の組み立て作業があわただしく行われていた。

本当に発掘現場にフレッシュの言葉はそぐわないが、正殿跡の柱の周りに置かれた石敷きと柱穴がくっきりとみえ、本当に美しい。

四隅に旗を立てられたという穴 そして 正殿の左右の非対称の建物跡そして南西端にあったという池の跡も良くわかる。( もっとも 新聞片手の解説との照合ですが・・・ )



南東隅から正殿跡発掘現場全景を眺める

手前に旗ざおの穴と別棟への渡り廊下の柱穴の周りの石敷  
奥に正殿の柱穴の周りの石敷が一行に等間隔で並んでいる。



北西隅より発掘現場西側

手前に旗ざおの穴周りの石敷奥に縁側の土台 右奥が池 右手前に細長い建物の柱穴が続いている



発掘現場の北側

田圃の向こうに伝飛鳥板蓋宮跡がみえる。  
此处には天武天皇の飛鳥浄御原宮など3代の飛鳥の宮があつた。

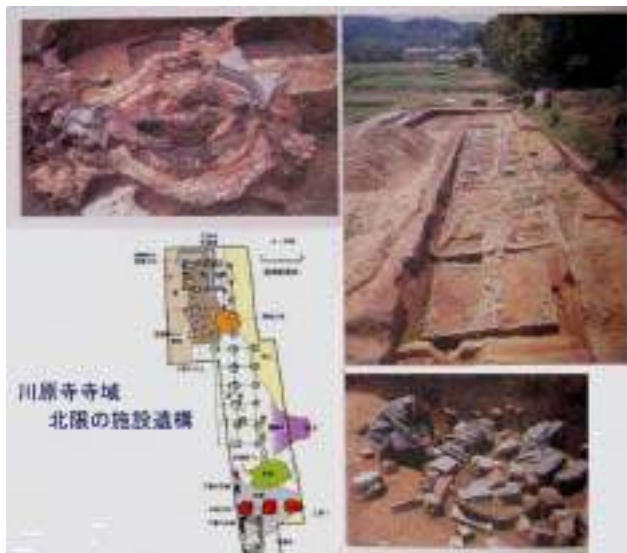


## 7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 Walk

### 4. 7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 Walk まとめ 官営大コンビナート「飛鳥池生産工房遺跡」と「川原寺寺院工房遺跡」



川原寺寺院生産工房遺跡 発掘現場



天武天皇 官営飛鳥池生産工房遺跡 発掘現場



7世紀後半 倭王権の王城の地 飛鳥京にあつた王権の大コンビナート・生産工房  
「川原寺寺院工房遺跡」と「飛鳥池生産工房遺跡」

倭王権が成立し、三輪山麓に宮があった時代から飛鳥の地に宮が移ってきた7世紀「飛鳥時代」  
それをまとめると

「大化の改新 壬申の乱を経て 倭王権が国家として日本を統一支配を達成する時代」

「大陸・朝鮮半島の文化・技術を吸収消化して、日本の文化・技術として自立を達成する時代」

「鉄の6世紀」といわれた5,6世紀にかけて、朝鮮半島との交流の中 鉄の供給を中心とした朝鮮半島からの先進技術・文化の覇権を握り、その技術展開力を支配力のエネルギーとして日本の統一を進めてきた大和政権。7世紀 飛鳥の時代には悲願であった日本国内での鉄の自立生産・たたら製鉄による大量生産を達成して、朝鮮半島依存から抜け出した。

政治的には豪族連合から脱し、大化の改新・壬申の乱を経て、律令制度のもと日本諸国に国造を置き倭の直接支配を確立した時代、日本自立の自信を高めた時代が7世紀飛鳥の時代である。

そんな数々のドラマが繰り広げられた飛鳥に倭王権直轄の鍛冶工房があると聞いて出かけましたが、鍛冶工房というより、国の自立をかけた一大先端技術センターでありました。

鉄・銅・金・銀などの金属生産工房 ガラス・玉の工房 漆工房 それらが総合的にひとつの生産工房として機能していました。まさしく当時の先端技術のナショナルセンターであったのでしょう。

もっとも鉄素材の生産は此処では行われず、大和・河内・近江や日本諸国から集めて持ち込まれていたと考えられる。また、王権の鉄鍛冶工房としての役割は飛鳥周辺大和の大県・布留・忍海などの大専業鍛冶工房に譲るのかも知れない。

この鉄に見られるように先端技術の大生産基地は他にあったとしても 王城の地に先端技術の総合センターがあつたこと このことが、まさしく王権が先端技術の覇権を一手に支配し、日本全国へ支配力を強めていった象徴だろう。

そんな飛鳥の絶頂期が壬申の乱を征して即位した天武天皇飛鳥浄御原宮の時代。

天皇をはじめて名乗り、

「大君は 神にしませば 赤駒の 腹這ふ田居を 都と成しつ」

「大君は 神にしませば 水鳥の すだく水沼を 都となしつ」

絶対君主誕生の歌が読まれる。

すごい時代であった。日本古代の産業革命・高度成長の時代であったろう。

そんな時代の象徴が飛鳥池生産工房遺跡であり、そこで鑄造された富本銭。

そんな中から 記紀の編纂がスタートし、風土記編纂へとつながって行く。

そして、永遠の都「藤原京」造営を経て、豪華絢爛たる平城宮奈良時代へとつながって行く。

飛鳥という我々にとっては「万葉集」 生産活動とはほど遠いロマンチック・ノスタルジックな落ち着いたイメージの世界であるが、エネルギーな躍動感あふれる時代でなかったか。。。。。

万葉集もそんな時代背景を持って眺めるのも必要ではないか。。。。。

久しぶりに飛鳥を一日かけて Walk。

昔の本当に道の狭い郷からよく整備された郷に変わっていましたが、車の入らない広い飛鳥京の空間がそっくりそのまま残っていて、一日 walk を楽しめました。

甘樫丘からみる飛鳥の郷の狭い空間と大和平野の広さのコントラストにもビックリしました。

でも 一番の収穫は飛鳥池生産工房遺跡に象徴される飛鳥の時代感。

「シルクロード 奈良」の時代に先立って、飛鳥の時代には古代の産業革命・高度成長の時代があり、それを成し遂げた大陸・朝鮮半島からの道が飛鳥へとつづいていた。

時代を超えた産業・文化の道それが「和鉄の道」と感じています。



ずっと追ってきた和鉄生産自立の時期 朝鮮半島と日本の鉄を通じた交流史

そんなものが、飛鳥で一区切りする。

まだ 謎が解けたわけではありませんが、飛鳥の中にそれらの答えがあるような気がしています。



2005.3.15. Mutsu Nakanishi

**7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 WALK**  
**官営大コンピナート「飛鳥池生産工房遺跡」& 「川原寺寺院工房遺跡」**

1. 「飛鳥池生産工房遺跡」& 「川原寺寺院工房遺跡」概要
2. 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 WALK
3. 飛鳥浄御原宮 「正殿」遺跡 発掘現場を訪ねて 2005.3.9.
4. 7世紀 古代飛鳥の製鉄遺跡を訪ねて 飛鳥 Walk まとめ

**【完】**



甘檀丘より 大和平野 2005.2.4.



山田道より 飛鳥京 全景 2005.3.9.



## 金剛・葛城山麓 葛城氏の鍛冶工房「忍海」

古代 「忍海」には数々の渡来人が住み鉄鍛冶の技術を伝えた

1. 葛城氏の王城跡 御所市 極楽寺ヒビキ遺跡 見学 2005.2.26.
2. 渡来鉄技術集団の郷 忍海 Walk 2005.3.9.
3. 「忍海と古代鉄」 新庄町歴史博物館展示より



飛鳥 甘樫丘から眺めた金剛・葛城山 2005.3.9.

【4世紀末から5世紀前半の頃 葛城の豪族 葛城襲津彦が朝鮮半島 新羅へ遠征した際の記事】

- 「のち新羅に詣りて、蹈鞬津に次りて 草羅城を抜きて 還る。  
この時の俘人等は、今の桑原、佐麻、高宮、忍海、凡て 四の邑の漢人等が始祖なり。」  
- 「日本書紀」神功皇后摂政五年三月条

葛城の豪族 葛城襲津彦が朝鮮半島 新羅の蹈鞬津の港から上陸し、草羅城を攻め落として帰ってきた。

その時連れ帰った人達が現在桑原、佐麻、高宮、忍海の四箇所に住む人達の祖先である。

- 「日本書紀」神功皇后摂政五年三月条



この記事にある「忍海」は大和平野 金剛・葛城山の山麓にあり、記事にある葛城氏の根拠地の一部 現在の葛城市（新庄町）であった。そして この「忍海」にある脇田遺跡からは 古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけて鉄器を生産していたことを裏付ける資料が出土している。また、忍海の後背の葛城山山麓の尾根筋には5世紀末から7世紀にかけて横穴式石室を持つ群集墓が作られ、鉄滓や鍛冶工具が副葬されている。（寺口忍海古墳群）

上記日本書紀の記事にある鉄の先進国新羅 また、「蹈鞬津」の港「蹈鞬」といい、横穴石室を持つ群集墓 いずれも この時代に朝鮮半島から持ち込まれたものであり、鉄と関係する渡来人が この「忍海」に古くから住み着き 鉄の生産に携わっていたこと、そして、それを統括していたのがこの地を本拠地として勢力を



伸ばしていた葛城氏であることがうかがい知れる。(日本書紀の記述そのものを鵜呑みには出来ないが・・・)  
 葛城氏は大和王権が成立したあと、天皇の皇后を次々輩出し、大王家の外戚として大いに権勢を誇ったが、  
 5世紀半ば 雄略天皇の逆鱗に触れ、焼討ちに会うなどして急速に勢力が衰える。この事件を契機に忍海は  
 王権の直轄地になるが、この地での鉄器生産地としての重要性は奈良時代まで続いてゆく。

数年前 歴史民族博物館のシンポ「伽耶の鉄と倭国」の「韓  
 鍛冶と渡来技術」花田勝広氏の講演で倭王権が確立されて行  
 く中で、倭王権を支えた専用鍛冶工房として、布留・大県そ  
 して忍海の存在を知りました。

葛城・金剛山麓の「忍海」。

場所は判ったのですが、どんなところなのか

昨年 大県へ行って 次は「忍海」と調べはじめた 2月22  
 日朝日新聞の朝刊に「葛城氏の王城 出土」(御所市極楽寺ヒ  
 ビキ遺跡)の見出し。

2月26日に現地説明会があると・・・そして その集合場所  
 に近鉄「忍海」駅。

葛城氏・忍海の先進鍛冶を見聞きする絶好のチャンスと久し  
 ぶりに現地説明会に出かけ、忍海にある新庄町歴史博物館で  
 「忍海」の歴史や和鉄についての資料を入手。再度 3月9  
 日 葛城山麓の丘陵地 古代 鉄の渡来技術集団の郷「忍海」  
 を Walk してきました。

「忍海」は葛城山の中腹からなだらかに大和平野に裾野を広  
 げる丘陵地。眼下に広大な大和平野がみ渡せ、そんな山の尾根筋の静かな林の中に 幾つもの小さな円墳が  
 並び立ち、

ここが鉄の技術集団の根拠地であったことを示していました。

この群集墓(寺口忍海古墳群)の光景は九州菊池川流域 山鹿でみた群集墓の古墳群そっくりでしたが、残  
 念ながら装飾古墳の痕跡はありませんでした。



古墳前期・中期の鍛冶工房分布 (5世紀前半から5世紀後半)  
 古墳後期の鍛冶工房 (6-7世紀)  
 畿内古墳時代の鍛冶工房遺跡 (花田氏資料より)



極楽寺ヒビキ遺跡 2005.2.26.



寺口忍海古墳群 2005.3.9.

# 金剛・葛城山麓 葛城氏の鍛冶工房「忍海」

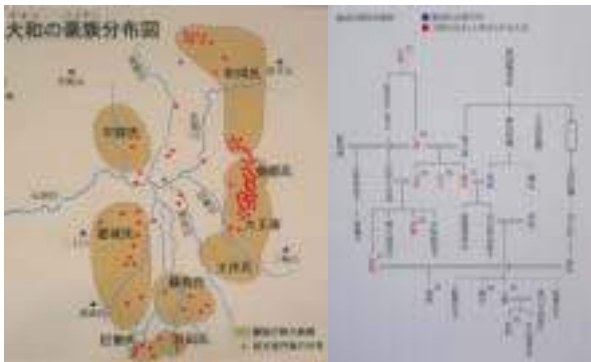
古代 「忍海」には数々の渡来人が住み鉄鍛冶の技術を伝えた

## 【 内 容 】

1. 葛城氏の王城跡 御所市 極楽寺ヒビキ遺跡 見学 2005.2.26.
2. 渡来鉄技術集団の郷 忍海 Walk 2005.3.9.
3. 「忍海と古代鉄」 新庄町歴史博物館展示より

## 1. 葛城氏の王城跡 御所市 極楽寺ヒビキ遺跡 見学 2005.2.26.

御所市極楽寺ヒビキ遺跡  
葛城氏の王宮跡



倭王家と葛城氏の関係 5世紀

鉄素材の自給前夜は倭王権が支配力を高めて行く時代  
そんな5世紀 倭王権の外戚として勢力を伸ばした大豪族  
葛城氏。

その根拠地金剛・葛城の山麓には多くの渡来人技術集団が  
いて、葛城氏の支配下で生産工房が営まれていた。そのも  
っとも重要なのは「忍海」の韓鍛冶・鍛冶集団で日本書紀  
にもその記録がある。

力の象徴「和鉄」。 倭の大豪族葛城氏の鍛冶工房「忍海」  
でも数々の鉄製品が作られると共に鉄素材自給の試みが重

ねられていただろう。そんな権勢を誇った葛城氏も  
雄略天皇の焼討ちにあつて5世紀末には衰退して行  
く一方、「忍海」は大和王権の直轄地となり、その鍛  
冶工房は益々隆盛をきわめてゆく

そんな 初期大和王権の片腕として権勢を誇り、  
古代の鉄器生産に大きく関わった葛城氏の中心地で  
「葛城氏の王宮跡」が発掘。しかも記紀に記載され  
たごとく「焼討ちの痕跡を残している」という。

大和王権がおさめる大和平野の中心部の南部一体を  
支配する葛城氏。

金剛・葛城連山の麓 北には竹之内街道から河内・難波



葛城氏王宮跡 極楽寺ヒビキ遺跡周辺図



へ。南へは 吉野・高野の山間から峠を越えて紀ノ川沿いに紀の国にでるいわば倭の玄関口に位置する葛城氏の本拠地。金剛山と葛城山の鞍部水越峠の下に位置する山麓丘陵地の高台で、眼下に大和平野を見渡せる場所で、ちょうど大和平野を挟んで飛鳥と反対の金剛・葛城の山の麓である。

2月26日(土) 極楽寺ヒビキ遺跡現地説明会参加のため、早朝神戸をとびだす。阿部野橋から近鉄で集合場所の近鉄御所線「忍海」駅へ向かう。

近鉄阿倍野橋駅ではしきりに駅のマイクが「極楽寺キビ遺跡」への行き方を伝え、「忍海」駅には現地へ行く臨時バスの長い行列が出来ている。聞きしにまさる「古代史ブーム」飛鳥・万葉集

とはちょっと違う古代のロマンに惹きつけられた人の多さにビックリである。忍海周辺を歩いている間もなし。バスに乗り込む。葛城山にはうっすら雪が残っていて、風がまだ冷たい。

忍海駅から葛城の山裾に沿って丘陵地の高台を南に葛城山ロープウェイを越すと金剛山の本体が見えてくるところで、バスが一台とおれる程度の道に入って 丘陵地を登って行く。

左に大和平野右に葛城・金剛の山を眺めながら 約20分 いくつかの集落を抜けると極楽寺の集落につく。もう 大勢の人が歩いている。完全に行楽地の感覚である。



近鉄忍海駅とその背後の葛城山 2005.2.26.



極楽寺集落で 遺跡へ向かう人並と集落から見下ろす大和飛鳥 2005.2.26.

でも 集落にはいると遺跡に向かう人並みを別にすれば、もう車の通らないのどかな里の風景が広がっている。この同じ丘陵地で発見された古代渡来人と関係が深い二光寺廃寺の現地説明会も同時に行われている。丘陵地に広がる極楽寺の集落を東に少し下って家並みが切れたところに飛鳥時代に創建された二光寺廃寺遺跡が発掘。この横から北の丘陵地の竹藪に向かって 約200mほどいったところに遺跡があり、そこへの見学通路に人並みが続いている。



ヒビキ極楽寺ヒビキ遺跡の森 背後 葛城山 2005.2.26.

この見学路の入り口でヒビキ遺跡と二光寺廃寺遺跡現地説明会の資料をもらって見学通路を進む。



二光寺廃寺遺跡



ヒビキ遺跡手前の竹藪

### 極楽寺ヒビキ遺跡

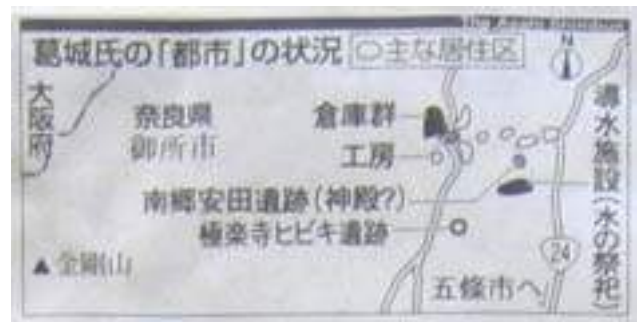
竹藪の中につけられた見学路を抜けると突然視界が開け、林に囲まれた台地に多くの人々が群れている。前方下の方に遠く大和平野が見える。ここが、極楽寺ヒビキ遺跡。

遺跡の南西側の高台広場から遺跡全体が見渡せ、約30X50Mほどの高台が発掘され、平地に掘立て柱跡が白くマーキングされて並んでいるのが見える。その背後北東側は谷になっていて眼下に大和平野 北から西には葛城山・金剛山の山並みが続いている。



葛城氏の王宮跡とみられる極楽寺ヒビキ遺跡 南西端の高台より（左:西 正面:北 右:東）2005.2.26.

この地は標高 240m の高台で 周囲を石を張った堀に囲まれ、その中 西側にはこの遺跡の主要建物である正方形の四面庇付の掘立柱建物があり、二階建てで南面・西面に縁側があったと考えられている。その東側は広場でそこに堀の跡や物見台跡が見つかっている。また 堀の一部は石を据えた庭状になっている。また、すべての柱跡周辺には焼けた土や灰が見られ、記紀に記事のある雄略天皇による焼討ちを裏付けるものとして注目されている。



土器などの出土は少なく生活臭がなく、葛城氏の「祭祀」または「行政」をつかさどる施設跡で周囲から見上げる高台にあることから、葛城氏の王宮の中核施設であると見られている。

また、この遺跡の周辺からはさまざまな機能を持つ施設が発掘されており、この地が葛城氏の根拠地であり、このヒビキ遺跡がその中核の施設と見られている。





南東端より 全体を見る 背後に金剛山 葛城山が見える 2005.2.26.

いわれてみると「そうか」と思うのですが、発掘された遺跡の土には所々赤茶けた土が混じり、柱跡にもそれが見える。



柱跡周辺の地面に残る赤茶けた土 これが雄略天皇による焼討ちの痕跡かもしれない

### 雄略天皇による葛城氏邸宅焼討ちの記事 概説

5 世紀の半ば 皇位継承をめぐる争いの中、安康天皇は自分が殺した大草香皇子の子眉輪王により、即位まもなく暗殺される。安康天皇の弟である雄略天皇が葛城氏の酋長円大臣の館に逃げ込んだ眉輪王を攻める。

葛城氏の酋長円大臣は娘韓姫と葛城領を献上して許しを請うが、攻め滅ぼし、韓姫を妻に娶り、所領を直轄地とする。この眉輪王の乱を契機に葛城氏は衰退する

5 世紀はじめには 北九州で磐井の乱が起こり、倭王権に対抗する九州勢力が一掃される。

そして 倭の豪族葛城氏も……。大豪族の連合体として出発した倭王権が国内にあっては着々と中央集権化を進めてゆく。一方 大陸との関係でいうと 朝鮮半島は伽耶・百濟・新羅・高句麗の分立する三国時代 戦乱の中 倭にとっては鉄素材の供給地として密接な交流がつつき、多くの渡来人が文物を伝える。

この朝鮮半島の交流・鉄の覇権も次第に大和王権が握ってゆく。



現地説明会で貼り出された極楽寺ヒキ遺跡 大型掘立柱建物復元図

そんな時代の中、葛城氏の持つ鉄の工房「忍海」もこの眉輪王の乱を契機に大和王権に組み込まれて行く。古代葛城・金剛山麓の道は技術を持ってきた渡来人たちの「和鉄の道」遠く見下ろせる大和・飛鳥を眺め、金剛・葛城の山合いを見ているもっと深い数々の歴史が詰まっているに違いないと思えてくる。



### 二光寺廃寺遺跡



二光寺廃寺遺跡 飛鳥時代の寺院 金堂基壇が出土

今年の2月に、極楽寺ヒビキ遺跡から200mほど南の金剛山東麓御所市西北窪の水田の下から寺院の金堂と考えられる建物跡が発見され今まで知られていなかった古代飛鳥時代の寺院の存在（7世紀後半）が明らかになりました。周辺からは多量の瓦とともに200点を超えるせん仏が出土し、豪華なせん仏壁を構成していたことが想像される。（せん仏は小型の仏像の型を粘土に押し付け焼いたもので、金箔（きんぱく）が張られ、金堂内部の壁を飾っていたとみられる。）

また出土した軒瓦からは周辺の高宮廃寺や朝妻廃寺といった渡来人と関係深い寺院との関わりも考えられている。

この遺跡の付近には、渡来系氏族の墓と考えられる北窪古墳群(6世紀後半 鉄鍛冶の技術集団と関連する群



集墓 鉄滓出土)があり、この周辺に住んだ渡来鍛冶集団の一族の寺ともみられる。



二光寺廃寺遺跡から出土した「せん仏」



もとの極楽寺の集落に戻って、また バスで「忍海」駅に戻りました。  
満員のバスの中も「葛城氏の王宮跡を見た。しかも 焼討ちの痕跡もみられた」といささか興奮気味。  
忍海駅のすぐ前に葛城市の新庄町歴史博物館があり、忍海の歴史の常設展示と共に二光寺廃寺から出土した「せん仏」が展示されていたのを見学。知らなかった忍海の古代・忍海の鉄など多くの資料が得られました。  
午後 予定があったため、古代「忍海」の鉄鍛冶関係の資料を貰って 再度忍海を訪ねることにして、近鉄に飛び乗って帰ってきました。 時折雪がちらつく 寒い一日でしたが、満足の日。



新庄町歴史博物館 忍海の歴史 常設展示より 2005.2.26.

極楽寺ヒビキ遺跡周辺を中心に北の忍海へ いわゆる金剛・葛城の山麓「葛城」の地域には数多くの古代渡来入関連遺跡が点在しており、渡来人と葛城氏の関係が深いことがうかがえる。

その渡来人と葛城氏の関係を示す key ward は「鉄・鍛冶」であり、そんな鉄・鍛冶渡来の流れが、古墳時代から葛城氏衰退後の飛鳥時代へと脈々と続いて行く。



【4世紀末から5世紀前半の頃 葛城の豪族 葛城襲津彦が朝鮮半島 新羅へ遠征した際の記事】

「のち新羅に詣りて、蹈鞬津に次りて 草羅城を抜きて 還る。  
この時の俘人等は、今の桑原、佐糜、高宮、忍海、凡て 四の邑の漢人等が始祖なり。」

- 「日本書紀」神功皇后摂政五年三月条



古代 朝鮮半島から倭へと続く文物・人の交流路が脈々と続きいてきた。その道の主は「和鉄の道」。そんな道がこの葛城・金剛の山裾を通っており、それを支配していた葛城氏。雄略天皇によって焼討ちを受け、衰退していったが、鉄の自立前夜 和鉄の展開に果たした役割は大きいだろう。記紀の中に書かれた葛城氏の記事と王城の跡にそびえる金剛・葛城の山を眺めながらそんなことを感じていました。

2005.2.26. 葛城氏の王宮跡で  
Mutsu Nazkanishi



# 金剛・葛城山麓 葛城氏の鍛冶工房「忍海」

古代 「忍海」には数々の渡来人が住み鉄鍛冶の技術を伝えた

## 2. 「忍海と古代鉄」

新庄町歴史博物館展示より



葛城山の山麓に広がる忍海



忍海 古墳時代の遺跡 脇田遺跡



脇田遺跡から出土した鉄滓と羽口

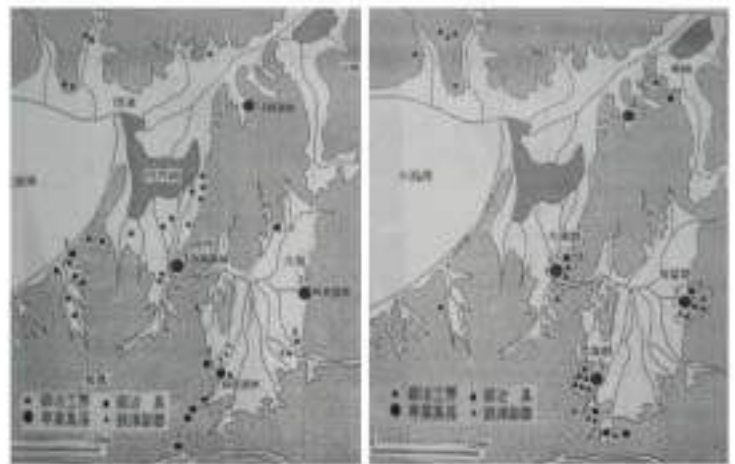


古墳時代畿内の生産工房遺跡（花田氏資料より）  
忍海群脇田鍛冶工房

私が金剛・葛城の山麓の地に「忍海」の名を見つけたのは数年前 歴史民族博物館のシンポ「伽耶の鉄と倭国」の「韓鍛冶と渡来技術」花田勝広氏の講演で古墳時代倭王権が確立されて行く中で、倭王権を支えた専用鍛冶工房として、大泉・布留そして忍海の存在を知りました。

大泉鍛冶工房が倭王権直轄であったのに対し、布留は物部氏 忍海は葛城氏の根拠地。それらの豪族が支配していたと考えられ、鍛冶技術集団である渡来人が数多くいたと考えられている。

また、5世紀末には葛城氏は衰退し、忍海は大和王権の直轄地となるが、忍海の鍛冶集団は忍海氏として引き続き倭王権の鍛冶工房として6,7世紀まで隆盛を極める。訪れた葛城市新庄町歴史博物館にはこれら「忍海」の古代 渡来人のかかわり・葛城氏の盛衰など「忍海」の歴史がパネル展示されていた。



古墳前期・中期の鍛冶工房分布  
3世紀後半から5世紀後半

古墳後期の鍛冶工房  
6・7世紀

畿内古墳時代の鍛冶工房遺跡（花田氏資料より）

訪れた葛城市新庄町歴史博物館にはこれら「忍海」の古代 渡来人のかかわり・葛城氏の盛衰など「忍海」の歴史がパネル展示されていた。

はるか東に大和三山を望む金剛・葛城の山麓沿い「忍海」周辺の丘陵地には古墳時代の多くの群集墳が点在する。それらの群集墳からは、武器や馬具、農工具、治工具など特色ある遺物が出土しており、技能集団としてこの地の豪族「葛城氏」「倭王権」を支えていたと考えられる。そして この技術集団は群集墓や出土品の特徴から渡来人と関係していると考えられている。



それらの中で 「忍海」の後背葛城山の尾根筋にある寺口忍海古墳群・笛吹古墳群・山口千塚古墳群や金剛山北麓の南郷遺跡群などからは多くの鉄製品や鉄滓が出土し、鉄鍛冶集団の群集墓と見られている。これらの群集墓と関連する集落遺跡の一つに忍海の「脇田遺跡」があり、此処からは古墳時代から奈良時代にかけて、数々の鉄製品・靴羽口や鉄滓などが出土し、葛城氏の中心的鍛冶工房であったことを示している。また 葛城氏の王宮跡が出土した葛城の地の南郷遺跡群 南郷角田遺跡では鉄・ガラス・銅・銀などの複合工房であったと見られて、周辺北窪遺跡からは若干ながら鉄滓も出土しているという。



脇田遺跡出土の羽口・鉄滓



寺口忍海古墳群（群集墓）パネルと出土品（右上:刀剣など 右下:鉄滓） 葛城市歴史博物館展示より





葛城山麓の群集墓 5世紀半ばから7世紀半ばにかけ、葛城山の尾根筋など丘陵地に主に数多くの小さな円墳が密集して作られる 主に木棺直葬・横穴石室

また、日本書紀には

【4世紀末から5世紀前半の頃 葛城の豪族 葛城襲津彦が朝鮮半島 新羅へ遠征した際の記事】

「のち新羅に詣りて、蹈鞬津に次りて 草羅城を抜きて 還る。  
この時の俘人等は、今の桑原、佐糜、高宮、忍海、凡て 四の邑の漢人等が始祖なり。」

- 「日本書紀」神功皇后摂政五年三月条

上記日本書紀の記事にある鉄の先進国新羅 また、「蹈鞬津」の港「蹈鞬」といい、横穴石室を持つ群集墓 いずれも この時代に朝鮮半島から持ち込まれたものであり、鉄と関係する渡来人が この「忍海」に古くから住み着き 鉄の生産に携わっていたこと、そして、それを統括していたのがこの地を本拠地として勢力を伸ばしていた葛城氏であることがうかがい知れる。

葛城氏は大和王権が成立したあと、天皇の皇后を次々輩出し、大王家の外戚として大いに権勢を誇ったが、5世紀半ば 雄略天皇の逆鱗に触れ、焼討ちに会うなどして急速に勢力が衰える。この事件を契機に忍海は王権の直轄地になるが、この地での鉄器生産地としての重要性は奈良時代まで続く。

この「忍海」に住んでいた集団を「忍海漢人」「忍海部」と呼び、統合して「忍海氏」と呼んでいる。その出自については上記渡来人記述ほか良くわかっていないが、この集団はその後 鍛冶に携わる技術者として日本各地にちらばり、その足跡を残している。

続日本紀養老3年の条「金作・韓鍛冶」の人々の中に伊勢国・播磨国・近江国などに「忍海」の名を関する人物がいるという。また、筑紫や対馬で兵器等を作らせたとの記事も古事記や続日本書紀にみられる。

また、壬申の乱の折りに忍海氏が天武天皇側の武器調達で功績をあげたともいう。

新庄町歴史民俗資料館編「忍海探訪」より

また、私の住む神戸の北西部押部谷・三木市志染の丘陵地にこの忍海部の足跡があり、中央の倭政権

と密接につながっていたこと初めて知りました。

『日本書紀』に雄略天皇に父を殺された億計・弘計二王子（後の仁賢・顕宗天皇）が播磨国 縮見屯倉首 忍海部造細目を頼って 現在の三木市志染に一時 身を隠した記事がある。

また、『播磨国風土記』はこの弘計・億計の 2 皇子の物語の中に「吉備の鉄の狭鋏持ち...」という歌を記している。

この地の豪族忍海部が中国山地の砂鉄を利用した鉄鍛冶の集団と関係していたことや後年この地に天目一 神社が忍海部氏一族の手で創建（1449 年）されたことなど考えるとこの地には鍛冶を仕事とした人々がいたことがうかがえる。

また、押部谷の「押部」の語源はこの「忍海部」に由来するという。

「神戸市西区役所まちづくり推進課」ホームページ等より。

金物街「三木」もそのルーツを遡れば、この忍海部にまで遡れるかもしれないと思っています。

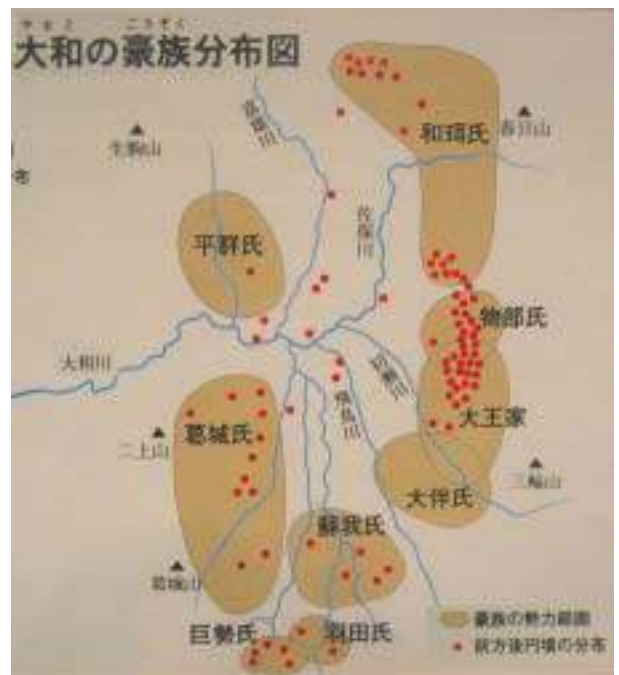
葛城氏が 5 世紀末雄略天皇によって攻められ衰退した後、権勢をほしいままにする蘇我氏は「その出自が葛城である」と言うがこれも、葛城の鉄の権益を無視できなかったからとも受け取れる。

一方、この葛城を本拠とし同じ鴨族から出て主として祭祀を司ってきた鴨氏は引き続き祭祀を司りながら 中央や日本各地に広がって行く。

「忍海」の鉄については まだまだ 知らないこと多く、まだ多くのロマンを秘めている。

吉野・熊野の修験道を開いた「役行者」も葛城の生まれ。まだまだ この金剛・葛城の山麓には多くの和鉄との出会いがあると思う。

司馬遼太郎は『街道を行く「葛城のみち」』で、この山麓の古道を北の忍海 笛吹神社 一言主神社を通過して金剛山麓の高鴨神社へと歩き、この道を「倭王家より古い国今も「国つ神」の残る道」とそのロマンをたぎらしている。



古代の群集墓古墳が点在する和鉄の郷 忍海

2005.3.9.



## 金剛・葛城山麓 葛城氏の鍛冶工房「忍海」

古代 「忍海」には数々の渡来人が住み鉄鍛冶の技術を伝えた

### 3. 渡来鉄技術集団の郷 忍海 Walk 2005.3.9.



古代 和鉄の郷「忍海」 忍海 葛城氏の鍛冶工房関連遺跡を訪ねて walk 2005.3.9.

3月9日 晴れ 葛城氏の鍛冶工房「忍海」の郷とその後背にそびえる葛城山の尾根筋に眠るといふ古代の鉄鍛冶の渡来人の群集墓を訪ねるのが目的でぼかぼか陽気の朝 近鉄忍海駅に降り立つ。

2月に一度来て、すぐそばの葛城市歴史博物館（新庄町歴史民俗資料館）で「忍海」の資料と地図を買って帰ったので、だいたいイメージは出来ている。後は足任せ 気楽に葛城山麓の山裾の古代 walk である。

頭の中では 寺口忍海古墳群のある葛城山麓公園から群集墓の点在する枝尾根を歩いて 山口の集落へ出て 丘陵地を下って笛吹の集落から脇田の遺跡へ

でも 思い通りに歩けるのか まったく足任せ。忍海駅からまっすぐ葛城山へ向かう道を登って行く。

正面に葛城山の頂上が見える。こちら側に幾つもの枝尾根が張り出し、その下の丘陵地にのどかな田園地帯がひろがり、ぽつぽつと幾つかの森や集落が点在するのどかな田園である。

この枝尾根の幾つかの尾根筋に渡来の鍛冶集団の群集墓があり、下の森が点在する丘陵地が古代忍海の集落である。三角上に均整の取れた尾根の下にある森が笛吹神社のある神山 その下が脇田の集落のあたりか。

此处で5世紀～7世紀にかけて数多くの鉄器が作られ、葛城氏・倭王権をささえた。日本で広く鉄器が使われて行く時代の幕開けである。



「忍海」の葛城山麓に広がるなだらかな傾斜地

周囲の田園風景を眺めながら田圃の中を道草食いつつ緩やかな勾配の坂道を30分程登ってゆく。

突然南北に葛城山の山裾を貫いて御所から五条・吉野への広い国道にぶち当たる。

司馬遼太郎が「この「葛城のみち」に沿う古い郷を残すためには避けたいが避けられぬ道」と書いている新道。ほんとうにのどかな里を切り裂く交通量の多い新道である。でも、電車が通る下の山裾からは5.60mも登ったか、駅からはかなり離れているので、新興住宅地はこのレベルまで攻め寄せてこない。のどかな風景が維持されている。

この新道を北へ少し歩いて、山田の集落をまた上ってゆく。此处からは登りがさらに急になって、山裾に広がる山襲の上である。所々に梅の花が咲き、振り返ると林越しに大和平野が遠くかすんでいる。



葛城山麓 山田周辺で

正面に葛城山から張り出してきた枝尾根や森が見え、行く手の北の端に二上山。この枝尾根のあたりが、寺口忍海古墳群のある尾根筋。葛城山麓公園の標識が見当たらず、違う枝尾根筋に入ったかと不安になりかけたところで、標識に出会う。標識に従って、北側からこの枝尾根を回り込むと先にもう一つ枝尾根があり、葛城山麓公園の道はこの枝尾根との間へ

回り込む。下って枝尾根の間にはいってゆくと立派な葛城山麓公園の入り口。



葛城山麓公園・寺口忍海古墳群の入り口周辺で 2005.3.9.



3.1. 寺口忍海古墳群 (葛城山麓公園) 2005.3.9.



葛城山麓公園に入ると正面に芝生に刈り込まれた斜面があり、その周りは林に覆われた尾根筋が取り囲んでいる。公園の案内図はあるのですが、まったく寺口忍海古墳については触れられていない。

周囲の尾根筋にはみな古墳群があると思われるのですが、果たして入ってゆけるのか不安になる。

すぐ横の公園の管理事務所に入ってこの芝生の丘から山道に入

れば、林の中に古墳群が広がっていること また、地図で想像していたとおり、この丘の向こうは墓苑で桜の時は花見でにぎわう場所であることなど教えてもらう。

芝生の丘に登りると、小さな尾根筋の林の中に山道が続いていて、そこに入ってゆくと、ぼこぼこと小さなこぶがあちこちにある。こぶの上にも木が育っているので、そ





のまま見落としてしまうが、これが古墳群だ。

向こうに一つ 古墳の横穴入り口の石組みが見えるものもある。

すぐ両側が崖の小さな尾根筋の上であるが、崖に作った横穴でなく小さな円墳が並ぶ古墳である。



静かな尾根筋に広がる古代の群集墓 寺口忍海古墳群  
2005.3.9.



古墳群の中に据えられた案内板によると寺口忍海古墳群は北・中央・南の3群にわかれ、150基以上の古墳がある。古墳は5世紀末に作られ始め、6世紀を通じて作られつづけ、規模の大きな石室では6世紀後半から7世紀初めにかけて追葬が行われたようだ。

大きさは10メートル前後の小さな円墳が尾根筋に密集して作られ、埋葬施設はほとんどが横穴式石室であるが、一部に九州北部に共通する竪穴系横口式石室が含まれ、多くの石室のが羨道閉塞部で床面が傾斜しているという特徴がある。

(竪穴系横口式特徴の痕跡か。。)

大量に出土した副葬品の中に鉄生産にかかわる鍛冶工具・鉄滓朝鮮半島からもたらされたと推定される馬具や鑄造鉄斧などが含まれ、忍海の鍛冶工房の渡来鍛冶集団との関係していると考えられている。



尾根筋 林の中に建ち並ぶ古墳群

公園の左の尾根を幾つかの円墳を見ながら登る丘の先崖に接して、きれいに整備されたD-30号墳がある。



尾根を利用して築かれた径 12 メートル、高さ 4 メートルの円墳で、6 世紀末から 7 世紀はじめの築造。埋葬施設は、南に開口する横穴式石室で、全長 7 メートル、玄室の長さ 4 メートル、幅 2 メートル、高さ 2.6 メートル。比較的大きな石を使い、奥壁は 3 段、側壁は 2 段でいずれも 1 段目から内に傾斜して組まれ天井石も巨大。盗掘のため遺物は少なく、須恵器、土師器、鉄釘が出た程度。鉄釘から、木棺が埋葬されていたことがわかったと案内板に記載されている。



整備され石室が公開されている D-30 号墳

はやしを抜けると左右の枝尾根が合わさるところがきれいに整地され、芝生の丘と墓苑に整備されている。墓苑に整備された左右の端にこぶが幾つか見えるので、この一体にも数多くの古墳があったと思う。丘の上からは、今登ってきた古墳群の尾根越しはるか向こうに大和平野が見える。



忍海古墳の上部の丘・墓苑から見る大和平野 2005.3.9.

この墓苑の奥からそのまま山口の集落へ南西の枝尾根に沿えば行けるはずであるが道がわからず。

登って来た尾根の下につけられた舗装道路に沿ってもう一つ西の尾根を越える道を探すが判らず。

管理事務所のところで公園整備の人たちに聞くと墓苑の一番上の端から抜けるという。久しぶりにバンの荷台に乗せてもらって墓苑まで引き返し、一番上の端の鍵がかけられた扉の横から塀をすり抜ける。

相当傷んだ舗装道路が左右の枝尾根の間にあった。草ぼうぼうでもうほとんど使われていないのだろうが、図面からするとこの左右の枝尾根にも沢山の群集墓があるはずだけれど深い灌木の中道なし。

10 分ほどで枝尾根の中を抜け、畑が広がる山口集落の上へ出た。

東にはぱっと眼下に大和平野が広がり素晴らしい景色が広がっている。



寺口忍海古墳群を抜け出た山口周辺



寺口忍海古墳群の尾根を抜けた山口集落の上からみた忍海そして大和平野 2005.3.9.

大和三山がぼっかり浮かび、  
 王城の地飛鳥も見渡せる。  
 倭大王が飛鳥から大和平野越  
 しにこの金剛・葛城の山麓を  
 見るように 大和の豪族葛城  
 氏が大和平野を挟んで王城の  
 地飛鳥を眺めている。畦道に  
 すわりこんでそんな構図にし  
 ばしみとれながら、古代忍海  
 にいた渡来鍛冶集団に思いを  
 めぐらしていた。



山口集落の上からみた忍海そして大和平野

この寺口忍海古墳群で 150 基を  
 超える群集墓 そして すぐ西へ下った笛吹古墳群・山口千塚古墳群も合わせると 100 を超える群集墓がある。この狭い忍海の郷のすぐ上の山端に大きな群集墓が隣接してほぼ 6 世紀百数十年間、3 つも維持され、群集墓合わせると約 300 にもなるのである。

すべてが渡来人 鍛冶技術集団でないにしろ忍海には大きな集落があり、鉄器製造の鍛冶工房を中心に大きな生産活動が行われていたことが判る。

葛城氏というと大和王家との外戚関係がすぐ言われるが、このような朝鮮半島との交流をベースに渡来鍛冶集団による鉄器製造などの高い技術と生産力がその力の背景になっていたのだろう。

古代葛城氏の勢力の源泉 忍海の鍛冶生産工房の大きさに納得しながら山口の集落へくだりました。



注 竪穴系横口式石室

横穴式石室はそれまでの一度だけしか使用しないという竪穴式石室の埋葬形式とは異にして、一度石室に埋葬した後でさらに追葬できる構造をもち、竪穴系横口式石室、横穴式石室、横穴といった後期古墳のもつ大きな特徴である。そこには、埋葬方法の大きな変化がみられ、竪穴系横口式石室は朝鮮半島から伝わってきた横穴式と従来の竪穴式石室との過渡期の日本独特の形式。



竪穴系横口式石室と横穴式石室との違いは、横穴式石室が遺体を安置する部屋（玄室）と玄室に通じる横口部（羨道）の床面が同じ高さで続き、玄室と羨道のどちらにも天井石を載せるのに対して、竪穴系横口式石室は、玄室と横口部に段差があり、玄室床面が横口部より低くなっていることと、横口部の側壁には天井石を載せないことにある。

日本では北九州に集中的に見られ、その後 各地にも散在する。

この竪穴系横口式石室が横穴式石室にまじっていることから、北九州 朝鮮半島の渡来人の流れを見ることが出来る。

### 3.2. 山口集落から笛吹神社・脇田集落を通過して忍海の駅へ



山口の集落



山口の集落より寺口忍海古墳のうる尾根筋

幾重にも重なって西に伸びる枝尾根の山際に沿ってくだってくると山口の集落の名が見え、道の別れにお地藏さんが立っている。寺口忍海古墳群のひとつ南の枝尾根筋ですぐ近くで、下ってきた枝尾根の南側斜面のあたりが山口千人塚古墳か・・・。

山口の集落を抜けるとまた畑が広がる中をこんもりした山裾の森を目印に笛吹き集落へくだってゆく。標識を見ながらくだるのであるが、なんせ凹凸の続く丘陵地の上、思い通りにたどり着けず、丘を下りながら結局すこし北へ行き過ぎて笛吹神社のある森の北側から南へ回り込む。



笛吹神社周辺



2005.3.9.



森は平地の上かと思っていましたが、森そのものが小さな丘陵地の先端で高い丘になっていて、神社はこの上で、丘の上に社がみえる。

この丘そのものが、古代の笛吹神社古墳でその後ろに続く尾根筋が古代の群集墓がある笛吹古墳群である。



笛吹神社 【葛木坐火雷（かつらぎにいますほのいかずち）神社】



笛吹集落を少し下って 笛吹神社・笛吹古墳群の森を見上げる

本殿の上に上うっそうとした森の中、立派な神社である。本殿のすぐ裏の急斜面の上に笛吹神社古墳があり、石室の入り口が見える。この古墳の墳丘の上に神社があり、この古墳をご神体としているようだ。



笛吹神社 本殿(1)



笛吹神社古墳

資料によれば、この古墳は6世紀半ばから中頃の古墳で尾根の先端部を利用した26メートル径の横穴式の円墳でこの後ろの尾根に続く群集墓笛吹古墳群の始まりに関わる中心的豪族の墓と見られる。

また、この後ろに続く尾根には75基ほどの群集墓 笛吹古墳群があるという。笛吹古墳群の大部分は径10メートル前後の横穴式円墳で笛吹神社古墳から西へ尾根筋に約80基に及び広がっているが、ほとんどが工事等で破壊され、所々に石が残っている程度になつたといわれ、ここからは坏、高坏、器台などの須恵器、

鎌、刀子、釘、斧、鋤先、鎌などの鉄製品、轡、辻金具などの馬具が出土したらしい。



笛吹神社(2)



この神社は一般に「笛吹神社(ふえふきじんじゃ)」と称するが、「笛吹神社」と「葛木坐雷神社」とが合祀されたもので、火雷大神(ほのいかづちおおかみ)と、天香山彦命(あめのかぐやまひこみこと)

を祀り、現在の本殿は笛吹神社のものといわれる。

「葛木坐雷神社」は927年に完成した「延喜式」にも記載がある古い神社で、古代にこの周辺に住んでいた笛吹連一族の氏神で、もともとは一族の祖神である火雷大神を祀っていたと考えられている。火雷大神の名が示すとおり、笛吹連はもともと古代このすぐ下に集落があった「脇田」の鉄器生産の技術集団と密接な関係があったと考えられ、笛吹神社古墳ならびに笛吹古墳群の群集墓もまた、寺口忍海古墳群・山口千塚古墳群と同様 古代この地周辺に住んでいた 忍海の鍛冶技術集団の一族が作ったものと考えられている。



夕暮れ近く 笛吹神社  
の前から東に坂をくだ  
る。

はるか遠くに大和平野  
が広がり、段々の田圃  
地帯のむこうに大きな  
集落が見える。



脇田集落越しに大和平野

この集落が脇田集落で  
あるが、市街地近く家

並みが続いていて、古代の鍛冶生産工房跡など遺跡としては何も残っていないので、どう歩こうかと思って下っていると広い新道に「脇田」の標識。ここをクロスしてそのまま脇田の集落に入る。直ぐ左田畑の中に脇田神社の新築された社殿が見えるので、この道の両側の田圃一帯が古代の鍛冶生産工房のあった脇田の集落であろう。

きょろきょろと集落の間にある田圃を見ながら下ってゆく。

振り返ると壁のように南北に広がる葛城山を背に その山裾奥に寺口忍海古墳群の山 そして その手前に笛吹の森 そしてその手前に脇田集落の家並みが広がっている。

今見えているこの丘陵地全体が古代5世紀から7世紀にかけて栄えた「忍海」。

5世紀末 葛城氏が衰退した後も、鍛冶工房に従事してきた忍海氏を中心に栄え、7世紀にはこの脇田集落 脇田神社周辺には鍛冶工房と共に東塔 西塔の二つの塔を持った地光寺もあったという。

一日 古代 鉄の郷「忍海」をかつて気ままに歩いて、近鉄忍海駅についた時には日もとっぷり暮れていました。



脇田集落周辺から 葛城山麓を眺める 2005.3.9.

山口千塚古墳群 笛吹古墳群 寺口忍海古墳群のある葛城山の山裾

中央部に忍海集団の神奈備山といわれる笛吹神社のある森「神山」

一番手前が弥生時代から住み継がれ、古墳後期・飛鳥時代 鍛冶工房として倭王権を支えた

## 金剛・葛城山麓 葛城氏の鍛冶工房「忍海」

古代 「忍海」には数々の渡来人が住み鉄鍛冶の技術を伝えた

### 4. 古代 鉄の郷「忍海」walk を結んで

「忍海」の言葉に惹かれて 古代 鉄の郷「忍海」を古代鉄 渡来人の足跡を求めての山裾 Walk 本当に満足ゆく walk でした。

倭王権よりも先に倭の国に先住し、多くの渡来人を迎えて独自の技術・文化を栄えさせ、大和王権確立につくした金剛・葛城山麓の郷。 おそらくその中心は「鉄・鍛冶」であったろう。そして、この「鉄・鍛冶」が多くの文化・技術が日本各地に伝播していった。

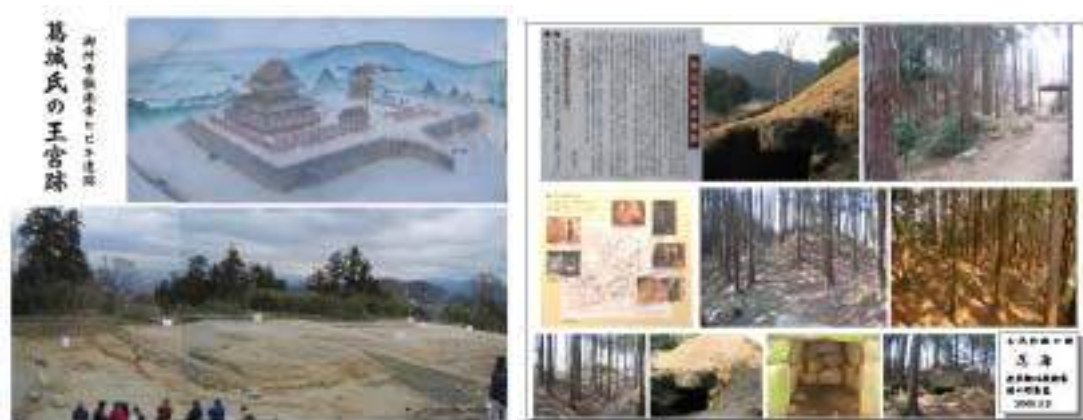
大きく前方に広がる大和平野を眺めながら、彼らもまた倭を動かしているとの実感が合ったのではないか そのおおらかさが、今もタイムスリップしたようにのどかな山麓の風景の中に詰まっている。

「忍海」の鉄については まだまだ 知らないこと多く、この金剛・葛城の山麓には多くの和鉄との出会い・ロマンを秘めているだろう。

また、葛城氏の焼討ちを受けた王宮の出土 悲劇の主人公のようにも写るが、どうもこの葛城・金剛のその後の展開をみているとそうでもないと感じる。何が秘められているのか わからないが。。。。



古代 和鉄を育んだ多くの渡来人が眠る葛城山山麓 忍海



司馬遼太郎は『街道を行く「葛城のみち」』で、この山麓の古道を「倭王家より古い国 今も「国つ神」の残る道」とそのロマンをたぎらしている。本当にそんな感じがピッタリする「忍海」walk でした



# プロジェクトX「千年の秘技 たたら製鉄復活の炎」と映画「火火」

信楽焼の「穴窯」と「たたら」の秘技 炎の美を重ねて

2005.4.9. by Mutsu Naknishi



映画「火火」のパンフより

プロジェクトX「千年の秘技 たたら製鉄復活の炎」より

たたら・鉄の放つ炎・肌について話していますが、信楽焼の陶芸家神山清子さんの生き様とともに信楽焼の素晴らしさを描いた映画「火火」が公開され、灼熱の窯で起こる炎流の素晴らしさにたたらの炎をダブルさせて その迫力と過ぎらしさに息を呑んで見ました。

ちょうど NHK プロジェクトX「千年の秘技 たたら製鉄の復活」の映像を見たところだったので それにダブルさせて余計に感慨深かったのかもしれない。

古代鉄製造の草創期がよくわからず、妄想かもしれませんが、「山の斜面を使って築かれた陶芸の穴窯 登り窯の変遷が 野だたら たたら炉（縦型炉・箱型炉）の技術と共通する技術があるのではないか？」

「古代のたたら製鉄の草創期には陶工とたたら製鉄の技術者は共通していたのでは・・・また、陶芸の窯がプレたたら炉のヒントになったのではないか？」などと思いをめぐらしています。

炎の経験でカバーする神秘・秘技の世界であることなど共通点多く、その刻々変化する炎の美しさに見せられました。

## プロジェクトXで 奥出雲の「日刀保たたら 復活」

3月29日プロジェクトXで 奥出雲の「日刀保たたら 復活」のドラマが放送された。

砂鉄によるたたら製鉄のみでしか出来ない高純度の玉鋼 その炎の変化の神秘。

久しぶりに見る 鉄の輝きと炎 血がさわぎました。

高純度な鋼 玉鋼なしでは今も日本刀を打つことが出来ない。

洋式高炉による近代製鉄が始まるまで千数百年にわたる日本古来のたたら製鉄。

砂鉄と炭を幾重にも重ねて日を入れ加熱。三日三夜原料（砂鉄と炭）を投入しながら炉を燃やし続け、高温風の送りと炉から立ち昇る炎の変化を見ながら、温度と砂鉄還元の状態を操ることで玉鋼をつくる。

炉を燃やし続けた三日目 めらめらとひかり輝く灼熱の激しい炎が穏やかな紫の炎に変わり、この時 炉の中では砂鉄が還元されて、鉄が搾り出され、耳をすますとその搾り出される音が聞こえるという。

本当に神秘的な一瞬でした。



たたら製鉄では 風を送り炭を燃やして灼熱を得る一方、環境は完全燃焼でなく、蒸し焼きの不完全燃焼の環境を作らないと砂鉄は還元されない。

高温を得るための酸化と砂鉄を還元するための還元雰囲気 この相反する環境を巧みに操って玉鋼を作る。鞆が発明されるまでは、山の斜面に炉を築いて、自然の風を利用して風を送り、高温を得たという。たたら炉の炎を見ていると神秘としか言いようがない。まさに経験に裏付けられた秘技である。

蛇足ながら 金属の中で「鉄」だけが酸化すると融点が下がる。したがって 鉄鉱石・砂鉄など酸化鉄の製鉄原料を高温に加熱して鉄を作る時に、還元されない原料はすべてスラグとなって流れ出してしまい、鉄は作れない。上記の三日三夜の晩 炎の変化と共に鉄が絞り出されるとの表現はまさにこの一瞬を言い表している。

高温と還元環境を作る操炉技術に熟知したリーダー（村下）無くしては不純物の少ない玉鋼をつくるたたら製鉄は復活し得なかった。

久しぶりに鉄の炎のエネルギーそしてその神秘に感激しましたが、同時に この番組がいう技術の伝承・復活の現実 「今 技術の伝承」と気楽にいわれるが、「物づくりとはなにか」「技術の伝承とは何なのか」技術屋の視点がもっと取り入れられてもいいのではないか・・・と。

#### 映画 「火火」



4/9 やっと神戸で信楽焼の陶芸家神山清子さんの映画「火火」が公開され、見る事が出来ました。

映画は神山さんの陶芸家としての生き様に息子さんの白血病・骨髄バンク設立への戦いを重ね、現実と戦いながら前向きに挑戦してゆく陶芸家神山清子さんが描かれてる。この映画の中で、神山さんの「穴窯」「自然釉」の制作課程や作品が随所に出てきて 窯焚きの映像が実に鮮烈できれいでした。



「野焼きの時代から穴窯そして登り窯へ 高温と酸化・還元環境が陶磁器のよしあしを決める。」そんな陶芸の窯とその焚き上げ技術に古代たたら草創期の「プレたたら」の技術をダブらせていました。



古代 日本でたたら製鉄が始まった時期と絡んで、自然送風を利用したといわれる「野だたら」の時代の技術がどんなであったのか？ 今も諸説があって よく判らない。

六甲おろしではないが 山を吹き抜ける「嵐」など山の谷間を吹き抜ける風が重要だったという。

古代 5世紀 土器からさらに高温で焼かれた須恵器が日本で現われる時代とたたら製鉄が始まる時代がほぼ合致する。 日本に鉄器が伝来して、約 1000 年もの長きにわたって素材の供給を朝鮮半島から受けるにもかかわらず、日本で鉄素材が製造できない古代。鉄の製造技術習得に日本は必死であったはずである。

釉薬を使わず、穴窯の中で作られた灰が窯を煙道へ吹き抜ける炎によって ガラス化して作品の表面に素晴らしい神秘の釉を形成する。 神山清子さんの作品を特徴づけるこの自然釉の世界は古信楽の再現でもあり、技術習得の苦難が美しい炎と共に描かれる。

クライマックスは高温に焼き続けて 13 日 灼熱の炎をふうじこめ、窯の中の炎が穏やかに変化し、自然釉の変化が始まり、窯をハイスピードで封じ込め、還元環境にして焼き上げを完了する。

窯焼き最後の還元焼成の段階で色・表情など作品が浮かび上がって作品の成否をきめる。

この最後の変化に向かって、数々の操業技術・炎の観察を駆使することなどこれはまさにたたら製鉄の終わりで和鉄がじわっと滲み出してくることにかける操炉技術と全く同じ。

すごい迫力で、古代プレたたらの世界もこんなだったろうと食い入るように見ていました。

本当にすごい技です。

陶芸の窯変などと変異を淡々と期待するのかと思っていましたが、すごい技術に裏打ちされた世界であること思い知りました。

たたらを支えた山内のたたら衆と村下の苦難の技術集団と日本の陶芸を支えた朝鮮半島からの陶工たちの苦難が信楽焼の神山清子さんの姿にだぶり、技術世界の本当の素晴らしさ・苦しさにも深い感銘を受けました。また、技術の理解と深い洞察がなければ 技術の伝承などできないだろうなどといついつい考え込んでしまいました。

大和政権の成立期 大和・河内には数々の新技術専用の工房が作られるが、鉄・陶・玉はその中心。

陶芸とたたら技術世界 古代には同根でなかったか・・・

今後 須恵器など古窯の遺跡にも足を踏み入れたいと思っている。

同じ時期にみた たたらと陶芸の炎の世界とその技術 本当に素晴らしい世界でした。

もし 機会あれば 是非 一度ご覧ください。

ついでながら、映画「火火」のあらすじを映画のパンフより添付します。

2005.4.09. 映画「火火」を見た興奮の中で

映画「火火」のあらすじ 映画のパンフより

参考 1 信楽焼 穴窯と登り窯の構造

参考 2 古代のたたら製鉄炉の概略

映画「火火」のあらすじ 映画のパンフより

**女性陶芸家の草分けであり、骨髄バンク立上げに力を尽くした 神山清子。今も信楽で日々窯を焚く女性の真実の物語**

独自の古代穴窯による信楽伝統を軸を軸として陶芸界に新風を吹き込む女性陶芸家であり、また清子・賢一の両方をきっかけに骨髄バンク運動を始め、全国の白血病患者を救うべく奮起する女性としても名高い神山清子。

「火火」は、実在する清子以外の女性の、芸術家として、母として女として大のようには生きる姿を描く、実話に基づく人気音楽、今の賛歌である。

# 火火



**白血病に倒れた息子。母は菩薩となり、鬼となる**

夫に亡かれ、女中として三人の子を育てながら、当然の事であるが運命による自然死を成したくないと戦う女性陶芸家、神山清子。だが、癌の予感の中で結んだ陶芸家の墓も穴窯を掘り直し、何処にも死なば打ちひしがれる。そして、数年、癌死から夜空に燃える炎を焼き上げるほどに突き進む。清子の母は清子の母としての母、家に入った彼女の母にかさねたが父親の母、死なれぬ夢、木槌がゴードロをついて可憐な色に染まっている。ついに倒れた清子の陶器だった。だが、清子は長くは続かない。同じ陶芸の道多岐歩み始めた清子の賢一が、次で倒れた。四時のはじめは自然、FLMに適合する骨髄の移植が生存の唯一の道。清子はこの日から、鬼となり、菩薩となった。



**日本映画の才能が結集した、感動の最高傑作**

主演で神山清子を演じるのは、田中裕子、清子・賢一役には新人俳優役者が起用され、映画デビューから石川りく、河野ゆい、橋本ひな、清子役は、津山豊博など実力俳優が出演する豪華キャストで、豪華演出のサポートも充実。脚本・監督は「愛の劇場」(元の花井)の二人組の熱い情熱(さび)を劇中に凝り込めて見事に描き出した。清子は清子の母を演じた。一歩の歩みを進めて清子の母を演じた。清子は清子の母を演じた。一歩の歩みを進めて清子の母を演じた。



**窯の火、土、陶芸作品、息を呑む<本物>の美しさ**

穴窯、燃える火、そして数多くの陶芸作品。この映画ではすべて本物が使われている。大量の薪で積み上げた穴窯の奥で燃える炎、美しくその光に焼かれる陶芸作品の美しさ。それらすべてが本物で撮影された。清子は、清子の母として清子と清子の母を演じた。清子は清子の母を演じた。清子は清子の母を演じた。





参考1 信楽焼 穴窯と登り窯

日本伝統工芸品協会 H.P 特集信楽焼より

<http://www.kougei.or.jp/crafts/0413/special/special.html>

<http://www.kougei.or.jp/crafts/0413/special/kama.html>

穴窯

穴窯は、山の斜面に沿ってトンネル状の穴を掘り、斜面の下の方を焚口とし、斜面にそって順に品物を並べていきます。焚口に火をいれると、炎と熱は斜面に沿って上へ上へと登り、上の口から抜けていきます。信楽では、鎌倉時代から穴窯が使われており、古信楽はすべて穴窯で焼かれました。信楽を囲む山の斜面には無数の窯跡が残されています。

現在の信楽では、重油、灯油、ガス、電気を燃料とした平地窯が主流ですが、「火色」「ビード口釉」「焦げ」といった美しい景色を醸し出す伝統の焼締のやきものは、いまでも穴窯、登窯で焼かれています。

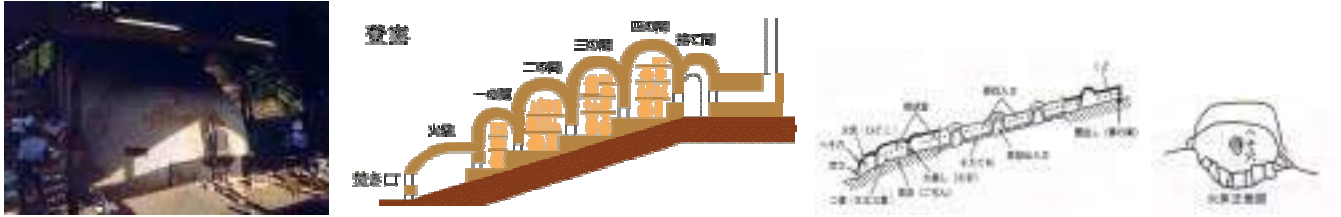


登窯

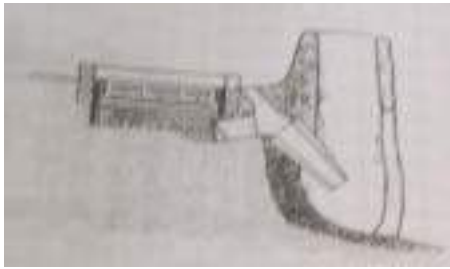
登窯は穴窯のトンネルドームを大型化し、焼成室を何段にも重ね、一度に大量の品物が焼けるようにしたものです。さらに、火袋(燃焼室。薪を燃やして炎をおこすところ)と焼間(焼成室。やきものを焼くところ)を分離することによって熱を合理的に蓄え、また燃焼の火が直接あたらないことで不良品率を抑えることが



でき、生産性の飛躍的な向上に貢献しました。信楽では江戸時代中期（1700年ごろ）から使われ、昭和25年から30年、火鉢の生産が最も盛んだったころは、およそ100余りの登窯が煙を上げていました。



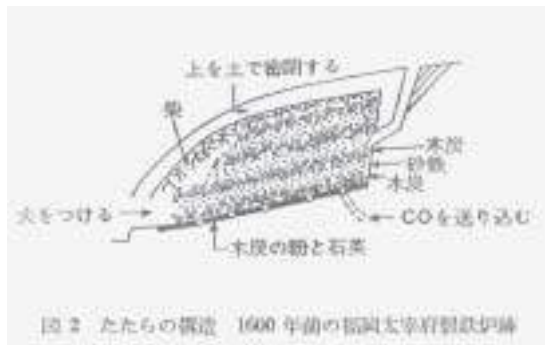
## 参考2 古代のたたら製鉄炉の概略



a. 豎型炉



b. 横型炉



黒岩俊郎 「たたら 日本古来の製鉄技術」より

5世紀「たたら」製鉄が国内で行われる前夜 土器の世界でも高温還元で焼きしめられる「須恵器」の技術が朝鮮半島から伝わる。

この高温還元の技術は製鉄でも最も重要な技術で、還元雰囲気 つまり蒸し焼きの技術がないと酸化している製鉄原料から鉄を取り出せない。

鉄が日本に伝えられて 1000年に渡るとも言われる製鉄の開始までの時間 その最大のポイントは高温を得るための鞆の伝来と還元雰囲気の調整であろう。

自然風での高温を得る方法は土器・土師器の窯が一役買っていたのではないかと。

炭がぎっしり詰められ、鞆の風供給とあいまって、還元環境と高温が安定して得られるまでは、窯を高温にあげてその後 窯だしまで窯を封じ込め還元環境におく技術に豎型炉のイメージを重ねている。

そんな高温 還元が得られる窯として 須恵器の登場が、製鉄にも重要な役割を果たしているのではないかと考えている。

先日訪れた富山県埋蔵文化財センターの「土器 土器 土器」展にそんな須恵器の窯のパネルがあり、興味を持ってみました。





富山県埋蔵文化財センターの「土器 土器 土器」展で 2005.5.18.



## 函館郊外の地図にある「鉄山」の地名を訪ねて

2005.4.24. hakotetsu.htm by Mutsu Nakanishi



南茅部より眺めた噴火湾側に沿って続く恵山と亀田半島の山並み 2005.4.24.  
この山並みの右端を越えて行くと「鉄山」から函館に至る



北海道南端の函館・渡島半島の地図をみると  
噴火湾側の海岸に沿って 南端の恵山から駒ヶ岳へ  
亀田半島の山並みが続く  
その中に函館の町に隣接して「鉄山」の地名がある

この地名を見つけて もう何年にもなる  
「鉄の山に違いない」「どんなところだろう」と。。。。。



恵山は北海道南端の活火山で、この恵山から駒ヶ岳そして長万部に至る海岸沿いは縄文の時代から開けた地であり、また 海岸には砂鉄が堆積する砂鉄海岸。

もっとも 北海道ではたたら製鉄の痕跡は未だなく、もっぱら本州から鉄製品が古くから持ち込まれてきたと札幌の開拓記念館で聞きました。そして 恵山の南西の津軽海峡に面した海岸 古武井では幕末に北海道ではじめて溶鉱炉が築かれ、周辺の砂鉄を利用して製鉄生産が試みられたところ。



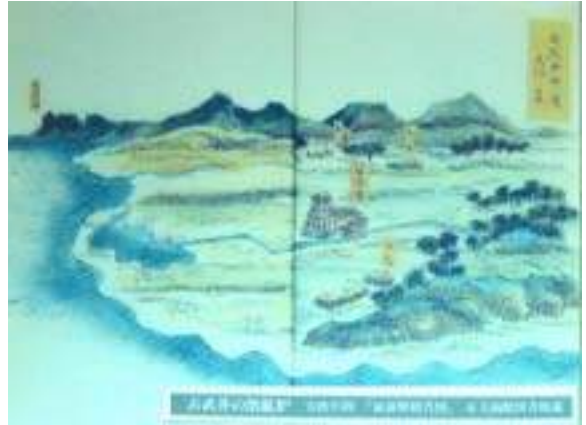
北海道 砂鉄の分布

これはわが国初の高炉操業の試みの一つでもあり、 開拓記念館にはそのパネルがありました。 しかし、実際には鉄生産はうまく行かず、数年で終わったようです。

でも、上記したようにこの恵山を中心とした亀田半島の山並みは鉄を産し、また北海道ではじめて鉄生産がスタートした所と考えられる。



砂鉄の浜 尻岸内 日の浜海岸 (インターネットより)



古武井 溶鉱炉の絵図



古武井溶鉱炉で使われたレンガなど 北海道開拓記念館で 2005.4.26.

4月24日 昼 函館の駅の案内所に飛び込んで 鉄山から縄文遺跡の密集地南茅部の海岸へ出るルートを教えてもらう。

「「鉄山」のバス停で下りて 次のバス待つて南茅部へ行きたい。夕方 函館に帰れるよね??? または大沼の方面へも出れるし・・・」と聞く。

「鉄山において どうするの???ほとんど 何も通らぬ山の中。タクシーも迎えなについてくれないよ 南茅部もほぼ 同じ」

と呆れ顔でいわれた。

南茅部も函館に合併して函館市。

ところが 交通の便はすこぶる悪く 2時間に1本のバス路線。

まあ どうにかなんと 出発が迫っていた鉄山を通過して南茅部行のバスに乗る。午後1時のバスに乗り込む。







函館駅前の「鉄山」から「南茅部」へのバス乗り場

函館から 15 分ほどで五稜郭・湯の川温泉の函館市街を抜けてトラピスチヌス修道院のところから、いよいよ山越え。

幾つか集落が点在する丘陵地を過ぎるといよいよ山が近くなり、30 分程で山の中に入り込み、人家がなくなり、対向車もなく、バスだけが山間の曲がりくねった道を登って行く。 バスの中ももう数人である。



函館トラピスチヌス修道院のところから市街地をぬけ、山に入ってゆく 2005.4.25.

家並がとざえて、しばらくすると眼前に山を大きく切り崩しているのが見えてくる。

「あそこが 鉄山。 バスも2分ほど休むよ」と運転手さんが 教えてくれる。

山の斜面に沿った道を大きく山を切り崩している碎石場を見ながら下って行って反対側に回りこんだところでバスが止まる。「鉄山」のバス停である。バス停の向こうにも同じようにやまを切り崩している碎石工場が見える。



函館市 鉄山町 周辺【1】      そこは 粗玄武岩の採石場がある山の中      2005.4.24.



### 函館市 鉄山町 周辺【2】

柱状節理状の岩脈とそこから掘りだされたブロック状の碎石 粗玄武岩 2005.4.24.

赤茶けた山肌に黒く柱状節理状に縞模様のはいった部分が見え、一瞬 これが鉄の鉱脈とりましたが、この黒い部分が粗粒玄武岩の岩脈で、きれいな平滑面に区切られた大きな石が採取されている。いずれにしろ地下でのマグマが上がってきて、他の岩の層に貫入凝固した半深成岩である。

深成岩にはマグマには大量の鉄分があり、このあたりに鉄の鉱脈があっても不思議でない。

バスの運転手さんによると昔 このあたりに鉱山があったと言うがさだかでない。「鉄山」の名もそこから北のかもしれない。

しかし、現在では ここで採取されるのは粗粒玄武岩の碎石。バラスとして最適な石の様である。

周辺には碎石工場以外になにもなし。

日曜日の昼だったからかも知れないが、人も車も全くとおらず、静まり返っている。山の真っ只中である。

案内所の人が言った意味がやつとわかった。

ただ、ここ「鉄山」でまっすぐ南茅部へ亀田半島の山並みを山越えするルートと南の恵山の方へ曲がって山越えするルートが分岐する。

昔から、ここは茅部や恵山の海岸と函館を結ぶ山越えの道でこのあたりでも鉄がとれ、函館を含めて3つのルートで海岸に運ばれたのかもしれない。

運転手さんのアドバイスもあり、そのまま また バスに乗って、山を越えて「北の縄文」遺跡が並ぶ南茅部の海岸へ下っていきました。

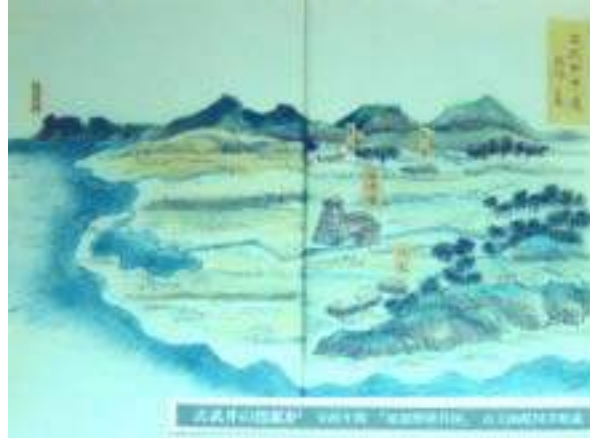


恵山から駒ヶ岳へ続く山並み 「鉄山」周辺【3】 2005.4.24.



「鉄山」から亀田半島の山並みを越えて 噴火湾側の海岸へ  
そこは「北の縄文」の密集地 南茅部





函館の「鉄山」は火山帯に属する「鉄の山」か 火山帯の禿山と思っていましたが、 雑木林が生茂る山中。その中で 今はパラストの原料粗粒玄武岩を産する山中の採石場でした。

でもこの恵山から駒ヶ岳へと続く 亀田半島の山並みは火山帯の中にあり、この海岸では豊富な砂鉄が取れる場所。

「鉄の山」であっても不思議でない。

「たたら製鉄」との関連 鉄鉱脈などについてはよく判らなかったが、鉄との関連が ありそうな場所でした。

この「鉄山」の南の海岸 恵山に近い古武井では この周辺の砂鉄を使って、幕末に日本最初の溶鉱炉が建てられ、洋式の鉄製錬が試みられたところである。

「鉄山」の地名もこの幕末の鉄精錬と関連した動きの中であつたのかもしれない。

地図で見つけた「鉄山」 函館の「鉄山」も面白い場所でした。

2005.4.24.午後 鉄山から南茅部へ越えながら

8.

「縄文の赤」を彩った酸化鉄顔料に「古代鉄」のルーツを思う

沼鉄(パイプ状酸化鉄)と赤色チャート(粘土質微粒酸化鉄)

「縄文ファイル」2004.10.1 & 11.1 赤沼英男「遺跡を科学する よみがえる文化財」より



山内丸山遺跡と「縄文ファイル」2004.10.1 & 11.1 赤沼英男「遺跡を科学する」 「縄文の赤」

「縄文ファイル」を見直して、山内丸山遺跡から出土した漆製品の赤顔料として微細なパイプ状の酸化鉄が赤色チャートと共に使われていることを知りました。

この微細なパイプ状の酸化鉄は「沼鉄」と呼ばれているが、「鉄分の多い沼地に茂る植物の根に吸い寄せられた鉄分がバクテリアなどの作用によって 其の根を核に其の周りに堆積した褐鉄鉱(水酸化鉄)の一種。

大きなものでは「高師小僧」「鳴石」「鈴」「鬼板」(鬼板は沼地に広く堆積した鉄でパイプ状ではない)などと呼ばれているもので、古代日本に「たたら」製鉄が始まる前の時代の



「たたら」の時代に「製鉄原料として使われたのではないかと想像され、日本各地に多くの製鉄伝承を残している。



山内丸山遺跡の漆製品の赤色顔料分析 「縄文ファイル」2004.10.1 & 11.1 より



これらの鉄原料は水酸化鉄を主とした褐鉄鉱で比較的低温(800 ~ 1000 )で還元・酸化されるので、これらを火の中に入れて焼けば、簡単に赤色顔料として使える赤が得られるという。

また 炭などと一緒に還元雰囲気焼けば「鉄」素材が得られるといい、日本でたたら製鉄の炉が出現するもっと古い時代にこの方法で「鉄素材が得られていたのではないかと」の説もあり、「日本の鉄のルーツ」にまつわる謎でありロマンの一つである。

三内丸山遺跡出土の漆製品



古代初期のたたら製鉄 黒岩俊郎「たたら」より



葦が生茂り、鉄分が濃化する尾瀬赤田代



「高師小僧」 豊橋高師台で採取



そんな植物の根に吸い寄せられたパイプ状の「褐鉄鋼」が縄文時代から漆の赤色顔料の原料として使われていた。「縄文の赤」がベンガラ・酸化鉄であること「鬼板」が昔からその原料素材として使われてきたことなど知っていましたが、沼地の植物の根に吸い寄せられた細かいパイプ状の鉄がそのまま顔料に使われていたことに驚きました。

縄文時代から火の中で焼く技術と共に存在珍重されたこの「沼鉄」多くの伝承が残りのもうなずける。



また、この焼く技術の中で、「酸化雰囲気の中で赤を発色させる技術と共に、還元雰囲気の中で微細ではあるが鉄の玉が取り出す技術が生まれていたのではないかと」思える記事でした。

「縄文ファイル」2004.10.1 & 11.1 赤沼英男「遺跡を科学する よみがえる文化財」より  
2005.6.10. 「縄文ファイル」の中にパイプ状の赤色顔料「沼鉄」の記事を見つけて  
Mutsu Nakanishi

**参考** 「高師小僧」を豊橋 高師が原に訪ねて もうひとつの古代製鉄原料?? 知っていますか??  
<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/12takashi.pdf>

## 参 考

### 1 山内丸山遺跡から出土した漆製品

【漆塗台付き大皿】 三内丸山遺跡からは、土器、木製品とともに朱色や黒色の漆塗りのものが出土している。漆の製作には多くの時間と労力、そして専門的な技術が必要とされる。写真は漆塗台付き皿の一部である。(写真：青森県教育庁文化課より)



【漆塗台付き大皿（保管）】 漆塗台付き皿は内面に黒色と朱色の顔料が観察され、黒色の下地の上に赤色の漆が塗られている。厚さは10mm程度である。

底部には高台の一部が残っているが、残存部の高さがそれぞれ違うので本来の高さはわからない。

(所蔵先：青森県教育庁文化課)



【漆塗鉢（保管）】 鉢は推定の高さが18cmで、平面形は楕円形である。内外面とも黒色の漆が塗られており、口縁の下2.5cmの位置に浅い沈線が1本施されている。木胎の厚さは7mm程度で極めて薄く、素地の加工技術も高い水準であったことを示している。

(写真：青森県教育庁文化課より)



## 2. 「縄文の赤」を彩る赤色顔料

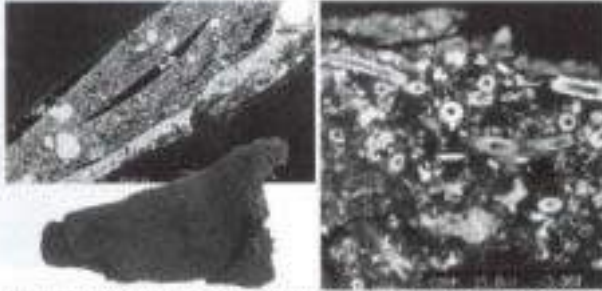
「縄文ファイル」2004.10.1 & 11.1

赤沼英男「遺跡を科学する よみがえる文化財」より



### よみがえる文化財～赤色塗彩資料の製作技法～

#### Making Red Pigment



左写真：高師小僧遺跡出土の土器に赤色塗彩を施す様子。右写真：土器に赤色塗彩を施す様子。赤色塗彩は、赤土を砕き、水を加えて練り、乾燥させたものである。

赤土を砕き、水を加えて練り、乾燥させたものである。赤土を砕くことで、赤土の粒子が小さくなり、水を加えることで、赤土の粒子が水に分散し、練りこまれる。その後、乾燥させることで、赤土の粒子が再び固まり、赤色の顔料となる。



### よみがえる文化財～パイプ状物質を使用した塗彩技法の浸透～

#### "Pipe-Like" Particles Produced Predominant Paint



左写真：パイプ状物質を使用した塗彩の様子。右写真：パイプ状物質を使用した塗彩の様子。パイプ状物質は、赤土を砕き、水を加えて練り、乾燥させたものである。

パイプ状物質は、赤土を砕き、水を加えて練り、乾燥させたものである。パイプ状物質は、赤土の粒子が水に分散し、練りこまれる。その後、乾燥させることで、赤土の粒子が再び固まり、赤色の顔料となる。



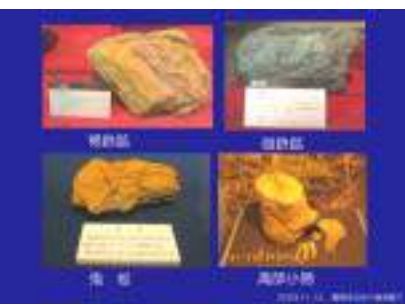
## 3. 植物の根に堆積した鉄 赤色顔料と古代の製鉄原料?



「高師小僧」「鬼板」が眠る豊橋市高師台 & 葦が生茂り、鉄分が濃化する尾瀬赤田代



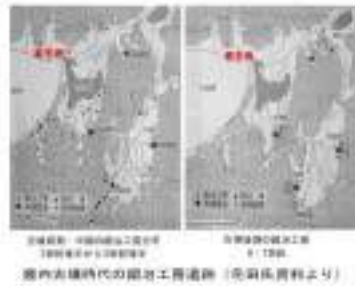
「鬼板」原料の赤が彩色された種々の製品



古代製鉄原料の可能性?



尼崎市 若王寺 2005.6.8.



### 1. 「古墳時代 畿内の先進鍛冶工房集落 若王寺遺跡」概要

尼崎史誌・兵庫県埋蔵文化財センターの調査報告&現地説明史料などより

### 2. 古墳時代 畿内の先進鍛冶工房集落 若王寺遺跡 Walk

私の出身地 尼崎の北部「若王寺」に古墳時代の先進鍛冶工房集落があった。

尼崎北部は原始・古代の大坂湾海岸線であり、猪名川が分流する河口の低湿地帯で 弥生の大集落「田能遺跡」はじめ、数多くの遺跡が営まれた。

また、「若王寺」には江戸時代の文豪「近松門左衛門」の墓のあり、「近松の里」と呼ばれている。

この尼崎北部の一体に幾つかの古代遺跡があることなど聞いていましたが、「古墳時代 鉄器の大量実用化が始まる「鉄の時代」をリードする先進鍛冶工房があった・・・」とは全く知りませんでした。

周辺の市街地 「若王寺」「久々地」「上坂部」「下坂部」とすぐ名前はでてくるのですが・・・

「名神高速道路沿いの旧電気試験所の所在地」に古代の鉄の先進工房があつたとは・・・

私たちの年代が育った「尼崎」は阪神工業地帯の中核工業都市「鉄の街 尼崎」。

そこに古代の鉄の先進工房が眠っている。



若王子遺跡のある尼崎北部 周辺図

阪神工業地帯の中核工業都市「鉄の街 尼崎」

そんな尼崎の古代にも「鉄の街」があった事知っている人はほとんどいないだろう。

そんな故郷に 思いをはせながら

「古代 たたら製鉄が始まった頃の痕跡が見つかるかもしれない」

「若王寺」界隈が今どうなっているのか

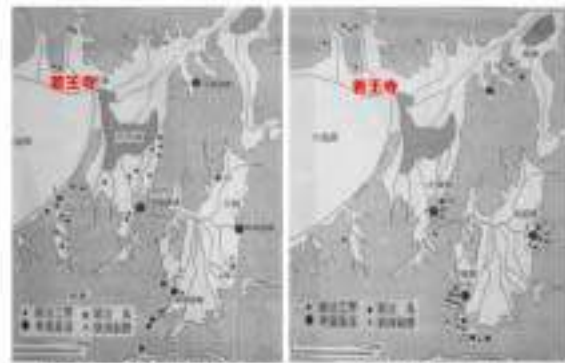
そんな興味で歩いてきました。

3世紀後半～6世紀末にかけての古墳時代 大和王権成立の前夜である。日本各地で大和王権に連なる豪族支配の象徴として数多くの前方後円墳が作られるが、これらの大土木工事を支えたのは鉄器の大量実用化であった。国内では未だ鉄の大量自給が出来ていないが、朝鮮半島からの鉄材供給・鉄器鍛冶加工技術集団の渡来などにより実用鉄器が急速に広がる。そして 5世紀末から6世紀国内での鉄の自給がはじまり、鉄器の実用が益々拡大する。そんな 実用鉄器の大量普及のこの時代 畿内には大規模な鉄器供給の役割を果たす鉄鍛冶工房や専用集落が数箇所出現する。

大阪湾がまだもっと内陸部に入っていたこの頃 大和王権の本拠となる河内・大和の大和川流域の大泉・忍海脇田・布留そして淀川流域の中流交野・森などに大規模な鉄鍛冶工房の集落が出現し、猪名川流域の河口湿地帯 現在の尼崎市若王寺にもそんな鉄鍛冶工房の村が出現し、実用鉄器供給の役割を果たした。

鉄鍛冶ばかりでなく、土器・埴輪作り 玉作りなど当時の先端技術の専用工房が出現し、畿内や日本各地に広がってゆく。「鉄の6世紀」と呼ばれる時代の到来はそんな鍛冶集団の存在によって鉄の大量自給が始まり、そして、鍛冶などの先端技術集団を支配下に置いた大和王権が日本統一を果たして行く。

でも、未だに、「国内での製鉄が何時から どのような技術で始まったのか」良く判っていないが、大量の鉄素材の使用が始まる専用工房はそれを解く鍵を握っていると思っている。



畿内古墳時代の鍛冶工房遺跡（花田氏資料より）

今は海岸線がはるか南になり、尼崎市の北部の市街地になっているが、当時は大阪湾の海岸線に近い猪名川流域の河口にあたり、ここから猪名川流域の伊丹・川西に多くの集落や渡来集団が住んでいた。若王寺はその南端にあり、若王寺遺跡に隣接してこの地の豪族の墓で阪神間最大の前方後円墳 伊居太古墳や弥生から古墳時代松まで続く複合集落下坂部遺跡などがある。

現在 若王寺遺跡は関西電力技術総合研究所ならびに産業技術総合研究所関西センター(旧電子技術総合技術研究所)の建物の下になっている。

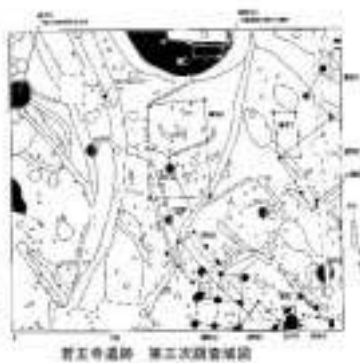
これらの建物の建設に合わせ過去に3回の発掘調査が行われたが、現在は敷地の際に「若王寺遺跡」の説明居太があるのみである。





# 1. 「古墳時代 畿内の先進鍛冶工房集落 若王寺遺跡」 概要

尼崎史誌・兵庫県埋蔵文化財センターの調査報告&現地説明史料などより



若王寺遺跡は弥生時代後期 3 世紀後半から古墳時代後期 6 世紀末まで継続する遺跡で第 1,2 回では遺跡の北側部分 3 回目では隣接する南部分が発掘調査された。

そして、掘立柱建物・土坑などの遺構や、土器、石製品の他、古墳時代後期の土器と一緒に鞆（ふいご）の羽口や鉄滓など製鉄に関する遺物も出土し、この遺跡に生活した人たちがこの辺りでは数少ない製鉄に関わりをもつ人たちであったことが明らかになった。

また、第 3 回目の調査では 6 世紀半ば古墳時代後期の鉄の村が出土し、掘立柱建物 18 棟 井戸 7 基 埋没古墳 1 基と多数の溝と土坑などが出現。第 1,2 回の調査結果と合わせ、若王寺遺跡の集落全貌がほぼ明らかになった。

この若王寺遺跡は古墳時代初頭から古墳時代末期にかけて営まれた集落で竪穴式住居が 1 つもない掘立柱建物の集落というきわめて特徴的をもっている。そして 出現した村では焦土面が広がり、鉄分が散らばり、多数の溝が集落の中を走り、幾つかの井戸も見つかっている。はっきりしてはいないが、溝で囲まれた区画が一つの単位とする鍛冶工房が広がり、残念ながら 炉の跡はまだ見つからないが、溝の中などから 羽口や土器と共に多数の鉄滓や見ついている。

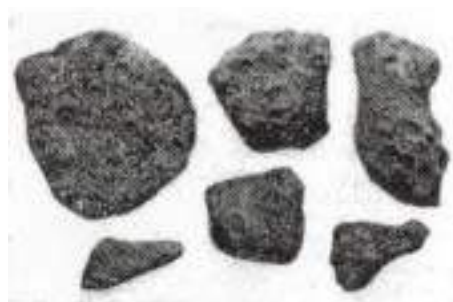
表 4 若王寺遺跡出土鉄滓の分析結果

成分	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	MnO
試料 1	54.10	1.47	48.12	21.78	17.48	4.61	1.10	0.90	0.18
試料 2	37.65	0.98	26.62	22.42	27.80	4.41	1.21	3.27	0.12

成分	TiO <sub>2</sub>	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	Ni	Cr	Cu	P	S	灼熱減量
試料 1	0.36	tr	tr	0.008	0.018	0.145	0.021	—
試料 2	0.44	tr	tr	0.015	0.050	0.230	0.028	5.86

(注) ① 重量パーセント。  
 ② T, Fe=全鉄分 M, Fe=全鉄分 %  
 ③ 資料は日本製鉄株式会社技術研究所。



若王寺遺跡の溝の中から出土した鉄滓例と出土鉄滓の分析例

炉が出土していないことや鉄滓の詳細な調査結果がないので、この村で製鉄が行われていたかどうかは良くわからないが、他所で製錬された鉄塊がここで不純物を除去する「鍛冶の村」であったと考えられる。

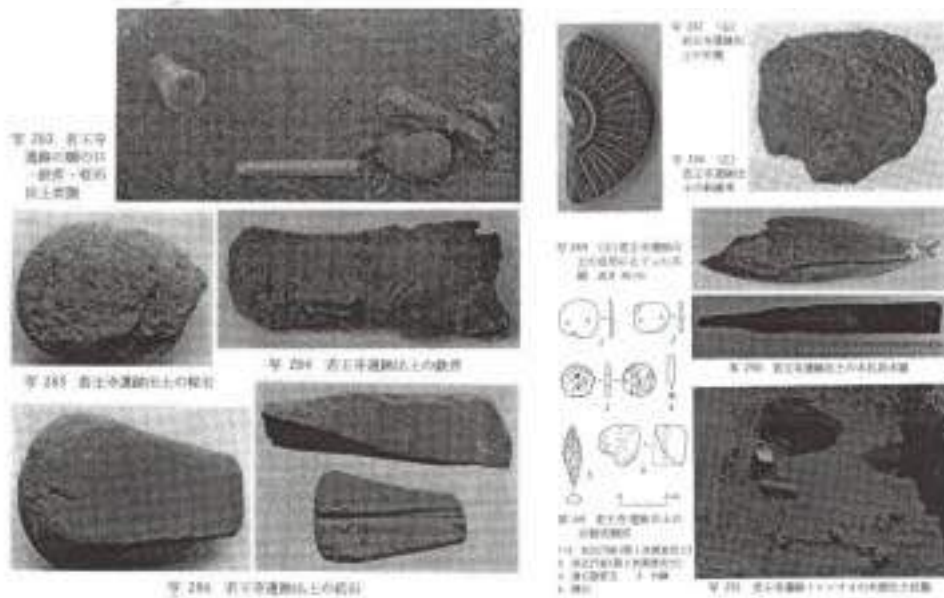
また、出土した多数の土器の中には数多くの韓式の土器が多数含まれていたことと合わせて考えると、渡来の技術工人が多数暮らす先端の鍛冶集団の村と考えられる。

双孔円板や紡錘車が玉砥石と呼ばれる碧玉や滑石などを加工する砥石と共に出土し、鉄だけでなく石製品の加工や製塩なども行われていた。



写 243 若王寺遺跡出土の穢の口

写 244 若王寺遺跡出土の鉄滓



古墳時代 畿内の先進鍛冶工房 若王寺遺跡の出土品



【参考資料】

1. 尼崎史誌 11 巻 「若王寺遺跡」
2. 兵庫県埋蔵文化財センター調査報告「若王寺遺跡」
3. 兵庫県埋蔵文化財センター「若王寺遺跡」現地説明資料



## 2. 古墳時代 畿内の先進鍛冶工房集落 若王寺遺跡 Walk 2005.6.8.



猪名川の分流 藻川 園田橋周辺



6月8日午後 若王寺遺跡周辺を歩こうと阪急塚口駅に下りる。

「若王寺」と書いて「なこうじ」と読む。古い古い集落である。目的の若王寺遺跡は旧の電総研の建物が建っている場所で阪急塚口駅より南東へ2kmほどのところ。地理的には良く知った場所であるが、もう何十年も足を踏み入れたことなし。

「若王寺」の集落のあたりは今どうなっているのだろうか??? 久しぶりの尼崎である。

塚口駅の東 阪急の線路の南側に上坂部・若王寺の集落が続く。今は「近松の里」上坂部の集落の近松門左衛門の墓がある広済寺や若王寺遺跡と同時期の5世紀頃 この地を収めた豪族前方後円墳の伊居太古墳を通過して東へいけば直ぐに若王寺遺跡である。



若王寺遺跡周辺地図

さらに東へ藻川の土手まで行って 引き換えして下坂部弥生集落遺跡を探して区画整理による市街化で今一番尼崎で変化した潮江から JR 尼崎へ。

塚口駅から東の尼崎と伊丹・川西を南北に結ぶ産業道路にでて、福知山線を渡って 森永製菓の工場の前に出て、南東へ上坂部の集落・近松門左衛門の広済寺を抜けて行けば 若王寺の電総研のあたり。南側に東西に走る名神高速道路の手前なので間違うことはない。

高校時代良く行った界限 半分昔を思い出しながらのWalkである。

塚口駅から20分ほどで産業道路・福知山線を渡って森永前から南へ上坂部の集落をぬけると近松公園の森。良く整備された公園の南端に近松門左衛門の像と広済寺。

もつとせせこましい集落の中にお寺があったと思いましたが・・・。



近松の里 近松公園と近松門左衛門像 2005.6.8.



広濟寺と近松門左衛門の墓

近松は尼崎」と小さい時から聞いて育ちましたが、尼崎のほかにも近松祭がある街がある。  
7年間程赴任した山口県美祢の隣町 日本海に面した美しい海岸の「長門市」もまた、近松の街。  
近松門左衛門生誕の地で毎年近松の祭が街を挙げて行われていること関西で知っている人は少ない。

近松の里へ足を踏み入れた時には、お寺から木魚の音が響き、広濟寺の本堂には、ぎっしりと人が詰まって、  
ちょうど例月の祈祷会。また、近松公園の木々の間では大勢の年寄りが将棋晩を取り囲んで午後を楽しんで  
いました。

最近の集落の公園という人影がないか、人が下があっても ぽつんと老人が手持ち無沙汰に座っているイ  
メージですが、ここ近松の里では寺の木魚の音が響き、多くの人影と会話が交わされていて 小さな寺と共  
に集落が生きていると感じました。近松の里が今も生き生きしているのがうれしい。

近松公園を抜けて 300 メートル程西の神社の森が伊居太古墳の上にある伊居太神社。全長約 93m の阪神間最  
大の前方後円墳の上に神社があるわけであるが、周囲を家並みに囲まれて、まったく古墳の形が見えなくな  
っている。また、社殿建築のため、古墳そのものの原形も失われているが、5 世紀頃 この地を収めた豪族  
の墓と見られ、隣接する鉄鍛冶工房 若王寺遺跡や弥生時代から続く集落 下坂部遺跡などを支配していた  
とも見られる。 埴輪片・土師器片・須恵器片や鏡・鉄剣が出土したと言われるが、詳細は良く判らない。



5 世紀頃この地を治めた豪族の墓 伊居太古墳(前方後円墳)の上に建つ伊居太神社



池田市にも高麗の織姫穴織媛を祭る伊居太神社があり、この伊居太神社から遷座したととの説がある。隣接する鉄鍛冶工房若王寺遺跡には数多くの朝鮮半島からの渡来人の系譜があり、これらを考え合わせるとこの地を治めた豪族も渡来系であったかも知れない。

伊居太神社前から住宅街を東へ 300m ほど行くと道の北側に茶色の高い建物のある英知大学 南側にコンクリートと網で出来た塀に囲まれた一角が見え、その塀に「若王寺遺跡」の説明版が貼り付けられている。



「若王寺遺跡」現 関西電力総合技術研究所の西北の端 2005.6.8.  
 「若王寺遺跡」の説明版が塀に埋め込まれている

塀に沿って東へ歩きながら、塀の中を覗き込むが、平地の広場とその向こうに研究所の建物が並んでいるだけで、予想はしていましたが、全く遺跡の痕跡はなし。この東半分には大きな鉄塔を上に乗せた関電総合研究所本館ビルがあり、その前庭にも「若王寺遺跡」の説明板が整備されている。



関電総合技術研究所本館前の「若王寺遺跡」の説明板 【1】 2005.6.8.



関電総合技術研究所本館前の「若王寺遺跡」の説明板 【2】 2005.6.8.

説明板の図面からすると この関電総研のある1ブロック 南半分が電総研の敷地で ちょうどその境あたりブロックの中心が「若王寺遺跡」発掘調査地の様である。今は完全に会社の敷地内で建物が建っており、遺跡自体は破壊されていると見える。

汚れた説明板がここが5世紀頃の鉄鍛冶工場の跡で掘建柱の工房や高床の倉庫跡や井戸跡などと共に羽口や鉄滓などの鉄関係遺物や土師器・須恵器や鏡・剣が出土したことが説明されている。

でも この遺跡が畿内のほかの鍛冶工場と共に大和王権が日本統一して行く黎明の過程で鉄の供給基地としての重要な役割を担ったことまたその任の技術集団として朝鮮半島からの渡来人が多数いたことなど「日本誕生に関わる先進製鉄遺跡」「鉄の街 尼崎」のマニユメント遺跡であることなどについては触れられていない。(もっとも そんな 明確な証拠があるわけではないが・・・)

ちょっとさびしい感じがする。



東側中央部 関電総研と電総研の境付近



南側 電総研(現産業技術総合研究所関西センタ)



南側の現産業技術総合研究所関西センタ側からの「若王寺遺跡」の現況 2005.6.8.

以前 福島県の東電原町の発電所へ行った時に工場内に製鉄遺跡が部分保存され、発掘調査結果が郷土の遺跡として立派な冊子にまとめられているのを思い出して、本館の受付へ行ってゆく。

「若王寺遺跡」について教えを請いましたが、総務の方がわざわざ出てきて 丁寧に対応していただきましたが、関電サイドには全く調査記録もなにもないとの事でした。電総研でも同じでした。

「若王寺遺跡・日本を作った古墳時代の先進鍛冶工場遺跡の一つ」への私の思い入れが強いのか、ちょっとさびしい限り。せめて 関電総研の前の案内板には 古びて見えかかった記述から 時代背景・遺跡の役割の記述も含め、きれいに整備してほしいもの。

「若王寺遺跡」のあった関電総研・電総研の敷地をぐるりと一周してから、遺跡の東北を流れる猪名川の分流 藻川の土手へ。





若王寺遺跡の北東 藻川 園田橋周辺 左 北西側 右 南東側

遺跡から 500 メートルほどなのですが、小中島の地名が残る。山陽新幹線をくぐり 15 分ほどで藻川の園田橋。北東の川筋の向こうには遠く六甲の山並みが見える。

何処を向いても家並みが続き、このあたりが、昔 大阪湾の海岸線の島が点在する低湿地帯とは想像がつかないが、川に沿って山陽新幹線 北には阪急 南には名神高速道路が走り、今も西国と大阪・京都を結ぶ交通の結節点。

古代には大陸や朝鮮半島の先進文化や人たちが海を渡ってこの地を通って畿内へ入ってきた。大阪湾奥のそんな要衝の地。

猪名川河口の低湿地帯には下坂部など漁労と農作で暮らす数々の集落群が広がり、多くの渡来人も渡り住み、伊居太古墳に埋葬された豪族が支配する先進の土地。



たたら製鉄黎明の技術痕跡を見ることは出来ませんでした。古墳時代 鉄器を大量に供給して日本誕生に大きな役割を演じた畿内の先進鍛冶工房群。

今はもう住宅街の中に埋没してしまっているが、そんな要衝にあった古代の先進鍛冶工房遺跡 日本の製鉄技術・文化に新風を吹き込んだに違いない。



弥生後期から古墳時代松まで続いた猪名川最南の集落 下坂部遺跡 2005.6.8.

藻川の岸から南へ小中島の集落を抜け、次屋・下坂部の集落から潮江を通過して JR 尼崎へ 昔の記憶を頼りに歩くのですが、区画整理が進み、大きな道が出来てまったく道筋がつかめない。集落の中に入ると知った建物もあり、昔のことが次々と記憶の中に浮かび上がってくるのですが、スポット的で まったくの浦島太郎。JR 尼崎駅北潮江のビル群の新しい街は知っていましたが、その北の尼崎北部も大きく変貌。

まあ ふるさとの街を歩くのは新しい発見の驚きとさびしさの半分づつでした。

2005.6.8.

Mutsu Nakanishi

江戸時代 広島藩を支えた鉄の道「芸北加計のたたら」  
 「加計 隅屋鉄山絵巻」と加計・豊平町周辺の製鉄遺跡を訪ねて  
 2005.6.20.



1. 広島の成り立ちに影響を与えた芸北のたたら
2. 家計町の町並み walk 街ぐるみ博物館
3. 「加計隅屋鉄山絵巻」に描かれた鉄の道と加計隅屋鉄山
4. 豊平町 中世の製鉄遺跡群を訪ねて
5. まとめ 芸北加計周辺の製鉄遺跡を訪ねて

広島湾に注ぐ太田川の上流五十キロ中国山地の中に「加計」という町がある。

広島より遡って来た太田川が狭い中国山地の山間を流れ、中国自動車道がその横を通り抜ける。紅葉で有名な三段峡がある芸北の中心地である。太田川に沿って加計を通って三段峡まで、可部線が通じていたが、今は廃止になっている。

江戸時代 繁栄を極めた芸北の「たたら製鉄の中心地」で、加計まで太田川の水運が開け、石見と芸州を結ぶ中継地として「鉄」を中心にその繁栄を支えたという。

そんな江戸時代の「加計のたたら」の様子を詳細に描いた絵巻が鉄山経営の中心であった加計町の加計家(隅屋鉄山)に残っている。江戸時代のたたら製鉄の工程や活動を生き生きと伝える貴重な資料である。

「たたら製鉄」について調べている中で、何度か断片的ではあるが、その絵巻の絵図に出会っている。

芸北は出雲・石見と並ぶ中国山地の大砂鉄地帯にあり、たたら製鉄の大生産地。古代のたたら製鉄との関係も調べてみたい。機会があれば一度は足を運びたい街のひとつが「加計」でした。

また、そんな中国山地のたたら製鉄について調べていて、広島の街が、この太田川を通じて、この「芸北のたたら」と密接に関係して出来上がった町であること知ってなおビックリでした。

6月20日 山口 美祢から神戸への帰り道 久しぶりに奥出雲 鉄のミュージアム 吉田村を訪ねるつもりで、中国道を走っていて、約1.5時間 吉和ICを過ぎて、「戸河内・加計IC」の標識を見て、切手にもなった「加計隅屋鉄山絵巻」を思い出して、そのままインターを出て加計の街へ行ってきました。



中国山地 加計・豊平町の位置





加計町の町並み(上)と街の中心にある江戸期鉄山経営の中心加計家(下)

思いつきで出かけてどうなるかと思いましたが、中国山地の山中深く 芸州と石見をつなぐ古い街道・海運の集散地 往時繁栄の面影を残す加形の街をゆっくり歩くと共に、加計や豊平町の役場・教育委員会・図書館などの人に色々世話になって、豊平町の「中世のたたら製鉄遺跡群」や「加計家 隅屋鉄山絵巻」の全体内容(模写パネル 加計町歴史民俗資料館で)を見ることが出来、素晴らしい一日でした。



豊平町 中世の製鉄遺跡群 坤東製鉄遺跡

## 1. 広島への成り立ちに影響を与えた芸北のたたら

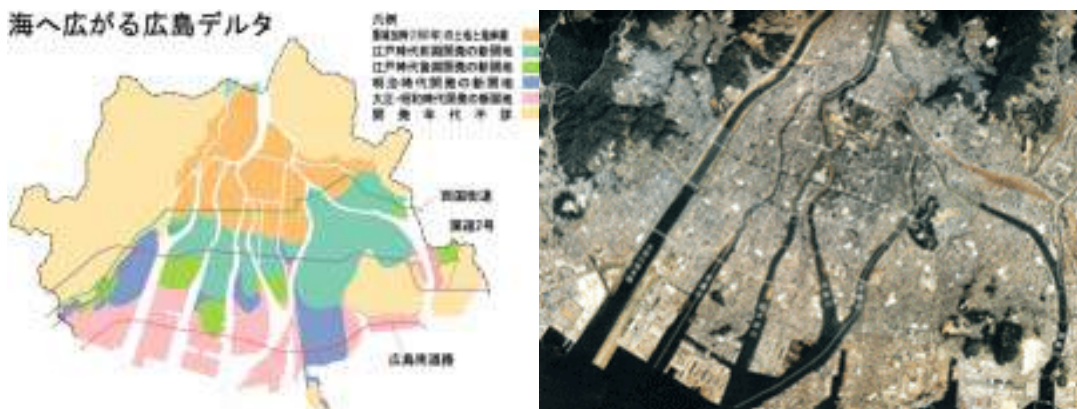


太田川の河口のデルタに発達した街 広島。

現在の広島の市街地のほとんどは江戸時代になって開拓された場所という。

江戸期まで、広島の海岸線は現在の新幹線の広島駅と国道二号線の間あたりであつたという。

太田川の運ぶ大量の土砂と度重なる氾濫がどんどん海岸線を埋め立て今の市街地を形成していったという。



海に広がる太田川の河口 広島デルタ

その最大の原因は太田川の上流の中国山地にある大量の砂鉄を使った「たたら」製鉄だったという。  
 江戸時代 この太田川上流の可部・加計などの芸北地方は日本でも有数のたたら製鉄による鉄の供給基地。  
 太田川を使った海運の発達でこの鉄供給を独占した広島藩は潤ったという。  
 ところが、たたら製鉄では材木の大量伐採による山の荒れに加えて、砂鉄採取のため、山の切り崩しと鉄穴流しによって、大量の土砂を川に流す。山砂に含まれる砂鉄の量は高々数パーセントであり、川に流される土砂も半端でなく、太田川の下流域の広島は度重なる太田川の氾濫に悩まされ続ける。  
 広島藩は太田川流域の砂鉄採取・鉄穴流しを禁止する一方 太田川河口の治水・干拓開発に努め、現代の市街地が形成されていったという。



加計隔屋鉄山絵巻より 材木伐採



先大津阿川村砂鉄採取乃図より 鉄穴流し



山砂切り崩し



鉄穴流し

また、この鉄を独占した広島藩では、「縫い針」生産の地場産業が興り、現在もこの縫い針生産全国シェア100%という。

このようなたたら製鉄による山・川・河口域の大きな自然変化は

斐伊川流域の出雲平野の形成

兵庫県千種川河口赤穂の遠浅海岸の形成との製塩業発達など

が良く知られている。

市街地が狭く、山が迫っている広島町の形成と発展には江戸時代の太田川のもたらした大量の土砂流入との戦いと治水や鉄を中心とした海運の産物といえる。



広島市の市街地形成が江戸期芸北のたたら製鉄の繁栄と太田川の水運と切っても切れない関係があるなどはじめて知りました。

## 2. 加計町の町並み walk

### なつかしさといやしの街 「街ぐるみ博物館 加計」



緑の山の中 戸河内・加計 IC を出て 加計の案内標識に従って西に向かう。すぐに太田川沿いに出て 10 分ほどで加計の街に出る。北から流れ込む滝山川の橋を渡ると加計の町並みに入る。川に沿って古い町並みが続いている。



全く準備なしに加計にやってきたので、まず加計駅と役場を探して町のアウトラインとたたき遺跡の概要を教えてください。

駅前には加計の町並みの案内図があり、太田川の川沿いの街道筋に古い町並みが続いていることが判る。

加計は昨年の秋周辺の町と合併して安芸太田町の一部。

滝山川が流れ込む 加計の町並みの入り口周辺 2005.6.20.

街中の加計支所で滝山川沿いにある教育委員会に電話してもらおうと「たたら遺跡」「加計隅屋鉄山絵巻」のことなどこちらへ来たら教えてあげると。もう一度 街を車で通り抜けて、教育委員会へ。

まっすぐな街道筋の両側に立ち並ぶ古い町並みの街灯の柱に「鍛冶」や「太田川の魚や川舟」などのモニュメントがかけられている。教育委員会で教えてもらって、もう一度街に戻る事にする。



「街ぐるみ博物館」を称する古い町並み 加計

2005.6.20.

加計の街の入り口滝山川との合流点から少し登ったところに大きな建物「川・森・文化・交流センター」があり、ここに加計町歴史民俗資料館・教育委員会・図書館も入っていて、町の総合文化センターとなっている。そして、歴史民俗資料館の廊下の壁にはあの「加計隅屋鉄山絵巻」2巻合わせて15メートルに及ぶ絵図がパネルにして掲げられ、全容が見られ、また 資料館の中で「加計のたたら」のビデオが見られた。



川・森・文化・交流センター

教育委員会で、若い学芸員の人達が地図を広げ、あちこち電話をかけたたりして、加計町のたたら遺跡の状況を調べてくれ、加計町のたたら遺跡のリストをコピーしてもらった。

加計隅屋鉄山絵巻に描かれる鉄山は加計の街中に今もある「加計家」が江戸期に加計周辺の戸河内・豊平・芸北町などで経営したもの。そして、今も加計家で絵巻は所蔵されているという。

加計の町ははその加計家の本拠地で太田川の水運を使って必要な物資を諸国から集めるとともに製造された鉄を広島に送る集積地。

したがって、加計の街に鉄山師「隅屋」の屋敷があるものの街に隣接して「たたら遺跡」はない。



加計の街の中心にあるかつての鉄山師 加計家

周辺北の芸北・東の豊平・西の戸河内に隅屋が経営した鉄山を含め、200以上のたたら遺跡がある。詳細は現地に行かないと判らないと地図を持ち出して 幾つかのポイントにチェックしてもらった。また、図書館では加計町史を見せていただき、加計周辺のたたら遺跡 加計隅屋鉄山絵巻と隅屋鉄山についての項をコピーさせてもらう。

「古代にもたたら製鉄が行われたと思われるが、この周辺では豊平町の中世たたら遺跡群が一番古い」とのアドバイスを受けて、もう一度 町に帰って 町並みとかつての鉄山師「隅屋」の「加計」さんの家を訪ねてから、豊平町の中世のたたら遺跡を訪ねることにする。

隅屋鉄山絵巻は加計町史で知った隅屋鉄山の概要とあわせて、次項でまとめた。

街に戻ると 町の入り口に近いところに「鍛冶屋館」と染め抜いた暖簾をかけた町屋 その隣に今も鉄を鍛えている現役の「鍛冶屋」が「トツテンカン」と槌の音を響かせている。



加計周辺で使われた鍛冶道具を展示している鍛冶屋館とその隣の鍛冶屋



製品のほとんどは石見神楽に使う道具類が中心という。

そういわれると石見神楽のポスターが街のあちこちに貼ってあり、ここは芸州広島と石見を結ぶ街道の結節点。石見神楽の道具類を今も街道筋にあたる加計で作っている。

かつては石見で作られた大量の原料砂鉄や小鉄が石見から運びこまれ、鉄素材が作られた。そして、この「鉄の道」が多くの物資を運び、人・文化の交流を担った。

この街でたたら製鉄が廃れた今も、その「鉄の道」が連綿とつながり、この加計と石見が結びついているのを知ってビックリです。

町並みのほぼ中心のところ街道に面して加計さんの大きな屋敷がありました。

かつてはこの「鉄山師 隅屋」の屋敷を中心にこの街道筋では往来する人でごった返したに違いない。

「隅屋鉄山絵巻」に描かれた街道筋の賑わいが目に浮かぶ。



まっすぐな街道筋の両側に立ち並ぶ加計の古い家並み 右端 JR 可部線 「加計駅」



街中にあるかつて隅屋鉄山を経営した加計さんの屋敷周辺 2005.6.20.

### 3. 加計 隅屋鉄山と隅屋鉄山絵巻



江戸時代 220 年にわたり芸北の中国山地加計で繁栄を極めた隅屋鉄山のたたら絵巻「隅屋鉄山絵巻」



芸北の中国山地 加計周辺では 南へ流れ下る大田川 北への江の川に大量の砂鉄があり、中世から近世初頭にかけて、たたら製鉄が盛んに行われ、江戸時代には西中国最大規模の製鉄場があった。

(但し、江戸時代には川が荒れるため、広島藩が大田川流域の砂鉄採取が禁じられたため、砂鉄は石見の国から運ばれた) 加計村の隅屋が営む鉄山が最大の規模。加計周辺で次々と鉄山を移動させながら 近世初期の寛永 19 年 (1642)から嘉永 6 年(1853)藩営に鉄山が移るまで約 220 年繁栄を極めた。



隅屋では 江戸時代を通じて二百年間 二十五カ所の「たたら」を経営  
(加計町 町史 民俗編より)

そんな 隅屋経営鉄山の当時の製鉄作業工程や活動が上下 2 巻(上巻 たたらの巻 6.4 メートル 下巻 鍛冶・勘場の巻 8.5 メートル)に細かく描かれ、隅屋鉄山を経営した加計家に伝わっている。原本を見ることはできなかったが、訪れた加計町 歴史民俗資料館の廊下の壁面を使って長さ 15 メートル全巻の絵図がパネル展示され、図書館所蔵の「加計町町史」にはこの絵図の詳細な解説が記述されていた。

上巻 たたらの巻には製鉄(精錬)工程である「たたら」を中心とした施設とその活動)が下記のような 5 つの連続絵図で描かれている

1. 大炭原木切り出しと運搬
2. 炭焼窯と大炭運搬
3. たたら内部と銑生産
4. たたら全景とケラだし
5. たたら諸道具とたたら歌



下巻 鍛冶・勘場の巻きには鍛冶工程(大鍛冶)や勘場への原料搬入と鉄素材の搬出が描かれている

1. 山内勘場(元小屋)とその活動  
(鉄山職人の飯料・鉄原料の搬入と鉄蔵への鉄の搬出)
2. 大鍛冶に用いる小炭の生産  
(原木伐採・炭焼・俵積み・小炭小屋)
3. 大鍛冶場の鍛錬を中心とした活動  
(大鍛冶場(中央が本場 左右が左下場))
4. 大鍛冶場 小炭焼の諸道具



江戸時代のたたら製鉄の各工程と職人たちの活動が生き生きと描かれており、加計周辺で営まれた鉄山の全貌が良く判る。この絵図で私が興味を持った場面は次のとおりである。



## 隅屋鉄山絵巻に見るたたら製鉄

### a. たたら製鉄用の大炭窯と鍛冶用の小炭焼き

#### 【 大 炭 窯 】



上巻部分 大炭窯

豊平町坤束製鉄遺跡に復元された大炭窯

上記絵図に描かれている二つの建物の右側がたたら製鉄に使われる「大炭」を焼く大炭窯。

大炭窯は幅約1丈奥行1.5丈程度で周囲を石垣で作り、祖目を少し掘り、笹を敷き、木材を並べその上に5.5尺ほどに切りそろえた大炭木を立てて並べて上に土を置いて天上を造り、4,5日焼く。

出来上がった大炭は半焼けの状態では形も不ぞろいになるが、たたら製鉄の炭としてはこれがかせない。

(加計町史 隅屋鉄山絵巻の記述より)

#### 【 小 炭 焼 き 】



下巻部分 小炭焼き

鍛冶用に使う小炭焼きは窯を用いず、露天で雑木を積んで火をつける。全体に火が回ったところで濡れむしるで覆って焼成する。(加計町史 隅屋鉄山絵巻の記述より)

このように たたら製鉄に使う大炭は半生でたたら炉の中で長く形を保持し、かつ還元雰囲気形成を支援する。一方 鍛冶用の小炭は直ぐ火力が高まるように焼きしめられる。

たたら製鉄では炭が大事と言われてきましたが、その作業の様子が生き生き描かれています。

### b. 高殿でのたたら製鉄作業



上巻部分 たたら製鉄の  
主要な工程

鉄押し工程 (右)

ケラ出し工程 (左)

たたら製鉄の主要な工程 銑押し工程(右)とケラ出し工程(左)がダイナミックに描かれている。主工程である銑押しでは4昼夜連続の作業で炉の湯口から炭素含有量の高い銑鉄が流れ出て湯溜りにたまる。得られた銑鉄は大鍛冶の工程で脱炭・鍛錬され、鉄素材である左下鉄・包丁鉄に仕上げられる。この絵図左奥には金屋子神が祭られ 左右の天秤鞆には番子が乗って 休みなく風を送っている。また たたら炉の左前にいる村下が小金を炉に投入しているのが見える。一代の銑押し作業が終わると炉を壊し、底に残ったケラ出しの作業が描かれている。(右)ケラ塊が引き出され、鉄池に投げ入れて急冷・分割が行われる。このケラ塊には炭素含有量の少ない鋼部分ケラが銑鉄とともにあり、細かく分割してケラを取り出し、鉄素材となる。また ケラ塊の周りには飛び散ったケラ片や銑鉄を拾い集める子供らが描かれている。

(加計町史 隅屋鉄山絵巻の記述より)

### c. 勘場



下巻部分 鉄山の事務所 勘場

勘場は鉄山の事務所で中心的存在で その機能と活動が生き生きと描かれている。山内に入って来るたたら製鉄の原料 砂鉄・炭 生活物資 そして山内から出てゆく鉄素材の搬出の風景が描かれている。勘場の奥座敷に隅屋から派遣された手代が座り、駄賃などを計算している。またその右の内庭では米の計量や大鍛冶で作られた鉄素材の搬出の準備をしている。また 道を挟んで反対側では石見から運ばれてきた砂鉄・子鉄の収納 その前には搬出入の馬や人たちが数多く見られ、忙しい勘場の風景が描かれている。(加計町史 隅屋鉄山絵巻の記述より)

### d. 大鍛冶



下巻 部分 細長い板葺小屋の大鍛冶工場

大鍛冶工場は4区に分かれ、中央の2区が本場 左右両端が左下場となっている。そのそれぞれに鞆を備え 小炭を焚いて鉄を熱する火窟がある。たたらから送られてきた銑鉄塊は左下場の火窟に入れられ、熔融脱炭され、左下鉄が作られる。それが本場に送られ、一割ほどのケラを加えて、火窟に入れ、熔融鍛錬のくりかえしによる精錬が行われ、卸し鉄・包丁鉄の鉄素材が作られる。左端の左下場では鞆を動かし、銑鉄塊を熔融脱炭。右端では出来た左下鉄を掻き出している。中央本場の左区画では卸し鉄を鍛錬していおり、右区画の手前では作業の終わった卸し鉄を整形している。



そのほか休憩中の人達やお茶を運ぶ女房たちなども描かれ、大鍛冶の実態が良くみてとれる。

(加計町史 隅屋鉄山絵巻の記述より)

断片しか知らなかった加計隅屋鉄山絵巻がこんなに詳細にしかもダイナミックに江戸時代の鉄山の様子が描かれている。

山口県の「白洲たたら」の様子を詳細を描いた「先大津阿川村砂鉄採取之図」にもビックリしましたが、多くのたたら製鉄に関わる職人が数多く、しかもダイナミックに作業している手元がえがかれているのにはビックリしました。

「たたら場での作業とその周辺 大炭と小炭の製造プロセスの実態 大鍛冶の具体的な連続プロセス 勘場の生き生きとした様子など」断片的だった諸作業のアクションを具体的に眼にして、鉄山の様子が頭の中で連続的なつながりで頭に入りました。

この絵巻物そのものが「鉄の道」 ふっとそんな思いが頭をよぎっています。

#### 4. 豊平町中世の製鉄遺跡群を訪ねて



加計の街を歩いた後 加計の教育委員会で教えてもらった豊平町の中世製鉄遺跡群を見に行く。

加計の町から北東の方向 太田川に流れ込む丁川を遡る。

豊平町にはこのあたりでは一番古い中世の製鉄遺跡群があるというが、詳細はわからないので、また 豊平町の教育委員会へ飛び込んで、教えてもらう予定。

加計の街を通り抜けると直ぐに太田川に流れ込む丁川。この丁川に沿って北へ谷筋を遡って行く。

この「丁川」の谷には加計周辺の川と同様 古代から多くの砂鉄を産したという。



加計から豊平への丁川沿いの道で 2005.6.20.

豊平町へは山越え道。20分ほどで山の南斜面高くまで段々状に広がる集落越えに差し掛かる。前をゆくダンプがジグザグ道を超えて行く。

ジグザクの段々道には石組みが生まれ、棚田が集落の間に広がっていた。



峠を越えて豊平町に入って

後で知ったのですが、この棚だの石組みはたたら製鉄の鉄山建築法の名残だといい、この加計周辺で数多くの鉄山が営まれたことをうかがい知れる。

ジグザクの道を登りきるとなだらかな高原が広がり、豊平町に入ってゆるやかな道を下ると豊平町役場のある戸谷の集落に入る。

(正式には合併で北広島町豊平支所)

町役場の人に電話をかけて貰って、たたら遺跡に詳しい教育委員の人のところで、豊平町のたたら遺跡について教えてもらう。



「行くのなら復元保存されている

坤束製鉄遺跡がいい」と遺跡の位置を教えてもらい、豊平の中世製鉄遺跡群をまとめたパンフ「豊平町中世製鉄遺跡 鉄のふるさと公園」をもらう。

ここにはたたら遺跡の出土品なども展示する民俗資料館があるのですが、残念ながら休館で入れず。また、加計でもそうでしたが、「たたら遺跡はゴロゴロあっちにもこっちにもあるのですが、行つても良く判らないでしょう。石ころが落ちているだけでさあ いけるかなあ・・・土地の人に聞いたら 行けんことないが・・・」

といわれたが、加計でも豊平でも本当に丁寧に色々教えてもらいました。



豊平町役場 現北広島町豊平支所

豊平町には古代から江戸時代にかけて200箇所を超える製鉄遺跡が確認されており、そのうち5つの遺跡が発掘調査がされ、12・13世紀中世の製鉄遺跡群として、そのいくつかが復元保存されているという。

鎌倉時代このあたりには多くの厳島神社の荘園が存在。この豊平町の西宗・中原あたりに当時三角野村と呼ばれた荘園があり、この三角野村は年貢として鉄を収めていた事が「厳島文書」に記されており、その収めていた鉄の量が多いことがわかっている。

このことから、中世の初めすでにこの豊平町周辺は中国地方有数のたたら製鉄の大生産地であった。

(資料「豊平町中世製鉄遺跡 鉄のふるさと公園」より)

下記に「加計町史」より、発掘調査された5つの中世製鉄遺跡群の概要を示す。

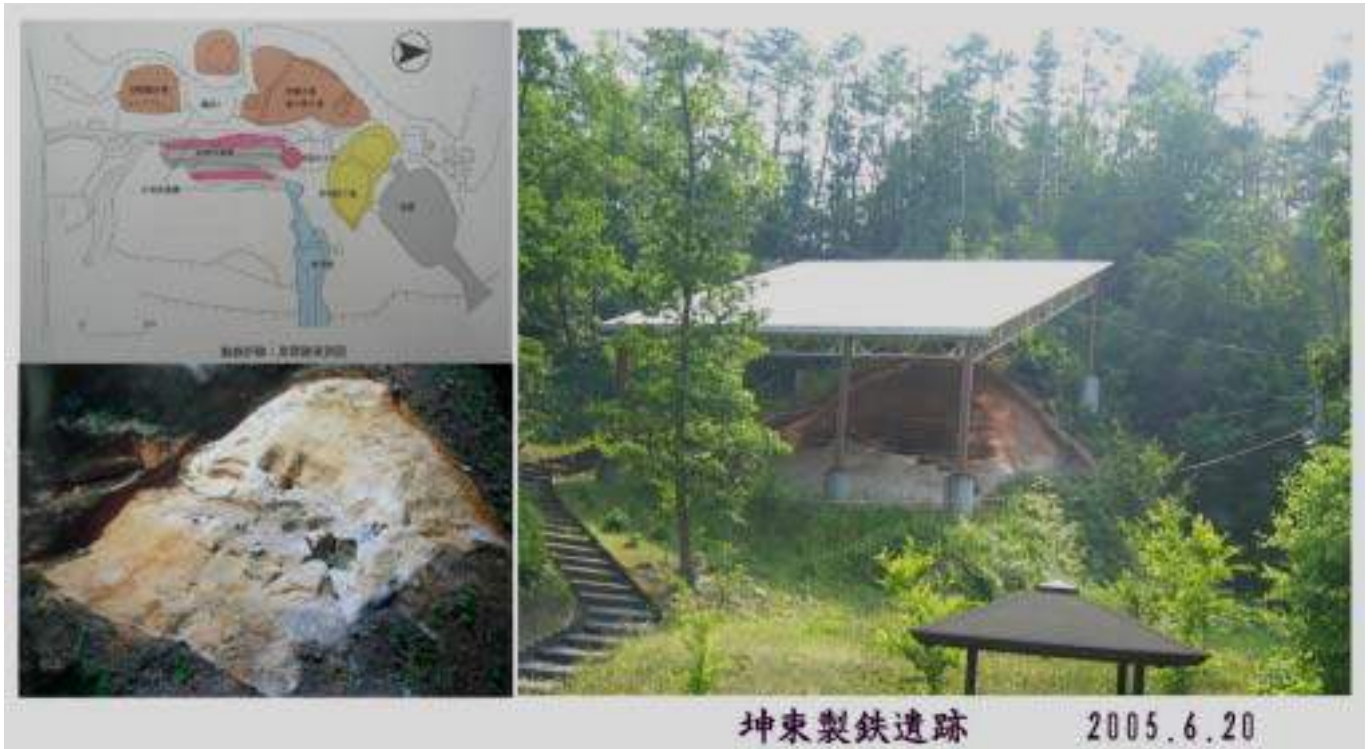
遺跡名	時期	製鉄炉型	炉の規模	炉下構造	その他の遺跡・出土物
古木 文久製鉄遺跡	12~13世紀	長方形箱型炉	長さ 約 2m 幅 約 1m	長さ 約 3.4m 幅 約 1.2m 高さ 約 50cm	鍛冶伊土器
今言部 長井製鉄遺跡	12~14世紀	長方形箱型炉	2m × 1m × 1m	4.0m × 3.0m × 1.0m	鍛冶伊土器、炭灰、砂鉄、鉄滓など
岡 瓶 坤束製鉄遺跡	12~14世紀	長方形箱型炉	2m × 1m	4m × 4.0m × 35cm	輪造、鍛冶伊土器、炭灰、木炭、煉瓦片、刀子、鉄滓、和魂鉄
今言部 榎+屋製鉄遺跡	13~14世紀	長方形箱型炉	2.6m × 1.1m × 85cm	4.6m × 1.1m × 45cm	輪造、鍛冶伊土器、砂鉄、鉄滓、木炭など
岡 城 元永製鉄遺跡	14~15世紀	長方形箱型炉	2m × 1m	4.6m × 8.5m × 70cm	

出典：「今言部町外遺跡発掘調査報告書」(1995年豊平町教育委員会発行)、「坤束製鉄遺跡」(1997年豊平町教育委員会発行)、「岡+屋製鉄遺跡発掘調査報告書」(1997年12月)広島県歴史文化財調査センター発行。



教えてもらった中世の製鉄遺跡群の中から、坤束製鉄遺跡・矢栗製鉄遺跡の2つを見学できました。

### 坤束製鉄遺跡



役場から15分ほどで、教えてもらった「道の駅 どんぐり村」。

町の中央に聳えるシンボル龍頭山が北正面に見える丘陵地で、丘の上に道の駅 民俗資料館 体育館・運動場・コートなど 豊平町の総合公園になっていて、たたら遺跡の出土品なども展示する民俗資料館があるのですが、残念ながら休館で入れず。

この丘上の公園を抜けて南に下ったひっそりとした谷筋の山肌に坤束製鉄遺跡が復元され「鉄のふるさと公園」として整備されていました。

この坤束製鉄遺跡では 山肌の平坦部に13~14世紀の製鉄炉・鞴・炭窯・炉壁捨て場 排滓場などの一連の製鉄場全体が出土し、発掘調査後 全体に屋根がかけられ、炉や鞴・炭窯を復元展示し、たたら場でたたら場の構造・使われた原料など一連の作業が理解できるように展示されている。

こんなたたら遺跡の展示法があるのだとうれしくなる。



坤束製鉄遺跡 全景

2005.6.20.

## たたら遺跡の展示というと

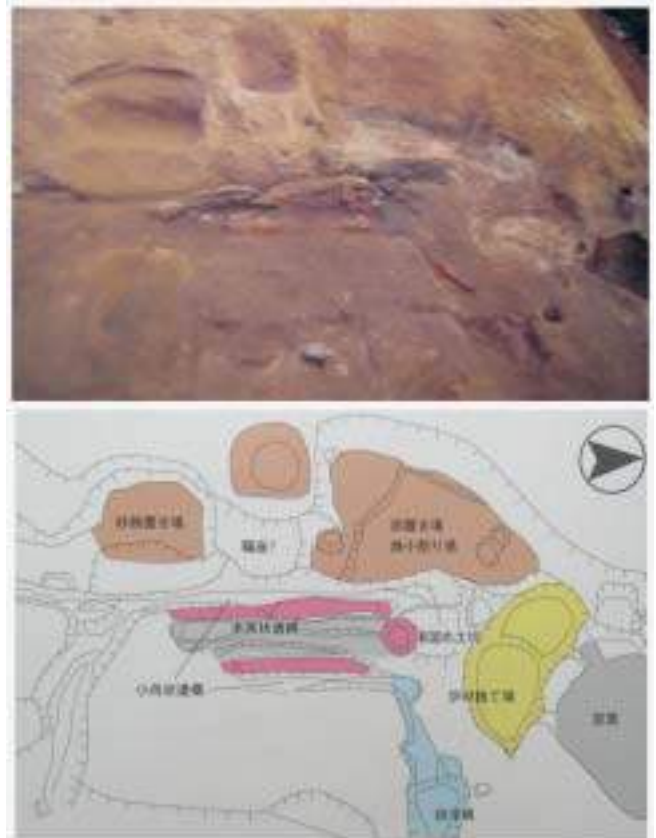
発掘調査後 簡単な資料つくって、遺跡は完全に破壊され、たたら遺跡の痕跡も残っていないか、たたら遺跡を埋め戻して簡単なごく一部だけ模型的に復元するか、

現地に立派なたたら館を建て、遺跡そのものは草ぼうぼう 古い説明板が立っているのみ  
こんな図式が多いのですが この坤束製鉄遺跡では、説明案内を最小限傍らの案内板にとどめ、そこにあつた現物と作その構造・作業が自分で膨らませるように遺跡が復元展示されている。  
詳しい説明はパンフレットに収められている。 こんなたたら遺跡の展示があつたと・・・・・・・・・・  
本当にさりげない何の変哲もない展示なのですが、自分の興味に合わせ、状況がずっと頭にはいる。

右端の階段を上ってゆくと たたら炉下の傾斜地が排滓場で鉄滓があたり一面に散らばっている。その上の傾斜部を掘り込んで たたら炉と炭窯が建設されている。



排滓捨て場



発掘調査時の状況

製鉄炉は 2mX1m の箱型炉で 2本の土堤で作られた本床状遺構とその両側に溝(小舟状遺構)の地下構造遺構がそっくり出土。その両側に鞆座。

このたたら炉の直ぐ上 鞆座の左右に砂鉄置き場と炭置き場。立派な高殿が建設される前の時代 山肌の斜面部にこんな配置でたたら場が納まっていたのか 簡単な屋根がかけられていただろう。



復元されたたたら炉



復元された炭窯



それら遺構の半分を残して断面が判るようにたたら炉が復元展示されたたら炉の下部の構造までよく判る。また この製鉄炉に隣接して出土した炭窯も復元展示されている。 断面を切り取って 構造も復元されているので、たたら炉 炭窯の構造が本当によく判る。

また、「狭い山の斜面でどんな配置でたたら場があつたのか 」 これに答えてくれる遺跡はすくない。山の斜面や 発掘後の一部の炉跡のみを見ても中々イメージわかず、断片的な発掘時の写真や図面はよく見かけるのですが、遺跡の現地で全体がはつきりイメージできるのがうれしい。

草ぼうぼうのたたら遺跡やたたら遺跡そっちのけの立派なたたら館を見る機会が多い中 こんな保存展示もあるとうれしくなりました。

### 矢栗製鉄遺跡



坤束製鉄遺跡から道なりに少し南に行くと道の左手に矢栗製鉄遺跡の標識が見え、ひとけのない左の緑の丘陵地の谷間に小道が続いている。約500m ほど小道を進むと熊笹などブッシュで覆われた右手の丘陵の斜面に隣接して小さな池があり、その向こうに矢栗製鉄遺跡の案内板。



矢栗製鉄遺跡へりの入り口

案内板のところから、ブッシュに覆われて細い道が残っているが、全く地面は見え、丘陵地の斜面の下の平坦地の地形とその下の池の小川が製鉄遺跡の痕跡を残しているのみである。

ここからは 14 ~ 15 世紀頃の箱型炉が出土したというが、土器が出なかったので年代の詳細はわからない。



クマザザで覆われた矢栗製鉄遺跡 2005.6.20.

## 中世の安芸・石見のたたら製鉄が近世の永代たたら原形をつくった

村上恭道氏「倭人と鉄の考古学」によると 産鉄国として古代には登場しなかつた安芸・石見のたたらが中世になると一躍脚光を浴びる。

この豊平町のたたら製鉄をはじめ、安芸・石見のたたらが生産性のよい永代たたらの原型となったという。



## 中世の安芸・石見のたたら製鉄が近世の永代たたらの原形をつくった

中世のこの地域のたたら炉には近世永代たたら炉の原形といわれる防湿施設である地下構造として、製鉄炉直下の舟形の土擴の両脇にも一条の溝を有し、防湿性を高めている。この構造が近世たたらの地下構造「床釣り」の本床(大舟)と小舟に発展したと見られている。

また、このたたら炉ばかりでなく、この地域のたたら場には共通の現象がある。

たたら炉および砂鉄置き場 木炭置き場 鞆座 木炭窯 土土擴など製鉄諸関連施設の配置にほぼ同じ規則性があり、たたら場に設計図があったとみられている。

これらたたら炉・たたら場の原形がその後近世の効率のよい永代たたらを生み、大量生産の原形を作っていたと考えられる。

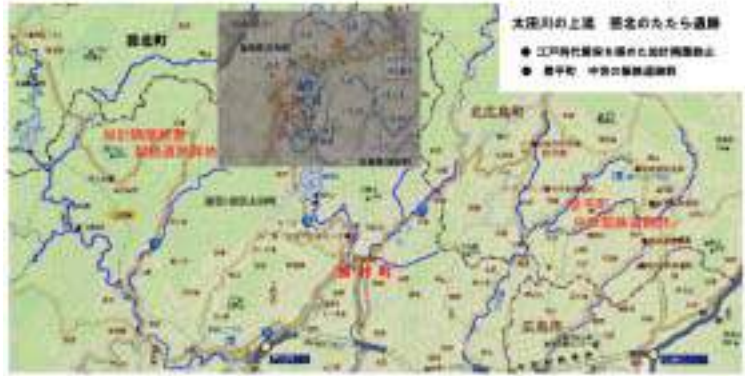
古代の庸調鉄・官営でなかつたこの地域の鉄が、需要の拡大と共にその生産性を高め、たたら炉・たたら場を統一改良して、均質・低コストの生産を可能として、商品価値を高め、益々商用鉄として畿内へ流れていったと考えられている。

そして、近世には この安芸・石見のたたらがモデルとなって、全国に広がって行くと共に この地がたたらの一産地になつていった。

この豊平町の中世の製鉄遺跡群はそんな古代と近世のたたらをつなぐ重要な製鉄遺跡である。



## 5. まとめ 芸北加計周辺の製鉄遺跡を訪ねて



広島市から太田川を遡った中国山地の谷あいの街「加計」

江戸時代 中国山地有数の繁栄をした「たたら製鉄」の大生産地帯で、その中心であった「加計 隅屋鉄山」思いがけず中国道を走っていて見かけた「加計 IC」の標識に、断片しか知らなかった「加計隅屋鉄山絵巻」が頭をよぎり、加計 IC で出て 加計を中心とした芸北のたたら遺跡を訪ねました。

太田川の名は知っていましたが、中国山脈の奥深くから流れ下る大河であることや中国山地の奥深くまで海運が開け、その中心に「芸北のたたら鉄」があったなどほんとうにビックリです。

「古代にまで遡れるたたら遺跡の情報があれば」と思いましたが、よく判りませんでした。

でも この地では鎌倉時代の初め、年貢として「鉄」を荘園主である厳島神社に納めていたことが判り、また、石見との交流など古代にも遡れる興味をもちました。

江戸時代のたたら製鉄の様子を描いた「加計隅屋鉄山絵巻」先に見た「先大津阿川村砂鉄採取之図」に勝るとも劣らぬ「鉄の道」の描写。上下巻あわせて2巻の絵図がパネルに写されて、加計の民俗資料館の壁に連続して掲げられている。それを見る目はもう たたらの工程を映画で見ているよう。

勘場・たたら場の作業の様子 原料・鉄の搬入・搬出・運搬の街道筋 が本当に表情が見えるがごとく生き生き書かれている。写真撮ったり、眺めたり、何度もスタートに戻って歩きました。

今 興味を抱いている古代の野たたらのプロセスの謎解きにつながる「炭」の質と製造 銑とケラの取り出し作業など僕にとっては興味深深。

また 役場・教育委員会へ飛び込んで、多くの資料を貰い、また 丁寧に遺跡の情報など聞いたり、電話してもらったり。すっかりお世話になりましたが、思いもかけず、加計 芸北のたたらを訪ねられ、面白い一日でした

又 今回は調べられなかった「神楽」。この地のあちこちでポスター等を見かけましたが、「神楽の道」が「鉄の道」でなかったか とイメージを膨らませています。

今度は 加計・戸河内から石見へそして出雲へ歩いてみたいと思っています。

大和王権を支えた鍛冶工房 森製鉄遺跡を訪ねて

大阪府交野市 JR 学研都市線（片町線）河内磐船駅周辺

2005.7.27. katano.htm by Mutsu Nakanishi



古代肩野 古代の先進鍛冶工房森製鉄遺跡が眠る JR 河内磐船駅前と多数の古墳群がある背後の山並み



大和王権確立に大きな役割を演じた畿内鍛冶工房の変遷と北河内の鍛冶工房森遺跡のあった交野市

3 世紀から 5 世紀にかけて、大和王権が日本を統一して行く前夜、畿内には鉄の鍛冶工房集落が出現し、大和王権成立の大きな役割を果たして行く。  
河内の「大県」 大和の「布留」・「忍海」 そして北河内の「森」などの鍛冶専用集落で、ここには数多くの朝鮮半島からの技術系渡来人がいたという。

この古墳時代 日本ではまだ鉄の自給が出来ず、朝鮮半島の鉄素材に頼っていた時代 成立間もない倭王権にとっては朝鮮半島からの鉄の移入ルートの支配なら





びに国内での自給に向けた取り組みは日本統一への最重要課題であり、数多くの渡来の工人を取り込みつつ、畿内で専用鍛冶工房を展開する。

そんな鉄鍛冶技術の中心にいたのが、初期大和王権の中心にいて、出雲と深いかわりを持つ物部氏である。

物部氏の根拠地は大和の布留(現在の天理)であるが、九州・出雲から吉備・播磨そして畿内へと点々と鉄の足跡を残している。



大和と河内を隔てる生駒・葛城・金剛連山の一番北端の麓 この連山から流れ出た天野川が西を流れる淀川に注ぎ込む扇状平野部一体が現在の交野・私市。

数多くの古代遺跡や七夕伝説など古代の先進地である。

物部氏の始祖 ニギハヤヒが天上より磐船に乗って舞い降りたとの記紀伝説の地でもある。

この地に物部氏の一族 肩野物部氏が本拠を構え、鉄の鍛冶専用集落・大鍛冶工房を営んでいたという。

北河内の山裾 現在の JR 河内磐船駅周辺の山裾 古代 大和王権の成立に大きな役割を果たした大鍛冶工房の一つ「森製鉄遺跡」である。そして この遺跡の直ぐ背後に連なる生駒連山の北端には森古墳群・寺古墳群など製鉄遺跡と関わったと考えられる豪族肩野物部氏の古墳群が幾つかの枝尾根に広がっている。

8 世紀に作られた播磨風土記揖保の郡佐比の岡の条(現在の播磨 太子町)には北河内にいた渡来の鍛冶工人が優秀な鉄鍛冶技術を有して、播磨・出雲と交流していたことを示す記事があり、この北河内がその後展開されて行く倭王権確立に大きな役割を果たした鉄の郷「和鉄の道」が通っていたと考える。

### 「播磨風土記」揖保の郡 佐比の岡の条の記事

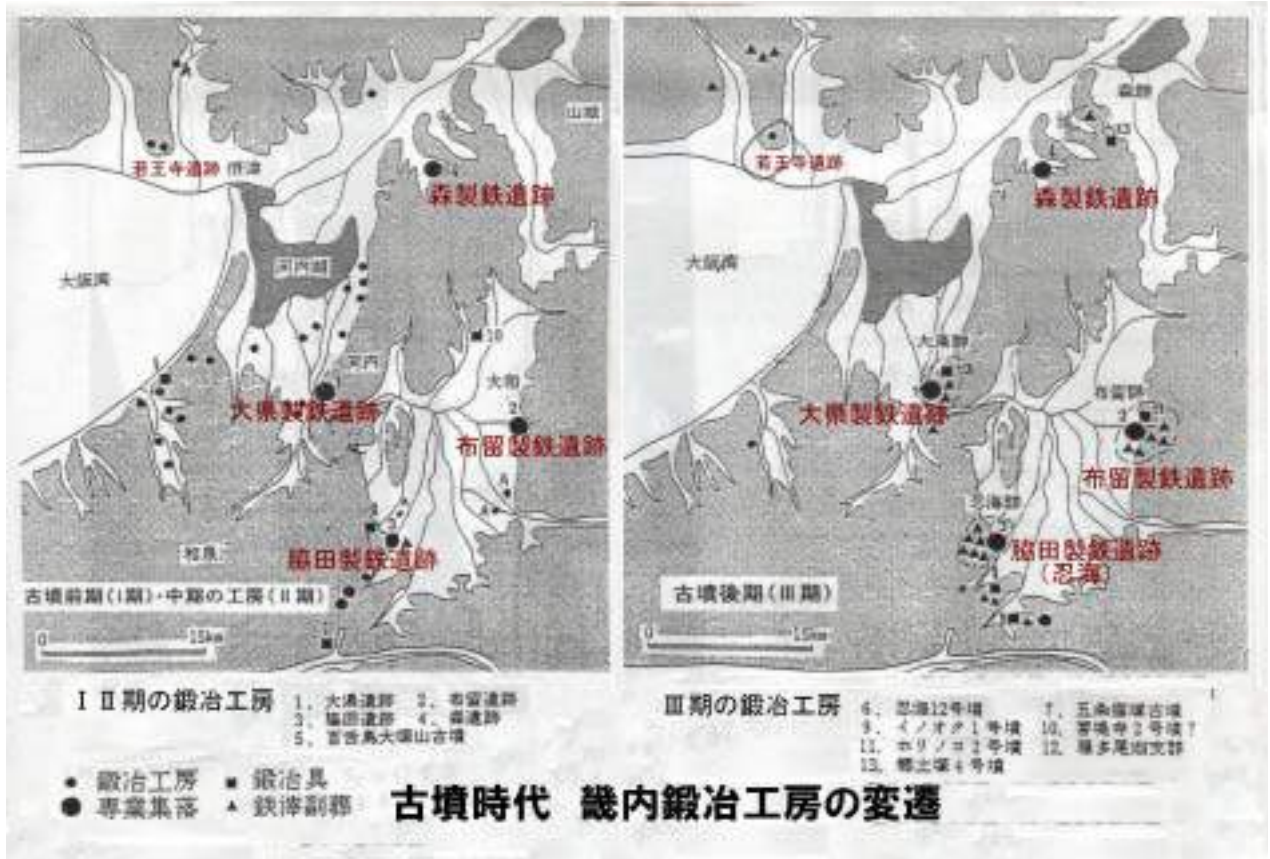


佐比と名づけたわけは出雲の大神が神尾山におられた。この神は出雲の国の人でここを通り過ぎるものがあると十人のうち五人をとり殺し、五人のうち三人を殺した。  
そこで出雲の国の人達は佐比(鋤)を作ってこの岡に祭った。  
だがどうしても快く受納されなかった。  
そうなったわけは比古神(男神)が先に来たが、比売神(女神)が後になって来たので、この男神はここによく鎮まることができずに立ち去ってしまった。そんなわけで女神は怨み怒っているのである。  
そうゆうことがあって後 河内の国の茨田の郡の枚方の里の漢人がやってきて、この山の付近に住んでこれをうやまい祭った。  
そこでどうやらわずかに御心をやわらげ静めることが出来た。この神がおられるので名づけて神尾山という。また 佐比を作って祭った所をすなわち佐比の岡とよぶ。

出雲から吉備・播磨そして畿内の河内そして大和へと続く「鉄の道」は卑弥呼の邪馬台国そして三輪山の初期大和王権へと続く「日本誕生の道」であり、そこで大きな役割を演ずる出雲・吉備そして物部氏。まさに日本誕生の謎を解き明かす主役の登場である。

最近では邪馬台国が大和産鉄の地三輪山の麓纏向の地に成立し、朝鮮半島の鉄の支配を通じて、地方諸国を連合して、大和初期王権が成立していったと考える人が多くなっている。

北河内の森遺跡は河内の大泉製鉄遺跡 大和の布留遺跡・忍海 脇田遺跡などの畿内の大規模専用鍛冶工房とともに鉄の時代の展開と大和王権の確立に大きな役割を果たしたに違いない。



第五回歴博国際シンポ「伽耶の鉄と倭国」花田勝広氏講演資料より

そんな資料を読んでいるうちに、北河内の古代の大鍛冶工房 森遺跡の存在を知りましたが、興味は大泉や忍海・布留など河内・大和の心臓部に向いていて全く予備知識なしでした。

播磨風土記 佐比の岡の条の記事「枚方の里の漢人」を見て、森遺跡の地がわかり、それが出雲・物部氏と繋がっていること知って興味百倍。

しかも 地図をきっちり調べるとこの地は昔遠足などで、何度か訪れた私市・くろんど池周辺。渡来人の郷 古代遺跡密集の地とおぼろげに磐船の名が頭に残っていた場所であるが、鉄との関係など思い巡らしたことなど全くなし。うかつでした。周辺 「星田」の町は渡来人と関係する地名で有名である。

「私市が和鉄の郷」 私にとってはまったくの不意打ちである。

「磐船」の名は知っていましたが、もう40数年前 「鉄の物部氏の始祖 ニギハヤヒが磐船に乗って天下ったところ」など思いも及んでいなかった。

この交野森にあった専用鍛冶工房集落は鉄の国内自給が始まる6世紀その前後 畿内にあって、大和王権の中心にいる物部氏が深くかかわった製鉄遺跡である。鉄自給の謎が解けるかも知れぬ。

とにかく私市に行ってみようと7月27日 一日中この界隈を歩いてきました。



# 1. 大和王権を支えた鍛冶工房 森製鉄遺跡 概要

交野市埋蔵文化財調査報告「古代交野と鉄」&「森遺跡」ほかより まとめ



森製鉄遺跡 発掘字の様子 交野市歴史民俗博物館展示より

森遺跡がある交野は大阪府の北東部 河内と大和を隔てて南北に伸びる生駒・金剛山系の北端の山裾 生駒山系から流れ出た天野川が西へ流れでる台地の上にあり、天野川は西に下って淀川に注ぐ。この台地の南には広大な大阪平野が広がる。淀川を遡って山城・近江・若狭を結ぶ道と河内・大和への結節点にあたる交通の要衝にあたり、古代より栄えたところである。



古代の鍛冶工房遺跡 森遺跡が眠る現在の河内磐船駅と森遺跡発掘地域図

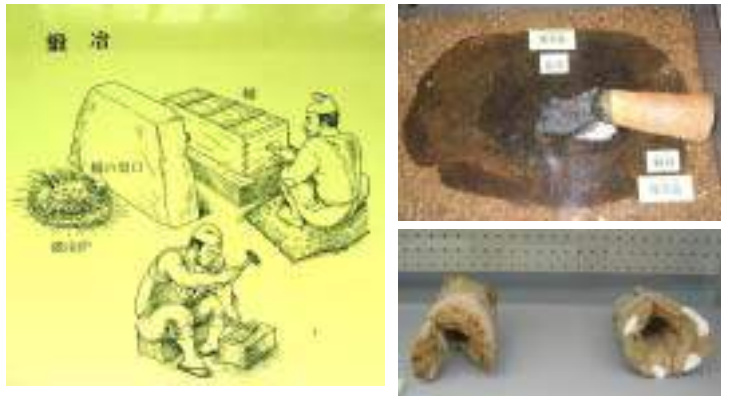


森製鉄遺跡はそんな交野の生駒金剛の山並みが尽きる山裾の台地 現在の JR 河内磐船駅の周辺森南町にあり、主に弥生時代末期から古墳時代中世にかけて栄えた大規模な集落遺跡である。

ここからは4世紀から5世紀中葉の水田の水路群や、5世紀後半～6世紀前半の鍛冶炉跡など古代の鍛冶工房遺構、また、10～13世紀の三宅山荘園跡と考えられる建物跡・遺物なども見つかっている。

近年この森地区周辺の開発が相次ぎ、発掘調査から様々なことがわかってきた。

なかでも、平成7年から8年にかけて行われたJR河内磐船駅北地区区画整理事業に伴う発掘調査は

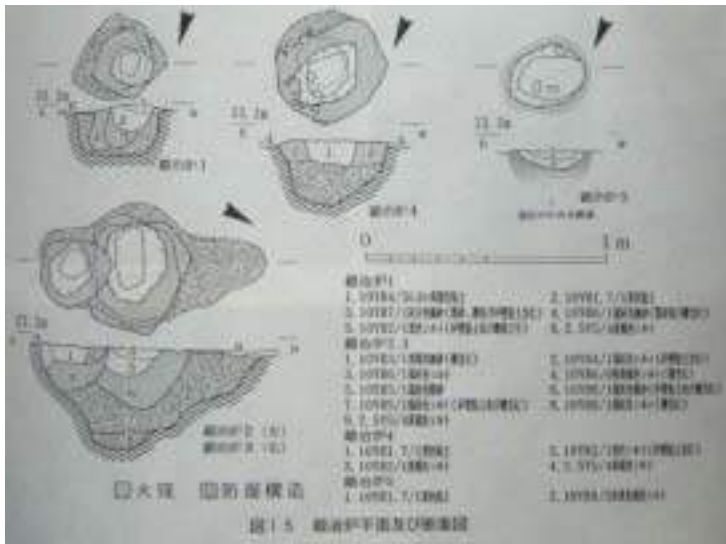


森遺跡鍛冶炉復元と出土した羽口

無大規模なもので、調査区計 8 箇所発掘面積 5390 m<sup>2</sup>に及びました。  
 最も注目すべきは 5 世紀後半～ 6 世紀全般にわたり操業した大規模な専用鍛冶工房集落遺構が出土し、この地に大規模な鍛冶集団が居たことが明らかになったことです。



森遺跡より出土した鉄滓と鍛冶加工の痕跡を残す鉄塊



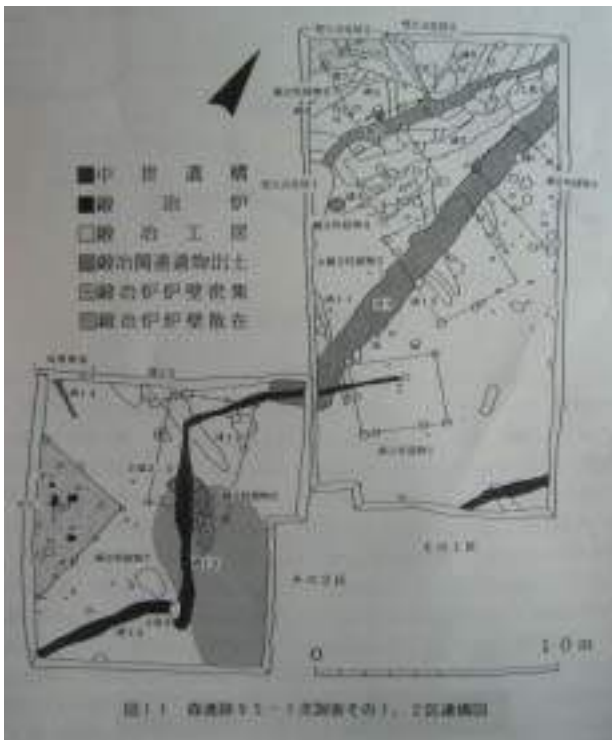
遺跡から出土した鍛冶炉

遺跡で出土した鍛冶炉すべては一旦土坑掘削後、使用済みの炉壁粘土や礫などを埋め戻しその上に火窟を築いている。

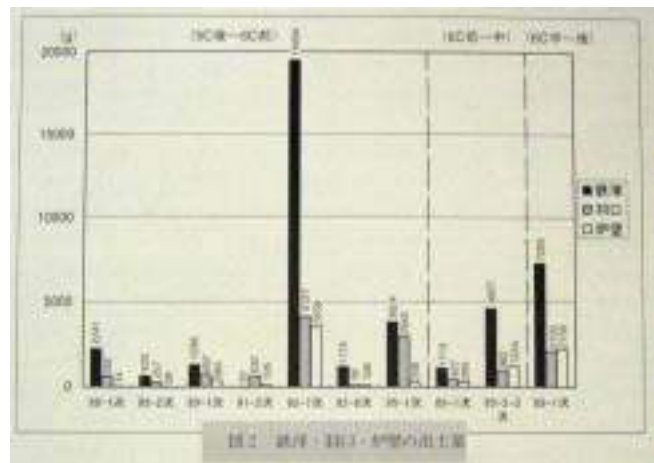
防湿構造上面は黄褐色シルトで整地している

それまで水田が広がっていた場所に 5 世紀半ば急に鍛冶炉と共に大量の鉄滓や羽口・砥石など多数の鍛冶関連遺物や須恵器が出土し、大規模な専用鍛冶工房の出現が裏付けられる。

また、国内鉄製錬による鉄素材自給が明確になっていない時代に他の場所で鉄素材として製錬された鉄滓を含む鉄塊がこの工房に持ち込まれ、製錬鍛冶・鍛錬鍛冶の鉄加工が行われ、鉄器・鉄器加工素材の供給が行われ、その操業は 7 世紀初頭まで続いた。  
 また、出土した鉄滓や羽口など鍛冶関連遺物の多さから畿内でも大規模製鉄遺跡に次ぐ大規模な鍛冶工房が存在したと考えられている。



森遺跡の鍛冶工房遺構 95-1次調査  
 左下:鍛冶炉跡など鍛冶工房作業場  
 右上:工房鍛冶工人の住居跡



森遺跡 鍛冶関連遺物の出土量と年代比較



この森遺跡からは古墳時代中期から 後期にかけての掘立柱建物 5 棟とそれに付随する溝や柵が作られている。これらの建物のうち 4 棟は森遺跡の東側で検出され、また西側では鍛冶関連の遺構・遺物が多数検出され、それらが同時期であることから、鉄生産の作業場と鍛冶工人の住居が分離していたと考えられている。

また、この森製鉄遺跡と同時代の古墳時代前期、中期から後期にかけて森周辺地の首長が葬られたと考えられる森古墳群、交野車塚古墳群が直線距離にして約 500 メートルほどのところにあり、この古墳の被葬者が鍛冶生産を掌握していたと考えられる。

この被葬者の確たる証拠はないが、多くの伝承や後の時代の文献などから類推して肩野物部氏と考えられており、物部氏がこの地の鍛冶集団を統括していたと見られる。

この肩野物部氏は岡山県津山周辺の古代鉄生産に関係していたと見られ、播磨風土記揖保の里の記事なども合わせ考えると古墳時代前期以来の出雲・吉備・播磨・畿内へと続く



「和鉄の道・出雲道」での物・人そして文化の森製鉄遺跡背後の山の尾根筋にある森古墳群

交流が日

本誕生前夜の本流として浮かび上がってくる。また、交野周辺の「星田」の地名や播磨風土記揖保の里の記事に代表される渡来系の技術集団の存在にも注目せねばならない。



この森遺跡に限らず、5 世紀後半に畿内では大県や布留・忍海などの大規模専用鍛冶工房が突如出現する。そして、これらの鍛冶工房には他所で製錬された鉄塊がこの鍛冶工房に持ち込まれている。鉄滓などの分析から砂鉄ではなく鉍石系原料で製造された鉄塊が持ち込まれているが、鉄塊の製造場所はよく判らない。しかし、間違いなくこの時代に大きな鉄鍛冶の技術革新があり、それが大和王権の伸展と大きく関わっていると考えられる。

畿内の専用鍛冶工房の操業の開始時と重なる 5 世紀後半 日本国内では鉄製錬開始の確たる証拠は見付かっていないが、急速な需要の高まりが、畿内での専用鍛冶工房を出現させた。

5 世紀半ばに遡れる鉄製錬の候補場所としては鉍石原料が使われた北近江 砂鉄原料が使われた丹後遠所遺跡そして 吉備の北部地帯などが考えられるが、特定は出来ていない。また、朝鮮半島から鉄素材の鉄塊そのものが移入された可能性もある。

いずれにしろ ポピュラーに鉄の自給が始まるまでの間 朝鮮半島からの鉄の移入・鉄の自給の試みが大和・九州そして出雲・吉備など日本諸国の最大課題であった時代を経て、大和王権が渡来人を取り込みながらその覇権を握り、日本統一を成し遂げて行く。その過程で、大和王権の本拠畿内に興った鍛冶工房が鉄器供給や鉄技術の革新など重要な役割を演じながら、鉄の技術を各地に拡大させてゆくと共に大和王権による日本統一が完成する。

畿内の鍛冶工房に持ち込まれた鉄塊の解明もそんな日本統一の謎を解き明かす鍵の一つに違いない。

「大和王権の中心にあってそんな鍛冶工房の展開に重要な役割を演じたのが出雲・物部氏でなかったのか」森遺跡と渡来人や物部氏との関わりや物部氏の日本各地の製鉄関連の足跡などを考えるとそんな構図が頭の中に浮かんでくる。

## 2. 古代 北河内の大鍛冶工房集落「森遺跡」周辺を歩く 古代鉄の郷 交野 森界限 walk 2005.7.27.



森遺跡周辺図



交野山傍示道より 交野・枚方の平野部眺望 2005.87.27.



森製鉄遺跡が眠る JR 河内磐船駅ロータリーと古代の里を示す石碑

「 金剛・生駒連山の西端 北河内 私市にある森製鉄遺跡は 河内の大泉製鉄遺跡と並び、大和王権が日本統一を成し遂げる前夜 日本各地に鉄を供給した畿内の大専用鍛冶工房集落。そして この鍛冶工房を統括しているのが この地に本拠を構える（肩野）物部氏であるらしい 」大和王権の中樞で軍事・武器を掌握していた物部氏。その豪族が具体的に鉄器製造にかかわっていた遺跡として鉄を通じた歴史が見えるかもしれない。また 鉄自給の道のりが見えるかもしれない。「鉄の6世紀」と呼ばれ、各地の古墳からは続々と鉄器が出てくる。朝鮮半島からの鉄素材の供給から脱し、日本の鉄製錬が始まる時期と大和王権が日本統一を完成する時期がほぼ重なっている。その中味がどんな風であったのか・・・邪馬台国から大和王権の確立へ 文字のない古代の謎がイメージをかきたてる

7月27日早朝 まったく地理的な予備知識無しに神戸を出て交野市へ。私にとっては「私市」の名前の方がなじみである。高校時代に「私市 くらんど池 ハイキング」に出かけて以来 淀川沿いの枚方を通ることはあっても、もう随分足を踏み入れたことなし。昔は田舎の片町線沿いであった淀川の西岸域 「大阪から京阪電車で枚方へ 枚方で交野線に乗り換えて私市へ」これが私の頭にあるコースであるが、今は JR 大阪東西線を経由する片町線が衣を変え大動脈学研都市線となり、住宅地として発展著しく地域の様相が一変している。神戸からも JR で直通電車が走り、1時間30分程でもう交野である。ほとんど高架上を大阪平野の広い市街地を東の壁生駒連山に向かって走り抜ける。 駅も新しくなり、新しい市街地が広がり、田舎臭さはもうない。生駒の山裾を北へカーブして、生駒連山の丘陵地をしばらく行くと交野市に入り、星田駅 そして 次が京阪交野線とクロスする河内磐船駅である。この河内磐船駅の南 生駒連山の山裾磐船溪谷が物部氏の始祖ニギハヤヒが磐船に乗って舞い降りた伝承の地。鉄の物部氏の本拠地の鉄の郷に興味深深である。





古代の先進鍛冶工房森製鉄遺跡が眠る JR 河内磐船駅 左 駅の南側 右 駅の北側

生駒山の山裾側の南側のロータリーに出て、観光案内板を見る。

ここは古代の郷 昔歩いたくろんど池ほか生駒連山の山裾の史跡を巡るハイキングコースが幾つも設定されている。しかし、「森製鉄遺跡」の名前がない。改札へ戻って駅員に聞くが「知らない」という。

とにかく 観光マップ貰うが、不思議そうな顔である。

「森遺跡はこの河内磐船駅周辺のはず。 どこかに森遺跡の案内板あるはず」と探しましたが、なし。

ふっと駅でもらったイラストマップ見ると「河内磐船駅の吹き出しに森遺跡の名 駅から徒歩30秒」と書かれている。 どうもこの河内磐船駅そのものが森製鉄遺跡の中にあるらしい。



駅の反対側にも行って見るが、何にも無し。整備された駅前のロータリーがあるのみ。

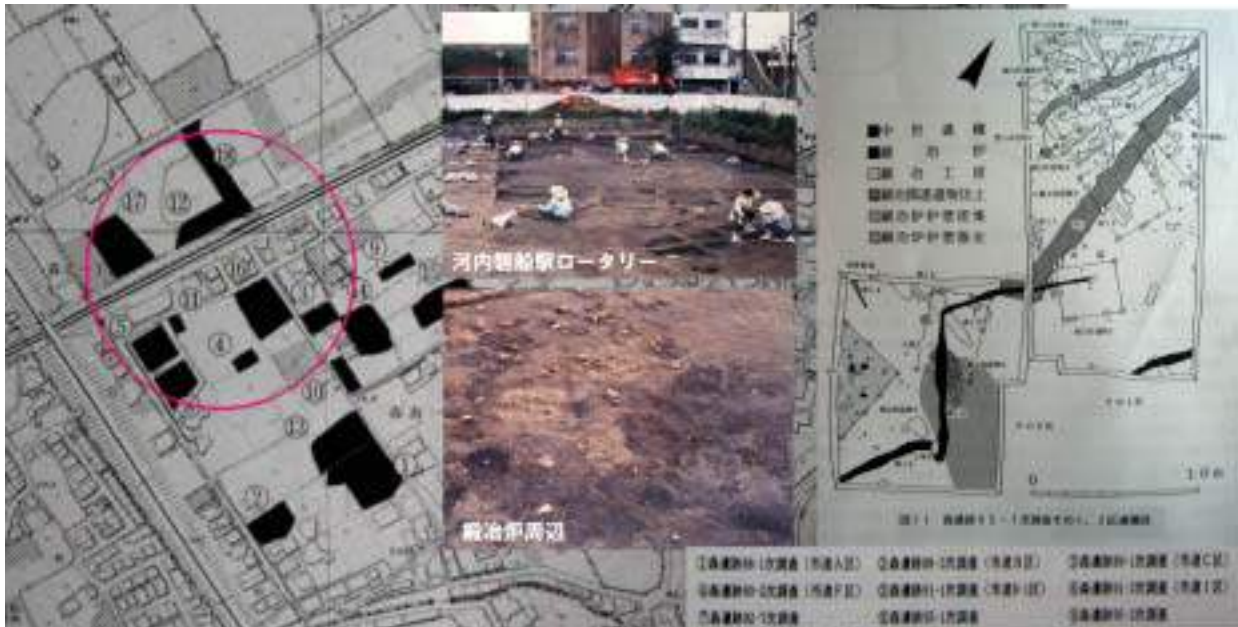
どうも、片町線が学研都市線になる時に駅を含む駅前が整備され、その時に発掘調査され、遺跡は破壊されたのだろう。まあ 製鉄遺跡という何れも珍しいものもなくほかの製鉄遺跡と同様発掘調査が済むと破壊されてしまう運命。街の人からも忘れられてしまう。

日本誕生の重要な遺跡なのに・・・と思うのですが、それにしても遺跡案内板もなくとあって 駅のロータリーの端に小さなモニュメントがあり、この地が古代から続く「無垢根」「森」村で、「この周辺からは古墳時代の集落や鉄器工房跡などの遺跡が数多く発掘され、この時期 無垢根村は交野の中心地」と記載されていました。 やっぱり、この駅前が森製鉄遺跡の中心部である。



JR 河内磐船駅前ロータリーにある古代森村の地であることを示す石碑





河内磐船駅周辺 森製鉄遺跡 午後 交野文化財事業団で入手した資料「古代交野と鉄」より  
**大和王権を支えた鍛冶工房 森製鉄遺跡 概要**

もう少し 森製鉄遺跡の痕跡を見たいが、駅前に居ても仕方なし。  
 背後の交野山を中心とした生駒連山の尾根筋には森遺跡と同時代の幾つかの古墳群がある。  
 駅前の直ぐ上の尾根筋には森製鉄遺跡を統括したと考えられる肩野物部氏の森古墳群が記されている。



とにかく 背後の山の尾根筋にある森遺跡と同じ時代の古墳群 森古墳群を歩いてから 交野の市街地にて、教育委員会か歴史民俗資料館に行って森遺跡の資料集めることにする。

駅前から東へ 山裾に向かって歩き出すと狭い路地の坂道が続く森南の集落が広がっている。  
 集落の中に入れば、「森古墳群の案内標識があるだろう」と思っていたが、まったく無し。  
 狭い路地が続く昔ながらの集落 観光地でないゆったりとした美しい家並みである。  
 家から道端に出てきたお婆さんを見つけて「森古墳群へ行く道」を聞くと、さっき行き止まりで出てきた路地をそのまま行くのだという。  
 「私有地なので今 道が荒れているが そこを登っていった山の上が遺跡。自信ないが行けないことはないでしょう」と。





河内磐船駅の東に広がる森南の集落 2005.7.27.

行けなくなったら戻ってもいいと路地に入って、土蔵の縁をすり抜けて、竹林の中の細い山道を登ってゆく。スタートから竹で「X」が組まれている。竹林を抜け、人気のない林の中の一本道を奥へ奥へと尾根筋に沿って登ってゆく。小さな尾根を横に見ながらの林でまったくどうなっているか判らないが、上り詰めればハイキングコースの道もあり、心配はない。



森古墳群へ登って行く山道 2005.7.27.

「遺跡は上り詰めた山の上」と婆さんが教えてくれたが、30分程で狭い尾根の上に出て尾根の上に道が続いている。やっぱり林の中であるが、コブが見える。ここがどうも古墳群の尾根らしい。こぶは判るのですが、林の中で古墳の形はよく判らない。



尾根筋の林の中に埋まる 森古墳群(1) 2005.7.27.



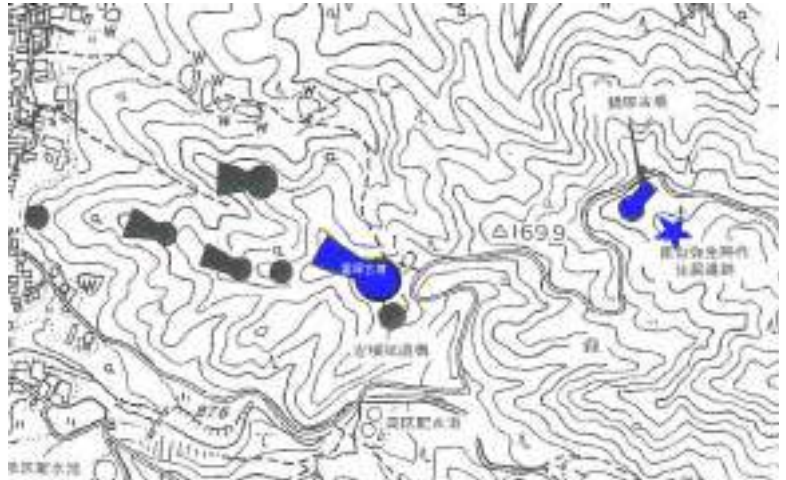


尾根筋の林の中に埋まる 森古墳群 (2) 2005.7.27.

後で歴史民俗博物館に行って、この森古墳群には 古墳時代前期 4 世紀中頃の古墳で 円墳 1 基と前方後円墳 5 基があり、この地の豪族肩野物部氏の墓ではないかと類推されるが、詳細は不明であることなどを知りました。

私のはっきり古墳とわかったのは一番奥の尾根の上にある雷塚古墳。

この古墳群の中で最も大きい古墳である。コブが非常に高く円墳とも思え不思議でしたが、それが古い前方後円墳の証拠と後で知りました。



森古墳群の地形図

資料によると全長 106m 後円部径 56m、前方部先端幅 32m、くびれ部幅 22m、尾根の地形を巧みに利用した前方部 2 段、後円部 3 段の古い形の前方後円墳。特に後円部に比べて前方部の幅が小さく、高さが極端に低い点、前方部が三味線のパチのように開いている点、墳丘部に埴輪や葺き石などが見られない点などが、前期古墳の中でもさらに古い部類に属するのではないかと見られ、大和の箸墓（女王卑弥呼の墓といわれる）とも同じ形。

一番古い形式の前方後円墳が古代の大鍛冶工房集落がある交野の後背の山裾にあり、それも大和王権の中樞に居る物部一族と関係している。この地が大和王権と密接に繋がっていた証拠であろう。

大和王権はその初期から鉄と密接につながっている証拠でないか・・・

雷塚古墳から少しさらに奥に行くと幅の狭いドライブウェイに突き当たる。傍示ハイキングコースで示された道である。ドライブウェイを少し進むと眼下に交野から枚方そして淀川の向こうの天王山を正面に遠望する岩山に出る。この岩山に上って眼下に広がる大バノラマを見るとこの地が古くからの要衝後であったこと実感する。

この道を少しいった山中に弥生時代の高地性集落跡を示す標識があり、さらに 10 分ほどで、山中の集落傍示。下の交野 寺の集落から登ってきた古道「かりがけの道」が合わさってこの生駒の山を越えて大和へ。



傍示への道で 眼下に大阪平野・淀川そして対岸の北摂の山々眺望 2005.7.27.



「かりがけの道」は平安時代 京から河内・大和を通して熊野へ通った「熊野詣」の幹線道という。



寺集落から見た傍示への道が通る山中とそこにある南山弥生時代住居跡遺跡標識

この山中は淀川を南北軸として東の大和へ結ぶ古代の重要路でなかったか・・・そして、交野はその結節点。 「古代 畿内を大和に結ぶ「和鉄の道」がこの交野を通過していた。 森の鍛冶工房への鉄塊や製造された鉄器もこの山中を行き通ったのだろうか・・・



交野山の山中 傍示の里 山麓の寺集落から大和へとつづく古道「かりがけ道」が登ってくる

古代大和への道というと瀬戸内・難波から東へ大和川沿いに河内を通過して大和に入る道ばかりをイメージしていましたが、大陸へ繋がることを考えると若狭・近江・淀川流域から交野・生駒の山裾を河内・大和へ入る道も重要でなかったか・・・

そんなことを考えながら傍示の里の蓮華寺まで歩いて、そこから 古道「かりがけの道」を下って、森集落の北の寺集落に降りてきました。



傍示集落 快慶の阿弥陀如来像がある蓮華寺 2005.7.27.



傍示から狭い尾根の間の谷筋を寺集落に下る古道「かいがけ道」



住吉神社とその横にある「かいがけ道」入り口の道標

寺集落 2005.7.27.

下ってきた寺集落の尾根筋にも数多くの古墳群があり、この地での鍛冶工房が長く営まれるのと符合する。また、さらに北の尾根筋の山裾 倉治の集落には「秦氏」の痕跡があると言われ、南の星田とあわせ、交野の広い地域に渡来人の痕跡があり、森の専用鍛冶工房にも数多くの渡来工人がいたと想像する。



渡来の織姫二神を祭る倉治にある織物神社 2005.7.27.

### 交野 星田の七夕伝説

河内磐船駅の直ぐ東の森南集落から小さな尾根筋を登って、古代この地を支配し、鍛冶工房を統括して大和王権の成立に関与した肩野物部氏の森古墳群を訪ね、古代の人の足跡をたどって傍示まで行ってかいがけ道を降りてきました。 約3時間の山里を巡る walk。

もう 忘れられているかのようにでしたが、大和王権成立期の前方後円墳がこの山中に埋もれていることを知って感無量。古代の鉄の郷が大和王権と密接に繋がっているとのイメージが益々膨らんだハイキングでした。河内磐船駅の直ぐ東の森南集落から小さな尾根筋を登って、古代この地を支配し、鍛冶工房を統括して大和王権の成立に関与した肩野物部氏の森古墳群を訪ね、古代の人の足跡をたどって傍示まで行ってかいがけ道を降りてきました。

もう 忘れられているかのようにでしたが、大和王権成立期の前方後円墳がこの山中に埋もれていることを知って感無量。古代の鉄の郷が大和王権と密接に繋がっているとのイメージが益々膨らんだハイキングでした。



### 3. 森製鉄遺跡の資料と出土品 倉治の歴史民俗博物館へ



河内磐船駅周辺から 森集落周辺 2005.7.27.

森古墳群を巡るハイクから再度 森南の集落に戻って、森遺跡の資料探すことにする。

集落で教えてもらった河内磐船駅西の「私市ふれあい館」 交野市役所の私市支所とでも言うべき建物で、森遺跡の情報を色々教えてもらう。

あちこち電話をしてもらって、市役所近くの体育・文化センターの隣の交野市文化財事業団に行けば森遺跡の資料があること また 倉治の歴史民俗資料館が改装オープンしたところで、そこに一部森製鉄遺跡の出土品が展示されていることなど教えてもらう。

交野市のマップを広げて 教えてもらった交野市文化財事業団・倉治の歴史民俗資料館に行って津田駅から帰ることにする。

さきほど歩いた 遺跡・森古墳群などのある山裾と学研都市線を挟んで西側を再度北に向かう交野市市街地 walk である。

#### 交野市文化財事業団で

河内磐船駅から約 30 分程 京阪交野線に沿って枚方の方に行ったところ、図書館・体育・文化センターなどが集まった一角に交野市文化財センターがあり、交野市の埋蔵文化財調査報告書がすべて整理されていた。そして 長年にわたる森遺跡の発掘調査の報告書やそれらをまとめた立派な資料「古代交野の鉄」「古墳時代の鉄製錬・鍛造再現実験記録」などを見せていただき、一番興味のある専用鍛冶工房関係の分冊を数冊分けてもらった。



本当に立派な記録報告が整備されていたのですが、「日本誕生とかかわったこの鉄の森遺跡をなぜ 保存しなかったのだろうか・・・また 簡単な案内板もなく、市民はほとんど森遺跡を知らない」事に疑問を感じました。

観光的には「織り姫・七夕伝説の街 一色」 「鉄にもロマンがあるのに・・・」と。

#### 参考 分けて貰った資料

「古代交野と鉄 」 1998.9 月 交野市教育委員会

「古代交野と鉄 」 2000.3 月 交野市教育委員会

「古墳時代の鉄製錬・鍛造再現実験記録」2002.3 月 交野市教育委員会

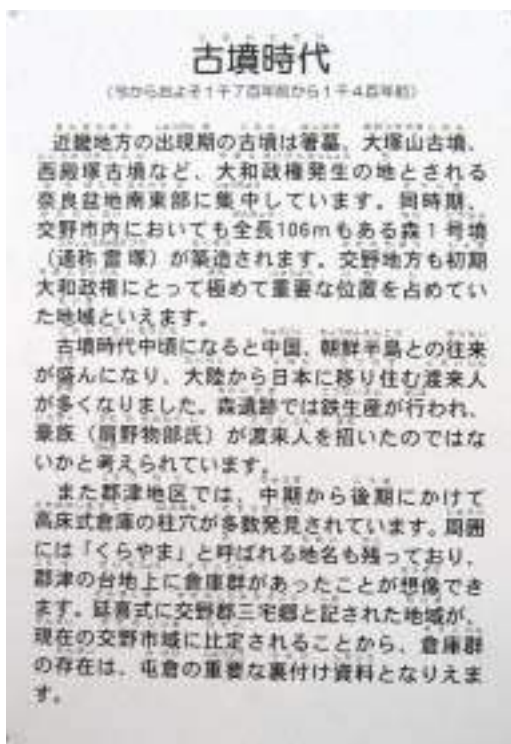
「交野市埋蔵文化財報告書 1990-1 森遺跡 」交野市教育委員会

交野市文化財事業団

歴史民俗資料展示室（交野市立教育文化会館）



交野市の一番北の端 倉治にある教育文化会館にある歴史民俗資料展示室  
【古代の交野 常設展示より】





## 森遺跡

弥生時代～中世

森遺跡は、おもに弥生時代末頃から古墳時代、中世にかけて栄えた大規模な集落遺跡です。

近年森地区周辺の開発が相次ぎ、発掘調査から様々なことがわかってきました。

中でも平成7年から8年にかけて行ったJR河内船橋駅北地区の区画整理事業に伴う発掘調査は、大規模なもので調査区計8カ所、発掘総面積5,390㎡にも及びました。

古墳時代前期、中期から後期にかけては森古墳群、交野車塚古墳群との関わりが注目され、森周辺地の首長が葬られたと考えられます。

またこの遺跡の特徴として、鍛冶専業集団の存在があります。5世紀後半から6世紀全般にわたり、森遺跡内では鍛冶作業が行われ、出土した鉄滓の量の多さから畿内でも有数の鍛冶工房が存在したと思われま



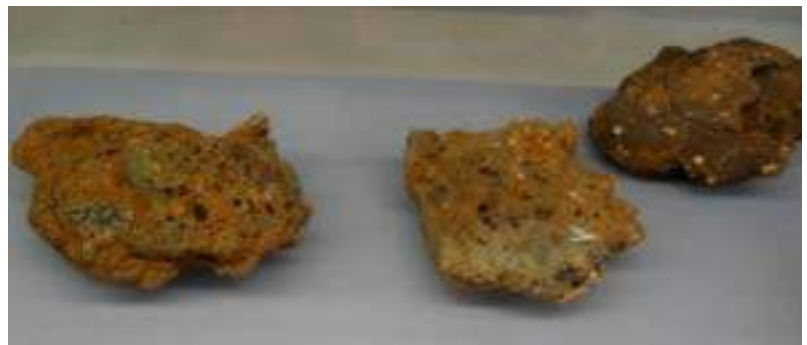
森遺跡の発掘風景



鍛冶炉復元模型



羽口



鉄滓



一部鍛造された鉄塊



鑄造鉄斧



鉄てい(近くの郡津浜り遺跡より出土)

鍛冶工房に持ち込まれた鉄素材の可能性

## もりこぶんぐん 森古墳群

昭和55年、若船小学校の児童が森地区の丘を歩いた時に漆黒や赤の破片を見つけました。交野市教育委員会がこの地区を調べたところ、前方後円墳が4基、円墳が1基、古墳と思われるものが2基見つかりました。この古墳は、大阪府の中でも最も古い時期の古墳で、古墳時代の前期、3世紀の終わりにつくられました。発掘調査は行われていませんが、物部氏の一族、眉野物部氏という豪族の古墳と考えられています。



森古墳群の第1号古墳  
(葦塚古墳)

#### 4. 古代鉄の郷 交野 森界限 walk まとめ



古代肩野 古代の先進鍛冶工房森製鉄遺跡が眠る JR 河内磐船駅前と多数の古墳群がある背後の山並み



大和王権確立に大きな役割を演じた畿内鍛冶工房の変遷と北河内の鍛冶工房森遺跡のあった交野市

5 世紀 大和王権が日本統一を成し遂げて行く過程「鉄」の需要が著しく増大する。ちょうど 鉄製錬が開始される時代でもあるが、まだ朝鮮半島からの鉄素材の供給を受けていた時代でもある。

5 世紀半ば そんな時代に突然 畿内に現れ、大和王権の日本統一に大きな影響を与えた大泉製鉄遺跡をはじめとする畿内の専用鍛冶工房。

何処からか鉄素材の供給を受け、鉄器製造のナショナルセンターとして増大する鉄器需要に対応する。また、数多くの渡来系技術集団を受け入れ、鉄器製造の鍛冶技術を革新すると共に いち早く鉄の製錬をも始めていた可能性がある。

邪馬台国・三輪王権へと大和・九州・出雲を舞台とした記紀神話に多くの人の眼が集まっている一方、その裏で農耕・文化・武力など国力の源泉となった「鉄」が果たした役割にも最近着目する人も多い。

「鉄のロマンが古代日本誕生の謎を解き明かすのではないか・・・」そんな思いで「古代の和鉄の道」をみている。



当初 そんな古代の大規模な専用鍛冶工房集落が北河内 金剛・生駒山系の北端 交野森にもあること知っていたのですが、余り気にかけていませんでした。

播磨風土記 揖保の郡 揖保の里の祭にある記事を眼にして、具体的に

「漢人・渡来人の鍛冶技術集団」

「鉄の国 出雲・西播磨」

そして北河内「茨田（淀川） 枚方の里」と古代鉄の key word が幾つも含まれている。

「これは花田氏の講演で聞いた北河内交野の森製鉄遺跡 大和から西播磨・出雲 そして朝鮮半島への和鉄の道が見える」のにビックリ。

古代鉄のロマンの謎のヒントがあるかもしれないとこの北河内交野の森製鉄遺跡界隈 walk に出かけてきました。

### 播磨風土記 揖保の郡 揖保の里の祭

佐比と名づけたわけは出雲の大神が神尾山におられた。この神は出雲の国の人でここを通り過ぎるものがあると十人のうち五人をとり殺し、五人のうち三人を殺した。

そこで出雲の国の人達は佐比(鋤)を作ってこの岡に祭った。だがどうしても快く受納されなかった。

そうなったわけは比古神(男神)が先に来たが、比売神(女神)が後になって来たので、この男神はここによく鎮まることができずに立ち去ってしまった。

そんなわけで女神は怨み怒っているのである。

そうゆうことがあって後 河内国の茨田の郡の枚方の里の漢人がやってきて、この山の付近に住んでこれをうやまい祭った。

そこでどうやらわずかに御心をやわらげ静めることが出来た。この神がおられるので名づけて神尾山という。また 佐比を作って祭った所をすなわち佐比の岡とよぶ。

そして、この交野 森の里に来て、残念ながら森製鉄遺跡・古代の大鍛冶工房は今 JR 河内磐船駅南北の駅前ロータリーになってその痕跡も無し。でも、駅から東に広がる生駒・金剛山系北端の丘陵地に広がる森南集落界隈からは広大な大阪・北河内の平野が遠望され、山裾には里山集落の風景が広がり、背後の山中には古代大和への道・そして 森製鉄遺跡と関係したと考えられるこの地の大豪族の古墳群が尾根の林の中に眠り、古代に思いを馳せるには十分でした。

そして、古代この地を支配した豪族は大和王権の一翼を担った鉄の物部一族の「肩野物野部氏」。

そして、山の尾根筋にはこの一族の首長の墓と思われる 4 世紀半ばの森古墳群があり、そこには卑弥呼の墓と黙される「箸墓古墳」と同じ初期前方後円墳の形式を色濃している。



尾根筋の林の中に埋まる 森古墳群 (2) 2005.7.27.

誰も入らぬ尾根筋の細い道の奥に静かに眠る大きな前方後円墳 鉄の首長が大和王権と強く結びついていること この山里を和鉄の道が大和へ通じていると感じました。

また、交野市文化事業団で分けてもらった立派な森遺跡の報告書にはこの肩野物部氏と吉備・津山地方久米・誕生川との結びつきが示されていました。

この吉備もまた鉄の国 日本での鉄製錬を始めた候補地の一つで大蔵池南製鉄遺跡(6 世紀後半)などがある。物部氏の足跡はこの他 九州・東国にもあるが、出雲から吉備・西播磨・河内・大和へと続く道は 九州を除けば まさに大陸・朝鮮半島から大和へ続く和鉄の道・渡来人の道 そして 大和の初期三輪王権を作り

上げた豪族連合の主要国でもある。

和鉄の道から見た日本誕生のドラマが見え隠れする面白い一日でした。

それにしても、交野市の街では 渡来人の里としての PR は行き届いているものの森製鉄遺跡の存在 鉄の里としての役割は全く知られていない。(もっとも 森製鉄遺跡発掘の一連の調査報告書は本当に立派なものである)

「産業の米 鉄」といわれるが まさに「日本誕生を担った鉄」が古代この交野森の集落から各地に運ばれていった。

せめて 古代の里ハイキングの出発点 河内磐船駅その下に古代 日本誕生の役割を担った鉄の里 大和王権の大鍛冶工房が眠ることの歴史案内板ぐらいほしいものである。

2005. 7.27. 学研都市線車窓から交野の里を振り返りながら

Mutsu Nakanishi





# ロマンあふれる交野ヶ原の七夕伝説

<http://www.kansaiyakken.com/wa/20.html>

都市機構関西学研本部発行情報誌“Wa” Wa20.H15.5 より整理

織姫星と彦星が天の川で年に一度の逢瀬を楽しむという七夕。

学研都市の交野ヶ原には星田、星ヶ丘、星の森など、星にちなんだ地名が多く、

七夕伝説が今も語り継がれています。星に願いをこめて、天野川流域の星降る里を訪ねてみましょう。

## 天野川を銀河に見立てる

古来より枚方市・交野市の地域は、交野ヶ原と呼ばれていました。東は生駒山系から続く山並が連なり、中央部には長尾丘陵、交野台地、香里丘陵が広がり、その間を生駒山系に源を發した天野川が西流して、西の淀川に注いでいます。

古代 淀川は枚方附近まで入江となっており大和に入るには哮ヶ峰の麓を流れる天の川を遡りつつ、大和に至るのが至便であったと考えられます。

交野ヶ原を流れる天野川は、白砂に覆われた美しい川で、天上の銀河を想わせるところから、“あまのかわ”と呼ばれています。

その由来により、京阪枚方市駅から近い天野川の下流には「鵜（かささぎ）橋」「天津（あまつ）橋」という天の川にちなんだ名前の橋が架けられ、七夕伝説が語り継がれてきました。

中国古代の七夕伝説によると、カササギは天の川に翼を広げて橋となり織女と牽牛を会わせたとあり、「天津橋」は天の港という意味で、舟で渡って、二人は出会うとあります。どちらも現在は車の通行量の多い橋ですが、織女と牽牛やカササギのレリーフなどがあり、「天津橋」には夜になれば銀河が浮かび上がる楽しい仕掛けもあります。少し上流に架かる「逢合（あいあい）橋」は、橋そのものは何の変哲もない橋ですが、兩岸には遊歩道があり、散歩におすすめです。

## 織姫様を祀る機物神社

交野ヶ原はその昔、動植物が生息する原野で、桓武天皇をはじめ、数多くの宮廷人が訪れて四季折々の自然を愛で、狩に興じました。「狩り暮らし機女（たなばた つめ）に宿からむ天の河原に我は来にけり」（狩をして日が暮れてしまったので、今夜は織女の家泊まろうよ。天の河原に来てしまったのだから）と『古今和歌集』や『伊勢物語』に詠まれている在原業平の歌はつとに有名です。

織女は、JR学研都市線津田駅から約800m、交野市倉治にある機物（はたもの）神社に祀られています。

5~6世紀頃、養蚕・はたおりの技術を持った秦氏が渡米して祀った秦者（はたもの）の社が、七夕伝説と結びついたようです。

昭和54年に7月7日の七夕まつりが復活され、境内にはたくさんの笹竹に願いごとを託した五色の短冊が飾られます。

前日の宵宮から夜店なども出て賑わい、本宮には神輿が出て、笹にはお祓い、祈願の後、深夜に天野川に流されます。

天野川をはさんで、機物神社と対称の位置の中山観音寺跡に、彦星と伝えられる「牛石」（牽牛石）があります。

現在、枚方の香里園団地の観音山公園になっている所で、その高台からの眺望は一見の価値があります。

## 星が降ったという星田妙見宮

JR学研都市線星田駅から南東へ歩いて約15分の所にある星田妙見宮。星田は新興住宅地ですが、妙見宮は鬱蒼とした巨木に



包まれた別世界です。120 段余りの石段を登りきると拝殿に到着。

妙見宮は嵯峨天皇の時代、弘法大師が修行をしている時、3 ヲ所に七曜星（北斗七星）が降ったと伝えられる内の1ヶ所で、太師が山頂の岩を靈石として七曜星を祀ったのが始まりといわれています。

現在も本殿はなく、山頂の二つの巨大な自然石を御神体として崇めています。ここでも平成8年に星の三大祭り「星祭り・七夕祭り・星降り祭り」が復活されました。

## 物部氏の始祖ニギハヤヒが天下った伝説の磐船神社 インターネットより採取

天野川の上流の磐船（いわふね）溪谷には物部氏の祖先神、饒速日命（ニギハヤノミコト）が天上より天の磐船で降臨したと伝わる磐船神社があります。磐船神社のご神体は船型をした高さ12mもある巨岩で饒速日命（にぎはやひのみこと）がこの樟船にのって天下ったといいます。また、神話伝説の「哮ヶ峰(写真右)」は「鮎返しの滝」と対峙してそびえたっています。このような神話の舞台が磐船であります。

また淀川を主要交通路として古代には 枚方から天野川を通過してここ磐船から大和へ至る道が主要道。

肩野物部氏がこの交通の要衝を本拠地として抑えていました。



交野市倉知 織り姫を祭る織物神社 2005.7.27.



饒速日山だとされる哮ヶ峰(たけるがみね) 磐船神社の御神体石=天磐船石 磐船神社の社前・旧道  
(インターネットより採取)



## 弥生の博物館 青谷上寺地遺跡を訪ねて

鳥取県鳥取市青谷町



青谷上寺地弥生遺跡 2005.7.28.

1. 弥生時代 後期 大陸と大和を結ぶ山陰の鉄
2. 弥生の地下博物館「青谷上寺地遺跡」概要
3. 鉄の時代を告げる「青谷上寺地遺跡」を鳥取県青谷を訪ねる

本年 7月 大阪で古代山陰のシンポジウム 2度ほどあり、邪馬台国・大和王権に至る日本黎明の時代に山陰が果たした役割が論じられた。

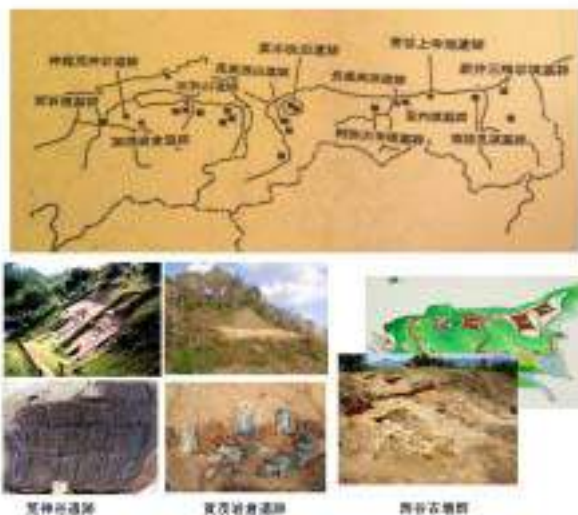
弥生時代中期の終わり頃 出雲荒神谷遺跡で 358 本もの大量の銅剣をはじめ、銅鐸・銅矛が埋められているのがみつき、さらに荒神谷遺跡から距離にして 3キロほどの賀茂岩倉遺跡で 39 個の銅鐸が発見された。いずれも山中に隠すかのように山の斜面に埋められていた。

青銅器の文化の終焉を示す大きな出来事といわれ、これを境として、弥生時代後期 1 世紀～3 世紀頃にかけて、この山陰で青銅器を中心とした文化から鉄の文化へ大きく変化する。

「大量の鉄」を持ち、国のさきがけともみえる大集落 東出雲・伯耆の妻木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡が出現である。また、山陰地方に四隅突出墳という独特の首長墓が出現する。

「山陰の鉄」が大きく大和王権にかかわっている。

弥生時代の大集落「妻木晩田遺跡」「青谷上寺地遺跡」は国の芽生え 日本に鉄の時代の到来を告げる「鉄の町」そんな印象を受けてまだ見ていない鳥取県倉吉市に近い海岸「青谷」の「青谷上寺地遺跡」を訪ねました。昨年「弥生人の脳みそが出土した」とセンセーショナルに報じられた遺跡で、まだ極一部の発掘であるが、大量の細工・加工が解かされた木製品・土器・獣骨製品・ガラス・石器・鉄器・獣骨・人骨が出土し、その出土の量と出土品の素晴らしさ そしてそれらから浮かび上がる弥生人の生活から「弥生の博物館」と呼ばれる大集落。そして 色濃く大陸・日本海諸国との交流を示す港湾都市でもある。



7月28日 朝 神戸を出て 家内と二人 青谷上寺地遺跡の見学に出かけ、帰りは倉吉から中国山地 古代からの産鉄地 奥津・津山へ。

国内で確認された初期製鉄炉の一つ6世紀初頭の「大蔵池南遺跡(岡山県久米南町)」ならびに直ぐ近くの古代物部氏の鉄の足跡誕生川流域のたたら製鉄遺跡群を訪ねて出雲から吉備・播磨から大和の鉄のルートを巡る道。夏の暑い一日でしたが、「古代の鉄の道」の素晴らしい足跡と風景を堪能して帰りました。

この資料には そのうちの青谷上寺地遺跡の探訪記をまとめました。

1. 弥生時代 後期 大陸と大和を結ぶ山陰の鉄

1～3世紀 この時代、鉄を産する朝鮮半島に近い先進地北九州諸国をはじめ日本各地には小国が分立し、「魏志倭人伝」に言う「倭国の大乱」を経て、「邪馬台国 卑弥呼」が成立する過程にあった。一方、朝鮮半島でも後漢・三韓分立の戦乱時代である。

戦乱・諸国分立の中で、多くの渡来人来日など活発な朝鮮半島との交流の時代である。

見方を変えると朝鮮半島から日本に持ち込まれた「鉄」が、道具・武器に加工されて、農耕・大規模な土木工事そして武器に使われ、パワーを増した集団が首長を中心に「国」に発展してゆく。

渡来鍛冶工人の助けをかり、本格的な鍛冶加工が広がって行く。

この弥生後期の日本各地の鉄器出土量を見ると大陸・朝鮮半島に近い鉄の先進地北九州が圧倒的に多く、次に妻木晩田遺跡・青谷上寺地遺跡のある鳥取・岡山が多く、畿内は少ない。

畿内はまだ鉄の後進地である。

弥生時代の歴史年表と妻木晩田遺跡・青谷上寺地遺跡



妻木晩田遺跡



青谷上寺地遺跡

日本各地の弥生時代後期 鉄器出土数

	刀剣	機	工具	農具	炊器	他	小計	不明	総数	備考
福岡	83	388	502	258	213	61	1603	243	1746	
熊本	17	377	189	158	45	37	823	1068	1891	
佐賀	25	47	91	85	69	19	357	28	365	
奈良	3	32	65	13	17	82	203	20	223	
鳥取	26	67	224	24	76	88	515	149	934	上野原20
岡山	13	125	105	18	17	18	291	144	436	うち93点は鳥取
兵庫北群	15	50	72	0	7	15	162	7	169	
兵庫南群	11	35	22	0	6	30	85	22	111	
京都北群	49	103	53	1	1	10	217	17	234	
京都南群	1	6	9	3	2	9	30	4	34	
大阪	3	32	19	3	14	16	87	65	153	

弥生後期の鉄器出土数  
(藤田豊司「見えざる鉄器」『先史』Ⅱ2002年9月を一部改変)



「北九州と中国地方・畿内の戦い」西日本で鉄の供給をめぐる争いが「倭国の大乱」でなかったか????」

大和を中心に北九州とは別に鉄の供給ルートを持つ吉備・出雲が連合して九州と対抗し、朝鮮半島の鉄の覇権を握った大和の連合が北九州を押し、日本を統一していったのではないか……

そんな風に取り取れる弥生後期の鉄器出土の分布である。

山陰の妻木晩田遺跡は麓に入り江を有する丘陵地の上に存在する高地性の大集落で、青谷上寺地遺跡も山麓ではないが、三方を小高い丘陵で隔てられ、海岸も小さな山と砂州で隔てられた入り江の奥の丘陵地で、高地性集落とおなじような要害の地。入り江は日本海諸国や朝鮮半島との交流が行われた港湾都市の機能を有していたと考えられる。

「鉄」伝承が多い出雲でありながらたたら製鉄の開始はずっと後の時代であり、「出雲が大和とどんな関係にあったのか???'」不思議でありましたが、朝鮮半島との交流を通じた鍛冶技術の先進地と考え、九州に対抗して大和が吉備・出雲と結ぶルートが見えてくる。

古代の「和鉄の道」日本海沿岸ルートの中央にある山陰が半島の鉄を持って力をつけた。

そんな風に弥生時代後期山陰に現れた妻木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡を見ると「農耕文化の弥生集落」といった見方が一挙に先進文化に彩られたイタリア ローマのような「都市国家」に見えてくる。



弥生時代後期 大陸や朝鮮半島の文化を取り入れ、急速に発展する西日本で、文化の先進地北九州が

一つの文化・通商のセンターであり、そこから瀬戸内や若狭から琵琶湖さらには四国の南を經由して東へ進んだ東端に河内・大和があり、ここも東のセンターとして、文化・流通の集積地となっていて、ここからさらに東国へ文化が伝播する構造になっていた。

そして、西日本の諸国が大和・河内の勢力と結んで先進技術・文化吸収のサテライト

を置き、それらが急速に力を伸ばし、連合を組んでいったのではないだろうか……

山陰は大和にサテライトを置く一方また大和と同じように大陸・朝鮮半島や九州と西日本さらに北陸・東国との交流中継地として発展していったのだろう。

古代山陰の鉄がそんな日本誕生の大きな役割を演じ、その萌芽は妻木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡にある。

まあ 妄想かもしれませんが、豪族連合というよりもパワーを持ったそんな先進的な「国」の連合体が「邪馬台国」をつくり、やがて大和王権へと発展していったと見える。

石見・出雲・伯耆そしてその南の吉備・播磨の中国山地は古代の産鉄の地 数々の鉄伝承があり、天日槍・スサノオ・少名彦(吉備津彦)など朝鮮半島渡来の鉄伝承もある。

日本の鉄鍛冶・鉄の本格的実用の時代への黎明の鉄の郷が「妻木晩田遺跡」「青谷上寺地遺跡」ではないか……

「妻木晩田遺跡」を訪れた時には大山の麓 眼前に淀江の入り江と島根半島の広がる海原 そしてその後の古代淀江の郷に大陸との交易文化にイメージを膨らませましたが、勉強不足で具体的な山陰の鉄にまで思いも及びませんでした……



妻木晩田遺跡

青谷上寺地遺跡



妻木晩田遺跡から島根半島弓ヶ浜眺望

参考 古代鉄の大王国 山陰 伯耆国 溝口の鬼伝説と大山山麓の大製鉄遺跡群 & 妻木晩田弥生遺跡  
<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/jstlaa05.pdf>

「青谷上寺地遺跡」は是非見たい。

予備知識は色々仕入れましたが、本当の所 まだ どんなどころか 想像もつかない。果たして イメージのとおりだろうか.....

まだ ほんのごく一部しか発掘されていないのに「妻木晩田遺跡」をしのぐ鉄が出土し、しかもその鉄の道具を使った数々の加工の文化「弥生の博物館」と言われる。

また 「無造作に溝に投げ込まれた多数の殺傷痕のある人骨と弥生人の脳が出た」という。

「銅の突き刺さった人骨と殺傷痕」これこそ「倭国の大乱」の証拠」という研究者もいる。

(銅製の武器は脆く人骨で折れて体内に残るが、鉄製は強く引き抜かれるので殺傷痕はついても武器は残らないという)

7月28日 朝 神戸を出て 家内と二人 青谷上寺地遺跡の見学に出かけました。

青谷上寺地遺跡から帰りは倉吉から中国山地 古代からの産鉄地 奥津・津山へ

国内で確認された初期製鉄炉の一つ6世紀初頭の「大蔵池南遺跡(岡山県久米南町)」ならびに直ぐ近くの古代物部氏の鉄の足跡誕生川流域のたたら製鉄遺跡群を訪ねて出雲から吉備・播磨から大和の鉄のルートを巡る道。夏の暑い一日でしたが、鉄の道の素晴らしい足跡と風景を堪能して帰りました。

この資料には そのうちの「青谷上寺地遺跡の探訪記」をまとめました。

## 2. 弥生の地下博物館 青谷上寺地遺跡 概要

上寺地遺跡展示館展示・「青谷上寺地遺跡発掘ノート」「埋蔵文化財センター青谷上寺地遺跡調査報告」より



「弥生の博物館」鉄製品・木製品ほか青谷上寺地遺跡出土品の数々 上寺地遺跡展示館で 2005.7.28.



青谷上寺地遺跡は今から 2200 年前から 1700 年前の弥生時代中期から後期にかけての遺跡で、国道 9 号線のバイパス工事に先立つ発掘調査で、数々の弥生人の生活道具がみつき、その質量ともに豊富なこと保存状態がよいことから「地下の弥生博物館」とよばれる。

この遺跡のある青谷は海岸近くのごく小さな沖積平野で、縄文時代入り江であった場所が砂州の発達で日本海と遮断され、潟湖へと変貌し、その西岸のほとりに遺跡が成立した。

潟湖という天然の良港に恵まれ、漁労が盛んな一方、遺跡の南西側の低湿地部には遺跡成立の当初から、水田域がり、農業も主要な生業であった。

この二つの領域に挟まれた遺跡中心部では当初から土坑や焼土域があり、そこから東の湖に向かって貝塚が築かれ、次第に湖が埋められて行く。

そして、弥生時代の中期になると中心部に引き続き土坑や土焼域が形成されるが、その周辺部に大型の溝が築かれ、多数の木造構造物が作られるようになり、後期になると中心部を取り囲む東西の両縁には内外を区別するように築かれており、東の溝の一部では 5300 点以上 1 約 00 人分の人骨が出土。

これらの中には脳を内部に残す頭蓋骨 3 点や殺傷痕のある人骨 110 点(個体数約 10 人分)があった。

また、溝には内側の岸辺に沿って列状に杉板矢板が打ち込まれていた。

鉄製の斧やのみなど鉄製道具の普及がこれらの土木工事を支えたと考えられる。

また、遺跡中心部の東辺では砂地の上に細長い板を立て並べ、倒れないように杭で固定した謎の遺構が無数に見付かった。



中心部の東西の縁にある内外を区画する溝と板列遺構



東辺の砂地上から出土した多数の謎の板列遺構

遺構名	数量
独立柱建物	8
貝塚	1
土壌	435
溝	74
杭列	93
焼土	97
集石	18
土器窟	16
卜骨集積遺構	1

遺物	数量
土器(コンテナ)	約2,400箱
木製品	約9,000点
石器	約4,000点
鉄製品	約270点
青銅製品	36点
ガラス製品	8点
骨角製品	約1,400点
獣骨	約27,000点
人骨	約5,500点
人の歯	3点
その他	遺物、土器、骨、石



鉄製品



木工製品

青谷上寺地遺跡の遺構・出土品概要

また、これら遺跡縁辺部の溝からは遺跡中心部にも勝る大量の遺物が出土しており、祭祀の場を含む溝の周辺部(中期までは東側潟湖方面 後期には周辺を囲む溝とその外側)が廃棄の場所となっていたと考えられる。一方 この遺跡では全時代を通じて、まだ竪穴住居跡は確認されておらず、遺跡の中心部の正確は良くわかっていない。しかし、この中心部では未製品や素材・加工具が集中的に出土する工房域と推定されるエリアがあり、木製品・骨角器・鉄器・玉類等の生産・加工をおこなっていたと想定される。

また、土器や木製品遺物の表面にサメやシカさらに謎の小動物そして海原に行く船団などの素晴らしい線刻画が描かれたものもある。

あわせて、大陸・朝鮮半島から入手したと考えられる鑄造鉄斧などを再加工して、板状斧・のみ・やりがんな・刀子・楔・穿孔具などの道具がつくられ、これら鉄器の出土数は 300 点を越え、鉄の先進地北九州をのぞくとずば抜けて多い。これらの優秀な工具が素晴らしい木製品・骨角器などの高度な加工技術を支えていた。鉄器の未製品や裁断痕のある鉄器が出土していたことから、簡単な鍛冶加工がここで始まっていたこともうかがえるが、詳細は判らない。

青谷上寺地遺跡の出土品の数々 上寺地遺跡展示館展示より 2005.7.28.



青銅製鋸が骨を貫通して刺さった人骨例

縄文人の脳がさる出土



また、発掘面積も遺跡全体の極わずかであり、居住跡も見付かっていないので遺跡全体を論ずることは難しいが、高度な技術を持つ集団がこの青谷に居て、日本各地のみならず、半島諸国とも交流をしていたと考えられる。

逆の視点からいうと天然の良港であるこの青谷の地が日本海沿岸・朝鮮半島諸国との交流を可能として、そこから数多くの渡来人・鉄の技術等先進技術を取り込み、交流拠点としての港湾都市を展開していたとも想定される。これらの見方を裏付ける高度な技術を有する加工製品・鉄器などの道具類のみならず、古代中国の通貨「貨泉」や朝鮮半島系無文土器・ト骨占遺構そして地域間交流を示す土器・水晶・翡翠・など海外や国内各地との関わりを示す遺物が数々出土している。

これら交易の中心に「鉄」があったに違いない。

参考 「青谷上寺地遺跡発掘ノート」

「埋蔵文化財センター上寺地遺跡 調査報告」

[www.adg.ne.jp/auto/www.pref.tottori.jp/maibun/houkokusho.htm](http://www.adg.ne.jp/auto/www.pref.tottori.jp/maibun/houkokusho.htm)

### 3. 鉄の時代を告げる「青谷上寺地遺跡」を鳥取県青谷に訪ねる 2005.7.28.

青谷は鳥取県の東部 現鳥取市を中心とした古代因幡国の西端にあり、その西は米子大山の聳える伯耆国。鳥取へは西播磨の山間を抜けてゆく智頭線が開通して山陽・智頭線経由で2時間ちょっとなのですが、高速道路がなく、関西からは一番行きにくい場所になりました。

7月28日 朝 神戸をでて、久しぶりに国道29号線を揖保川沿いに北播磨播磨風土記の産鉄の地の山間を戸倉峠を越えて鳥取に出る。神戸から約2時間ほど。

鳥取から海岸沿いの国道を西へ白兔海岸を通過して30分程、海に突き出た岬の根元を乗り越すとパッと西の岬(海岸にこんもりある丘)まで約1Kmほど白砂の浜が道路に沿って見える。青谷の海岸で浜は歩くとキュッキュッと鳴く「鳴き砂」の浜。

東西の岬の間には真っ青な日本海が広がっている。狭い砂浜の湾であるが、道路の反対側には青谷の町並みが広がっている。



岬を乗り越えたところに広がる青谷の海岸



西端を流れる勝部川の橋より鳴き砂の青谷海岸と青谷の町並み 2005.7.28.

弥生時代にはこの浜が砂州になっていて、西の丘の麓を流れる今の勝部川の河口を出口として奥へ湖が広がっていたという。現在の市街地がすっぽり湖でまさに天然の良港である。この湖の奥 西側から中央部の岸辺に青谷上寺地の集落があったという。

西の岬の所まで行ってユーターンして、青谷上寺地遺跡・展示館と山陰線青谷駅への標識の所から、国道を

南に折れて 町中に入り、日置川の橋を渡ると川に沿って未整備の広場があり、そこに上寺地遺跡展示館が建っていた。広場の南側を山陰線が走り、青谷駅が見え、そのさらに南側が上寺地遺跡である。また 北の海側は東西端の山裾が迫っていて、この展示場のある場所は弥生時代の湖の真ん中あたりか??そして、西側の丘の裾を流れる勝部川の河口が日本海への出口 南側が上寺地の集落である。



青谷上寺地遺跡概略図



弥生時代の青谷



青谷上寺地遺跡展示館



青谷上寺地遺跡展示館



展示館の南 山陰線の向こうが上寺地遺跡

展示館には上寺地遺跡の発掘の様子や出土遺構・出土遺物などが良く整理してパネルで展示されていた。やっぱり、木製品の緻密な細工と道具の豊富さに驚かされる。

鉄無しにはやっぱり出来なかったろう。水田跡や数々の工房跡と思われる場所 遺跡の周囲の溝と祭祀跡などが見つかっているが、居住区はまだ見つからず、この集落の正確はまだ良くわからない。

しかし、多彩な遺物から単なる弥生の集落ではなく、弥生後期 日本海沿岸交流の拠点港湾都市であったことがうかがえる。



鉄鍛冶工房がこの遺跡の中にあり、数々の農耕・漁労などの道具製作や木製品などの加工を支えたというが、学芸員の人に会えず、どの程度の鍛冶が行われていたかは不明である。

でも 木製品や土器・骨角器の洗練された精密加工や表面に施された線刻画を見るとその高度な技に驚嘆させられ、また、鉄器というと直ぐに武器・武具ということになるが、「弥生の地下博物館」と呼ばれる上寺地遺跡の多様な文化や豊穡の世界を支えた鉄の道具類に改めて鉄の重要性を見る。

また、ここに居た人たちの脳みそが銅製鏃の刺さった人骨と共に展示され、国の萌芽・倭国の大乱の痕跡と



も見られるという。

ほんとうにどんな人たちがここに居たのだろう。

物だけでなく、日本海沿岸諸国や朝鮮半島の人たちも多く居て、湖岸は活気に満ちていたに違いない。

渡来の人達と在来の人達の同化プロセスの謎を解き明かしてくれるかもしれない。

はやく、居住区が見つかり、この遺跡全体像が浮かび上がってくるのが、待ち遠しい。

「『国・都市の萌芽』原始的な生活というより、弥生の先端都市というのがふさわしい現代に通じる匠の世界が開示されている」と益々想像を膨らませています。



上寺地遺跡で見つかった弥生人の脳(レプリカ)

展示館をでて、市街地をはなれ、山陰線を渡って約 500 メートルほど南側に行った田園の中を東西の丘陵地を結んで新しい高架道路とバイパス道路が通っている。

この両道路の下が発掘された上寺地遺跡である。



上寺地遺跡の中央部周辺(青谷中学横)より、東側を見る 【北 南】 2005.7.28.



上寺地遺跡の中央部周辺(青谷中学横)より、西側を見る 【南 北】



東の端 日置川の所から西側 上寺地遺跡方面を見る 【南 北】 2005.7.28.

青谷上寺地遺跡 全景 【青谷羽合道路地下】2005.7.28.

青谷の町の南側の丘陵地の山裾を東西に貫く高架道路とバイパス道路。その北側には田園が広がり、その向こうに市街地。この田園の中がすっぽり潟湖で、この東西のバイパス道路の丁度真ん中あたりから西側に上寺地遺跡が広がっている。この道路建設部が発掘されただけでほかの部分はまだ手づかずである。ほんの道路部だけであれだけ沢山の遺構遺物が発掘されており、まだ 何が出てくるかわからない。丁度バイパスが高架道路と分かれて北へ曲がるあたりが遺跡の中心部。



上寺地遺跡の西端 勝部川の土手より 2005.7.28.

ここに立って弥生をイメージすると、周り三方がコの字に丘陵地が取り囲み、前方には丘陵地に囲まれた潟湖。そして湖の西端で海につながる丘陵地で隔絶された狭い空間である。この縄文後期の時代 妻木晩田遺跡のように高地性の弥生集落が出現するが、この地も海岸ではあるが、環境的にはそれに近いと見える。

西に出雲。そして 妻木晩田の大集落遺跡があり、次の古墳時代には、文化の先進地 九州北部・朝鮮半島と河内・大和の丁度中間にあって、日本誕生に大きな役割を演じ、そのありさまが数々の神話・伝承として残っている。

そんな「弥生から古墳時代への移行。そして鉄の時代の到来」を考える素晴らしい遺跡である。鉄の時代の到来。弥生から古墳時代へ。山陰の鉄が果たした役割、具体的に弥生の中で鉄が活き活きと生活文化を支えていたことが実感できる遺跡。それが上寺地遺跡でした。

この鉄のエネルギーが日本誕生へ向かわせたのだろう。また、この山陰で渡来人の果たした役割も忘れてはならない。大陸・朝鮮半島から続く道でもある。そんなことを思い出させてくれるごとく、直ぐ西の東郷湖湖畔には中国テーマパーク燕趙園がありました。古代この山陰の出雲から吉備・播磨から大和へ。鉄の国の連合が大和王権を誕生させた鉄の道。そんなイメージを描きながら、倉吉から奥津・津山へと中国山地を越えて、日本でも最も初期の製鉄遺跡のひとつ 吉備国久米南町大歳池南製鉄遺跡を訪ねて帰りました。

2005.7.28. Mutsu Nakanishi



吉備の古代遺跡を訪ねて



中国テーマパーク燕趙園



鳴き砂の青谷海岸



## 2005夏 青春 18きっぷ 普通電車日帰り Walk アルバム

### 和鉄の道 古代の鉄の足跡を訪ねて



2005kippu00.htm 2005.9.5. by Mutsu Nakanishi

家内にけしかけられて7月の末 2005夏のJR「青春18きっぷ」を買いました。  
 7月20日から9月10日までの期間 JRの普通列車に限り、一日乗り放題で5回分11500円。  
 今年の夏は これを使って 平日の風来坊の旅 鉄道の旅を決め込もうと・・・・・・・・。  
 一度使って見たかった切符で、この1ヶ月 あっちへふらふら こっちへふらふら 和鉄の道を楽しみました。  
 鳥取県 青谷海岸へは どうしても 普通電車では便悪く 車で家内と出かけ、中国山地を津山に抜けて帰ってきました。

### 【2005 青春 18きっぷ 日帰り Walk アルバム 古代 和鉄の道を訪ねて】



北河内 古代 物部氏の鍛冶工房集落 森 と 天の川伝説 の 私市界限 大阪府 交野市 2005.7.27.



出雲で青銅器が埋められた後 忽然と因幡国の西端 青谷に現れた  
 先端技術の港湾都市 青谷上寺地弥生遺跡 2005.7.28.

鉄の道具で加工された数々の木製品・骨角品・土器など鉄の時代到来を告げる「国」のさきがけ  
 ここで 弥生人の脳みそ が そのまま残った頭骨が3つみつかった



まがね吹く 吉備 吉備 walk 「真金吹く 吉備の中山」 岡山県総社 2005. 8.4.

その「中山」は古代山陽道 瀬戸内海岸景勝地 桃太郎伝説の吉備津神社が山裾にある  
背後の中国山地は「真金吹く」古代吉備の大製鉄地帯



まがね吹く 吉備 吉備 walk 津山周辺の古代製鉄遺跡を訪ねて 2005.7.28.& 8.4.

大蔵池南製鉄遺跡は古代 初期たたら遺跡

また 吉井川の分流 誕生川に残る古代製鉄遺跡群には物部氏の足跡が残るという



天女の通う道は鉄の道(2) 湖北のたたら遺跡を訪ねて 滋賀県木之本町&余呉 2005.8.5.

賤ヶ岳から見る余呉湖 & 日本で最も初期のたたら遺跡のひとつ 古橋たたら遺跡

湖北 海津大崎周辺の山には古代鉄鉱石があり、大和王権初期の製鉄はこの鉄鉱石が原料といわれる

近江は鉄の国 湖南瀬田・南郷丘陵には源内峠や木瓜原・野路小野山製鉄遺跡 湖北にはマキノ・浅井などの製鉄遺跡群

多くの渡来人の郷が琵琶湖を取り囲む

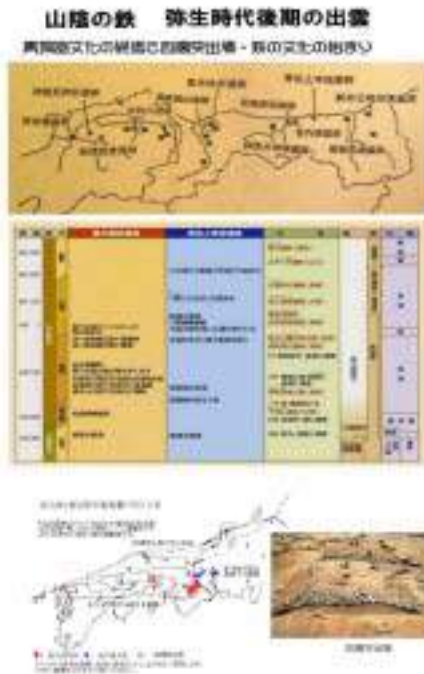


湖北 古代鉄の郷 マキノ の北の壁 赤坂山・三国山の連山

この山を越えると福井県若狭 嶺南地方である 2005.8.29.

暑くて 暑くて閉口しましたが、思いも寄らぬことに出会えて、面白い青春 18 きっぷ walk でした。  
また 「朝鮮半島の渡来人から北九州・山陰そして 中国山地を越えて吉備・播磨そして河内・大和へ」  
神話・伝承ばかりの世界とと思っていましたが、和鉄の道が現実味を持って繋がったのも収穫。  
面白い鉄の日本史が見えてきて ひとりでもよこんでいます。もっとも 首かしげる妄想かも・・・









遺構名	数量
掘立柱建物	6
円塚	1
土塙	435
溝	74
杭列	93
焼土	97
集石	16
土版築	16
卜骨集積遺構	1



山陰 弥生時代後期の「港湾・交易都市」 弥生人のいづきを伝える「弥生の博物館」青谷上寺地遺跡 2005.7.28.



山陰 弥生時代後期の「港湾・交易都市」 弥生人のいぶきを伝える「弥生の博物館」青谷上寺地遺跡 2005.7.28.  
 精密な加工を施したと膨大な出土品は鉄の道具の使用無しでは作れない 鉄と共に山陰の国の萌芽を示す数々の出土品



遺物	数量
土器(コンテナ)	約2,400個
木製品	約9,000点
石器	約4,000点
鉄製品	約270点
青銅製品	36点
ガラス製品	66点
骨角製品	約1,400点
貨幣	約27,000点
人骨	約5,500点
人の墓	36
その他	銅器、漆器、土器、石





数々の線刻絵画が木製品・土器に施されている

**殺傷痕や病変を持つ人骨が多数投げこまれた状態で溝の中からは出土 銅鏃(青銅製のやじり)が刺さったものも出土**

弥生時代後期 1900 年前の遺跡 溝の中から、多量の土器や木器、骨角器などが出土していますが、特に東側の溝からは、5200 点にも上る多量の人骨が散乱した状態で発見され、中には脳の残っている頭蓋骨 3 点が出土。また、いくつかの骨には殺傷痕が認められ、今から約 1800 年前に争いごとがあったことがうかがわれます。

178 年頃の「和国の大乱」を示すとする研究者もいる

出土した脳には細かな形態も一部残り、DNA 分析が可能な状態で、同遺跡の弥生人のルーツを解明する重要な手掛かりとなる。古代人の脳が確認されたのは世界的にも珍しく、日本では初めて。これらの脳は、死後すぐに溝の中に捨てられて水と土で密封され、腐りにくい状態にあったため残ったものと見られる。



青銅製鏃が骨を貫通して刺さった人骨例

縄文人の脳が 3 点出土



pdf 写真集 吉 備 路



真金吹く 吉備の中山

帯にせる細谷川の音のさやけさ

古今和歌集

2005.8.11. 足守川より吉備の中山を望む



# 吉備路

吉備津より造山古墳へ 2005.8.11.



吉備津周辺より 西へ 吉備路を眺める 2005.8.11.



吉備の巨大古墳 造山古墳 2005.8.11.







国史文庫  
楯築弥生墳丘墓

昭和五十二年二月五日撮影

遺跡の主要な遺構は、楯築五の目の土壇を中心とする二つの南北向を軸とした長方形の遺構である。両者は東西約七十メートル、南北約二十メートル、幅約五メートルの大きさをもつて、一九七九年から一九八九年まで、地盤の掘削による発掘の結果、吉備考古学研究所の調査で中心部が明らかになった。

二つの遺構は、楯築弥生墳丘墓の遺構である。従来の遺構は、南東部には楯築弥生墳丘墓の土壇と大さく楯築された。これら二つの遺構は、一九七九年から一九八九年まで、地盤の掘削による発掘の結果、吉備考古学研究所の調査で中心部が明らかになった。

いま土壇の南には五の目の石塔が、また楯築に土壇が建てられる。これらは楯築の遺構を守る目的でもつたものである。また楯築の遺構の中心部には楯築の遺構が認められる。

楯築下二つの遺構が認められる。中心部の楯築下二つは、東西約七十メートル、南北約二十メートルの大きさをもつて、一九七九年から一九八九年まで、地盤の掘削による発掘の結果、吉備考古学研究所の調査で中心部が明らかになった。

楯築下二つの遺構が認められる。中心部の楯築下二つは、東西約七十メートル、南北約二十メートルの大きさをもつて、一九七九年から一九八九年まで、地盤の掘削による発掘の結果、吉備考古学研究所の調査で中心部が明らかになった。

楯築下二つの遺構が認められる。中心部の楯築下二つは、東西約七十メートル、南北約二十メートルの大きさをもつて、一九七九年から一九八九年まで、地盤の掘削による発掘の結果、吉備考古学研究所の調査で中心部が明らかになった。

岡山大学教育委員会



吉備のストーンサークル 楯築弥生墳丘墓遺跡 2005.8.11.



古代製鉄の始まりを告げる奥坂「千引カナク口谷製鉄遺跡」や温羅伝説の「鬼ヶ城」が眠る吉備路背後の山塊

2005.8.11. 備中高松周辺より





吉備路 備中国分寺 吉備の巨大前方後円墳 造山古墳と作山古墳 2005.8.11.



## 古橋製鉄遺跡

滋賀県 木之本町 2005.8.4.

古代若狭ルート of 文化の先進地  
古代仏教文化の花開く己高山麓の古橋  
国内での鉄製錬開始を担う 6 世紀後半  
の製鉄遺跡



古橋は若狭から奥美濃へと続く三国岳（夜叉が池）・横山岳・金糞岳の連山を越えて美濃へ結ぶ古道が続く

北国街道木之本宿から奥美濃を通過して中山道を結ぶ脇街道の入り口



湖北の鉄鉱石を使った国内鉄製錬開始を告げる  
6世紀後半の製鉄遺跡

## 古橋製鉄遺跡 2005.8.4.

湖北 古代の先進地 滋賀県木之本町古橋





# 羽衣伝説の湖北 余呉湖

2005.8.4.





# 賤ヶ岳山頂よりの眺望

2005.8.4.








北国街道 湖北 若狭越 木之本宿 2005.8.4.





pdf 写真集 北近江「マキノ&赤坂山」

赤坂山 栗柄越 登山道より マキノ町 メタセコイヤの並木道 2005.8.29.





北近江 マキノ町 メタセコイヤの並木道 2005.8.29.





北近江 / 若狭国境

赤坂山 walk 2005.8.29.

古代北近江産鉄の地 マキノ

黒河峠登山口-三国山縦走路で 2005.8.29.

白谷温泉-黒河越・黒河峠登山道口から 三国山—明王禿-赤坂山-粟柄越-マキノ高原  
黒河越 北近江 琵琶湖湖岸 マキノから三国山の北を越えて 若狭 敦賀への古道  
粟柄越 北近江 琵琶湖湖岸 マキノから赤坂山の南を越えて 若狭 美浜への古道



マキノの街から奥琵琶湖 赤坂山縦走路 三国山 - 明王禿 で 2005.8.29.





明王禿の背後 赤坂山を望む 2005.8.29.





赤坂山を明王禿より望む 2005.8.29.





赤坂山 縦走路より マキノの街 海津大崎・葛籠尾崎を望む 2005.8.29.



古代 北近江 産鉄のマキノ・西浅井の山裾を望む 赤坂山 縦走路より 2005.8.29.





赤坂山 山頂より三国山の眺望

2005.8.29.





赤坂山南の鞍部 栗柄越周辺 岩に刻まれたお地蔵さんがある 2005.8.29.





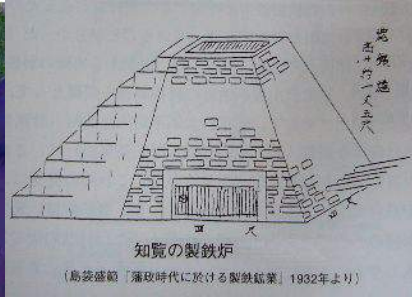
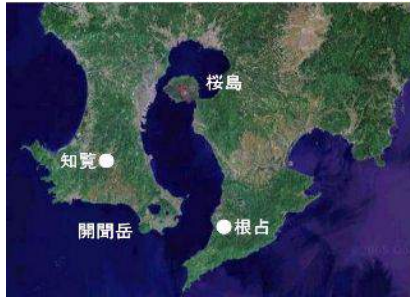
夕暮れの赤坂山と三国山 知内川の土手より メタセコイアの並木 2005.8.29.



夕暮れのマキノ

2005.8.29.





石組み製鉄炉を伝える記事

喜入町上茶笏松製鉄遺跡

知覧町ニツ谷製鉄遺跡

参考資料 厚地松山製鉄遺跡 2000 鹿児島県知覧町教育委員会ほか

本年 7 月 友人からメールで「故郷 薩摩で 石組みのたたら炉が次々と発見されている」と伝える日経新聞記事を教えてもらった。石で築かれた「たたら炉」などまったく知らず。

興味津々で、たたら炉が発見されると伝える鹿児島県薩摩半島の知覧町にメールで教えを請い、知覧ミュージアムの上田氏より発掘調査の進んだ知覧町 厚地松山製鉄遺跡資料など多くの資料と共に概要を書いた丁寧な返事をいただいた。もう 興味いっぱい 南薩摩 知覧の石組み製鉄遺跡 探訪に行ってきました。

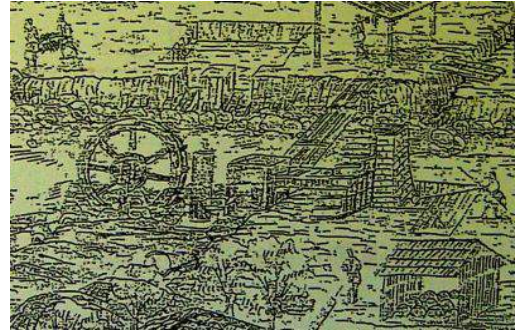
1. 「 知覧を中心とした石組み製鉄遺跡群 概要 」  
鹿児島県知覧町埋蔵文化財発掘調査報告第 9 集  
「厚地松山製鉄遺跡」鹿児島県知覧町 教育委員会 等より
2. 知覧 石組み製鉄遺跡を訪ねて 2005. 10. 12.
  2. 1. 知覧 厚地松山製鉄遺跡へ
  2. 2. 知覧茶と石垣が美しい武家屋敷群の街 「知覧」
  2. 3. 現存する石組製鉄炉を訪ねて  
「ニツ谷製鉄遺跡」 & 喜入町「上茶笏松製鉄遺跡」
  2. 4. 開聞岳の麓の海岸に堆積する砂鉄 開聞町 川尻浜  
これもまた 今まで知らなかった独特の砂鉄でした
3. 薩摩独特の石組み製鉄炉を生んだ凝結凝灰岩  
薩摩もまた「火の国」・「鉄の国」

# 1. 「 知覧を中心とした石組み製鉄遺跡群 概要 」

知覧ミュージアム 上田耕氏より戴いた資料

鹿児島県知覧町埋蔵文化財発掘調査報告第9集 「厚地松山製鉄遺跡」鹿児島県知覧町 教育委員会 等より

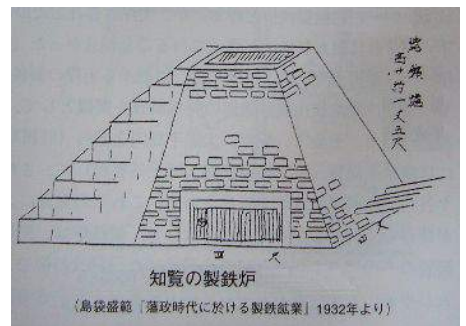
- 知覧で次々発見された石組みたたら炉は切り出した石を組んで炉を築き、粘土で内張りした縦型炉。そして 炉の一辺に接して緩やかなスロープが築かれ、スロープを登って 原料が挿入される。また、たたら炉は湿気を嫌うにもかかわらず、河に隣接。発見された水路跡などから「鞆」の動力に水車を使っていた。



石組み製鉄炉 厚地松山製鉄遺跡推定復元図より

昭和7年に島袋盛範が鹿児島県内の各地の製鉄遺跡

を調査し、古老からの聞き書きと遺跡のスケッチから詳細な報告論文「藩政時代に於ける製鉄業」を書いた。彼のスケッチにある製鉄炉と同じタイプの上記した製鉄炉が知覧で次々と発見されている。



（島袋盛範「藩政時代に於ける製鉄業」1932年より）

また、出雲のたたら炉が三昼夜の操業が限界だったのに対し、島袋の論文によると操業はおおよそ3から7日だったという。炉壁を石にすることで、長時間の操業に耐え、「けら」の取り出しも炉を完全に破壊することなく何度も使用した。

島袋盛範が描いた知覧の石組み製鉄炉

- 薩摩半島知覧や反対側の大隈半島にも存在する石組みで築かれた製鉄炉で 江戸期のものであるが、どこまで遡れるのか 不明。でも 薩摩には随所に古い製鉄関連遺跡がある。現在 鹿児島県に現存する石組み製鉄炉は大隈半島の根占町二川・内之浦町大谷添製鉄遺跡の2基 喜入町上茶笥松製鉄遺跡・知覧町ニツ谷製鉄遺跡の2基の4基である。そして 発掘調査で発見された知覧町 厚地松山製鉄遺跡のもの2基を含めると6基である。



知覧 ニツ谷製鉄遺跡



喜入 上茶笥松製鉄遺跡



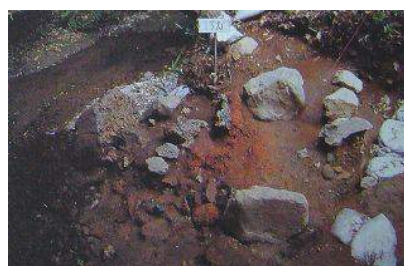
根占 二川製鉄遺跡



内之浦 大谷添製鉄遺跡



知覧 石組製鉄炉のスケッチ



知覧 厚地松山製鉄遺跡 A1・A2号製鉄炉



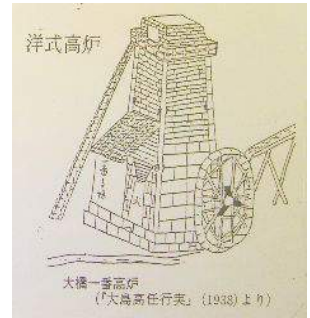
現存する鹿児島県の石組み製鉄遺跡 6基



3. この石組の製鉄技術が日本で初めての薩摩藩洋式高炉建設を可能にし、さらに 釜石大橋の洋式高炉建設に導入されたのではないか・・・

鹿児島県知覧町埋蔵文化財発掘調査報告第9集

「厚地松山製鉄遺跡」 鹿児島県知覧町 教育委員会 等より



釜石大橋一号洋式高炉

鹿児島の鉄というと鉄砲伝来の種子島 そこに沢山の鉄砲鍛冶がいて、また砂鉄の堆積した「たたら浜」があるとの知識ぐらいしかない。

薩摩半島に想像すらしなかった石組みの「たたら炉」そして その技術が洋式高炉への先駆となった可能性がある。

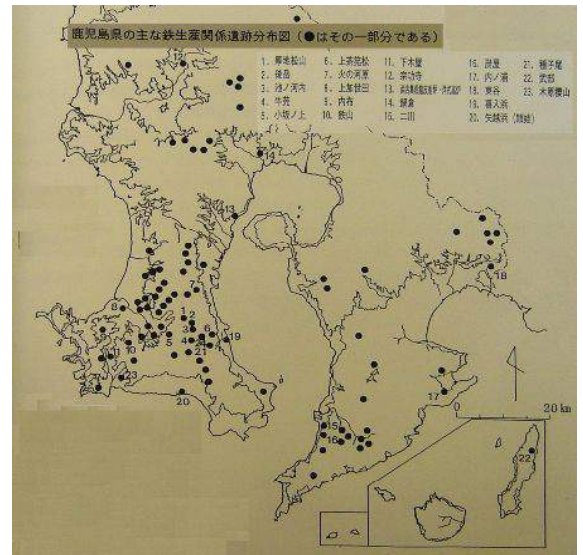
かつて 『東北の鉄・蝦夷の鉄』なんて・・・』とっていましたが、それが「日本のたたら製鉄技術・刀鍛冶の一つの源流」。

今また 「洋式高炉の祖は釜石 千人峠・大橋」と思っていたのが、それに先立って 北の函館に「武井の反射炉」そして「南 薩摩には日本最初の洋式高炉」。

その先駆技術とも見える石組み炉の土着技術が薩摩にはある。

そして 「出雲を中心としたたたら」が放棄した「チタン含有量この砂鉄を使った操業が行われている。

日本における洋式高炉のルーツ・源流に「薩摩」ははずせない。



鹿児島県製鉄関連遺跡分布

私の照会にご返事いただいた知覧ミュージアムの上田氏の手紙

『 厚地松山製鉄遺跡など調査の済んだ遺跡は埋め戻され、石組み炉は見られない。

しかし、 知覧の「二ツ谷の製鉄遺跡」では今も その石組み炉が見られる 』

にさっそく 行きたかった開聞岳登山をも兼ねて行って来ました。

今回の COUNTRY WALK で知ったのですが、開聞岳とこの薩摩の石組み製鉄遺跡はどうも切っても切れない関係にあったと思っています。

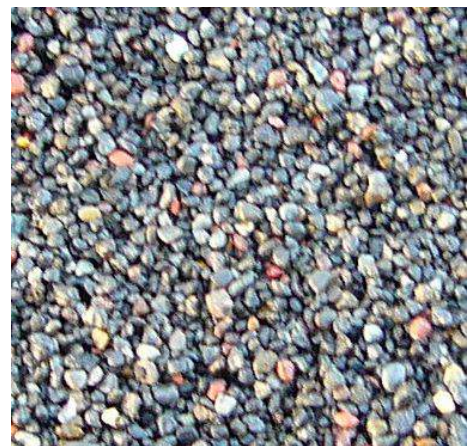
「火の国」の代名詞は熊本ですが、鹿児島では錦江湾を作った始良カルデラそして阿多・喜界カルデラ・開聞岳の噴火と火山とは密接な関係にあり、噴火がはきだす破碎流・マントルが岩石を作り、豊富な鉱物資源を生む。

石組み製鉄炉の詰み石も周囲にあるそんな石。

イタリア ナポリではヴェスビオ火山が生む岩石が美しい石畳の道を生み、知覧では美しい石塀の街をそして石組製鉄炉の建設を可能に。

また 海に流れ込んだ溶岩は海の力で細かく粉碎・磨かれて薩摩の海岸を砂鉄の浜にした。

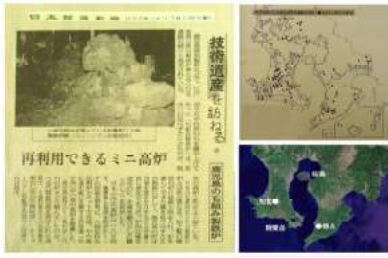
意識もしていませんでしたが、鹿児島もまた「火の国」「鉄の国」でなかつたか・・・



開聞 川尻浜の砂

その一つ一つが磁石にひっつく砂鉄

これから何が出てくるか楽しみである。



鹿児島県の製鉄遺跡分布



石塀が美しい知覧武家屋敷



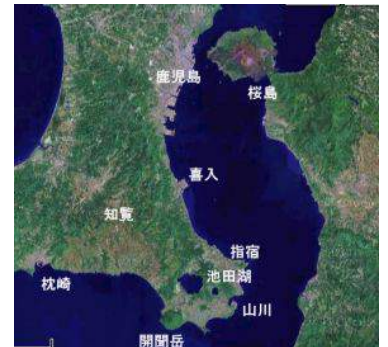
開聞 川尻 砂鉄の浜

## 2. 知覧 石組み製鉄遺跡を訪ねて 2005. 10. 12.

11月12日 前日到着したばかりの山口を朝早く出て、関門橋をわたって、九州自動車道を鹿児島へ。「秋雨前線の谷間 今週の鹿児島の晴れ間は12日 13日しかなし」の予報に、「今日か明日 どちらかで 晴天の開聞岳に登りたい」と急遽 家内と二人飛び出した。今年の春 まったく取れなかった開聞岳の宿もシーズンでないのですぐ取れ、「天候は快晴 でも 鹿児島は雲が多い」と言う。

山口から鹿児島まで約500KM 神戸・山口間とほぼ同じ距離。ほぼ5時間ほどの距離である。

今日は知覧の石組み製鉄群を見てから、開聞岳の下に泊まって、明日開聞岳に登るスケジュール。



指宿スカイライン 錦江湾展望台からの桜島の展望 2005. 10. 12.

「知覧へ行くというけど 遺跡の場所 判っているね」と家内が聞かすが、地図で一応確認はしたが、行ってみないとわからない。毎度の事ながら出たとこ勝負である。

球磨川沿いの山間の長いトンネルを抜け、霧島の山々を横に見ながら、山間のハイウェイを通り抜けるとまもなく鹿児島。やっぱり鹿児島にかかると雲が多くなるが、晴れに一安心。鹿児島の町並みの向こうに錦江湾と桜島がくっきりと見える。

鹿児島市内へ降りずに、そのまま薩摩半島東側海岸沿いの山の上を縫って南下する観光道路 指宿スカイラインをさらに南下して知覧 IC を出て知覧の街に向かう。

鹿児島から先ははじめての場所。好奇心が先へ先へと進む。

約40分ほど山並みの中を縫って走ると知覧 IC。知覧へは西へ下ってゆく。 反対側の東へ下れば喜入。

知覧の街はずっと下であるが、知覧の街の歓迎モニュメントが立っている。開聞岳はまだ、周りの山に阻まれて、見えない。

知覧の街の周辺にある製鉄遺跡群をインターネットで調べると厚地松山製鉄遺跡が知覧の石組製鉄遺跡の代表として掲載されていて、あとは行って見ないとまったく判らない。

知覧ミュージアムの上田さんに送っていただいた資料にある製鉄遺跡のマークした地図がたよりである。



知覧の製鉄遺跡群関連地図



すでに発掘調査された「厚地松山製鉄遺跡」と石組み製鉄炉が残る「二ツ谷製鉄遺跡」は是非見たいが、地図に「二ツ谷」の地名があるだけで、いってみないとわからない。

## 2.1. 知覧 厚地松山製鉄遺跡へ

知覧 IC を出て とにかく知覧の街に向かって山を下って 谷沿いの道を少し下った道端に「池之河製鉄遺跡」の案内板が立っている。案内板に従って車を横道に入ると小さな谷川に橋が架かって、この川の岸のところが池之河製鉄遺跡の説明板。蜘蛛の巣がいたるところに張った川沿いの道を少し下りましたが、痕跡を見つけられなかった。 もっとも 橋の下の川べり周辺で鉄滓片を見つけました。



知覧 池之河製鉄遺跡 周辺 2005.10.12.

通常のたたら遺跡のように川岸に近い斜面部でテラス状にならした場所を探したのですが、知覧の製鉄遺跡は本当に川岸のすぐ横に近い場所であることを後で知り、よう見つけなかったのかもしれない。

製鉄遺跡の概要を示す説明板はあるのですが、場所の見取り図や主要遺跡位置を示す図がないのでまったく検討がつかない。後でわかりましたが、知覧ではほかの遺跡でも同じでした。

ここからさらに下って、知覧の街の中に入り、地図の地名を頼りに北東の山裾「厚地」に向かう。

「厚地松山製鉄遺跡」は町の史跡に登録されているのか きっちりと案内標識があり、それに導かれて緩い丘陵地を登ってゆく。

道の畦や戸口に黄色い彼岸花が咲いている。彼岸花というと赤しか知りませんでした、ここでは黄色がほとんどで赤や白も一部咲いている。彼岸花というと関西ではもうさきおわりですが、今が満開。やっぱり南国なのである。



石組み製鉄遺跡の郷 知覧町「厚地」とそこに咲く黄色の彼岸花 2005.10.12.



厚地の集落を抜けて 丘陵地を少し登って、小さな河を横切るところに厚地松山製鉄遺跡の案内板があり、そこを河に下りる道を降りると河に接して丘陵地の斜面に囲まれた5m四方程度の狭い広場になる。その 斜面に隣接して 厚地松山製鉄遺跡の説明がはめ込まれた案内板が立っている。



厚地松山製鉄遺跡を示す案内板と製鉄遺跡を貫く厚地川 2005. 10. 12.



説明板には水車を動力としたたたら炉の模型が描かれ、18世紀頃から江戸時代の製鉄遺跡で水車跡や川底を四角く削った遺構がみられ、周りに鉄滓が散在していることが簡単に記されている。

石組み製鉄炉についてはまったく触れられていない  
この案内板の背後の斜面や足元には小さな鉄滓があちこちに散らばって、ここが製鉄遺跡であることはわかるが、やっぱりどこに何が

あったのか わからない。今まで見慣れた製鉄遺跡とはどこか 異なる。

製鉄炉はどこ？ 水車跡は？ 川底を削った跡は？

川底の岩盤が見え、小さな石がこの周辺だけ異常に多く 正面の「金池」の立札の前の川底が平らにけづられているようだ。 向かいに見える分流の水路も人工的で岸には石がつまれているのがみえるが、良くわからない。上田氏から送っていただいた厚地松山遺跡の図面を取り出して、製鉄遺構の位置関係を調べる。



水車跡や川底遺構が見つかった厚地松山遺跡 橋から南側地区



厚地松山製鉄遺跡地形図



厚地松山製鉄遺跡 地形図



地形図をみると どうやらこの橋から南に位置する地区は水車跡やその水路が見付った地区で橋の北向こう側の対岸の川岸が二つの製鉄炉が見つかった場所。

そうすると今立っているこの場所がたたら炉の鞆を動かす水車小屋があった場所。

よく見ると足元に礎石が埋まっており、川岸の崖と思っていたところに草に埋まった石組みの水路がありました。

橋の南側地区 水車小屋と水路遺構

川の向こうの人工的な石垣もどうやら水車の水路跡らしい。 正面の川の中が金池らしい。



鞆の動力源水車跡遺構 水路石組と水車の坊主柱土台石の遺構

足元の礎石が水車の動力をつたえる坊主柱の土台石だとするとこの場所に近接して製鉄炉があったに違いないが、この地区から製鉄炉は発見されていない。

それにしても 本当に川岸である。

湿気を嫌う製鉄炉であるが、おそらくこの河周辺が凝灰岩の台地であるので、その岩盤を底に石組みの製鉄炉が築かれたため、河に近くても水・湿気が遮断できたのかもしれない。

逆に岩盤の上に炉が築き、河に近接する水車を鞆の動力に使う薩摩独特の石組み製鉄炉が生まれた。

削られた川底やゴロゴロある石をみているとそんな気がする。



水車跡石組み水路出口と前の川底「金池」と人工的な分流部

とにかく製鉄炉の跡を見たいと道路を横切って反対側の川沿いに入ってゆく道を探すが、良くわからない。集落の中の家に入って道を教えてもらう。

「橋を渡ってすぐの家の塀に沿って 踏み跡があるから入ってゆくと集落の人が遺跡まで整備した道が続いている。でも 遺跡はもう埋め戻してあるから全く何もない。行っても仕方ない」 橋北の厚地川上流 製鉄遺跡が発見された周辺という。

「でも どんな所か見たいので 行って来ます」と橋を渡って 河に沿った畑のあぜに入る。



河に沿って灌木の中を細い道が続いて 数百メートルほどで行き止まりとなり川岸の崖を一段降りるようになっていて、整地された狭い平らな広場になっている。その端が一段下の川になっていて、ごろごろ大きな石がある。

ここでも 河は兩岸が切り立った岩崖で河底も岩盤が露出している。

周りは人気のないうつそうとした雑木や竹林の中。

ここが2つの製鉄炉が発見された橋北の厚地松山遺跡の中心地である。

でも本当に河に近接していて 狭い場所である。

河はやっぱり この地点で廊下状に岩盤がむき出しで、大きな岩肌が見える。

上田氏からいただいた資料によるとこの地の発掘調査で2つの石組み製鉄炉が発見されたという。



製鉄炉が発見された厚地川上流の橋北の地区

### ● 発掘された厚地松山遺跡の石組製鉄炉概要

厚地松山製鉄遺跡の調査は上田氏らが中心になって 1994 年すでに存在が明らかになっていた橋南地区の水車跡・石組み水路跡周辺から始まった。これらの遺構と共に数多くの鉄滓や炉壁・羽口が発見されたが、鍛冶炉や製鉄炉が見付らず、1996 年から範囲を広げて継続して行われ、製鉄炉などが発見され、遺跡全体がほぼ明らかになってきた。

平成 10 年橋北 厚地川上流の川沿いの土手自然石に赤褐色粘土が付着しているのが発見され、その発掘調査から1号製鉄炉が発見され、 また そこからすぐ北側の平坦地から2号製鉄炉が発掘された。

これら二つの製鉄炉には凝灰岩や火砕岩などの石が置かれていた。

また、これらの製鉄炉の間にはこの台地の基盤である凝灰岩の岩盤が露出し、この岩盤に加工跡があり、製鉄炉の石がこの岩盤から切り出された可能性もある。



①A区近景（東側から）

②A区発掘作業状況

2組の石組製鉄炉が発見された厚地松山製鉄遺跡 橋北側地区 発掘時の様子



## ■ 1号製鉄炉

1号製鉄炉は破壊が著しく形態がすでに失われていたが、炉の側壁部と炉底部が残っていて、河に面した土手が崩れて炉壁と炉内が露出し、火砕岩を利用した側壁内側には鉄滓が溶着していた。

東西の炉壁内側間の幅は約0.85m 炉底は楕円形状をしている。

炉底には5~10cmの石が多数置かれていた。

また 炉内から木炭片・鉄滓・砂鉄焼結塊などが出土した。

炉内のC14年代測定からは1813~1921年 炉壁サンプルの考古地磁気測定からは1780~1850年と測定された。



発掘調査で発見された石組み製鉄炉 A地区1号製鉄炉 知覧町 厚地松山製鉄遺跡

## ■ 2号製鉄炉

1号炉の内側平坦地の地表面から約0.30m~0.50mのところから発見された。

凝灰岩の炉壁の一部が地表面に顔を出し、赤橙褐色の土がひろがっていた。

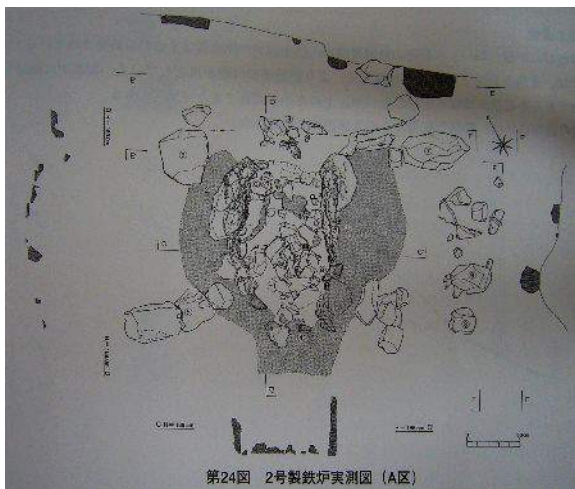
炉は凝灰岩の側壁が残り、炉内に炉壁の一部と考えられる石と赤橙褐色の土が詰まっていた。

炉内の最大長約1.45m 最大幅約0.8m 炉壁から炉底までの最大高さ約0.5m

炉底には小さな河原石や凝灰岩・鉄滓が敷かれ、一部露出した岩盤をそのまま炉底として使用  
両側の炉壁内側には鉄滓が溶着。 炉の東側には石や盛り土を配してスロープが作られている。

炉内からは木炭・砂鉄焼結塊・鉄滓・炉壁などが出土

炉内のC14年代測定からは1805~1893年 炉壁サンプルの考古地磁気測定からは1760~1850年と測定された。



発掘調査で発見された石組み製鉄炉 A地区2号製鉄炉 知覧町 厚地松山製鉄遺跡

誰一人いない林の川端で厚地松山製鉄遺跡復元図や石組み製鉄炉のイメージを膨らめますが、やっぱり戸惑う。  
ぜひとも 石組み製鉄炉の現形を見たい。

炉の形が現存するという「ニツ谷製鉄遺跡」を探そう。



地図によると「二ツ谷」はこの「厚地」からは知覧の街を挟んで反対側になる。  
 知覧の有名な武家屋敷群 来るときにちらちら見た茶畑にも立って眺めて見たい。  
 いくつか この厚地松山製鉄遺跡のあちこちで拾った鉄滓をポケットに入れて厚地を後にする。



## 2.2. 知覧茶と石垣が美しい武家屋敷群の街 「知覧」



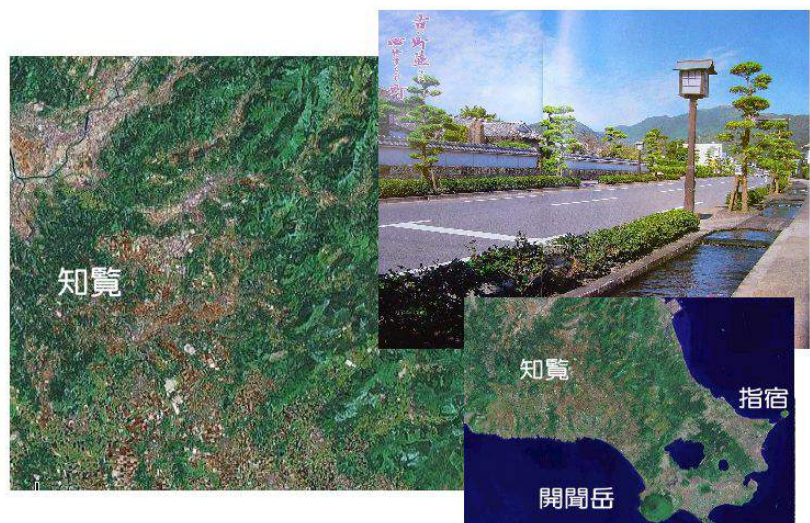
知覧の武家屋敷群と「知覧茶」の茶畑 2005. 10. 12.

知覧町は薩摩半島の南部中央に位置し、東西約9.4km、南北約22.3km、総面積120.19平方km  
 薩摩半島の山並みに囲まれた盆地で、鹿児島市から約36kmの距離にある。

500mを越す山々を連ねる北部地域から、緩やかな傾斜で中部・南部丘陵台地を形成しながら南部海岸線に至る特徴のある自然地形を持っている。

南にある開聞岳を始め、先史の時代からの度重なる火山噴火による火砕流に見舞われ、土壌は主にシラス層・コラ層・黒ボクと呼ばれる火山性噴出物からなっている。

古く縄文時代から開けた所で、南薩の中心地。江戸時代 島津藩113の外城の一つとして栄え、知覧の中心麓地区には今も美しい家並みの武家屋敷群が残り、薩摩の小京都と呼ばれる。



### ● 外城制と麓集落

江戸期薩摩藩の中心は鹿児島城にありましたが、17世紀初頭から「外城制」を各地に施行し、領内各所に政治・経済・文化・軍事の中心となる外城が設けた。



これは各地に武士を配置し、「麓（ふもと）」と呼ばれる集落を形成することで防備を整え、日常は居住地として使用されますが、戦時は陣地（じんち）として使用できるよう考えて作られていました。

麓集落には領内から武士が配置され、政庁である地頭仮屋が置かれた。外城は、本来の軍事面に加えて経済・流通の面からも交通の要所に築かれることが多く、その地域が発展していく要因となりました。

麓集落の武士は、農耕などで自活し、非常時には地頭の指揮の下に動員される半農半武の存在。

麓集落の外周には町・村・浜があり、経済の中心となっていました。

「厚地」の丘陵地を西に下ってゆくと、丘陵地のなだらかな斜面に「知覧茶」の茶畑が広がっていました。夜霧を散らす風車が沢山立っている茶畑の風景が、遠くの山並みに向かって広がっていました。家内がしゃがんで茶畑の中にデジカメを向けている。はじめて見る黄色いお茶の花が咲いていました。



知覧茶 茶畑と茶の花  
2005.10.12.

「厚地」の丘陵地に広がる茶畑とお茶の花 2005. 10. 12.

知覧の中心地役場の前に車を止めて、すぐ向かいの武家屋敷群の家並みの見学に行く。

まっすぐな道の両側に石塀が美しい江戸期の武家屋敷群が並んでいる。

薩摩藩独特の外城制でやってきた武士の住居群。 国の重要伝統的家建造物群保存地区である。

石垣の白いベルトとその上の生垣の緑、そして奥 青い空背景の山並みが背景にあって 直線的な組み合わせの景色が美しい。生垣の緑の刈り方が現代風なのも面白い。

本来 この武家屋敷内にそれぞれが持つ庭園が素晴らしいと聞きますが、中に入らずパス。



知覧の中心地に隣接して今も残る麓地区武家屋敷群 2005. 10. 12.

その後 地図の「ニツ谷」の地名を頼りに「ニツ谷の石組みたたら」を探しに「厚地」とは街を挟んで反対側の丘陵地へ。

「ニツ谷」の集落の民家を訪ねて 聞きますが、点でバラバラ見つけることができず。

結局 また 知覧の街に帰って、知覧ミュージアムの上田さんにお世話になってしまいました。



## 2.3 現存する石組製鉄炉を訪ねて

### 「ニツ谷製鉄遺跡」 & 喜入町「上茶筌松製鉄遺跡」

知覧ミュージアムを訪ねると残念ながら休館日でしたが、町の人に教えてもらって通用口に行くと館の人たちがいて、上田氏も館の中に折られるという。本当にラッキーでした。

ミュージアムの中に入れてもらって、多くの資料をいただき 30分以上も石組み製鉄遺跡についてあれこれ教えてもらう。

「薩摩地方の製鉄遺跡がどこまで 遡れるか まだ 未知の製鉄遺跡が眠っていて 良くわからない。

でも 9 世紀奈良時代末頃の遺跡から供献鉄滓(鍛冶滓と一緒に精錬滓)が鉄滓が見つかっており、また、いるし、時代は下るが、18 世紀中頃 薩摩は出雲・安芸・伯耆・石見とならぶ全国的な鉄の産地と記され、製鉄に水車が使われていたことも記されている。また 質を言わなければ、砂鉄は薩摩半島の海岸どこにでもあるなど、これからどこまで薩摩の製鉄が遡れるか わからない。」とうかがった。

また 「ニツ谷製鉄遺跡はまだ未調査のまま、標識もなにもなし。ニツ谷の集落のバス停の少し手前道脇に小さな茶畑があるので、そこの畦道を川に向かって少し降りると川に沿う林の中に石組みそのままの遺跡が見える。また このニツ谷をさらに山の方へ進んで有料道路を横切って 少し喜入に下りた 森の中にレストランがあり、そこに看板が立っているのが上茶筌松製鉄遺跡で こども石組み製鉄炉が残っている。是非 両方訪ねたらいい。」と丁寧に位置を教えてもらって、地図のコピーも。

どちらもさっき その周辺を車で通った場所なので様子が大体わかる。

また 今回この記事に多く使わせてもらった立派な石組み製鉄遺跡の調査報告書「厚地松山製鉄遺跡」(2000 鹿児島県知覧町教育委員会)や上田氏の石組み製鉄遺跡関係の論文別刷りなど沢山の資料をいただいた。まったく アポもとらず、突然の訪問に色々教えていただき 感謝。

また 教えていただかなかったら、知覧に現存する石組み製鉄炉をよう見つけなかったろう。

知覧地方の民俗・歴史を展示した知覧ミュージアムの隣には特攻隊の平和祈念会館があり、大勢の人たちが訪れていたが、あまり好きでなく パス。

(知覧の街も もっと 戦争 戦争・特攻隊 特攻隊 となっているのかと思っていましたが、そんな臭さはほとんどなく 明るい南国の街の景色にほっとしました。)

### ■ ニツ谷製鉄遺跡の石組み製鉄炉

知覧ミュージアムから 10 分ほどでまた ニツ谷の丘陵地に入り、目印の茶畑の横に着く。

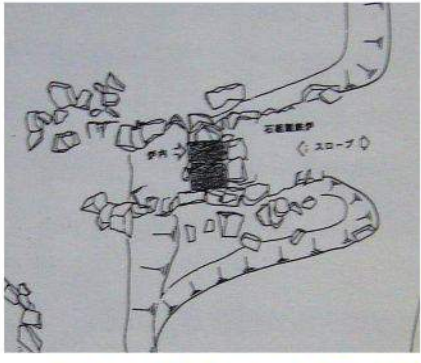
道端に車を止めて 茶畑の横の道を入ると 茶畑の端が崖になった杉林の傾斜地が川まで落ちている。

その一角四方に立ち入り禁止の縄が張られ、苔むした石の山 ニツ谷製鉄遺跡の石組み製鉄炉がありました。



丘陵地の上の茶畑 その下の川の崖っぷち「知覧町 ニツ谷製鉄遺跡」 2005. 10. 12.





知覧町 ニツ谷製鉄遺跡 石組み製鉄炉 2005. 10. 12.

石組み製鉄炉はここでも川に近接した岩盤の上にあり、大きな切石が苔むして炉が築かれていました。

最大長 6.30m 最大幅約 1.80m

炉内は約 1.10mX0.70m の長方形状

高さ約 1.80m で熔融スラグが付着

炉の外側の石組みには隙間を防ぐため、粘土が貼られていた。

この製鉄路のほか作業場や岩盤割り貫きの水路・排滓場などが見つかったが、杉林の中は杉の葉がびっしりと埋まっていた見つけられなかった。また、製鉄炉の下の川にはゴロゴロと大きな切石が川中にころがっていた。

やっぱり、石組み製鉄炉は川に非常に近接した狭い場所に築かれている。

また 石組みの炉はここでも岩盤の上。

容易に石組の石が得られるばかりでなく、防湿の意味もあるのだろう。



「川に隣接した岩盤の上の石組み炉 そして水車を使った鞆」

知覧の石組み製鉄炉の3点セットか ほぼ同じモデルのたたら製鉄が作られていたと推察される。



本当に今まで見たことも想像もしなかつた製鉄炉が薩摩にありました。

薩摩のどこかに 復元できるような鉄山全体の絵図でも残っていれば いいのですが . . . .

■ 喜入町「上茶笥松製鉄遺跡」の石組み製鉄炉



ニツ谷製鉄遺跡から そのまま丘陵地を登り、指宿有料道路をくぐって喜入側に越えて行く。  
教えてもらったとおり山の中を15分ほど ニツ谷製鉄遺跡から約1.5kmほど離れた山の中に上茶笥松製鉄遺跡がありました。

目印の盛の中のレストランにぶつかって 直ぐ下の所に「喜入の森 製鉄炉」の標識があり、谷の方に降りる遊歩道とは名ばかりの草にうずまった小道がありました。ぼうぼうの草を掻き分けて進むといった具合。150メートルほど進んだところで斜面に沿って左へ曲がる枝道があり、そこを入ると川に隣接して草ぼうぼうの狭い平地があり、川の反対側の斜面に小さな小川が流れている。

その平地の真ん中に石組み製鉄炉のイラストのある「喜入の森製鉄炉」の説明板が立っていた。

なんせ 草ぼうぼうで 周囲の地形も定かでなく、製鉄炉らしき石もわからない。

川の方を覗き込んだり、周りを見渡したり、まったく判らず。

ふっと説明板の後ろ側 川と反対側の小川のところにある草付きのコブが石組み。よく見ないと周りの草に埋もれてわからない。



上茶笥松製鉄遺跡の石組み製鉄炉  
2005. 10. 12.

眼を凝らさないと石組みが見えない



上茶笥松製鉄炉跡の看板と石組製鉄炉の後ろに隣接する水路 2005. 10. 12.





上茶筌松製鉄炉跡

凝灰岩の切石を使った石組み製鉄炉であるが、ほとんど崩れている。炉に近接して水路があり、その反対側にスロープがある。

スロープの先端から最大長約 6m

石組の横幅 約 1.8m 最大高さ約 1.4m

炉内は約 1.20mX0.9m

炉から約 3m ほどの場所に金池状の窪地がある。

この製鉄炉は昭和の前半に使用されたとの言い伝えがある。

もう草ぼうぼうで詳細はわからない。

きっちり整備されすぎて 手が加えられているのもいやですが、せつかく説明板も立てられ、一度はきれいに整備されたのでしようが、維持してもらいたいものである。

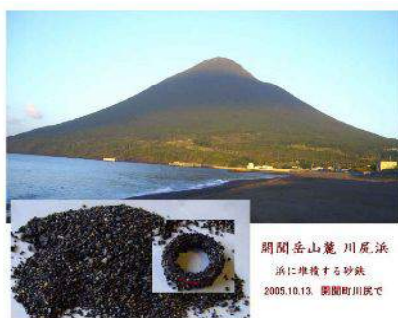
石組みのたたら製鉄炉が薩摩 知覧にあると聞いて 興味津々でやってきましたが、「岩盤が露出する低い崖の川に近接して 付近にある凝結凝灰岩の切り石や自然石を積み上げた縦型炉」という今まで見てきたたたら炉とは異質の薩摩独特の製鉄炉で、火山地帯である薩摩の自然を生かした独特の製鉄炉。

江戸期 薩摩の国を鉄の産地に押し上げ、そして、幕末の洋式高炉建設の一番乗りを薩摩が成し遂げるペース技術となった。

本当に まったく知らなかった新しい たたら炉のページをめくった気分をかみ締めながら、夕方 喜入の海岸から薩摩半島南端の開聞へ向かいました。

## 2.4. 開聞岳の麓の海岸に堆積する砂鉄 開聞町 川尻浜

これもまた 今まで知らなかった独特の砂鉄でした



開聞岳の夕日と開聞岳麓の川尻浜の浜砂 すべて鉄を含む大粒の砂でした 2005. 10. 12.



指宿を抜けて 薩摩半島南端の山川町から西へ 開聞岳へ 2005. 10. 12. 夕

夕方 指宿を抜け、素晴らしい南国の景色を見ながら薩摩半島南端を西へ山川町に入ると正面に左右均整の取れた円錐の開聞岳が見える。一度は登りたいと何度も計画がのびのびだった開聞岳。高さは 924m と高く

はないが、海からすっきり立ち上がった素晴らしい姿である。

やっぱり 頂上には雲が巻いているが、今日は開聞岳に沈んでゆく夕日に期待が膨らむ。

海に突き出た枕状溶岩台地の景勝地 長崎鼻を廻って開聞町川尻の国民宿舎「開聞荘」に飛び込んだのが、5時。この宿から見る「開聞岳の夕日」は旅人には有名で そのためにここに宿をとる人も多い。

この春花のシーズンには宿をとろうとして取れなかったところ。

シーズン オフの平日 泊り客は数組 今日グー。日没を確かめると6時過ぎ。荷物を部屋に置くとそのまま夕日に併せて温泉へ。

飛び込んだ露天の温泉は褐色の鉄分まじりの塩辛い湯である。やっぱり鉄泉。浜には砂鉄がおそらく一杯だろう。

温泉にいるのは私ともう一人二人だけ。

ゆったりと暮れ行く開聞を眺めていると、空と海が赤く染まって日が開聞岳に傾きかけ、素晴らしい夕焼けが始まった。あわてて カメラを取りに戻る。

川尻の浜越しに開聞岳が真っ赤にそまってゆく

「この景色や この景色や」 どんどん変わってゆく夕焼けに見とれる。



開聞荘の露天風呂 褐色の鉄泉



開聞岳の夕日 開聞荘の露天風呂より 2005. 10. 12.

温泉からあがって、暗くなりかけた浜に出る。波打ち際まで 砂が粗い。粒のそろった粗い砂がびっしり。砂鉄が混じっているようには全く見えない。「色は黒いが砂鉄はなし」と。

明日早く起きて もう一度砂鉄を探そう。それにしても素晴らしい夕景を本当に独り占めである。



開聞町 川尻の浜の夕焼け 2005. 10. 12. 夕



ご満悦で南薩摩の芋焼酎を飲みながらの夕食。

明日 開聞岳の頂上の雲が取れることを祈りながら、知覧 石組み製鉄炉 Walk の一日が終わりました。

翌朝 6時 窓を開けるとくっきりと開聞岳の頂上が見える快晴。

すぐに海岸へ飛び出す。

昨夕の夕焼けもス払い風景ですが、くっきりと浜の向こうにそびえる開聞岳も美しい。

反対側には長崎鼻へ黒い海岸が続き、うっすらと大隈半島の先も見える。



川尻浜から南東の長崎鼻を望む



西の開聞岳へ続く川尻岬 2005. 10. 13. 早朝

やっぱり、粒の粗い砂が波打ち際までびっしりである。

砂鉄の浜で見慣れた細かい砂浜に打ち寄せる波が描く黒い紋や風が描く風紋などまったく描けない粗い砂。

立ったり座ったり、すかして 波打ち際にたまった、細かい砂鉄の痕跡を探すがダメ。あきらめる。

でも 粒がそろった球状で、拾い上げると色々な色がまじっていて、それはそれで素晴らしい。



川尻浜の浜砂 これがみな鉄を含む砂鉄粒 もうビツクリです 2005. 10. 13. 朝

念のために ポケットから磁石を取り出し、砂の上にほり投げると なんと「どの砂もみんな磁石にひつつく」この粗い砂がみんな磁石に引っつく砂鉄粒。 もう びっくりである。

波に磨かれたこんな粗い球状の砂鉄粒が肉眼でみえる浜なんて初めてである。



磁石にひつつく川尻の浜の砂



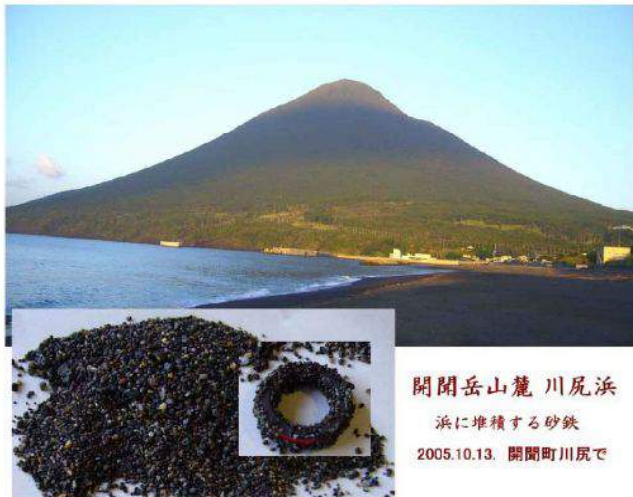
「薩摩の海岸はどこへ行っても砂鉄が堆積している」との上田氏の言葉が頭をよぎる。

石組み製鉄遺跡の原料は浜に無尽蔵にある。

考えてみれば、この南薩摩は阿多カルデラが爆発して溶岩流が海に流れ込んだ地である。

地球のマントルそして噴火火山岩・破砕流など大量に鉄分を含んだ岩石が海に流れ、海の手で粉碎・磨かれて浜に堆積する。山中にある花崗岩の中にある鉄分が川を流れる間に微粉碎され、浜に堆積するよりも本当にダイナミックなプロセスである。またしても「薩摩」である。

砂を拾い上げると本当にきれいな球状をした数々の色穂した砂である。磁石が引っ付かないとにわかには信じがたかったのですが、そのルーツを考えると納得です。



### 3. 薩摩独特の石組み製鉄炉を生んだ凝結凝灰岩 薩摩もまた「火の国」・「鉄の国」

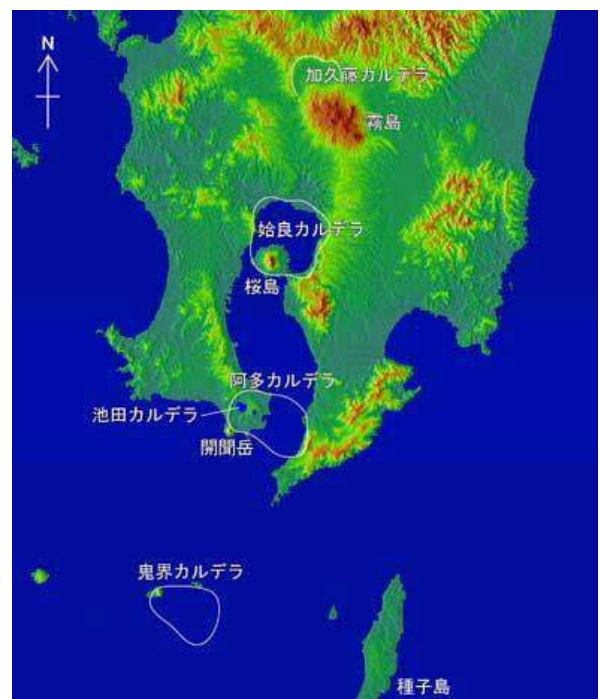
知覧町周辺の石組み製鉄遺跡は溶結凝灰岩の自然石や切石を積み上げたもので、石と石との間は粘土でふさぎ、炉の内側にも粘土が内張りされている。

この溶結凝灰岩は、火山の噴火で噴出し、周辺に流れ下った高温の火砕流堆積物が自分自身の熱と重みでくっついたもの。

火砕流堆積物の上半部は空気中で冷やされ、最下部の直接地面に接した部分は地面で冷やされるので、溶結しない。これがシラスで、シラスと溶結凝灰岩とは、全く見かけは違いますが、兄弟である。

この溶結凝灰岩は、単位体積重量  $2\text{gf}/\text{cm}^3$ 、間隙率  $14\sim 32\%$  程度と軽くて空隙に富むが、さすが、圧縮強度は  $115$  (軟質部)  $\sim 749$  (硬質部)  $\text{kgf}/\text{cm}^2$  とコンクリートと同程度の強度を示す。欠点は風化に弱いことである。

鹿児島県には北から 噴火で錦江湾・桜島が形成された始良 (2.5 万年前) カルデラ、南薩摩 錦江湾南部・開聞岳の阿多 (9 万年前) カルデラ、南薩摩池田湖の池田 (5.5 千年前) カルデラ そして海を越えて九州一円に影響が





およんだという南の喜界カルデラ（6.3千年前 現在の薩摩硫黄島周辺）などのカルデラがあり、それらは大量の火砕流を広範囲に放出して陥没してできたものである。

このような数多くの火山の度重なる噴火により、鹿児島県には広くシラス台地が形成され、いたるところに溶結凝灰岩が存在する。

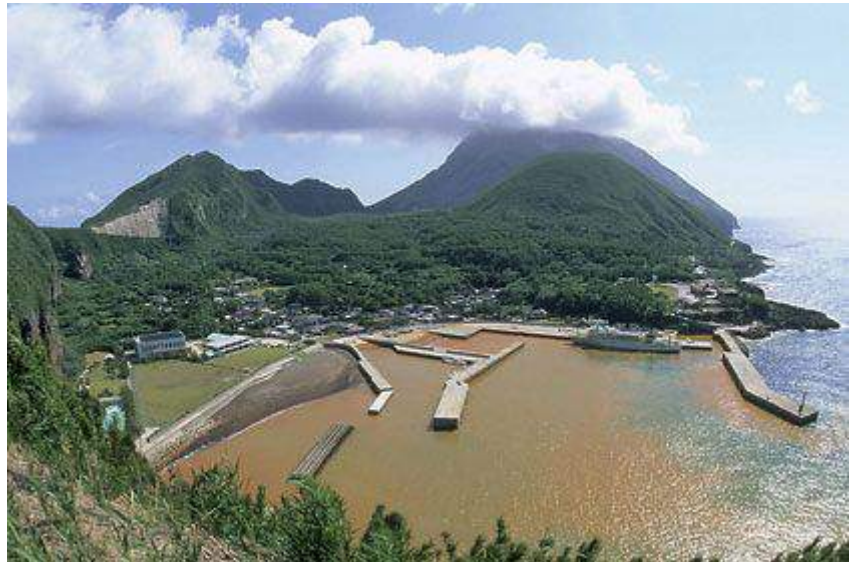
知覧盆地もそんな台地で、知覧の丘陵地のいたるところで、侵食速度の速いシラス部分が侵食・流されて凝灰岩などの岩盤が残り、それらが露出する。

鹿児島県特に南薩摩では加工しやすい溶結凝灰岩が広く得られ、これが鹿児島独特の石組製鉄炉が発達した理由の一つであろう。

この溶結凝灰岩は知覧の美しい石塀を始め、石橋・建造物等にも広く使われている。

「火の国」の代名詞は熊本ですが、鹿児島では錦江湾を作った始良カルデラそして阿多・喜界カルデラ・開聞岳の噴火と火山とは密接な関係にあり、噴火がはきだす破砕流・マントルが岩石を作り、豊富な鉱物資源を生む。

イタリア ナポリではヴェスビオ火山が生む岩石が美しい石畳の道を生み、知覧では美しい石塀の街をそして石組製鉄炉の建設を可能に。石組み製鉄炉の積み石も周囲にあるそんな石。



喜界カルデラの一部 現薩摩硫黄島 鉄分で港が茶色である

そして、海に流れ込んだり、降り注いだ溶岩は海の力で細かく粉碎・磨かれて薩摩の海岸を砂鉄の浜にした。

もっとも この薩摩の砂鉄はチタン分が多く、長くたたら製鉄には不向きと見られてきた。

高チタン含有砂鉄はねばいスラグによる棚つりなどの発生で精錬が難しく、日本におけるたたら製鉄の量産原料としては見向きもされなかった。

しかし、鹿児島での石組み製鉄炉では出雲など粘土で構築した一般のたたら炉に比べ、耐火性が強く、高温操業が可能となって、このチタン含有砂鉄をも原料として可能ならしめた。

大きな炉が構築でき、しかも長期にわたる高温操業が出来ることが、洋式高炉建設の時代となって その技術がクローズアップされることになったと思われる。

薩摩半島に想像すらしなかった石組みの「たたら炉」そして その技術が洋式高炉への先駆となった可能性がある。

かつて 「『東北の鉄・蝦夷の鉄』なんて・・・」と想像していましたが、それが「日本のたたら製鉄技術・刀鍛冶の一つの源流」。

今また 「洋式高炉の祖は釜石 千人峠・大橋」と想像していたのが、それに先立って 北の函館に「武井の反射炉」そして「南 薩摩には日本最初の洋式高炉」。

その先駆技術とも見える石組み炉の土着技術が薩摩にはある。

そして 「出雲を中心としたたたら」が放棄した「チタン含有量の多い砂鉄」が薩摩半島の海岸に大量にあり、この砂鉄を使った操業が行われている。

日本における洋式高炉のルーツ・源流に「薩摩」ははずせない。

また、開聞岳 円錐形の素晴らしい山 そんな風に想像していましたが、この地を訪れて たたら製鉄との密

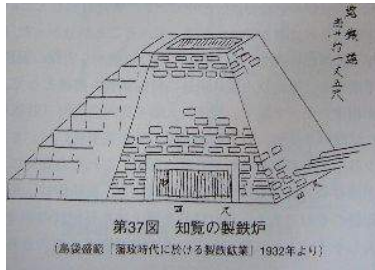
接な結びつき 思わぬ展開にびっくりです。

意識もしていませんでしたが、鹿児島もまた「火の国」「鉄の国」でなかったか・・・  
まだ、薩摩の石組み製鉄遺跡はペールを脱ぎ始めたばかり。  
これから何が出てくるか楽しみである。

開聞岳麓 川尻の浜で 真っ暗な砂鉄の海を眺めながら

2005. 10. 12. Mutsu Nakanishi

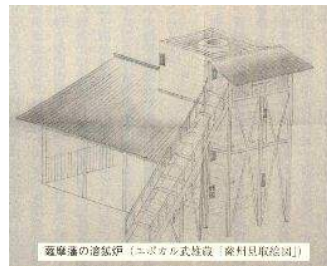
### 鹿児島もまた「火の国」「鉄の国」



知覧 石組み製鉄炉のスケッチ



川尻浜の砂鉄



日本最初の島津藩 洋式高炉



知覧 二ツ谷製鉄遺跡



喜入 上茶筌松製鉄遺跡



根占 二川製鉄遺跡



内之浦 大谷添製鉄遺跡



知覧 厚地松山製鉄遺跡 A1・A2号製鉄炉  
現存する鹿児島県の石組み製鉄遺跡 6基



知覧町 知覧ミュージアムの上田耕氏には アポも取らずに出かけた私に時間をさき、懇切丁寧に石組み製鉄遺跡について色々お教えいただき、また 沢山の資料を戴くなど本当にお世話になりました。

また 今回の記事作成については、それらの資料を石組み製鉄炉のベースデータとして色々使わせていただきました。本当にありがとうございました。

上田氏からいただき、今回使わせていただいた資料は次のとおりです。

1. 鹿児島県知覧町 教育委員会 : 鹿児島県知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書第9集「厚地松山製鉄遺跡」2000年
2. 厚地松山遺跡現地説明資料
3. 上田耕 : 第7-6 鹿児島の在来製鉄の考古学的調査 薩摩のものづくり研究 平成14・15年度成果報告
4. 上田耕 : 近代以前の鹿児島県の鉄生産 鹿児島考古第37号 p41 2003.7月
5. 在来製鉄技術と熔鉱炉 島津家おもしろ歴史館2 p30 1998.10月
6. 上田耕 : 研究ノート 石組製鉄炉の発見 「大河」第7号 p167 2000.10月



2005.11.14.

11月14日早朝 函館 湯の川温泉から出発。

昨日夜 函館山からの夜景の興奮がまだ冷め遣らぬ中、レンタカーで函館の東 渡島半島の一番先端にある活火山恵山へ。

幕末に日本最初の洋式高炉が建設された地「古武井」がこの山の山麓海岸にあり、その海岸には砂鉄の浜が広がっているという。

今年の春 函館から鉄山を通過して 縄文の里「南茅部」に行った時、残念ながら回れなかったところで、是非とも訪れたかった場所である。



日本で最初に建設された古武井の溶鉱炉

**参考** 和鉄の道 Iron Road 2005

**函館郊外の地図にある「鉄山」の地名を訪ねて** 2005.4.24.

<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/5iron15.pdf>

### 日本初の洋式高炉 古武井 溶鉱炉 恵山町高岱（現函館市恵山町）

幕末 箱館奉行が大砲を鑄造するために安政3年(1856年)函館東部沿岸の砂鉄を利用した大規模な製鉄事業を計画し、溶鉱炉・反射炉等の設計・建設を蘭学者の武田斐三郎に命じた。

武田は蘭学書からの知識と来航していたイギリス人やフランス人からの助言を頼りに、古武井(亀田郡恵山町)に溶鉱炉を建設した。せっかく建設された溶鉱炉であったが、よい成果が得られず、文久3年(1863年)、暴風雨により大破し放棄された。

現在 主要部分は破壊されており、切り石で組まれた基段及び水車水路が残っている。

我が国最初の高炉建設の試みの一つとして貴重な遺構である。また、武田斐三郎は日本最初の洋式の城「五稜郭」の築城社としても有名な科学者である。





<http://www.dokyoj.pref.hokkaido.jp/hk-osmky/shakyo/bunkazai.htm#modori>

2. 武田斐三郎の溶鉱炉 多田浩平氏のホームページ

<http://nt.hakodate-ct.ac.jp/~j03330/homepage/youkouro.html>

1. 函館湯の川から鉄山を越えて 古武井の海岸へ



日本最初の溶鉱炉が建設された  
古武井海岸 2005.11.14.

湯の川の丘の上にあるトラピスチヌス修道院を見学した後、そのまま亀田半島を横断して南茅部に出る山声の道をとる。今年の春「鉄山」の名に惹かれて バスで越えた道である。そして、春はそのまま鉄山から「縄文の郷」南茅部へ山を越えましたが、鉄山から右に折れて、山間の道を亀田半島を縦断して海岸部の古武井海岸へ出て 恵山へ向かう。



亀田半島中央にそびえる三森山 2005.11.14.

湯の川から峠に上ってゆくとを越える

と左手に広大な草地在り、その向こうに三森山が裾野を引いている。青空バックの姿が素晴らしく、ついつい車を止めて見とれました。

山中を走り出して 10分ほどで前回訪れた時にびっくりした鉄山の採石場の横に出る。



鉄山 柱状節理の粗粒玄武岩の採石場 春 鉄山を訪れて 2005.4.24.

恵山から駒ヶ岳に続く火山地帯のほぼ中間点に当たり、赤茶けた山肌に黒く柱状節理状に縞模様の粗粒玄武岩の岩脈 地下でのマグマが昇ってきて、他の岩の層に貫入凝固した半深成岩。マグマの鉄がこのあたりで鉄鉱脈を作ったり、鉄分を多く含んだ岩の山が形成されている根のだろう。「鉄山」の名もそこから来たのかもしれないと思っている。また、これら恵山から駒ヶ岳に続く火山帯での火山活動が亀田半島の山々を形成し、海岸部に大量の砂鉄を堆積させた。

鉄山から右に折れて山間を亀田半島を縦断して海岸部へ向かう。

もう 松かな落葉樹の紅葉は終わっているが、蝦夷松や白樺などの木々の枝が浮き出してきた 北海道独特

の素晴らしいモノトーンの濃淡を作っている。おそらく今しか見られない紅葉である。



北海道特有のモノトーンの紅葉が素晴らしい鉄山より亀田半島の山中を古武井の海岸へ 05.11.14.

木々の織りなす紅葉を楽しみながら山間を下ってゆくと 20 分ほどで女那川海岸に出て、函館から海岸沿いを走る持ちと合流して北に進路をとる。行く手 岬の先端にこんもり御椀型で茶色の地肌を見せる山が見える。これが渡島半島先端の活火山「恵山」。



写真で見たりして噴煙を上げる荒々しい活火山「恵山」を想像していたのですが、紅葉した山々上にちょこんと頭を突き出すきわめておとなしい姿に一瞬戸惑う。

荒々しい恵山の噴火が鉄分を含んだ岩石を周辺や海に撒き散らし、それがこの亀田半島東岸の浜に砂鉄を堆積させたと思うのですが・・・・・・・・。

小さな岬を乗り越えると正面に真っ直ぐ恵山に向かって伸びる砂浜の海岸が見える。色が黒い。これはやっぱり砂鉄が堆積しているに違いない。

地図 ナビに古武井の名が記されている。このあたりが 幕末に周辺の砂鉄を使って製鉄を行うため、日本で始めて洋式高炉が建設された地 正面奥恵山の麓の高台がその古武井の地である。



古武井の海岸から恵山・古武井の集落・恵山を望む 道の駅「なとわ・えさん」周辺より 2005.11.14.

運転している家内に道探して 海岸へ降りようと道探す。また、古武井の溶鉱炉跡の案内板がないか・・・と探すが見つからず。右手の丘に風車がまわり、橋に古武井川の名がある川まで来て、直ぐ集落が続く。海岸に下りたいので、道の駅の手前の雑草地まで引き返して、車を止め浜に下りる。

草地から小さな崖を降りると砂全体が深いねずみ色した砂鉄の堆積が崖に沿って帯状に続いている。

その上を鳥が歩いたのだろう点々と足跡が続く。そして この砂鉄帯の波打ち際には波に磨かれた黒い砂鉄が水に生えて すばらしい文様を作っていました。





函館市恵山町古武井 大量の砂鉄が敷詰められた古武井の海岸と砂鉄が織りなす文様 2005.11.14.

すごい量の砂鉄が海岸に堆積していました。  
おそらく 恵山の噴火により、海に落ちた岩石が波で洗われ、研磨されて 鉄分を磨きだし、それが浜に堆積したのだろう。  
先日 南の端 開聞岳山麓の開聞の浜で見た砂鉄はそれこそダイナミックというか大粒で丸い粒子の堆積でしたが、ここで見る砂鉄は細かい見慣れた形状でした。  
同じ火山の噴火でも、その状態の変化が噴出する岩を変化させ、波がこんな変化をもたらすのだろう。



古武井川周辺より 古武井の集落 2005.11.14.

ひとしきり海岸で砂鉄を見たり、北の恵山 反対側に遠くかすむ下北半島を眺めたりした後、道の駅に行って 古武井の溶鉱炉跡について 聞くのですが、てんでバラバラで良くわからず。

恵山支所まで井って聞けばよかったですけど・・・。

後でインターネット調べると僕が探していた位置よりももつと北側の高台 恵山にもっと近い位置でした。

## 2. 渡島半島先端の活火山 恵山



山の反対側 恵山火口



恵山 つつじ公園 展望台より 2005.11.14.

「恵山」の標識を見ながら 古武井の海岸よりそのまま海岸にへばり付いた狭い道をを集落の中に入って、恵山への道に折れ、紅葉した林の中を少しいくとつつじ公園の駐車場。

正面に恵山の岩峰がモノトーンの淡い濃淡を示す紅葉の中に埋もれて見える。

どうも こちら側には火口が見えないらしい。どうも この山を越えて反対側に出ねばならないらしい。案内板に 30 分ほど尾根を登って展望台に出る道が書かれている。

周りの紅葉があまりにも素晴らしいので、展望台まで登ることにする。



恵山 紅葉公園 展望台への散策路から見る周辺の山の紅葉 2005.11.14.

今通ってきた古武井の海岸線や山々の山体を彩る紅葉を眺めながら紅葉した尾根の登り道をたどる。

全山真っ赤なかえでが彩る紅葉や 緑・黄・赤のまだら模様の紅葉そして 三段紅葉の紅葉も素晴らしいが、



こんな淡い濃淡が色なす紅葉は初めてである。

山をのぼるにつれ、そんな紅葉が広がって見え、実に素晴らしい。



恵山山麓の山体を彩る紅葉 展望台の登りで 2005.11.14.

30分ほどで正面に荒々しい岩肌むき出しの恵山がそれこそ視野いっぱい突然現れる尾根筋に出て、恵山の山稜全体が見通せる高台にでて、海岸側の崖の先端に展望台。

恵山の岩肌は見えるが、やっぱり火口はこちらサイドから見えない。荒々しい恵山の頂上から南にすばらしい紅葉した尾根筋が続き、その先左側に遠く亀田半島の海岸線そして太平洋の海が広がって、どちらかという日本画に近い景色である。みぞれ混じりの冷たい雨が時折降り、風が本当につめたい。



恵山 つつじ公園 展望台より 2005.11.14.

恵山から続く稜線の左端の肩を越えてゆく道 車が1台越えてゆくのが見える。

先ほど公園の駐車場へ入ったが、その横の狭い道をそのまま進めば どうも山越えが出来そうである。

平日 どこに行ってもひとがいないので、聞けないのがつらい。

駐車場に戻って、そこから、恵山に向けてさらに登る。展望台から見た山腹を斜めに恵山の南肩を越える道である。見てる間に高度を上げて肩の所をこえると、まもなく眼前に噴煙を上げる恵山の火口がぱっくりとこちら側に口を開けている。



恵山火口の駐車場で 2005.11.14

すぐそのまじかのところに火口が口を開けていて、海岸側から見た姿からは想像がつかない。

また 周囲をぐるっと 360 度 広い火口原が広がり、火口原の中央が駐車場になっていて、ここから周辺に遊歩道が四方に伸びている。

この火口原はゴロゴロした石ころがある白い地肌が点々とし、その間を全面 縞模様の帯状にまるでコケが覆っているかのように背の低い植物が覆いつくしている。あとでわかったのですが、これが有名なイソツツジ。6月下旬には緑のじゅうたんの中に白い花を咲かすという。

そして その向こう荒々しい火口壁の反対側の山々は 初冬モノトーンの淡い濃淡の紅葉で全面覆われた山体を連ね、本当に静寂の中にいる。

駐車場に車を置いて まつすぐ 正面のぱっくりと口をあげ、数箇所からもうもうと蒸気を吹き上げる火口壁にのぼってゆく。静かではあるが、やつぱり すごい迫力である。



今も蒸気を吹き上げる活火山「恵山」の火口 2005.11.14.





蒸気を吹き上げる



恵山の火口



火口の縁をめぐる遊歩道で

2005.11.14.

火口の縁に登ると眼下いつぱいに一面まだら模様の火口原が見渡せ、そこに細い歩道が縫うように続いている。そして、賽の河原と呼ばれる道筋には点々と石が積まれ、風に吹かれて風車がまわっている。人っ子一人いない地で これをみると 死の世界へ入った様でなんとも不気味であつた。この恵山はこの渡島半島と対峙する下北半島恐山と並ぶ霊場であるとの案内板の説明に納得する。吹きすさぶ風の中 それこそ 津軽三味線が聞こえてきそうな風景である。



火口の縁より 火口原

2005.11.14.



火口原はエゾ イソツツジの群落



イソツツジの群落がつづく賽の河原

このまだら模様 近づいてよく見ると小さなシャクナゲのような葉をしているのですが、シャクナゲにしては小さすぎる。これが有名な恵山のエゾイソツツジと聞きました。

6月中旬かに7月上旬にかけ、この火口原 緑の絨毯の中一面に白い花をつけるという。

またこの時期よりは少し早く 約5月中旬から6月上旬 山肌は一面 真っ赤な山ツツジに覆われ、一番恵山がにぎわう時という。

この時には おそらくにぎやかな明るい雰囲気につつまれるのでしょうか、今はみぞれと寒風吹きすさが賽の河原である。

冷たい風に震えながらの今 誰もいないのが、かえって 恵山の火山としてのすごさが見える。

また、晩秋というより初冬の北海道の紅葉 素晴らしい景色でした。

ぐるっと火口壁のまわりまで登って、北の噴火湾の方が見えるところまで、登ったのですが、噴火湾の方は雲でいっぱい、視界開けず。ぶらぶらと火口原を散策して戻ってきました。

この地での洋式高炉建設に一役かった「恵山」。

「鉄山」の名を地図にみつけてはじまったこの函館の walk を思いかえしながら、山を下って、今度は海岸沿いを函館まで帰ってきました。



恵山 火口原の紅葉 2005.11.14.



恵山の肩から太平洋を見る 2005.11.14.

恵山は活火山といっても車で火口原の中まで入り込めるやさしい山。

さらに火口の直ぐ傍まで近寄ることが出来る穏やかなそして小さな山でした。

でも この山がもたらした大噴火が周辺の地形を作り、資源そして文化を支えた。

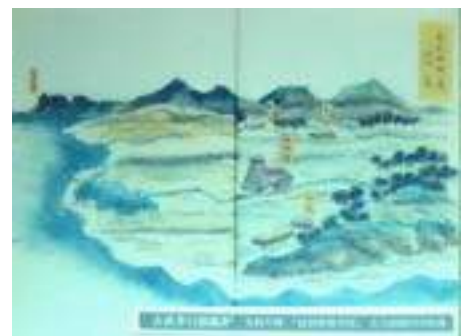
この山が噴出した岩石が磨かれ、山麓の海岸に大量の砂鉄を堆積させている。もっとも この砂鉄は幕末まで見向きもされなかったのだが・・・

そして 日本の中央に遠く離れながら、幕末 外国船の入航による西洋文明先進の地として登場し、洋式高炉を建てて 鉄の生産を始めようとする。

この図式は 鹿児島県 薩摩がほぼ同時に洋式高炉を立てた のと同じである。

海岸に堆積する大量の砂鉄が洋式高炉で資源化出来ることを知って小躍りしたに違いない。そして、僻地からの脱却を願ったに違いない。外国船やオランダ書の知識を元に試行錯誤で高炉建設をするのが、眼に見えるようだ。

外国船来航が揺り動かす文化・技術の衝撃の大きさは江戸ばかりでない。ほかにも数々の技術・文化があったろう。すごいものだったことがうかがえる。





残念ながらこの函館も鹿児島もまだ技術不足で高炉操業に失敗するが、先進に夢を膨らませたことだろう。鉄が時代を先取りし、動かして行く。そんな断片が見えたような気がする。

ほんの地図に載っている「鉄山」の名に惹かれて 始めた渡島半島の Walk がすごい広がりを持っていたことに今更ながら驚いている。

高島秋帆 釜石 大橋の洋式高炉操業の成功の前にこの函館古武井や鹿児島薩摩藩の高炉建設があった。まったく知らなかった日本文明開化の鉄の1ページを見ることが出来ました。

函館までの海岸沿いからは 波の荒い津軽海峡 そしてその向こうに大間・下北半島がみえ、行く手に函館の海岸が見えだした頃はもう夕方。 夕日に光る海のむこうにぼつりと館山が見えていました。

満足の日でした。

2005.11.14. 津軽海峡の夕日を見ながら

Mutsu Nakanishi



: 下北半島遠望  
津軽海峡 を見ながら函館へ



函館海岸遠望の遠望  
2005.11.14.夕

**参考 恵山のエゾイソツツジとヤマツツジ** インターネットより採取



6月中旬から7月上旬 満開を迎える恵山火口原のイソツツジ



5月から6月 恵山山腹で満開となるヤマツツジ

